第一部　世界と人間の起源

1 第一創造史(1)

1 1 はじめに、神は天と地を造られた。2 地はむなしく何もなかった。
やみは深淵(しんえん)の上にあり、神の霊は水の上をおおい動いていた。(2)
3 宇宙の創造 神が、「光あれ」と言われると、光があった。神はその光を見てよ
4 いとされた。神は光とやみとを分けて、5 光を「昼」と名づけ、やみ
を「夜」と名づけられた。(3) そして夕となり朝となって、一日が過ぎた。(4)

【注】（1）司祭伝承（525ページ解説参照）による第一創造史（1―2）では、宇宙のことが古代に普及していた考えに基づいて描かれている。記事は当時の知識を反映したもので、今日知られているような科学的なものではない。しかし他の古代の世界開びゃく説に見られるような宗教上の誤りはない。むしろここではその誤りを反ばくしている。神感による聖書の著者が創世記1章において説いていることは、（宇宙の部分ではなく）宇宙以前に存在する（多くの神々ではない）唯一の神が、全能のことばにより、その霊を通じ、労することなく、秩序正しく、万物を創造され、しかもその創造されたものはみなよかったということである。著者はさらに、人間が特に万物の霊長として神によって創造され、万物の支配権にあずかっていることも説いている。創造のみわざは六日間に分けられ、

七日目は休息となっている（2[2-3]）。これは守るべき安息日（出31[13-18] 20[8-11]、シナイ山で神と選民が結んだ契約のしるしであり、イスラエル人にとって最も重要なおきてとなる）のことを教えさとすためである。原始宇宙の創造（1[2]節）のあとで、さらに八つのみわざが三日から成る二つの対称的な期間に行われたように述べられている（第一、二、四、五日にはそれぞれ一つのみわざ、第三、六日にはそれぞれ二つのみわざ）。記事全体はかたにはまった語句によって組まれている。これは巧妙にくふうして記事全体を明確、風雅、荘重にするためである。

（2）[1]節は原始宇宙（「天と地」）の由来を語り、[2]節は形も生命もないが何ものかが潜んでいる原始宇宙の最初の状態を描いている。[1]節の訳語「造る」の原語は「バラ」（1[21,27] 2[3] 5[1-2] 6[7]も同じ）。このヘブライ語は神の場合にだけ用いられ、労することなく造る、すなわちことばまたは意志によって造るという義。[2]節の「深淵」は、古代の世界開びゃく説の中の「原始の海」という語に相当する。しかし聖書中の「深淵」は神の支配下にあって全く受動的である（注4後半参照）。能動的なのは「神の霊」、すなわち創造力、または生命を与える神の息（詩104[103][30]参照）。この「神の霊」は「おおい動いている」ようにとしてその巣の上を舞っているさまを描いている申32[11]に用いられている。新約聖書中の三位一体の啓示に照らして、多くの教父たちは「神の霊」を聖霊にあてはめている。神のみわざを完成するのは聖霊のみわざとみなされ、典礼中では「創造主なる聖霊」と呼ばれている。（1節における目的語は「天」と「地」であるが、[2]節においては「地」と「水（すなわち深淵）」になっている。対称的な第一創造史の中としては、つり合いのとれない文句なので、[1]節の「天」という原語の中の一文字を取り除いて「水」と読み、「はじめに、神は水と地を造られた」とする修正が最近提唱されている。これは他の世界開びゃく説による原始宇宙の描写に完全に一致する。）

（3）「昼」と「夜」はあとで創造される「光るもの」（14―18節）に依存するとはみなされていない。ヨブ38[19-20] 26[10]参照。創世記1章において、ものに存在を与えているのは、神の全能の「ことば」すなわち「…あれ」という命令である。しかしものは名をつけられてはじめてその存在がじゅうぶんに確立されるという点では、古代の世界開びゃく説と同じである。被造物は名をつけられて、じゅうぶんな目的と意義を帯びる。[2][19-20]において人が動物に名をつけることは、動物に対する人の支配権を意味する。

（4）直訳では「一日」。動詞はない。[8,13,19,23,31]節の第二、三、四、五、六日の場合も同じ。このような事が六日間継続またはくり返され、その一つ一つが列挙され、七日目（通常その日のあかつき）にその事が終るか、また

次に、神が、「水の中に大空(5)あれ。そして水と水とを分けよ」と言われると、そのとおりになった。[2]神は大空を造り、その下の水と上の水とを分けられた。[3]神は大空を「天」と名づけられた。そして夕となり朝となって、第二日が過ぎた。

次に、神が、「天の下の水は一つ所に集まれ。そしてかわいた所が現われよ」と言われると、そのとおりになった。[2]神はかわいた所を「地」と名づけ、水の集まった所を「海」と名づけられた。神はそれを見てよいとされた。[3]また神が、「地は草木で青くなれ。種のある草と、地の上に種のある実を結ぶあらゆる種類の木とで青くなれ」と言われると、そのとおりになった。[4]すなわち種のあるあらゆる種類の草と、種のある実を結ぶあらゆる種類の木とを生じた。神はそれを見てよいとされた。[5]そして夕となり朝となって、第三日が過ぎた。(6)

次に、神は言われた、「天の大空に光るものあれ。そして昼と夜とを分けよ。その光るものは季節と日と年とを定めるしるしとなれ。[2]また天の大空にあって、地を照らす光となれ」。するとそのとおりになった。[3]神は二つの大きな光るもの(7)を造り、そのうちの大きなものに昼をつかさどらせ、小さなものに夜をつかさどらせ、また星も造られた。[4]神はそれらのものを天の大空に置かれた。これは地を照らし、[5]昼と夜をつかさどり、光とやみを分けるためであった。神はそれを見てよいとされた。[6]そして夕となり朝となって、

第四日が過ぎた。

次に、神は、「水は生き物の群れで豊かになれ。また鳥は地と天の大空との間を飛べ」と言われた。[2]そして神は大きな海の怪物、また水に群がるあらゆる種類の泳ぐ生き物をすべて造られた。また翼のあるあらゆる種類のものもすべて造られた。神はそれを見てよいとされた。[3]そこで神はそれらのものを祝福して、「生めよ、ふえよ、海の水に満ちよ、

は完成したようにする筆法は、古代近東においてよく用いられた。著者は整然かつ秩序ある創造のみわざと神の完全な万物支配を述べるために、この筆法を採用したのであろう。古代の他の開びゃく説では、神々を生み出した「原始の海」と「神々」との死闘が述べられ、聖書の開びゃく説による秩序ある創造とはいちじるしく異なる。太陽が第四日に造られたことは(16節)、別に問題とはならない。月が夜をつかさどるために造られたように、太陽もすでに存在する昼(5a節)をつかさどるために造られたものとみなされている(前注参照)。

(5) 直訳では「打ちのばされた(金属)板」。古代セム人は大空のことを「上に水をたくわえた堅い天井」と考え、その穴から大雨が降ると思っていた(7:11 8:2)。巻末第一図参照。

(6) 第一の期間、すなわち最初の三日間は分離のみわざをもって終っている。㈠光がやみから分けられ、昼と夜が生じた(第一日)。㈡水の中に大空が造られ、上の水と下の水とに分けられた(第二日)。㈢下の水が集められて海と地が分けられ、地から植物が生じた(第三日)。最初の三日間に宇宙を別々の領域に分けたというみわざと、あとの三日間にそれぞれの領域に住むものを創造したというみわざとは符合する。すなわち㈠昼と夜をつかさどる光体(第四日)、㈡水の中に魚、空に鳥(第五日)、㈢地上に動物と人間が造られ、食べ物として植物が与えられた(第六日)。以上の分離の大みわざは、2:1の「こうして天と地とよろずのものは完成した」という文句に要約されている。

(7) 当時エジプトなどで神として礼拝されていた「太陽」と「月」という名称を故意に省いている。これらは特に宗教的層を定める場合に役立つ単なる被造物である。

23 また鳥は地にふえよ」と言われた。[1]そして夕となり朝となって、第五日が過ぎた。
24 次に、神が、「地はあらゆる種類の生き物、すなわちあらゆる種類の家畜、はうもの、
25 野の獣を生み出せ」と言われると、そのとおりになった。[1]神は野のあらゆる種類の獣、
あらゆる種類の家畜、地をはうあらゆる種類のすべてのものを造られた。神はそれを見
てよいとされた。

26 次に、神は、「われわれ(8)にかたどり、われわれに似せて人を造ろう。
人間の創造 そして人に、海の魚、空の鳥、家畜、野のすべての獣、地をはうす
べてのものを治めさせよう(9)」と言われた。
27 神はご自身にかたどって人を造られた。
人を神にかたどって造り、男と女とに造られた。
28 神はかれらを祝福して言われた、
「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、そして地を従わせよ。
海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を治めよ」。
29 また神は、「見よ、わたしは、おまえたちに食べ物として、全地の種のあるあらゆる草と、
30 種のある実を結ぶあらゆる木とを与える。[1]そして地のあらゆる獣、空のあらゆる鳥、地
をはうあらゆるもので、およそ命あるものには、それぞれの食べ物として青草を与え

31 る(10)」と言われると、そのとおりになった。[1]神はご自身が造ったすべてのものを見られた。
それははなはだよかった。そして夕となり朝となって、第六日目が過ぎた。

2 1 こうして、天と地とよろずのもの(1)は完成した。[2]神はなされていたそのわざを第七日目(2)
3 に完成された。そしてなされたすべてのわざを第七日目に休まれた。[1]神はすべての創造
のわざを第七日目に休まれたので、その日を祝福して聖日とされた。

(8) この複数についてはいろいろの説がある。㈠著者が人間創造の重要性をあらわすために、神がその創造にあたってご自身と相談されたように描いた（11_{7}、24ページ解説参照）。または㈡「神の充満性」（コロサイ1_{19} 2_{9}）を表わすための尊厳複数。ヘブライ語では神を「エロヒム」という複数形で表わす。しかし一般に単数形の動詞が続く。エズラ4_{18}ではペルシャ王が自分のことをいうのに単複両形を用いている（イザヤ6_{8}参照）。㈢人間創造に関する天使たちへの発表。詩8_{6}のギリシャ語訳とラテン語訳では「エロヒム」を「天使たち」と解し、「神は人間を天使たちより少し低く造られた」と訳している（3_{22}、ヨブ1_{6a}、列上22_{19-22}参照）。㈣教父たちは聖三位のことであろうと解している。

(9) 有形的被造物のうちで人間だけが神に似て理性と自由意志をもち、したがって地と被造物に対する神の支配権にあずかっている。

(10) 人間も動物も互に殺し合うことなく、平和のうちに生活していた（未来のメシヤ時代のような）原始時代の描写である（イザヤ11_{6-8}参照）。9_{2-3}でこの関係は改められる。

【注】(1) 直訳では「万軍」（イザヤ6_{3} 45_{12} $_{13}$参照）。

(2) 多くの古代語訳は「第七日目」ではなく「第六日目」と読んでいる。第六日目に完成されたとするほうが、出20_{8-11} 31_{14-17}（第七日目の神の安息を理由として安息日には全然仕事をしてはならないとさだめている）によく適合する。しかし著者は今まで用いてきた古代の筆法（1注4参照）にならって、みわざが七日目（のはじめ）に完成したとしるしている。

これは天と地の創造史である。(4)

第二創造史(3)

神ヤーウェが地と天とを造られた時、[1]まだ地には野の木が一本もなく、また野の草も一本もはえていなかった。神ヤーウェが地に雨を降らさず、土を耕す人もいなかったからである。[1]しかし大水が地からわきでて、土の面(おもて)をあまねく潤していた。[1]神ヤーウェは土のちりで人を形造り、命(いのち)の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。(5)

神ヤーウェはエデンの中の東に園(その)を設け、その形造った人をそこに置かれた。(6) [9]また神ヤーウェは、見て美しく食べるによいあらゆる木を土からはえさせ、さらに園の中央に生命の木(7)と、善悪の知識の木とをはえさせられた。

一つの川がエデンからわきでて園を潤し、そこから分れて四つの流れとなった。[11]第一の名はピションといい、金(きん)のあるハビラ全土をめぐって流れている。[1]その地方の金は質が良い。またそこにはブドラク(8)としまめのうもある。[1]第二の川の名はギホンといい、クシュ全土をめぐって流れている。[1]第三の川の名はチグリスといい、アッシュルの東を流れている。第四の川はユーフラテスである。(9)

---

(3) 第一創造史（1[1]—2[3]）は司祭伝承の文体と見かたを反映している。第二創造史（2[4]—3[24]）は前者とは文体、見かたともに異なっているので、別の伝承に基づいていることがわかる。第一創造史は、全体として宇宙のこ

とを述べているが、第二創造史は人類始祖の歴史を詳しく物語っている。後者に使用されている伝承の特徴の一つは、神の固有名詞「ヤーウェ」（出3[14]参照）を用いていることである。この理由でヤーウェ伝承と呼ばれている。司祭伝承は「神」を意味する普通のヘブライ語（エロヒム）を一様に用いている。しかし著者は23章で「神ヤーウェ」（ヤーウェ・エロヒム）という二重名称を使用している（ほかの所ではほとんど用いていない）。あたかも「神」（エロヒム）と「ヤーウェ」の同一性、および各種伝承の根本的調和を、最初にあたってここで主張しているように見える（3注[3]後部も参照）。このあと著者は各種伝承を用いるにあたり、その不調和を問題としていないようである。このことを考えれば、外見上の矛盾や重複記事が容易に理解できる。

(4) 文法上[4a]節は第一創造史の結びとも第二創造史の題目ともなりうる。文体から見れば前者に属しているが、その用法から見れば後者に属している。というのは、創世記は十部に分けられ、それぞれの題目に同一のヘブライ語「トレドス」が使われていて（15ページ解説参照）、最初の題目がこの[4a]節に用いられているからである。「トレドス」は「産出」の義であるが、ここでは「創造史」と訳した。

(5) ヘブライ語では「人」を「アダム」、「土」を「アダマ」。4[25]5[1-3]において「人」という普通名詞「アダム」が最初の人間の名となっている。人間創造が実に具象的に描かれているが、このことからわれわれが知る重要なことは、人間の肉体は神によってすでにあるものから造られたが、霊魂は神によって直接創造されたということである。伝12[7]参照。

(6) 「エデン」は近東のある地域と考えられているが、その位置不明。「園」はエデンの一部で、近東さばくの中の緑地のように描かれている。

(7) 死なないという特殊の恵み、または永久に生きるための手段（3[22]参照）の象徴。原罪によってそれを失う（3[22b]）。格3[18]、黙22[2]も参照。知識の木については注10を見よ。

(8) かおりの高い樹脂（民11[7]参照）。

(9) 古代人は中央アフリカと中央アジアは大陸によって結ばれていると想像していた。したがってナイル川（ギホン川、シラ24[25]参照）はその源をパレスチナの東のほうに発し、インダス川あるいはガンジス川の下流であると考えていた。この二つのうちどちらかがピション川のことであろう。このように四大河川はエデンにある尽きることのない一つの源から発しているものと思われていた。巻末第二図参照。「アッシュル」は、ヘブライ語では「アッ

15 神ヤーウェは人を取ってエデンの園に置き、そこを耕させ、そこを守らせられた。16神
17 ヤーウェは人に命じて、「おまえは園にあるどの木の実を食べてもよい。17しかし善悪の
知識の木の実は食べてはならない。それを食べると、必ず死ぬであろう」と言われた。(10)
18 また神ヤーウェは、「人がひとりでいるのはよくない。かれにふさ
19 最初の女 わしい助け手を造ろう」と言われた。19そして神ヤーウェは野のあ
らゆる獣と空のあらゆる鳥とを土で形造り、人のところに連れてき
て、かれがそれらになんと名づけるかを見ようとされた。人がそれぞれの生き物につけ
20 た名は、そのままそれらの名となった。20人はすべての家畜、空の鳥、野のすべての獣
21 のそれぞれに名をつけたが、人にふさわしい助け手は見つからなかった。(11)21そこで神ヤ
ーウェは人を深く眠らせ、眠っている間にそのあばら骨の一つを取り、その所を肉でふ
22 さがれた。22神ヤーウェは人から取ったあばら骨をひとりの女に造りあげ、(12)人のところ
23 に連れてこられた。23すると人は言った、

「これこそ、わたしの骨からの骨、わたしの肉からの肉。
男から取られたのだから、これを女と名づけよう」(13)。

24 それゆえ、男は父母(ちちはは)を離れて、妻に結びつき、ふたりは一体となるのである。(14)
25 人とその妻とはふたりとも裸であったが、恥とは思わなかった。

シリア」と同じであるが、ここではアッシリア帝国（首都ニネベ、列下19[36]参照）のことではなく、帝国誕生以前のその地方の中心地のことで、当時の首都アッシュルの名をそのまま取ったものである。10[11-12]参照。

(10) 「善悪の知識」という句は箇所によって異なった意味をもつ。申1[39]、サムエル下14[17] 19[36]〔35〕、列上3[9]、イザヤ7[15-16]参照。23章の文脈からは、ヤーウェがご自分のため、また廷臣、使者としての天使のために取っておかれた知識を意味しているようである。この知識とは、生と死、健康と病気、多産と不妊、すなわち将来の善と悪の問題に関するものである。このような知識は人間の力では及ばないものなので、「人の目を開いて神のようにする」（3[5-22]）といわれている（民24[3-4]参照）。女はかかる知識を得ようとして木の実を食べることを決心する（3[6]）。人間は誘惑に負けて、ヤーウェだけが啓示し、授与できる事がらをさぐり、または手に入れるために、占いや魔法など（申18[10-11]参照）を使い、偶像、動物、自然物を崇拝した（エゼキエル8章にはこのような「いまわしい事」がしるされている）。動物のうちで「最も狡猾」と描かれているへびは、占いや魔法の力の象徴とされていた（出7[11-12]参照、「占う」と「へび」はヘブライ語では同じ文字で、語原上関連があると思われる）。女をそそのかしたへびは、当時の女の心をひいていた生産力崇拝に特に結びつけられている。当時の女は多産と安産のため、生産力崇拝を行った。悪（人の労苦と死、女の出産の苦しみ、へびが動物の中でのろわれること）と善（将来の救世）を定め、人と女とへびにこれら将来の善悪を知らせるのは、ヤーウェだけである（3[15-19]）。

(11) 1章では人は神のみわざの最高傑作として最後に創造され、すべての生き物に対する支配権を与えられている。ここでは人は最初に創造され、そして他のすべての生き物が人のために造られている。これは人を中心とする見地からの描写であって、人間が万物の霊長であることを、この二つの説明から知ることができる。

(12) 最初の女を男のあばら骨からとって造ったということは、両性が本質的にも人間の尊厳性においても同等であること、および夫婦間の愛の義務を示し、男尊女卑の思想を否定する。しかし女は男に従うべきものである（コリント前11[8-9] 11[11-12]、チモテオ前2[12-13]）。

(13) ヘブライ語では男を「イシュ」、女を「イッシャ」。

(14) キリストは婚姻の不解消性を本来の状態に復帰させるために、本節を引用している（マテオ19[3-6]、マルコ10[2-9]）。聖パウロは婚姻の一体制をキリストと教会の一体制にたとえている（エフェゾ5[29-32]）。

3

誘惑と堕落(1)

1 さて神ヤーウェが造られた野のすべての動物のうちで、へび(2)は最
もこうかつであった。へびは女に、「神は、『おまえたちは園にある
どの木の実も食べてはならない』と確かに言ったのでしょう」と聞い
2 た。3 女はへびに、「園にある木の実を食べてもよろしいのですが、
3 神は、『園の中央にあ
4 る木の実を食べてはいけない。また触れてもいけない。おまえたちが死ぬといけないか
らである』と言われました」と答えた。4 しかしへびは女に、「いいえ、あなたがたは死
5 にはしません。5 それを食べると、あなたがたの目が開かれて善悪を知り、神のように
なることを、神は知っているからです」と言った(3)。
6 そこで女は木をながめると、その実は食べるのによく、目をそそり、賢くなるには望
ましいと思われたから、それを取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、かれも食べ
7 た。7 するとふたりの目は開かれ、裸であることを知った(4)ので、いちじくの葉をつづり
合わせ、腰に巻く物を造った。

8 いつものようにそよ風の吹きはじめるころ(5)、ふたりは園をそぞろ歩きされる神ヤーウ
9 ェの足音を聞いたので、人とその妻とは神ヤーウェを避け、園の木の間に隠れた。9 神ヤ
10 ーウェは人に声をかけて、「おまえはどこにいるのか」と言われた。10 そこで人は、「わた

【注】(1)「原罪」の話は前章に準備され、本章にしるされる。聖パウロはロマ5[12]で、「ひとりの人によって罪が世

にはいり、また罪によって死が世にはいったように、すべての人が罪を犯したので死がすべての人に及んだ」と、はっきりしるしている。著者も同様に神感によって、世に広まっている罪と死は、全善である創造主から来たのではなく、すべての人の父が犯した罪の結果であることをよく承知していた。またこの事実を描くための資料を選ぶにあたっても、特に「人の子」、すなわちひとりの人イエズス・キリスト（アダムはキリストの前表であると聖パウロはロマ5[14-19]で言っている）によって、世があがなわれるであろうという神の荘厳な約束を記録するにあたって、神感を受けている。

（2）へびのしわざは知2[24]では悪魔のしわざとされている。黙12[9] 20[2]も参照。禁じられた「善悪の知識」に関連して象徴となっているへびについては2注10参照。

（3）悪魔は誇張した文句（一本でなく「どの木の実も」）からはじめ、次に、知識の木の実を食べると必ず死ぬという神のことばを否定しただけでなく、人間がこの知識を得て神と同等になることを神が恐れているのだとしている。悪魔は悪知恵があり（コリント後11[3]）、「うそつきで、うそをつく者の父」、また「はじめから人殺し」である（ヨハネ8[44]）。「神のように」の「神」はヘブライ語ではまた、22節の場合のように、天使たちという意味の「神々」をさすこともできる（1注8㈡参照）。ギリシャ語訳、ラテン語訳、多くの近代語訳では後者の意味に解している。悪魔は「エロヒム」という語をヤーウェの意味に二回用い（1節と5節後部）、ここでは二重の意味をもたせて欺こうとしたのかもしれない。著者が2[4]から3[24]まで「ヤーウェ・エロヒム」という名称を絶えず用いたのは、このあいまいな語を避けるためであったかもしれない。

（4）欺かれた後、彼らの目は開かれ、自分たちが裸であること、すなわち恥だということに気がつく（イザヤ20[4] 47[3]、エレミヤ13[26]、エゼキエル16[37-39] 23[10,29-30]、ナフム3[5-6]参照）。「こうかつな」（ヘブライ語で「アルム」）へびに関する語句と、「裸」（「エルッミム」）の人祖に関する語句との間にしゃれが含まれているようである。この二つのヘブライ語の子音は同じ。こうかつなへびは人をさとくしないで、裸のままの状態にとどめている。裸であることの恥は、肉の霊に対する反抗、不従順を暗示している（ロマ7[15-23]特に23節参照）。この事は人の霊が神にそむいたことから生じたものである。人が神から隠れたことは(8節)、罪によって神との親交を失ったことを意味する。

（5）直訳では「日のそよ風のころ」（雅2[17] 4[16]参照）。

11 しは園であなたの足音を聞き、裸なので恐れて隠れました」と答えた。「すると、「だれ
がおまえの裸であることを教えたのか。おまえは、わたしが食べてはならないと命じて
12 おいた木の実を食べたのか」と言われた。「人は、「わたしの連れとしてくださったあの
女が木から取ってくれたので、わたしは食べました」と答えた。(6)
13 そこで神ヤーウェは女に、「おまえはなんということをしたのか」と言われた。女は、
「へびがわたしを迷わしたので、食べました」と答えた。

14 **罪の罰、救世主の約束**

神ヤーウェはへびに言われた、
「おまえはこの事をしたので、
すべての家畜、野のあらゆる獣のうちでのろわれる。
おまえは腹ばい、一生ちりを食べるであろう。(7)
15 わたしはおまえと女との間に、
またおまえの子孫と女の子孫との間に恨みをおく。
かれはおまえの頭を踏みつけ、
おまえはかれのかかとにかみつく(8)であろう」。
16 次に女に言われた、
「わたしはおまえのみごもりの苦しみを大いに増す。

おまえは苦しんで子を産む。
おまえは夫を慕うが、夫はおまえをおさえる(9)」。

(6) 人は罪を認めることをせず、女を非難し、また女を与えてくれた神に対しても間接に責めを負わしている。
(7) 「腹ばい」「ちりを食べる」は最もひどい屈辱を意味する表現。詩72[71]9、イザヤ49[65]23、ミカ7[17]参照。
(8) 「踏みつける」と「かみつく」は全然意味は異なるが、その語幹は同形でしゃれを含んでいる。本節で神から直接話しかけられているへびは悪魔のことである。悪魔の子孫は悪魔のように神にそむくものたちをさす（ヨハネ8[44]でキリストは自分を殺そうとしている者は悪魔を父にもっていると述べている）。「女の子孫」は集合名詞である「悪魔の子孫」に並行する文句なので、エワ（すべて生きた者の母、20節）の子孫である全人類をさすと解するものが多い。もちろん人の子キリストを通じてのみ勝利が得られるので、間接にはキリストをさす。しかしこの解釈は後世の啓示からみてじゅうぶんだとは思われない。本節後半における対立は二つの集合体の間のものではなく、一つの悪魔とひとりの人間、すなわち悪魔（「おまえ」）と「女の子孫」をさす単数代名詞との間のものである。ギリシャ語訳と古いラテン語訳はこのように解し、本節後半に男性単数形の代名詞「かれ」をあてている（ヴルガタ訳ではあやまって「彼女」としるしている）。したがって「かれ」は「やがて来る者」（49[10]）、救世主キリストを直接にさす。キリストは悪魔の頭を踏みつける、すなわち十字架上の死によって悪魔を滅ぼす（ヘブライ2[14]、ヨハネ一書3[8]）。神は悪魔とキリストの間の対立のようなものを悪魔と女の間におかれているので、「女」はエワだけを意味すると解するのはじゅうぶんではない。むしろ本節に予言されている将来における救世においては、キリストの母、無原罪のマリアがエワに代って「女」の役割を演ずると解するほうが他の解釈よりもすぐれている。救世における協償者マリアの「女」という役割は、原罪における協力者エワの「女」という役割に相当するものである。原罪が「女」で始まったように、救世も「女」で始まる。本節は堕落が、エワの罪を償って余りあるものである。原罪した人類の救いに関する最初の約束を含んでいるので、「原始福音」と呼ばれている。
(9) 「慕う」と「おさえる」のヘブライ語はまた4[7]においてもともに用いられている。へびが女を誘惑した

17 さらに人に言われた、「おまえは妻のことばを聞き、食べてはならないと命じておいた木
の実を食べたから、
土はおまえゆえにのろわれる。
おまえは一生ほねおって土からかてを取れ。
18 地はおまえのためにいばらとあざみをはやし、
おまえは野の草を食べるであろう。
19 おまえは土に帰るまで、
土から取られたおまえは土に帰るのだから」。
額(ひたい)に汗してかてを取れ。
おまえはちりであり、ちりに帰るのだから」。
20 さて人はその妻の名をエワ(10)と名づけた。彼女がすべて生きた者の母だからである。
21 神ヤーウェは皮の衣を造り、人とその妻に着せられた。22神ヤーウ
楽園からの追放
ェは、「見よ、人は善悪を知り、われわれのひとりのようになった。(11)
さて、人は生命の木の実をも食べ、いつまでも生きるであろうから、
23 かれが手を伸ばしてこれをとらないように――」と言われて、一人をエデンの園から追
24 い出された。これは土から取られたかれに、その土を耕させるためである。一神ヤーウェ
は人を追い払われた。そして生命の木への道を守るためにエデンの園の東にケルビム(12)と

4 きらめく炎(13)のつるぎとを置かれた。
1
2 **カインとアベル**　人はその妻エワを知った。彼女はみごもってカインを産み、「わた
した、彼女はカインの弟アベルを産んだ。アベルは羊飼いとなり、カ
人はヤーウェの助けで、ひとりの男の子を得ました(1)」と言った。一ま

罰として、前節において女との間に恨みをおかれたように、女は人を誘惑した罰の一つとして、男に従うことになる。

(10)「エワ」という名は、「生命」、「生きる」というヘブライ語の語根に由来する。

(11) 複数形「われわれ」については1注8参照。二節あとに、ケルビムのことがしるされているので、その(ロ)の説明、すなわち神が玉座を囲む天使たちに話しかけているとする説は、ここではそれほど不適当には見えない。「人は善悪を知り、われわれのひとりのようになった」は、悪魔のいつわりの約束のことば(5節)をまねて、神がやさしく皮肉を言ったものと一般に考えられている(7a節も参照)。本句はまた、15―19節に啓示されたばかりの、人のために用意された善悪、すなわち人の罪から生じたこれからの「悪」と神の慈悲による将来の「善」を、人が知るようになったという意味にもとれる(2注10参照)。

(12) 古代バビロニアでは「カリブ」は半人半獣の姿をした第二級の神々の一種で、宮殿を守るために入口の両側に置かれてあった。聖書のケルビムは神の創造による霊であり、出37ア―9では人の姿、エゼキエル10章ではさまざまのかたちで現われる。

(13) いなずまのような形をしていて、バビロニアでは門にとりつけられ、入門を禁ずる象徴。ここでは園にはいることを禁じた神の命令を意味する。

【注】(1)「カイン」は「かじや」の義(22節のトバル・カイン参照)。しかしここではエワが「カイン」とこれに発音が似ている「カナー」(「得る、所有する」の義)とを結びつけたものである。「カナー」には「産む、造る」の義もある。神が主語の場合には「創造する」の義。この義だとすれば、本句は神に協力して最初の子を形造る(マカ

3 インは農夫となった。 一日がたって、カインはヤーウェに供え物として地の作物をささ
4 げた。 一アベルもまた、羊のういごを取り、そのあぶらみをそえてささげた。(2) ヤーウェ
5 はアベルとその供え物とをよみされたが、(3) 一カインとその供え物とはよみされなかった。
6 カインは大いにおこり、顔を伏せた。 一そこでヤーウェはカインに言われた、「おまえは
7 なぜおこるのか。どうして顔を伏せるのか。 一おまえが正しければ、顔を上げればよい
ではないか。おまえが正しくなければ、罪が戸口で待ちかまえているようなものではな
いか。それはおまえを慕うが、おまえはそれをおさえなければならない」(4)。
8 カインは弟アベルに、「野原へ行こう」と言った。さてふたりが野原にいる時、カイン
9 は弟アベルにとびかかって、かれを殺した。 一そこでヤーウェはカインに、「弟アベルは
どこにいるのか」と聞かれた。カインは、「知りません。わたしは弟の番人なのでしょうか」
10 と答えた(5)。 一ヤーウェは言われた、「なんという事をしたのか。聞け、おまえの弟の血が
11 土からわたしに叫んでいる(6)。 一土は口を開いて、おまえの手から弟の血を受けた。今やお
12 まえは土からのろわれる。 一おまえが土を耕しても、もはや土はおまえのために実を結ば
13 ない。おまえは地をさまよいさすらう者となるであろう」。 一カインはヤーウェに言った、
14 「わたしの悪は重すぎるので、人々はがまんしないでしょう(7)。 一あなたはきょうわたしを
この土地から追い出してしまいます(8)。わたしはあなたの目の届かない所にやられます(9)。

バイ下7 21b—23a参照）にあたってのエワの驚いた表現である。320はここに属すると考えるものが多い。
（2） レビ1 12参照。「ういご」「肥えたもの」は、アベルが最も良いものだけを心からささげたことを意味する（出
34 19、民18 17、レビ3 9—11 14—16参照）。
（3） ヘブライ11 4参照。神は特別なしるしで表わす（例、士6 21、レビ9 24）。
（4） 本節の大体の意味ははっきりしている。すなわちカインの心の中にはいりこもうとしている邪念（アベルを
殺そうという悪い考え）を制するようにと神がカインに警告しているのである（ヨハネ一書3 12参照）。直訳では、
「おまえがよくすれば、『上げること』ではないか。しかしおまえがよくしなければ、罪は戸口に伏しているものでで
はないか。それ（伏しているもの）はおまえを慕うが、おまえはそれをおさえなければならない」。「上げることで
はないか」を「おまえ（とその供え物）はよみされるではないか」の意味に解する者も多いが、本訳のほうが適当
と思われる。「伏しているもの」は文法上から見れば分詞（創世記に用いられている他の箇所は29 2 49 14 25）で、男
性（「ロベツ」）であるが、この語に関連している名詞「罪」は女性である。おそらく著者の考えが罪の象徴として
一般によく知られていたある男性名詞に移ったのであろう。したがってそのあとに続く「それ」は女性ではなく男
性となっている。著者が3 24で神の使いを描くにあたってバビロニアの「カリブ」の姿を借りて表現したように（3
注12参照）、ここにはじめてしるされた「罪」というものの本性、すなわち人の心にはいりこもうとするものである
ことを描くために、ここではアッカド人の考える悪鬼「ラビツ」（ロベツと子音は同じ）の姿を借りたものと思われ
る。この「ラビツ」は家の中にはいりこもうとして戸口のところですきをうかがっている野獣のように伏したもの
と、当時一般に信じられていた。ペトロ一書5 8で悪魔が「しし」と呼ばれている。
（5） アダムとエワは神に問いただされて苦しい弁解をしたが（3 10 12 13）、カインは無礼な虚偽の答をした。
（6） 申12 23「血は命……」参照。血が土の上に流されておおわれないならば、復しゅうを天に呼び求める。エ
ゼキエル24 6—9、ヨブ16 18。
（7） 「わたしの罰は重すぎてたえられません」、あるいは「わたしの罪はあまりにも大きすぎてゆるされませ
ん」とも訳される。
（8） 今まで耕してきたエデンの肥えた土地から追い出されること。
（9） エデンで生活している人々が受けている神の特別保護から離れること。

わたしは地をさまよいさすらう者となり、わたしを見る人はだれでも、わたしを殺すでしょう」。15 ヤーウェは、「それならば、カインを殺す者はだれでも、七倍の復しゅうを受けるであろう」とカインに言われた。そしてヤーウェは、だれがカインを見ても、かれを打ち殺すことのないように、カインにしるしを付けられた。(10) 16 カインはヤーウェのみまえを退き、エデンの東、ノドの地に住んだ。(11)

カインの子孫と文明のはじまり (12)

17 カインは妻を知った。妻はみごもってハノクを産んだ。カインは一つの町をつくり、その子ハノクの名にちなんで、その町を名づけた。18 ハノクにはイラドが生れ、イラドはメフヤエルを生み、メフヤエルはメトシャエルを生み、メトシャエルはレメクを生んだ。19 レメクはふたりの妻をめとった。ひとりの名はアダ、他のひとりはチッラと呼ばれた。20 アダはヤバルを産んだ。ヤバルは天幕に住み、家畜を飼う者の始祖(13)となった。21 その弟の名はユバルといい、琴と笛を奏するすべての者の始祖となった。22 チッラはトバル・カインを産んだ。トバル・カインは青銅と鉄で種々の道具を造るかじやであった。(14) トバル・カインの妹はナアマといった。

23 レメクは妻たちに言った、

「アダとチッラよ、わが声を聞け、
レメクの妻たちよ、わがことばに耳を傾けよ。

---

(10) エデンから離れるカインを保護するために彼につけられたしるしは、カインの嘆願に答えられた神の慈悲によるものである。この「しるし」はカインに与えられた保証という意味にも解される。

(11) 「ノド」についてはここにしるされている以上のことは何も知られていない。12-14節の「さまよいさすらう者」の原語「ナー」「ナド」によく似ている。エデンの外にはすでに他の人々がいてカインを見れば殺すだろうということが14-15節にしるされているので、カインとアベルの事件は実際にはもっとあとで起ったのかもしれないと考えられる筋もある。それで二代後のケナン（5:9）とカインを同一人物であろうと見るものもある。それはとにかく著者はここで世にはびこってゆく罪悪をわれわれにはっきり示している（注5参照）。3章では最大のおきての第一にそむいた人祖の罪とその結果が述べられ、ここでは第二（マテオ22:36-40）にそむいた罪とその結果が述べられている。特にはっきり表わされていることは、神が罪をきらっておられることと、その罪がどこでだれによって犯されようと必ず復しゅうがあるということである。しかし神は親心から前もって警告を与え（7節参照）、犯罪後でも慈悲を示される（前注参照）。それでも人の罪悪はふえるばかりで（19節の一夫多妻、23-24節の高慢と残忍性）、罰として大洪水が起るまで続く（6:1-7）。

(12) 2節はカインとアベルの二つの職業をしるし、17-22節はカイン家の七代について物語っている。これらが文明のはじまりとなっている。叙述された事がらとその名は符合する。たとえば、「ハノク」は新築祝いをする（申20:5参照）という意味の「ハナク」に似ている。ヤバル、ユバル、トバル・カインについては注14を見よ。あとで放浪者となったカインの名はケニ人と呼ばれる放浪かじや（民24:21-22、士1:16 4:11-17参照）の名のおこりであると思われる。

(13) 直訳では「父」。

(14) 「ヤバル」「ユバル」「トバル・カイン」の意味は彼らが身につけたわざに符合する。「ヤバル」は「導く」の義で、らくだ係「ウビル」（歴上27:30）と語根は同じ。「ユバル」は角笛（出19:3）を意味する「ヨベル」に似ている。「トバル」は北に住み（10:2）青銅で物を造る（エゼキエル27:13）人々の名である。「トバル」のあとについている「カイン」は「かじや」の義でギリシャ語訳にはない。あとの書入れと思われる。

わたしを傷つけるならば、わたしは人を殺し、
わたしに打ち傷を与えるならば、若者を殺す。
24 カインのための復しゅうが七倍ならば、
レメクのためには七十七倍[15]。」
25 アダムはまた妻を知った。彼女は男の子を産み、「カインに殺されたアベルの代りに、神はわたしにもうひとりの子を授けられました」と言って、シェトと名づけた[16]。
シェトの子孫と祭式のはじまり
26 シェトにも男の子が生れ、その子をエノシュと名づけた。エノシュはヤーウェのみ名を呼んだ最初の人であった[17]。[18]

5
1 アダムの系図[2]は次のとおりである。神はアダムを創造された時、
2 **洪水以前の太祖**[1] ご自身に似せて造って祝福し、その名を「人」と名づけられた。これはかれらが創造された時のことである。
3 アダムは百三十歳の時、自分にかたどられて自分に似た男の子を生み、その名をシェトとつけた。
4 アダムはシェトを生んでから八百年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。
5 アダムの一生は九百三十年であった。そして死んだ。
6 シェトは百五歳の時、エノシュを生んでから八百七年

(15) **キリストは復しゅうの正反対、すなわち人をゆるすことを命じるにあたって、さらに数字をふやしている。**七度でなく七の七十倍まで兄弟をゆるさなければならないと、ペトロに命じている（マテオ18[22]）。

(16) 「シェト」は「授ける」の義の「シャート」には「置く」の義もあり、3[15]にも用いられている。なお「子」の原語と3[15]の「子孫」の原語は同じ。シェトは救世主を出す家系の祖。

(17) 「み名を呼ぶ」ということは、唯一の神を礼拝するときの正式の型で一般に供え物とか宗教的儀式を伴う（12[8] 26[25]、列上18[24]—[26]）。ロマ10[13]も参照。ヤーウェ伝承は洪水以前でも「ヤーウェ」という名称が使用されていたように伝えているが、これと異なり司祭伝承とエロヒム伝承（これもモイゼ五書のおもな資料）は、この名称が正式にモイゼに示されるまでその使用のことについては述べていない（出6[2]—3[14]）。

(18) 本訳は原典の意味に近いと思われる。現存原文によれば、「そのとき人々はヤーウェのみ名を呼びはじめた」。「エノシュ」は他の箇所では「人」「人々」を意味する詩的用語（例、申32[26]）。

【注】(1) 本章の系図と11[10]—[26]のセムの系図にしるされている年齢は象徴的なものである。一般に太古の年表が文字どおりとられていないことはバビロニアの年表を見れば明らかである（これによれば洪水前のバビロニア王朝の十代はそれぞれ数万年ずつになっている）。また本章中の数字が他の古代語写本と訳本（サマリア五書や七十人訳）の中で計画的に変えられているように見えることからも明らかである。これらの数字は文献的史料の存在しなかった時代の未知の数万年に橋渡しするために案出されたもので、この方法は当時一般に用いられていた。ここではアダムからアブラハムまでの時代、すなわちアダムからノエまで（**5章**）とセムからアブラハムまで（11[10]—[26]）がこの方法でしるされている。著者は当時の支配者の系図のかわりにアダムの系図をしるし、全人類はみな同一の先祖をもち、その先祖は神によって神にかたどられ（1[26]）、神に似せて（5[1]）造られたことを説いている。その「かたどり」は、大部分の人の心が悪に傾いたにもかかわらず、神のまことの「かたどり」である救世主キリスト（コリント後4[4]）が第二のアダムとしてすべてのものをご自身において一つのかしらのもとにまとめる（エフェゾ1[10]）ために来られるまで、選民の中の神の子ら（6[2]、申14[1]参照）によって受け継がれている。アダムはキリストの先祖（ルカ3[23]—[38]）、前表（ロマ5[14]）である。

(2) ヘブライ語では「トレドス」。2注[4]参照。アダムとシェトの系図はヤーウェ伝承に基づいて4[25]—[26]から始まっているが、本節で断ち切られ（しかし注5を見よ）、もっと系統的な司祭伝承に基づく系図がこれに代っている。これは1[1]—2[4a]の伝承に同じ。

8 生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。 -シェトの一生は九百十二年であった。そして死んだ。

9 エノシュは九十歳の時、ケナンを生んだ。 10 エノシュはケナンを生んでから八百十五年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。 -エノシュの一生は九百五年であった。そして死んだ。

12 ケナンは七十歳の時、マハラレエルを生んだ。 13 ケナンはマハラレエルを生んでから八百四十年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。 -ケナンの一生は九百十年であった。そして死んだ。

15 マハラレエルは六十五歳の時、エレドを生んだ。 16 マハラレエルはエレドを生んでから八百三十年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。 -マハラレエルの一生は八百九十五年であった。そして死んだ。

18 エレドは百六十二歳の時、ハノクを産んだ。 19 エレドはハノクを生んでから八百年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。 -エレドの一生は九百六十二年であった。そして死んだ。

21 ハノクは六十五歳の時、メトシェラーを生んだ。 22 ハノクは神とともに歩んだ。(3) ハノクはメトシェラーを生んでから三百年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。

23 ハノクの一生は三百六十五年であった。 24 ハノクは神とともに歩み、神がハノクを取られたので、(4) 見えなくなった。

25 メトシェラーは百八十七歳の時、レメクを生んだ。 26 メトシェラーはレメクを生んでから七百八十二年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。 -メトシェラーの一生は九百六十九年であった。そして死んだ。

28 レメクは百八十二歳の時、男の子を生み、 29 「この子はヤーウェにのろわれた土地ではねおって働くわれわれを慰めるであろう」と言って、その子をノエと名づけた。(5) -レメクはノエを生んでから五百九十五年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。

---

(3) 同句がノエのことについて6[9]で用いられている。アダムとエワの堕落以前の状態（3[8]参照）に似たもので、神との親交を意味する。

(4) おそらく神がエリアを引き取られた時と同じように。列下2[1-12]に同句が数回でる。ハノクの神との親交はシラ44[16]に後世の鏡とされ、聖パウロはヘブライ11[5]にその信仰をたたえている。またハノクのことはユダ[14-15]節にもしるされている。

(5) 本節は「ヤーウェ」の文字が使用されているので、4[26]でとぎれたヤーウェ伝承による系図物語の断片である。「ノエ」という名は「慰める」のヘブライ語「ナヘム」にちなんでつけられている。「ナヘム」のはじめの二つの子音は「ノエ」の子音に同じ。「ヤーウェにのろわれた土地で」については3[17]8[21]参照。原語からは「……土地から慰めをわれわれに与えるであろう」という意味にもとれる。そうだとすれば、本句はノエのぶどうづくり（9[20]）を暗示したもの（詩104[103][15]、格31[6-7]、エレミヤ16[7]参照）。本節に含まれている予言は救世主を意味するものと解する教父もある（ペトロ一書3[20]参照）。

31 レメクの一生は七百七十七年であった。そして死んだ。
32 ノエは五百歳になって、セム、ハム、ヤフェトを生んだ。

6

1 人間がこの世にふえはじめてかれらに娘たちが生れた時、[2]神の
子らは人の娘たちを見て好ましいと思い、望むままに彼女らを妻に
3 めとった。[1]そこでヤーウェは、「わたしの霊はその中にいつまでもと
どまらない。人はまったく肉であるから。人の日数は百二十年にすぎない[2]」と言われた。
4 神の子らが人の娘たちの所にはいり、娘たちが子を産んだころ、またそのあとでも[3]、
地上にネフィリムがいた。その人たちは太古の勇士で、名高い人々であった。
5 ヤーウェは、人の悪が地上にはびこり、あらゆる心の思いが絶え
6 ず悪いことにばかり傾いているのを見て、[1]地の上に人を造ったこと

人類の堕落[1]

罰としての洪水[4]

【注】(1) 著者は1章で創造の事実を述べるにあたり、当時の通俗な世界開びゃく説を用いて写実的にしるしているが、ここでもだいたい同じように、洪水をひき起したころの堕落状態を描くにあたって、当時一般に伝えられていた神話、すなわち天人と人の女との不倫から生れた巨人に関する伝説の中の語句を用いたものと思われる。それはとにかく、著者のいう「神の子ら」はここでは天人のことではない。義人、特にシェトの子孫中の霊的な人々をさしている（ルカ3[38]にシェトの父アダムは神の子としるされている。申14[1]参照）。「人の娘たち」は悪い女、特にカインの子孫でまったく肉的な女たちのこと。[2]節の「望むままに…めとった」は不信仰なレメク（4[19]）がはじめた一夫多妻のことを意味し、当時一般のならわしとなっていた。「めとりとつぎ」（マテオ24[38]、ルカ17[27]参照）はこの時代について述べたキリストのことばである。

(2) 一般人類の生命の息（2[7]、詩104〔103〕[29-30]参照）は百二十年後の洪水によって断たれるであろうという神の宣告（おそらくヨナ3[4]の場合と同じような悔い改めの期間。ハノクの審判についての予言、ユダ[14-15]節参照）。義人までも罪を犯すようになり、人間は「まったく肉」的になった。そしてもはや神に似たものではなくなり（1[26]参照）、神から与えられた生命を持つにふさわしくなくなった。以上の解釈はギリシャ語訳、ラテン語訳、シリヤ語訳に一致するものである。またこの不明なヘブライ文の意味を「わたしの霊はいつまでも人の中で（人の堕落によって）卑しめられるべきではない」と解する者もある。この不明なヘブライ語に類似したアッカド語の語根の意義にしたがって解すれば、「わたしの霊は人のためにいつまでもその責めを負うべきではない」。すなわち「わたしの霊（罪に悩まされる神聖な霊、イザヤ63[10]参照）は、わたしが造った人間をいつまでも生かしておくということをわたしに許さないであろう」。[5-7]節はこの考えが発展したものであろう。

(3) 「またそのあとでも」はおそらく後の書入れ（民13[33]参照）。知14[6]には昔の巨人の高慢と洪水による罰のことがしるされている（バルク3[26-28]、シラ16[7]参照）。ネフィリム（巨人）もしくは勇士は不道徳な結婚によって生れたものと考える者が多い。しかし著者ははっきりとそうは言っていない。人のいかなる力も神のさばき（洪水）にあえば無力であることを示すために、その時代に巨人が存在していたことを引合いに出したのであろう。

(4) 洪水物語は司祭伝承とヤーウェ伝承に基づくもので、6[5]から9[17]にわたってしるされている。著者は統計的な司祭伝承のほうを主として用い、これに鮮明で通俗的なヤーウェ伝承を少しずつ織り込んでいる。6[5-7a]、7[c-8]、7[1-5]、7[a]、8[a]、9[b-10]、12[22-23a]、23[c]、8[2b-3a]、6[8-12]、13[b]がだいたいヤーウェ伝承によるものであろう。その結果交互に組み合わされほとんど二重記事になっている。著者は両者の不調和（例、箱船の中の動物の数や特に洪水の日数）を別に問題としていない。このことは著者が記事の細部に歴史性を認めていないことを意味する。これらは著者にとってはまったく二次的なものである。聖書の記事に類似した古代バビロニアの伝説はかなりある。前者は後者に依存するものではないが、両者の内容に多くの共通点が見られる。したがってともに同じ「歴史上の核心」を持ったものであるということがわかる。すなわちメソポタミアの大洪水中の出来事を核心として通俗な叙事詩の形で洪水が世界に及んだものとしている。しかしヤーウェ伝承と司祭伝承に含まれている叙事詩の要点（8[22]および注8、9[8-17]および注2参照）や、著者が両伝承を用いた目的はバビロニア伝説の場合と全く異なっている。その目的は洪水物語中に説明されているように「神は聖にして罪をきらい罪を罰する一方、他方では義人をあわれむ」という真理を公にする

を悔み、(5)心を痛められた。7ヤーウェは、「わたしは、創造した人をはじめ、家畜、はうもの、空の鳥までも、地のおもてから滅ぼそう。それらを造ったことを悔いるから」と8言われた。9しかし、ノエはヤーウェの心にかなっていた。

10ノエ家の歴史は次のとおりである。ノエは当時の人々の中で正しく、かつ全き人であった。ノエは神とともに歩んだ。11ノエは三人のむすこ、セム、ハム、ヤフェトを生んだ。12神が世を見られると、非常に(6)堕落していた。神の前に、世は堕落し、暴虐に満ちていた。13神はノエに言われた、「わたしは肉からなるものがみな堕落した生活をしたからである。そこで神はノエに言われた、「わたしは肉からなるものをみな絶やそうと思う。かれらのゆえに世は暴虐に満ちているから。わたしはかれらを世もろとも滅ぼそう。

14おまえはゴーファ(7)材で箱船を造れ。箱船の中にへや(8)を造り、そのうちそとをチャンで塗れ。

ノエの箱船

15造り方は次のとおりである。箱船の長さは三百アンマ(9)、幅は五十アンマ、高さは三十アンマ。16箱船に屋根を造り、上から一アンマに仕上げよ(10)。また箱船の戸口を横側に設けよ。なお箱船の中にふなぐらと二階と三階を造れ。17見よ、わたしは地の上に洪水をおこし、天の下の命(いのち)の息のある肉からなるものをすべて滅ぼそうとしている。世にあるものはことごとく死に絶えるであろう。18しかし、わたしはおまえと契約をす

19る。おまえは、むすこたち、妻、むすこたちの嫁らとともに、箱船にはいれ。20すべて肉からなるあらゆる生きものを、それぞれ二つずつ箱船に入れて、おまえとともに生き残るようにせよ。21それらは雄と雌でなければならない。22種類の家畜、地をはうあらゆる種類のすべてのものの中から、それぞれ二つずつがおまえのところに来るから、それらを生き残らせよ。23そしておまえは食べられるあらゆる種類の食べ物を集めて手もとにたくわえ、おまえとそれらの食べ物とせよ」。24ノエはそ

ことである。新約中には、教訓的な意味をもって洪水のことがしるされている。ヘブライ11[7]、ペトロ一書3[20-21]、マテオ24[37-38]、ルカ17[26-27]参照。教父たちは、「ノエの箱船は教会の前表で、教会にはいらないものは救われない」と説いている。

(5) 神が罪を極度にきらっておられることを強く表現したことば。神は不変（民23[19]、サムエル上15[29]参照）。

(6) 直訳では「見よ」。注意を引くための語。本節は1[31]の形とまったく同じ。神のわざと人のわざとは著しい対照をなすことが暗示されている。

(7) この語はここに一回用いられているだけ。「いとすぎ」か「もみ」のような木をさしているのであろう。

(8) 直訳では「巣」。原語の子音から「よし」「あし」、すなわち船板のつぎ目を詰める「繊維」の意味にもとれる。

(9) 原始的尺度。ひじから中指の先端までの長さで約四十五センチ。一般にはラテン語の「クビト」という単位名で表わされている。ノエの箱船と同じ大きさの近代船は約一万五千トンぐらいであろう。

(10) 「屋根」と訳されている語は本節に一回用いられているだけで、その意味はあいまいである。側面の最上部を一アンマの幅で取り巻いているすきまのような「窓」と訳す者もある。「上から…仕上げよ」の原語の意味も不明で、いろいろと推測されているが、その一つは「箱船の上の端から一アンマ外側におおいのように屋根をかぶせよ」という解き方である。これはノエが箱船の外を見ることができなかったことと符合する（8[6-13]および注[3]参照）。

のとおりにした。ノエはすべて神が命じたとおりにした。

7
1 ヤーウェはノエに言われた、「おまえとおまえの家族はみな箱船にはいれ。わたしはお
2 まえを今の世の人の中で正しいと見たからである。 2 おまえはすべての清い獣の中から
3 それぞれ雄雌(おすめす)あわせて七匹(1)ずつ、清くない獣の中から雄雌一つがいずつ、 3 また空の鳥
の中からもそれぞれ雄雌あわせて七羽ずつ取り、それらの種類が全地の上に生き残るよ
4 うにせよ。 4 あと七日たてばわたしは地の上に雨を四十日四十夜降らせ、地の面(おもて)からわた
5 しが造った生きものをすべて滅ぼすからである」。 5 ノエはすべてヤーウェの命じたとお
りにした。

6 洪水(こうずい)が地の上におこった時、ノエは六百歳であった。 7 ノエ、むすこたち、妻、むすこらの嫁たちは、洪水を避けるためにともに箱
乗船 船にはいった。 8 清い獣、清くない獣、鳥、地をはうすべてのものの中から、 9 雄雌一つがいずつがノエの所にきて箱船にはい
10 った。 10 それから七日たって洪水が地の上におこった。

11 ノエの生涯の六百年目の第二の月の十七日、ちょうどその日に大
洪水(2) きな深淵(しんえん)の源がことごとく破れ、天の水門が開かれた。 12 そして大
13 雨が四十日四十夜、地の上に降った。 13 その同じ日に、ノエとノエの

むすこたちセム、ハム、ヤフェト、それからノエの妻とむすこたちの三人の嫁がともに
14 箱船にはいった。 14 あらゆるすべての種類のもの、あらゆるすべての種類の獣、あらゆる
らゆるすべての種類の鳥、羽のあるすべてのものも翼のあ
15 るすべてのものも、はいった。 15 命の息のある肉からなるものがみな一つがいずつ、ノエの
16 所にきて箱船にはいった。 16 はいったものはすべて肉からなるものの雄と雌で、それらは
神がノエに命じたとおりのものであった。そしてヤーウェはノエを中に閉じ込められた。
17 洪水は四十日の間、地の上に続いた。 17 水が増して箱船をおし上げ、箱船は地から浮き
18 上がった。 18 水はみなぎり地の上に大いにみちあふれ、箱船は水の面(おもて)に漂った。 19 水はま
20 すますみなぎり、天の下の高い山はすべておおわれてしまった。 20 水はさらに十五アンマ

【注】(1) 「清い獣」は食用といけにえに供せられた獣。「七匹ずつ」はおそらくそれぞれ三つがいと一匹の雄。この雄は8[20]に述べられているいけにえのためのものかもしれない。直訳では「七つ七つ」で、七つがいの意味にもとれる。司祭伝承ではただ種類ごとに一つがいとなっている(6[19-20])。またモイゼの律法によって定められるまで清い獣と清くない獣の区別をしていない(レビ11)。

(2) 司祭伝承によれば、深淵の水がまだ大空によって分けられていなかったころの原始宇宙の状態に復帰しかかったために洪水がおこり(11節の「天の水門が開かれた」、1[6-9]および注5参照)、水は百五十日の間高くなっていったことになる(7[24])。ヤーウェ伝承によれば、四十日四十夜降った雨のために洪水がおこったことになる。著者は両者をあわせ用いて後者の四十日を前者の百五十日のはじめの部分とし、また8[6]ではこの四十日を箱船から外に出るまで待っていた期間のはじめの部分であるとしている。

21 みなぎり、山々はおおわれた。
22 地に群がるすべてのものも、人もみな死んだ。鼻に命の息のあるすべてのもの、すな
23 わち陸にいたものはことごとく死んだ。ヤーウェは地の上の生きものをすべて、人を
はじめ、家畜、はうもの、空の鳥までも、滅ぼされた。それらはこの世から滅ぼされ、
24 ノエと、箱船にノエとともにいたものだけが生き残った。水は百五十日の間、地の上
にみなぎっていった。

8
1 神は、ノエと、箱船の中にノエとともにいたすべての獣と、すべ
水の衰え、下船　ての家畜とを思い出された。そこで神は地に風を送られ、水はおさ
2 まった。深淵の源と天の水門は閉ざされ、天からの雨は止められ
3 た。水は地の上から絶えず引いていった。洪水がおこってから(1)百五十日後に減りはじめ
4 た。第七の月の十七日に箱船はアラトの山に留まった。(2)水はますます減って第十の
月に及び第十の月の一日に山々の頂が現われた。
6 四十日後にノエは箱船に造っておいた窓を開いて、(3)からすを放した。からすは地の
8 上の水がかれるまで出たりもどったりした。(4)そこでノエは水が地の面から引いたかど
9 うかを見るために、かれのもとからはとを放した。しかしはとは足をとどめる所が見
つからなかったので、箱船のノエの所に帰ってきた。水が全地をおおっていたからであ

10 る。ノエは手をさし伸べてはとを取り、箱船の中に引き入れた。
ノエはさらに七日待って、またはとを箱船から放した。
12 てきた。見ると、むしり取ったばかりのオリーブの葉を口にくわえていた。ノエ
エは水が地から引いたことを知った。ノエはさらに七日待って、またはとを放した。
13 かし、はとはもうノエの所に帰ってこなかった。
14 第六百一年(5)の第一の月の一日に、地の上の水はかれた。ノエが箱船のおおいをはずし
て、地の面を見るとかわいていた。第二の月の二十七日に地はかわききった。15そこで

【注】(1)「洪水がおこってから」はヘブライ文にはない。直訳では単に「あの(百五十日)」。すなわち7^{24}の「百五十日」。
(2) アラトは古代のウラルト地方で、アルメニアおよび少し南にはみでた地方も含む。アララト山の位置は巻末第三図の中にしるされている。
(3)「窓」は屋根に造られたということがはっきりしている。そこからは空しか見えなかったので、ノエはかわいた所があらわれたかどうかを見るために、はとを放した。古代の船乗りは四面陸の見えない海上で鳥を放し、その飛んでいった方向に進路を定めたものである。三度目に放したはとが帰ってこないので、ノエはおおい(13節)をはずしても心配はないことを知った(6^{16}および注10参照)。そしてノエ自身で大地のかわいているのを見た。
(4)「からす」のことをしるした本節は洪水を物語るもう一つの伝承から取られたものかもしれない。そうだとすれば、本節をここにさしこんだために、「七日待ってはじめてはとを放した」という文句が押し出されたのかもしれない。10節の「さらに七日」という文句からそう思われる。
(5) ノエの生涯の第六百一年のこと。ギリシャ語訳ではこのように書き入れている。

16 神はノエに言われた、「おまえは、おまえの妻、むすこたち、むすこたちの嫁らとともに
17 箱船から出よ。あらゆる肉からなるもののうち、おまえの所にきた生きものは、鳥
も家畜も地をはうすべてのものもことごとく、地に群がり、地の上に生み、ふえるように、
18 外に連れて出よ」。ノエは、むすこたちと妻とむすこたちの嫁らを連れて外に出た。19すべての獣、すべての家畜、すべての鳥、地をはうすべてのものは、その種類ごとに箱船
の外に出た。

20 さてノエはヤーウェのために祭壇を築き、すべての清い獣すべて
21 **洪水後ノエのさげたいけにえ** の清い鳥の中から取って、祭壇の上で燔祭(6)をささげた。ヤーウェは意にかなうかおり(7)をかがれた時、心の中で言われた、「わたしはもう二度と人のゆえに土をのろわない。人の心は若い時から悪に傾いているからである。わたしがこのたびしたように、もう二度とすべての生きものを滅ぼすということはしない。

22 地のあるかぎり、
種まき時と取入れ時、寒さと暑さ、
夏と冬、昼と夜は、
やまないであろう(8)」。

9
1 神はノエとそのむすこたちを祝福して言われた、「生めよ、ふえ
2 **ノエ祝福さる。禁断の血(1)** よ、地に満ちよ。野のすべての獣、空のすべての鳥は、地をはうすべてのものと海のすべての魚とともに、おまえたちを恐れおののくであろう。これらのものはおまえたちの手に渡される。命のある動
3 くものはことごとく、おまえたちの食べものとなる。わたしはすべてのものを青草と同じようにおまえたちに与えた。

---

(6) 宗教用語。いけにえを焼きつくし少しも司祭や献納者の食用とせず、全部を神にささげる祭。レビ1参照。
(7) 直訳では「なだめるかおり」。後に「よみされるささげ物」を表わす形容語となる（例、出29^{18,25,41}、レビ1^{9,13,17}）。ミサ聖祭中カリス奉献の時の祈りの中にもこれと同じ表現がある。
(8) もう二度と大洪水をおこさないというヤーウェの厳粛な約束。洪水に関するヤーウェ伝承はここで終っている。司祭伝承は同じ保証を厳粛な契約の形で表わしている（9$^{8-17}$参照）。

【注】(1) ノエとその子らは第二の人祖として（19節）、アダムとエワが受けた祝福と同じものを受ける（9^{1}と1^{28}を比べよ）。しかし人間と動物の間に新しい関係が立てられる。すなわち人類ははじめ平和のうちに動物を支配し（2節）、その肉を食べてもよいことになる（3節）。しかし血は魂であり（申12^{23}、レビ17$^{10-14}$参照）、神のものであるから、食用とせずに（4節）、神に返さなければならない（レビ17^{4}）。神にかたどって造られた人間の生き血はなおさら聖である（5-6節）。人間の血がはじめて流された時、神が直接カインを罰されたが（4$^{9-12}$）、これからは人の血を流せば、殺害者の生き血が要求される。すなわちほかの人、または「血のあだを討つ者」（民35$^{19-21}$、申19^{12}）と呼ばれる親族の手によって要求される。また人間を殺す動物も殺される（出21^{28}）。動物の血を食べた者は神から罰を受ける（レビ17^{10}）。

4 じように、おまえたちに与える。5しかし命のある、すなわち血のある肉は、食べてはな
5 らない。6わたしは、おまえたちの命の血の値を必ず要求する。いかなる獣からも、また
6 人からも、それを要求する。人間同志からでも、わたしは人の命を要求する。
6 人の血を流す者はだれでも、人によって血を流される。
6 神にかたどって、人は造られたからである。
7 おまえたちは、生めよ、ふえよ、地に群がり、地にふえよ」。
8
8 次に神はノエとそのむすこたちに言われた、9「見よ、わたしはお
10 **ノエとの契約**(2) まえたちとおまえたちのあとに続く子孫と契約を立てる。10またお
まえたちとともにいるすべての生きものと、おまえたちとともにい
11 る鳥、家畜、野のすべての獣、およそ箱船から出てきたものはみな、野のすべての獣と
11 さえも、契約を立てる。わたしはおまえたちに契約をする。11もうふたたび洪水(こうずい)によっ
12 て、すべて肉からなるものが断たれることはない。もう二度と地を滅ぼす洪水はない」。
12 また神は言われた、「わたしと、おまえたちおよびおまえたちとともにいるすべての生
13 きものとの間に、わたしが代々(よよ)いつまでも立てる契約のしるしはこれである。13わたし
14 は雲の中にわたしのにじを立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。14わ
15 たしが地の上に雲を集め、にじが雲の中に見える時、15わたしは、おまえたち、すべて

16 の生きもの、すべて肉からなるものと、わたしとの間の契約を思い出す。水はもう二度
16 とすべて肉からなるものを滅ぼす洪水とはならない。16にじが雲の中にある時は、わた
17 しはそれを見て、神と、地の上にあるすべての生きもの、すべて肉からなるものとの間の
17 永久の契約を思い出す」。17また神はノエに、「これはわたしと、地の上のすべて肉からな
18 るものとの間に、わたしがする契約のしるしである」と言われた。
18 箱船を出たノエのむすこたちは、セム、ハム、ヤフェトであっ
19 **ノエの子ら**(3) た。ハムはカナアンの父である。19この三人はノエのむすこで、全
19 地の人々はこの三人から分れ出た。

---

(2) 神がノエとすべての生きものになされたこの契約は(6 18参照)、司祭伝承による洪水物語の要点である(8 22参照)。この伝承による宇宙の概念(1 1—10)、すなわち陸地は天界の大洋、地上の海、地下の深淵に取り囲まれているという考えからすれば、全物語のいちばん重要な箇所は大洪水は二度とおこらないという神の厳粛な約束である(イザヤ54 9参照)。次の滅亡、すなわち世界最後の滅亡は火によって行われるであろう(ペトロ二書3 5—7 10—13参照)。ノエに与えられた契約は、旧約における神の三つの契約の最初のもの。この三つは新約の準備(コリント前11 25、ルカ22 20参照)。第一、ノエとの契約のしるしは「にじ」(9 13、直訳では「[神の]弓」)、第二、アブラハムとの契約のしるしは割礼(17 11)、第三、モイゼとの契約のしるしは安息日(出31 15—17)。契約という考えは旧約聖書に行きわたっている。

(3) 18—27節では次の点があいまいである。(イ)18節ではハムはノエの次男であるが、24節では末のむすことなっている。(ロ)22節はハムを犯人にしているが、25—27節ではのろわれるのは彼のむすこカナアンとなっている。20—27節は、セム、ヤフェト、カナアンをノエのむすことして物語っている古いほうのヤーウェ伝承から取ったものであり、

20 さてノエは農夫となり、ぶどう畑を造りはじめた。21 ノエはぶどう酒を飲み、酔って
22 天幕の中で裸になっていた。カナアンの父ハムは父の隠しどころを見て、外にいたふ
23 たりの兄弟に告げた。23 しかしセムとヤフェトはマントを取って、自分たちの肩にかけ、
うしろ向きになって進み、父の隠しどころにかぶせた。ふたりは顔をそむけていたので、
24 父の隠しどころを見なかった。24 ノエは酔いからさめて、末のむすこが自分にしたこと
25 を知った時、25 ノエは言った、

「カナアンはのろわれよ。
兄弟のしもべのしもべとなれ」。

26 さらに言った、

「セムの神、ヤーウェは賛美されますように。(4)
カナアンはセムのしもべとなれ。
27 神はヤフェトを広がらせ、(5)
セムの天幕にかれを住まわせられるように。
カナアンはかれのしもべとなれ」。

28 ノエは洪水のあと三百五十年生きながらえた。29 ノエの一生は九百五十年であつた。そ
して死んだ。

10 1 民族表(1) ノエのむすこセム、ハム、ヤフェトの系図は次のとおりである。
洪水の後、かれらに子が生れた。

2 ヤフェトの子は、ゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メ
3 シェク、チラスである。ゴメルの子は、アシュカナズ、リファト、トガルマである。
4 ヤワンの子は、エリシャ、タルシシュ、キッチ人、ドダン人である。5 これらから民族

22節の「……の父ハム」は後のつけ加えで、この伝承では末のむすこカナアンが犯人となっていたのであろうという解き方がある。もう一つは、ハムはすでに神から祝福されたものであるから(9:1)、犯人ではあるが、のろわれるのはむすこのカナアン以下の子孫であるという解き方である。後にイスラエル人(セム族)に征服されるカナアン人(26節)は堕落した有名な民族である。

(4) セム族は特別の祝福を受け、神ヤーウェを知る民族となる。ヤーウェはイスラエル人と特別の契約を結び、彼らは選民となる(イザヤ51:16参照)。太祖の祝福は効力があって取り消すことができず、子孫にも及ぶものとされている(27:49章参照)。

(5) 「ヤフェト」は「ヤフト」(広がらせる)に発音が似ている。「セムの天幕に……」という文句に、イスラエル(セム)の霊的子孫である教会にはいる異邦人(ヤフェト)は救われるという予言が含まれていると解する教父が多い。

【注】(1) 著者は本章で彼の知っているすべての民族の家系をさかのぼってノエの三人の子の名をあげ、全人類は同一の祖先から出たことを述べている。これも前と同じ二つの伝承から取られたものである。すなわち司祭伝承が土台となり、ヤーウェ伝承が1b8—15 18b—19 21 25—30節に織り込まれている。16—18a 24節はおそらく著者自身が付け加えたものであろう。洪水物語の場合と同様、著者はその不調和を問題としていない。7節ではハビラとシェバはハムの子孫になっているが、28 29節ではセムの子孫となっている。その分類は人種学的というよりも、むしろ地理的歴史的

の島々は分れ出ている。以上は、その国々、それぞれのことば、その民族、その民族にしたがったヤフェトの子孫である。

6 ハムの子は、クシュ、エジプト、プト、カナアンである。7クシュの子は、セバ、ハビラ、サブタ、ラーマ、サブテカである。ラーマの子は、シェバとデダンである。

8 クシュはニムロドを生んだ。ニムロドはこの世の最初の征服者

ニムロドの偉業

9 で、「ヤーウェの前に強いかりうどであった。それで、「ヤーウェの前に強いかりうどニムロドのように」とうたわれた。10かれの王国の基は、バベル、エルク、アッカドで、みな、シンアル地方にあった。11その地方からアッシュルに進み、ニネベ、レホボト・イル、カラー、12およびニネベとカラーの間にレセンを築いた。それはあの大きな町である。

13 エジプトは、ルド人、アナム人、レハブ人、ナフトー人、14パトロス人、カスルー人、カフトル人を生んだ。カフトルからペレシェト人が出た。

15 カナアンは、長男シドン、ヘト、16およびエブシ人、アモル人、ギルガシ人、17ヒッビ人、アルキ人、シニ人、18アルワディ人、ゼマリ人、ハマチ人を生んだ。後にカナアン人の諸族は散り広がった。19カナアン人の境界はシドンからゲラルの方向のガザに至り、ソドム、ゴモラ、アドマ、ゼボイムに向かい、レシャーにまで及んだ。20以上は、その氏族、そのことば、その国々、その民族にしたがったハムの子孫である。

21 セムにも子が生れた。セムはエベルのすべての子孫の先祖で、またヤフェトの兄であ

なものである。ヤフェトの子孫の分布は北から西にかけて、すなわち小アジアおよびカスピ海、黒海、地中海の沿岸に、ハムの子孫の分布は南のほう、すなわちメソポタミアとアラビアに及んでいる。巻末第三図参照。記述の順序はセムの子孫の分布は東のほう、すなわちアフリカの北東部およびその対岸地方とカナアン(パレスチナ)に、逆で、末の子ヤフェトの子孫から始めて、セムの子孫を最後にしるしている。そしてヘブライ人の祖エベルを経て神の選民イスラエル人の祖アブラハムに向かっている。選民の記事を中心にするためにこの方法をとったのであろう。この表の目的はすべての民族の中から神の民として選ばれたイスラエル人の特権を強調することである。

(2) 地中海の島々および沿岸に住む民族「ドダン人」の代りに、あるヘブライ語写本とサマリア五書とギリシヤ語訳は、歴上1[7]と同じように、「ロダン人」と読んでいる。おそらく、ロド島のことを連想したのであろう。しかし「ドダン人」というヘブライ語は、アッシリア文献中の「ヤドナン人」に符合しているようである。

(3) 本章中の名の大部分は民族の名称であるが、「ニムロド」は個人の名で9節のことわざにされるほど有名な英雄である。彼の領地アッシュル(11節、ミカ5[5]参照)に、セム人のものとされているが(22節)、彼はハムとクシュ(エチオピア)の子孫となっている。彼の名のおもかげは「ニムルド」という現代の町の名に残っている。この町はニムロドの建てた古代の町「カラー」(11節)のことだとされている。

(4) 「みな」の原語は「カルネ」とも読まれ、町の名ともなりうる。「バベル」(11注[5]参照)と「バビロン」はヘブライ語では同じ。

(5) 「レホボト・イル」の跡はまだ発見されていない。「町の郊外」、すなわちニネベの郊外を意味しているのかもしれない。「レセン」も発見されていない。単に「とりで」を意味するものかもしれない。アッシュルについては2注9後部参照。

(6) おそらく書入れ箇所をまちがったもので、「ニネベ」にかかる形容語と思われる。あるいは「レホボト・イル」というあいまいな原語の意味を説明したものかもしれない。ヨナ1[2]3[2-3]参照。

22 る。ーセムの子は、エラム、アッシュル、アルパクシャド、ルド、アラムであった。23 ア
24 ラムの子は、ウツ、フル、ゲテル、マッサであった。ーアルパクシャドはシェラーを生
25 み、シェラーはエベルを生んだ。ーエベルにふたりの男の子が生れ、ひとりをペレグと
26 いった。その時代に地の人が分れたからである。(7) その弟はヨクタンであった。ーヨクタ
27 ンは、アルモダド、シェレフ、ハザルマベド、エラー、ーハドラム、ウザル、ディクラ、
23 ーオバル、アビマエル、シェバ、29 オフィル、ハビラ、ヨバブを生んだ。これらはみな、
30 ヨクタンのむすこであった。ーこれらの人たちが住んだ所は東の高原地帯で、メシャか
31 らセファルの方向に及んでいた。ー以上は、その氏族、そのことば、その国々、その民
族にしたがったセムの子孫である。
32 民族と血筋ごとに分けると、ノエのむすこたちの家族は以上のとおりである。洪水(こうずい)後、
かれらから地上の民族は分れたのである。

11

1 全地は同じ言語と同じことばを使っていた。2 東のほう(2)で人が移
バベルの塔(1) り住んでいるうちに、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住みつ
3 いた。ーかれらは、「さあ、れんがを造ってよく焼こう」と互に言っ
4 た。石の代りにれんがを、しっくいの代りにチャンを用いた。ー次に、「町を造り、頂が
天に達する塔を建てよう。われわれの名をあげてわれわれが全地に散らばらないように

5 しよう」(3) と言った。ーヤーウェは人の子らが建てた町と塔を見るために下られた。6 そし
てヤーウェは言われた、「見よ、かれらはみな同じことばをもつ一つの民である。これ
はかれらのわざのはじめにすぎない。これからもかれらがしようと思うことはなんでも、

---

(7) 「ペレグ」の子音は「分ける」という動詞の子音に同じ。

【注】(1) 次章から選民の歴史が始まるが、その前に第一部「世界と人間の起源」の締めくくりをつけるために、著者は本章で、世界中に広がっている人間のことばの不統一の原因についての通俗な言伝えを用いている。その出所はヤーウェ伝承で、おそらく二つの古い言伝え、すなわち町建設の言伝えと、塔建設の言伝えとをいっしょにしたものであろう。神が第二原因(たとえば自然現象)を通じてなされたことが、直接なされたようにしるされている。すなわち創造の計画にはなかった人間社会のことばの混乱は、人間がその団結力を過信した高慢の罪に対する神の罰としてしるされている(4節、シラ40 19参照)。セム族の遊牧民が誇らしい大きな町におけることばの多様性と、その近くにあった未完成のジグラトの廃虚とを見て、これは明らかに神が人々のことばを乱し、その結果、人々が離散したのであろうと考え、このことを言い伝えたものであろう。もちろん実際にはニッサの聖グレゴリオがすでに論じているように、彼らが離散した結果、ことばが次第に分れていったのである。この聖書記事に並行するバビロニア伝説はない。というのは、バビロニアでは「バベル」は「神の門」の義で、このような塔、すなわちジグラトは神々の聖所として建てられているからである。原罪のあとで原始福音が授けられたように、この混乱と離散のあとで、アブラハムとそのすえキリストにおいて再結合を見る、という約束が授けられる(12 3 22 18、ガラチア3 8 16)。この再結合の最初の成果は、五旬祭の日に使徒たちが聖霊にみたされて他国のことばを話したこと、および「天が下のすべての国々から」きた人が教会に入れられた、という事実の中にあらわれている(使2 4—11 41)。

(2) アララトの山(8 4)からのセム族の最初の移動を描いたものであろう。

(3) 団結力を過信した彼らの高慢(4a節、注1参照)に加えて、本節の最後のことばは、「地に満ちよ」という神の命令(9 1-7)に対する不従順を描いたものかもしれない。

7 成し遂げられないことはないであろう。「さあ、われわれ(4)は降りて行って、あそこでか
8 れらのことばを乱し、互のことばがわからなくなるようにしよう」。「ヤーウェはその人
9 たちをそこから全地の面(おもて)に散らされた。かれらは町を建てるのをやめた。「それでその
名はバベル(5)と呼ばれた。ヤーウェがそこで全地のことばを乱されたからである。そこか
らヤーウェはその人たちを全地の面に散らされた。

10 セムの系図は次のとおりである。

洪水(こうずい)以後の太祖(6)

セムは百歳になってアルパクシャドを生んだ。これは洪水の二年
11 後である。「セムはアルパクシャドを生んでから五百年生きながら
え、幾人かの男の子と女の子を生んだ。
12 アルパクシャドは三十五歳の時、シェラーを生んだ。13 アルパクシャドはシェラーを
生んでから四百三年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。
14 シェラーは三十歳の時、エベルを生んだ。15 シェラーはエベルを生んでから四百三年
生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。
16 エベルは三十四歳の時、ペレグを生んだ。17 エベルはペレグを生んでから四百三十年生
18 きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。「ペレグは三十歳の時、レウを生んだ。
19 ペレグはレウを生んでから二百九年生きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。

20 レウは三十二歳の時、セルグを生んだ。21 レウはセルグを生んでから二百七年生きな
がらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。
22 セルグは三十歳の時、ナホルを生んだ。23 セルグはナホルを生んでから二百年生きな
がらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。
24 ナホルは二十九歳の時、テラーを生んだ。25 ナホルはテラーを生んでから百十九年生
きながらえ、幾人かの男の子と女の子を生んだ。
26 テラーは七十歳の時、アブラム、ナホル、ハランを生んだ。

---

(4) 複数形については1注8参照。

(5) 「バベル」はここでは類似音「バラル」(混乱する)に由来する。バビロニアでは「バベル」は「神の門」、「バビロン」は「神々の門」の義(注1参照)。バビロンはニムロド王国の基(10 10)、後に旧新両約聖書中で不道徳と偶像崇拝の象徴となる(例、イザヤ13、エレミヤ50、黙18)。

(6) 系図の目的と意義については5章の「洪水以前の太祖」の注参照。両者とも司祭伝承によるものであるが、本系図は前者よりも簡単で各太祖の年齢はかなり短くなっている。要するにその目的は、洪水からアブラハムの誕生までの期間に橋渡しをすることである。5章の場合と同様、他の古代語写本や訳本の中で数字が計画的に変えられているということは、その数字に歴史性がないことを示す。数字の点ではヘブライ語原文においてすら、つじつまが合っていない(11 10と5 32 7 6 8 13とを比べよ)。ギリシャ語訳にはアルパクシャドとシェラーの間にカイナン(ヘブライ読みではケナン、5 9-14参照)を入れている。このカイナンは同訳の10 22ではセムの子孫となり、10 24 11 12-13ではアルパクシャドの子でシェラーの父となっている。ルカ福音書中のキリストの系図は、このギリシャ語訳からとったものである(ルカ3 36)。巻末系図参照。

第二部　太祖アブラハム

テラーの系図は次のとおりである。

テラーはアブラム、ナホル、ハランを生み、ハランはロトを生んだ。
ハランは父テラーの存命中、その誕生の地カルデヤのウルで死んだ。
アブラムとナホルは妻をめとった。アブラムの妻はサライといい、ナホルの妻はハランの娘でミルカといった。ハランはミルカとイスカの父である。
がなかった。テラーはむすこアブラムと、ハランのむすこで自分の孫であるロトと、むすこアブラムの妻である嫁サライとを伴い、カルデヤのウルを立ってカナアンの地に向かった。しかしハランに着いた時、そこに住んだ。テラーの生涯は二百五年[7]であった。
そしてハランで死んだ。

アブラハムの召出し[1]

ヤーウェはアブラムに言われた、
「おまえの国、おまえの親族、おまえの父の家を離れ、
わたしがおまえに示す地に向かえ。
わたしはおまえを大きな民にする。
わたしはおまえを祝福し、おまえの名を高くする。
おまえをのろう者をのろう。
わたしはおまえを祝福する者を祝福し、
おまえによって、地のすべての民はかれら自身を祝福する[3]」。
アブラムはヤーウェの言われたとおりに出発した。ロトもともに行った。アブラム

わたしはおまえを祝福し、おまえの名を高くする。
わたしはおまえを祝福する者を祝福し、
おまえをのろう者をのろう。
おまえによって、地のすべての民はかれら自身を祝福する[3]」。
アブラムはヤーウェの言われたとおりに出発した。ロトもともに行った。アブラム

【注】(1) 神によって「アブラム」という名は「アブラハム」に、「サライ」は「サラ」に改められる(17[5,15])。ためらうことなく神の召出しに従ったアブラハムの偉大な信仰を聖パウロはたたえ、アブラハムが高齢でサラがうまずめであったにもかかわらず、アブラハムはその信仰によって選民の祖となったと述べている(ヘブライ11[8-12])。アブラハムの信仰は、聖パウロがロマ4章で詳しく説明しているように、われわれのキリストにおける信仰の前表である。ウルからハランへ(11[31])およびハランからカナアンへの移住については、巻末第四図参照。

(2) 「おまえは祝福(の基)となる」という意味もある。これは3節のギリシャ語訳に符合する。次注参照。

(3) 「人々は『神があなた(またはわれわれ)をアブラハムのように祝福されますように』とあいさつし合うだろう」の意味(48[20]、エレミヤ29[22]参照)。この「祝福する」の再帰態は18[18]と28[14]にもでる。これと同じ動詞のもう一つの再帰態も22[18]と26[4]にでてくる(申29[18]、詩72[71][17]、イザヤ65[16]、エレミヤ4[2]参照)。以上五か所の動詞はみなギリシャ語訳とラテン語訳では受動態に訳され、「地のすべての民は、アブラハム(または彼の子孫)において祝福されるであろう」という意味になっている。ガラチア3[8]に本節の文句が引用されているが、両者ともギリシャ語訳からのものである。

(7) サマリア五書では百四十五年。これは、アブラハムがその父テラーの死後ハランを去った、というステファノの話(使7[4])に一致する(11[26]12[4]参照)。

5 はハランを去った時、七十五歳であった。
おとびかれらの得たすべてのものとハランで手に入れた人々とを連れて、カナアンの地
に向かって行った。かれらはカナアンの地に着いた。
6 アブラムはその地にはいり、シェケムの聖所、モレの大木のところに来た(4)。そのころ
7 そこにはカナアン人が住んでいた。ヤーウェはアブラムに現われて、「わたしはこの地
をおまえの子孫に与える」と言われた。アブラムは自分に現われたヤーウェのために、
8 そこに祭壇を築いた。ーかれはそこからベテルの東の山に移り、西にベテルを、東にア
イを望むところに、天幕を張り、そこでヤーウェのために祭壇を築き、ヤーウェのみ名
9 を呼んだ。ーさらにアブラムはネゲブ地方(5)に向かって移って行った。

10 さてその地にききんがおこったので、アブラムはエジプトに下り、
11 **エジプトにおけるアブラハム(6)** そこにとどまった。その地のききんはひどかったからである。ーエ
ジプトにはいろうとした時、かれは妻サライに言った、「わたしは
12 おまえが美しい女であることを知っている。ーエジプト人がおまえ
を見れば、『あれはかれの妻だ』と言って、わたしを殺し、おまえを生かしておくでし
13 ょう。ーおまえはわたしの妹(7)だと言いなさい。そうすれば、わたしはおまえのゆえにね
14 んごろにもてなされ、またおまえによって命が助かるでしょう」。ーアブラムがエジプト

15 にきた時、エジプト人はその女を見て、非常に美しいと思った。ーファラオの大官らは
彼女を見て、ファラオの前でほめたたえたので、サライはファラオの宮殿に召し入れら
16 れた。ーファラオはサライのゆえにアブラムをねんごろにもてなしたので、アブラムは
羊、牛、雄(おす)ろば、しもべ、はしため、雌(めす)ろば、らくだを得た。

---

(4) 「聖所」はいわゆる「聖樹」のあるカナアン人の神域のことであろう。アブラハムはここにまことの神に対する祭壇を築く。申11[30]にもでてくるこの「モレの大木」は、シェケムの近くにあるテレビン樹（またはかしの木）（35[4]）で、おそらく「占い人の大木」（士9[37]）のことであろう。「モレ」もここでは多分「占う」の義。ヤコブが地所を買い（33[18-20]）、井戸を掘るのはこの近くである。この井戸のところでキリストは休み、サマリアの女に話しかける（ヨハネ4[5-12]）。ヨゼフの骨は埋葬のためエジプトからここに持ち帰られる（ヨシュア24[32]）。（使7[16]も参照）。

(5) 南部パレスチナ。ユダヤの南。直訳では「乾燥」。この地方はさばくのようであったから、ギリシャ語訳では「さばく」。ラテン語訳では「南」。

(6) アブラハムとサラに関するこの出来事の主題は、20章でくり返され、また同じようなことがイサクとレベッカについて26[6-11]で述べられている。この主題は、異民族の支配者が彼らに悪い習慣をおしかぶせたにもかかわらず、またアブラハムがいかがわしい方法をとって危険に対処したにもかかわらず、神がアブラハムとサラを大きな民族にすると約束されたことを忠実に守られている、ということを示すものである。ファラオと宮中の者たちを苦しめた災は、ファラオに疑問をいだかせ、これ以上サラをとどめておくことは危険だと思わせて、彼女をアブラハムのもとに返させる性質のものであったのであろう。20章参照。「婚姻の神聖」に対する神の配慮は、ファラオやアブラハムの考えよりもはるかに深い。アブラハムは神の考え、神の道を悟りはじめたばかりである。

(7) 20[12]ではサラはアブラハムの異母妹となっている。

17 しかしヤーウェは、アブラムの妻サライのことで、ファラオとその家の者とに大きな
18 災を下した。[1]そこでファラオはアブラムを呼んで言った、「あなたはわたしになんとい
うことをしたのですか。あの女があなたの妻だということを、なぜわたしに知らせなか
19 ったのですか。[2]なぜあなたは『あの女はわたしの妹です』と言ったのですか。わたしは
20 あの女を妻にしようとしていました。さあ、あなたの妻です。連れて行きなさい」。[3]ファ
ラオはアブラムのことについて臣下に命じた。かれらはアブラムとその妻とすべての
持ちものとを送り出した。

13

1 アブラムは妻とともにすべての持ち物を携えて、エジプトからネ
2 ゲブ地方に上った。ロトもかれとともに上った。[2]アブラムは家畜
3 と金銀を非常に多く持っていた。[3]かれはネゲブ地方からベテルま
で移って行き、ベテルとアイの間で、さきに天幕を張った所に着い
4 た。[4]そこは前に祭壇を築いた所である。そこでアブラムはヤーウェのみ名を呼んだ。
5 [5]アブラムとともに行ったロトもまた、羊、牛、天幕を持っていたので、[6]その地域は
ふたりをともに住まわせるにはじゅうぶんではなかった。持ちものがあまりにも多すぎ
7 て、ともに住むことができなかったのである。[1]アブラムの家畜の牧者とロトの家畜の牧
者との間に、争いがおこった。そのころその地には、カナアン人とペリッジ人[2]が住んで

8 いた。[3]アブラムはロトに言った、「わたしたちは身内の者[3]だから、わたしとあなたの間に
9 もわたしの牧者とあなたの牧者との間にも、争いがないようにしよう。[4]あなたの前に全
地があるではありませんか。わたしから離れなさい。あなたが左ならば、わたしは右に
10 行きます。あなたが右ならば、わたしは左に行きます」。[5]そこでロトが目をあげてヨル
ダンの全盆地を見渡すと、ゾアルのほうまで、ヤーウェの園またはエジプトの地のよう
に、あまねくよく潤っていた。これはヤーウェがソドムとゴモラを滅ぼされる前の状態
11 であった。[4]それでロトはヨルダンの全盆地を選び、東のほうへ移った。かれらは互に別

【注】(1) アブラハムとロトはその地域を彼らだけで使ったのではない。次節にあるように他の住民もいた。[6]節の別れの理由と[36]7のエサウとヤコブの別れの理由は同じ。両者とも司祭伝承による。本章の大部分（[6]11b—12a節を除く）はヤーウェ伝承により、牧者間の争いを別れの理由としている。本章の大部分（[6]11b—12a節を除く）はヤーウェ伝承により、牧者間の争いを別れの理由としている。[26]19—20（やはりヤーウェ伝承）と同様、井戸の使用に関する争いのことであろう。

(2) [34]30、ヨシュア[17]15、士[1]4—5参照。ペリッジ人はセム系ではなく、中部パレスチナの山地に住んでいた古代人の残存種族と思われる。

(3) 直訳では「兄弟」。本節のように近親者（アブラハムはロトのおじ、[12]5）、あるいは遠い親類（申[23]8）をも意味する。

(4) ソドムとゴモラの滅亡は[19]23—28にしるされている。ともに死海の南の盆地にあったが、現在は水中に没している。「盆地」は直訳では「環」、すなわち死海を取りまく地域。ゾアル（[19]20—23[30]参照）はよく潤った盆地の南の境界にあって、川のある楽園（[2]6[10]）、あるいはナイル川のあるエジプトのようであった。中部パレスチナの山の背にあるベテル（神の家）からは、四面を見ることができた（[9a]14節参照）。東のほうにはヨルダン盆地の北部も見

12 れた。ｰアブラムはカナアンの地に住み、ロトは盆地の町々に住み、天幕を移してソドム
13 まで来た。ｰソドムの男たちはよこしまで、ヤーウェに対しはなはだしい罪人であった。(5)
14 ロトが別れて行ってから、ヤーウェはアブラムに言われた、「目
15 **アブラハム、ヘ** をあげて、おまえのいる所から東西南北をながめよ。ｰわたしはお
16 **ブロンに移る** まえが見渡す地をみな、おまえとおまえの子孫に永久に与える。(6)ｰわ
たしは、おまえの子孫を地のちりのように多くする。もし地のちり
17 が数えられるようであれば、おまえの子孫もまた数えられるであろう。ｰ立ち上がって
18 この地を縦横(たてよこ)に歩き巡れ。(7)わたしがこれをおまえに与えるからである」。ｰアブラムは天
幕を移しながら、ヘブロンにあるマムレの大木(8)の所に来た。そしてそのかたわらに落着
き、そこでヤーウェのために祭壇を築いた。

14

1 シンアルの王アムラフェル、エッラサルの王アルヨク、エラムの
2 **四王の遠征**(1) 王ケドル・ラオメル、ゴイムの王チダルの時代に、ｰこれらの王は、
ソドムの王ベラー、ゴモラの王ビルシャー、アドマの王シンアブ、
3 ゼボイムの王シェメベル、ベラーの王すなわちゾアルの王と戦った。ｰ五人の王は連合
4 して、シッディムの谷、今の塩海に進んだ。(2)ｰかれらは十二年間ケドル・ラオメルに従
えたが、ロトの行った南部盆地は見えなかった。巻末第四図参照。

(5) ロトは罪の中の安易な生活を選び、後にすべてを失う(19章)。神はアブラハムの平和愛好(8節)と無欲
(9節)を祝福し、彼に全地域を与える(15節。12[7]で約束済み)。またロトが選ばなかった乾燥した山地のちりのよ
うに、多くの子孫を彼に与える。

(6) 12[7] 17[7] 22[18] 24[7] の場合と同じく、アブラハムの子孫はイスラエル民族、すなわち選民のこと。しかし聖パ
ウロはこれらの箇所に言及して「子孫」または「すえ」はキリストのことであると説いている(ガラチア3[16])。キ
リストをかしらとする神秘体は永遠に王国を所有する。このことは「地」という語によって予表されている。

(7) 土地を歩き巡ることは、取得を表わす法律上の形式的行為。

(8) または「かしの木」あるいは「テレビン樹」。現存ヘブライ語原文では本節および14[13] 18[1]の「大木」は複
数形。ギリシャ語訳、シリヤ語訳では単数形。後者のほうが原典を反映しているようである。マムレ(ギリシャ語
訳、ラテン語訳ではマンブレ)はその木の所有者の名(14[13])。マムレという所はヘブロンの北三キロのところにあ
り、よくヘブロンと同一視される(23[19]および注11[35 27]参照)。アブラハムのネゲブ滞在中(20章)を除く居住地。「マ
ムレ」の現在のアラビア名「(神の)友」は、アブラハム、イサク、ヤコブ、そして彼らの妻も、「マムレに面する」マクペラのほら穴に埋葬される(49[29-31])。

【注】(1) 本章は今まで創世記に用いられてきた伝承とは異なる別の資料による。あるいは非イスラエル系の言伝えかもしれない。そうだとすれば、シャレムの王メルキゼデクが非常にたたえられている(18[18-20]節)ことから判断して、シャレム(後のエルサレム)にとどめられた言伝えであろう。純粋のイスラエル系伝承ならば、アブラハムのことをヘブライ人(13節)とはあまり言わないし、また古代名称の多くはイスラエル人に知られていることばであらわされる。当時エラム国がカナアンの町々からよくみつぎ物を要求したことについては、考古学上の証拠がある。アムラフェルは、前にそう思われていたあの有名なバビロニア(シンアル)の王ハムラビのことではない。多分北部メソポタミア(イラク)の王であろう。著者が創世記の中に本章の記事を入れた理由は、アブラハムの勇敢(14-16節)をほめ、戦利品に対する彼の無欲(21-24節)を示すためであろう。[18-20]節はアブラハムをエルサレムに結びつけている。このエルサレムこそ、後に彼の子孫の聖都となり、そこに最高の神ヤーウェの神殿が築かれる。

(2) この五つの町は知10[6]で「ペンタポリス」と呼ばれ、19章にその破滅がしるされている。シッディムの谷は今は死海(塩海)の南部の水中に没している(13[10]および注4参照)。

5 っていたが、十三年目にそむいた。(3) 14 十四年目にケドル・ラオメルとかれにくみする王た
ちとがやってきて、アシュテロト・カルナイムでレファ人を、ハムでズズ人を、シャベ・
6 キルヤタイムでエム人を、 15 そしてセイルの山々でホル人を撃ち、荒野の近くのエル・
7 パランにまで達した。 16 次にかれらは引き返してエン・ミシュパト、すなわちカデシュ
に行った。そしてアマレク人の全領土、およびハザゾン・タマルに住んでいたアモル人
8 をも撃った。(4) 17 そこで、ソドムの王、ゴモラの王、アドマの王、ゼボイムの王、ベラーの
王、すなわちゾアルの王は出て行き、シッディムの谷でかれらに対して戦いの陣をしい
9 た。 18 すなわちエラムの王ケドル・ラオメル、ゴイムの王チダル、シンアルの王アムラ
10 フェル、エッラサルの王アルヨクの四人の王に対する五人の王である。 19 さてシッディ
ムの谷にはチャンの穴が多く、ソドムの王とゴモラの王が逃げた時、ある者はそこに落
11 ちたが、その他の者は山にのがれた。(5) 20 敵はソドムとゴモラのすべての物とすべての食
12 料を奪い去った。 21 かれらはアブラムのおいロトとかれの物も奪い去った。かれはソド
ムに住んでいたのである。

13 **アブラハムの諸王追撃**

ひとりの逃げのびた者が来て、ヘブライ人(6)アブラムにこのことを
知らせた。アブラムはアモル人マムレ(7)の大木のかたわらに住んでい
た。マムレはエシュコルとアネルのきょうだいである。かれらはア

14 ブラムと同盟していた。 22 アブラムは親族がとらわれの身となったと聞いて、かれの家
15 で生れ訓練された三百十八人の者を召集し、ダンまで追って行った。 23 アブラムは、敵
に対して夜のうちにそのしもべたちを組に分け、かれらを撃って、(8) ダマスコの北方ホバ
16 まで追った。 24 かれはすべての物を持ち帰った。また親族のロトとその持ち物および女
たちや人々も連れ帰った。

---

(3) おそらく、これからはみつぎ物を納めないと言って、拒んだのであろう。

(4) レファ人、ズズ人(またはザムズム人)、エム人、ホル人は、ヨルダン川東方に住んでいた古代民(申2[10-12]20-22参照)。ここにしるされている地名は、侵入軍が東方ヨルダン地方を北から南に「王の道」(民20[17]21[22]、ダマスコからアラビアまでの通商路)に沿って進んだことを示す。これは銅の鉱床に通ずるその通路およびその鉱床の支配権を維持するためであろう。エル・パラン(今のアカバ湾のエラト)にいたり、侵入軍は右まわりをして引き返し、パレスチナの南エン・ミシュパト(さばきの泉)、すなわちカデシュ(民13[26] 20[1-13]参照)を経て、最後にシッディムの谷に南西からはいった。巻末第四図参照。

(5) 本節は「ソドムの王とゴモラの王が逃げた時、彼らはそこに落ちたが、他の者(三人の王)は山にのがれた」とも訳される。この訳によれば、ソドムの王はあとで救い出されたか、あるいは自分ではい上がったことになる(17節参照)。しかし穴に落ちこんだ者は死んだと解するほうが道理に合う。

(6) 「ヘブライ人」は「エベルの子孫」(10[21])の義であろう。「エベル」はおそらく「向こう」すなわち「ユーフラテス川の向こう」の義であろう。アブラハムとその先祖は川向こうから来ている(ヨシュア24[2-3] 14-15)。

(7) ここでは人名。13注8参照。

(8) アブラハムが凱旋途上の敵の縦隊のしんがりに対して、幾手にも分れて夜襲(士7[16]参照)したのだろう、と解されている。

17 アブラムがケドル・ラオメルおよびかれと結んだ王たちを撃って
帰ってきた時、ソドムの王はシャベ谷、すなわち王の谷[10]にアブラム
18 を祝福する[9]を迎え出た。ーシャレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒を持っ
メルキゼデク て来た。かれは最高の神の司祭である。かれはアブラムを祝福して
言った、
19 「天地を創造された最高の神によって、
アブラムは祝福されますように。
20 敵をあなたの手に渡された最高の神は、
賛美されますように」。
そこでアブラムはすべての物の十分の一をかれに贈った。
21 ソドムの王はアブラムに、「人々をわたしに与えて、物はあなたに取っておきなさい」
22 と言った。「しかしアブラムはソドムの王に答えた、「天地を創造された最高の神ヤーウ
23 ェにわたしは誓いました。ーあなたが『わたしはアブラムを裕福にしてあげた』と言
わないように、わたしは糸からはきもののひもにいたるまで、あなたの物は何ももらい
24 ません。ーわたしは何もいりませんが、ただ若者たちが食べた物と、わたしに同行した
人アネル、エシュコル、マムレの分け前とは別です。この人たちには分け前を取らせ

てください。」

15
1 **アブラハムの信仰**[1]

これらの出来事の後、ヤーウェのことばが幻のうちにアブラムに
臨んだ[2]、
「恐れるな、アブラムよ、わたしはおまえの楯のたてである。
おまえの報いは非常に大きいであろう」。

(9) 歴史上、メルキゼデクは古代シャレムにおけるカナアン人の王のことであろう（ヨシュア10-のエルサレムの王の名「アドニゼデク」と比べよ。詩76〔75〕3でシャレムはエルサレムと同一視されている）。パンとぶどう酒は申23[5]にしるされているように、そもそも帰る途上の飲食物として出されたのであろう。この場合は戦勝感謝のために、王司祭メルキゼデクによって最初神にささげられたものと思われる。メルキゼデクの神エル・エリョン（最高の神、天地の創造主）は、ここではヤーウェ（まことの最高の神、唯一の天地の創造主）と同一視されている。したがってアブラハムは最高の神ヤーウェの司祭としてのメルキゼデクから祝福され、彼に十分の一を贈っている。詩110〔109〕4で、キリストはメルキゼデクのように永遠に司祭である、とうたわれている。聖パウロはメルキゼデクの系図も出生も死亡も創世記にしるされていないので、彼の司祭職は永遠に続くものであると説いている。またその他の点からも、メルキゼデクの司祭職はキリストの司祭職の前表であることを説いている（ヘブライ6[20]ー7[25]）。教父たちはこの前表論をさらに発展させて、このパンとぶどう酒をミサ聖祭のパンとぶどう酒の前表であると解している。この意味において大司祭メルキゼデクのささげ物のことがミサ典文中にしるされている。ある教父たち（聖アムブロジオなど）は、創世記から漸進的に始まるこの宗教的解釈をさらに推し進めて、メルキゼデクのふしぎな現われを神の子自身の出現であるとまで解している。

(10) 「王の谷」はサムエル下18[18]に述べられている。エルサレムの郊外セドロンの谷にあったのであろう。

【注】(1) 神が幻のうちに現われるという描写法などから、新たな資料エロヒム伝承が、はじめてここにヤーウェ伝承とともに用いられたものと考えられる。

(2) 「ヤーウェのことばは臨む」という語句は、モイゼ五書の中では本章（4節も参照）だけに出てくるが、

2 アブラムは、「主ヤーウェよ、わたしに何をくださるのですか。わたしは子どもなしで過
3 ごしています。わたしの家のあとつぎはダマスコのエリエゼル(3)なのです」と言った。
ブラムはまた、「あなたはわたしに子孫を与えてくださいません。わたしの家のしもべ
4 がわたしのあとを継ぐでしょう」と言った。
5 「その男はおまえのあとつぎにはならない。おまえの実の子があとつぎになる」。
てヤーウェはかれを外に連れ出し、「天を仰いで見よ。星を数えられるならば、数えてみ
6 よ」と言われた。またかれに、「おまえの子孫はあのようになる」と言われた。
ムはヤーウェを信じた。ヤーウェはそれを義としてかれに帰せられた(4)。

7 **契約式**

また、「わたしはこの地をおまえに与え、これを継がせるために、
た。
8 どのようにして知ることができますか」と言った。
9 三歳の雌やぎと三歳の雄羊と山ばととひなばととを、わたしのもとに持ってこい(5)」と言
10 われた。
11 い合わせておいた。しかし鳥は裂かなかった(6)。
時、アブラムはそれらを追い払った(7)。

12 日が沈みかけたころ、深い眠りがアブラムに臨み、大きな恐怖「くらやみ」がかれを
13 襲った(8)。ヤーウェはアブラムに言われた、「次のことをよく知れ。おまえの子孫はよそ

予言書、特にエレミヤ書とエゼキエル書の中では、全能の神の啓示をしるす時によく用いられている。

(3) 原語の意味は全然不明であるが、次節に照らして一般に「あとつぎ」と解されている。「ダマスコの」と読まれている原語の意味も不確実。「わたしの家の執事エリエゼルがわたしのあとつぎです」という推測もある。「養子はあとつぎである。ただし実子が後に生れた場合はこの限りではない」ということが古代律法に定められている。

(4) 当然ありえないと思われたことでも、神のことばゆえにそれを信じたので、アブラハムは神のみ旨にかなうものとなり義とされる。ロマ4章で聖パウロはアブラハムの信仰をわれわれのキリストに対する信仰の前表と見なしている(ガラチア3[6]、ヤコボ2[23]、本書12注1参照)。

(5) アブラハムがしるしを求めたのに答えて、ヤーウェが当時の契約の儀式にしたがって厳粛に約束を保証されることを、アブラハムは承知していた。動物は二つに裂かれ、契約の当事者がその間を歩く。契約を守らなければ、裂かれた動物のようにされるという意味を含んだものであろう(エレミヤ34[18—20]参照)。ここではヤーウェだけが煙と火の形でその間を通る(17節)。注12参照。

(6) レビ1[17]の規定参照。

(7) アブラハムが追い払った猛鳥は、彼の子孫が約束の地を受け継ぐ前に経験しなければならない試練や困難を象徴している。この凶兆の意味を[13—16]節で神はアブラハムに説明し、また彼とその子孫に保証を与える(15[16]節)。

(8) 「深い眠り」の原語はアダムの場合(2[21])の原語と同じ。ここでは「外自然的な眠り」で、神から知らせを受けている状態。ギリシャ語では「脱魂状態」と訳されている。アブラハムを襲った「恐怖」については、マルコ9[5]参照。[13—16]節の記事が別の資料から取られてここにさしこまれたものだとすれば、「くらやみ」は本来は[17]節の「やみ」というまれな原語を説明しようとして欄外に書かれ、あとでその書入れ箇所をまちがったものかもしれない。「くらやみ」はギリシャ語訳とラテン語訳では「恐怖」の修飾語となって「くらい恐怖」と訳されている。

の国にとどまり、その人々に仕え、四百年[9]の間苦しめられるであろう。
はかれらが仕える民をさばく。後にかれらは多くの物を携えてそこから出るであろう。
おまえは安らかに祖先のところに行くであろう。おまえは高齢になって葬られるであろ
う。[10]かれらは四代目にここに帰る。アモル人の罪悪はまだ満ちていないからである[11]」。
日が沈みやみに包まれた時、煙の立っている火つぼと燃えているたいまつが[12]、その裂
かれたものの間を通った。その日、ヤーウェはアブラムと契約を結んで言われた、「エ
ジプトの川[13]から大きな川〔ユーフラテス川〕に及ぶこの地を、わたしはおまえの子孫に
与える。[14]これはケニ人、ケニッジ人、カドモニ人、ヘト人、ペリッジ人、ラファー人、
アモル人、カナアン人、ギルガシ人、エブシ人の地である」。

16

アブラムの妻サライは子を産まなかった。彼女には、エジプト人
イスマエルの誕生[1]　でハガルというつかえめがいた。サライはアブラムに、「ヤーウェ
はわたしに子どもを産ませてくださいません。どうかわたしのつか
えめの所にはいってください。おそらくわたしは彼女によって、子
どもを与えられるでしょう」と言った[2]。アブラムはサライの言うことを聞き入れた。[3]ア
ブラムの妻サライはつかえめのエジプト人ハガルを連れて行って、夫のアブラムに妻と
して与えた。[4]これは、アブラムがカナアンの地に住んでから十年後のことである。[5]か

れはハガルの所にはいり、彼女はみごもった。ハガルは自分がみごもったことを知ると、
女主人をあなどりの目で見るようになった。[5]そこでサライはアブラムに言った、「わた
しの受けた侮辱はあなたの上にかかりますように。わたしはあなたの胸にわたしのつか

---

(9) 端数を切り捨てたもの。選民がエジプトで過ごした期間は四百三十年（出12[40]、ガラチア3[17]参照）。
(10) ヤコブの子らがエジプトにくだってから脱出するまでの四代、すなわちレビ、ケハト、アムラム、モイゼ（出6[16-20]参照）。
(11) アモル人はここでは「カナアンの住民」あるいは「古代の全パレスチナ人」の義で、[26]節のように一種族をさすものではない。罪悪についてはレビ18[21-30]参照（ここでも神は罪悪に対する罰として彼らをその地から追うと言われている）。神は罪悪がいよいよ満ちるまでしんぼう強く待たれる。
(12) 神はよく煙と火を用い、その存在を象徴する（出19[18] 3[2] 13[21]、使2[3]参照）。ヤーウェの火の通過によって神聖なものとされた肉を、祝宴の席で食べたことであろう。
(13) エジプトとパレスチナを分けている「エジプトの小川」（ワディ・エル・アリシュ川）のことであろう（ヨシュア15[4]参照）。「川」の原語と「小川」の原語とはよく似ているので混同されたのかもしれない。このパレスチナの境界線に彼らの勢力が及んだのは、実際にはサロモンの時代だけである（列上4[21]参照）。「エジプトの川」をナイル川の東方支流「シホル川」（ヨシュア13[3]参照）と解する者もある。
(14) [18]節の〔ユーフラテス川〕と同様、パレスチナに以前住んでいた民族の名をあげている[19-20]節も、おそらく後のつけ加えであろう。「カドモニ人」は聖書中ここ以外にはあらわれない。
【注】(1) Ja[3 15 16]節は司祭伝承、他はヤーウェ伝承による。本章の大部分に並行する記事（エロヒム伝承）が、21[9-21]にしるされている。
(2) 後にラケルやレアがしたように（30[1-6 9-13]）、サラは当時の習慣にしたがった。ハムラビ法典にはこの習慣があらわれている。

えめを与えたのに、つかえめは自分がみごもったことを知ると、わたしをあなどりの目
6 で見るようになりました。ヤーウェがわたしとあなたの間をさばきますように」(3)。ーアブ
ラムがサライに、「おまえのつかえめはおまえの手の中にある。おまえの好きなように彼
女をしなさい」と答えたので、サライはつかえめを苦しめた(4)。それで、彼女はサライの
もとから逃げた。
7 ヤーウェの使い(5)が、荒野の泉、すなわちシュル(6)への道にある泉のほとりで彼女と会っ
8 た。ーそして、「サライのつかえめハガルよ、おまえはどこから来て、どこへ行くのか」
と尋ねた。ハガルは、「わたしの女主人サライのもとから逃げているところです」と答え
9 た。ーヤーウェの使いは彼女に、「おまえの女主人のもとに帰り、その手に身を任せよ」
10 と言った。ーヤーウェの使いは彼女(7)に、「わたしはおまえの子孫を数えることができない
11 ほど多くふやそう」と言った。ーヤーウェの使いは彼女に言った、

「おまえはみごもっている。
そして男の子を産む。
その子をイスマエルと名づけよ。
ヤーウェがおまえの苦しみを聞かれた(8)からである。
12 かれは野生のろばのような人となり、

その手はすべての人に逆らい、
すべての人の手もかれに逆らう。
かれはすべての兄弟と仲たがいして住むであろう(9)」。
13 ハガルは自分に語られたヤーウェに、「あなたはエル・ロイ(10)です」と名づけ、「わたしを
14 見られる御者(おんもの)のうしろ姿を、ここでほんとうに見たのでしょうか(11)」と言った。ーそれで、

(3) サラはアブラハムを非難しているが、アブラハムのしたことは彼女自身が彼にすすめたことである。
(4) ハムラビ法典によれば、第二の妻となって子を産んだ奴隷が女主人の気に入らないものとなっても、彼女を売ることはできないことになっている。しかし奴隷のしるしをつけて、他の奴隷と同じように扱うことはできる。
(5) 「ヤーウェの使い」は見える形で現われたヤーウェ自身であることが13節でわかる（22[11-16]、31[11-13]、出3[2-4]、士6[11-24]、13[3-23]参照）。神に関するこの筆法は、はじめの記事（3[8]、8[21]など）ほど擬人法的ではない。これはあとで伝承を洗練する時に用いた描写法かもしれない。
(6) 「壁」の義。エジプト王ファラオが北東の国境に築いた「城壁」に結びつけたものかもしれない。ハガルは自分の本国に向かって逃げている。
(7) 11節と同じ語句で始まる9節と10節は、あとでさしこまれたものであろう。
(8) 「イスマエル」は「神は聞かれた」または「神が聞かれるように」の義。
(9) ハガルは、自分の子が自分と同じような奴隷にはならず、主人のない荒野のろばのように（ヨブ39[5-8]参照）、全く自由になると保証されている。事実、イスマエルの子孫であるアラビア人とさばくのベドイン人がそうである。ハガルはサラに苦しめられるが、サラの子孫はハガルの子孫に苦しめられる。
(10) 「見る神」のことで、「(を)見られる神」または「(に)見られる神」の意味。
(11) 原文の意味不明。「うしろ姿を…見る」については出33[23]参照。次節の「井戸」につけられた名称の意味、

その井戸はベエル・ラハイ・ロイ(12)と名づけられた。それはカデシュとベレドの間にある。

15 ハガルはアブラムに男の子を産んだ。アブラムは、ハガルが産んだその子をイスマエ
16 ルと名づけた。ハガルがアブラムにイスマエルを産んだ時、アブラムは八十六歳であった。

17

割礼と契約(1)

1 アブラムが九十九歳の時、ヤーウェはアブラムに現われて言われた、「わたしはエル・シャッダイ(2)である。わたしの前に歩み、全きものであれ。(3) 2 わたしはおまえと契約をして、おまえを非常に多くふやすであろう」。

3 アブラムはひれ伏した。神はかれに言われた、4「わたしのおまえに対する契約は、おまえが多くの民族の父となるということである。5 おまえの名は、もう、アブラムとは呼ばれない。おまえの名はアブラハム(4)と呼ばれる。わたしがおまえを多くの民族の父とするからである。6 わたしはおまえに非常に多くの子を生ませる。わたしはおまえからもろもろの民族をおこす。王たちはおまえから出るであろう。7 わたしは、おまえとおまえのあとに続く代々の子孫とに、わたしの契約を永久の契約として立てる。おまえとおまえのあとに続く子孫の神となるためである。8 わたしは、おまえがとどまっている地、すなわちカナアンの全地を永久の所有として、おまえとおまえのあとに続く子孫とに与える。わたしはかれらの神となる」。

9 神はまたアブラハムに言われた、「おまえもおまえのあとに続く子孫も代々、わたしの

9 および人間が神を見れば生きておれないという言伝え(32[31]、出33[18-23]、士6[22-23]13[21-22]参照)に基づいて、原文を改め、「ほんとうにわたしは神を見て、そのあとでわたしは生きているのでしょうか」と推測する者が多い。

(12) 「わたしを見られる生きた御者の井戸」の意もある。この井戸は24[62]25[11]にもでる。ネゲブの少し南、現在のビル・マインにある。巻末第五図参照。

【注】(1) 本章は神とアブラハムの契約を物語るもので、司祭伝承による。これは15章におけるヤーウェ・エロヒム伝承による記事(多くの子孫とカナアンの地に関する約束)と、本質的には同じものである。新しい題材として、神の特殊名称「エル・シャッダイ」、アブラハムとサラの改名、契約のしるしとしての割礼、およびサラの子イサク誕生の約束があげられる。司祭伝承は旧約の中に四つの時期を画している。第三期はこの割礼の契約で始まる。第一期はアダムと、第二期はノエと、第四期はモイゼとの契約で始まる。

(2) 司祭伝承においては、「ヤーウェ」という名称はモイゼに啓示される(出6[3]参照)まで使用されていない。啓示以前の太祖時代には「エル・シャッダイ」が神の固有名称として用いられている。ラテン語訳とギリシャ語訳の一部にもとづいて、「全能の神」と一般に訳されているが、これは正確ではない。おそらく「山にまします神」の意義。この意味は、神のすみかは北の山にあるという古代人の考えによく合致する(詩48[47]2-3、イザヤ14[13]、巻末図解参照)。また神がシナイ山に現われるという記述(出19[11-25])にもよく合う。

(3) 「わたしの前で歩み」は「神のみまえにあることを意識して暮す」の義。「全きもの」の原語は、ノエの場合(6[9])と同じ。この命令は、契約における人間側の一般的義務を表わす。

(4) 「アブラム」と「アブラハム」は、「高められた父」または「父のゆえに高められる」(高貴の家柄)の義をもつ語から分れ出た別々の形である。「ラハム」はここでは「人だかり」または「多数」の義の「ハモン」に関連する。これによれば「多くの……の父」にするという神の約束に合致する意味になる。古代名称は今日以上に意義を持つ。

10 契約を守れ。－わたしとおまえとおまえのあとに続く子孫との間で、おまえたちが守る
べき契約は次のとおりである。すなわち、おまえたちの中の男はみな、割礼[5]をうけよ。
11 おまえたちは包皮の肉に割礼をうけよ。これは、わたしとおまえたちの間の契約のしる
12 しとなる。－おまえたちのうちの男は代々みな、生れて八日目に割礼をうけなければな
らない。家で生れた者も、またおまえの子孫ではなく異邦人から金で買われた者も同じ
13 である。－おまえの家で生れた者も、おまえが金で買った者も、割礼をうけなければな
14 らない。わたしの契約は永久の契約として、おまえたちの肉にしるされる。－無割礼の
男、すなわち包皮の肉に割礼をうけていない者は、わたしの契約を破った者として身内
から断たれる。

15 神はアブラハムに言われた、「おまえの妻サライの名をサライと呼
16 **イサク誕生の約束**　んではならない。その名はサラ[6]である。わたしはサラを祝福し、ま
た彼女によって男の子をおまえに授ける。わたしはサラを祝福する。
彼女はもろもろの民族の母となり、もろもろの民の王たちは、彼女
17 からおこる[7]」。－アブラハムはひれ伏して笑い、心の中で、「百歳の者に子が生れるだろう
18 か。九十歳のサラが子を産むだろうか」と言った。－そしてアブラハムは神に、「イスマ
19 エルがあなたのご保護のもとに生きますように」と言った。－神は答えられた、「いや、

おまえの妻サラはおまえに男の子を産む。おまえはその子にイサク[8]と名づけよ。わたし
は永久の契約として、イサクに契約を立てる。イサクとそのあとに続く子孫の神となる
20 ためである。－イスマエルについては、わたしはおまえの言うことを聞き入れた[9]。わたし
はかれを祝福して、多くの子を生ませ、非常に多くふやす。イスマエルは十二人の族長[10]

---

(5) 神がにじをノエとの契約のしるしにされる（9 12-17）以前に、すでににじがあったように、割礼もアブラハム以前に、すでにエジプトおよびその周辺で行われていた。しかしアブラハムの生国メソポタミアではこの風習はなかった。一般に種族の一員となる儀式として、また結婚準備の儀式として、成人する前に施された（出4 24-26、本書34 14-17 22参照）。ここでは子どもの時に神の選民に加えられるしるしとして、神がこの儀式を神聖なものとしている。生命の源、すなわち種族を存続させる器官は、儀式的流血によって聖別されている。割礼は洗礼の前表。しかし心の割礼をうけなければ、すなわち罪や悪欲を切り離し神のみ旨に従わなければ、肉の割礼は無価値である（申10 16 30 6、エレミヤ4 4 9 25-26、エゼキエル44 7 9）。キリストも割礼をうけられるが（ルカ2 21）、新約によって廃止される（使15 5-29）。しかしこの霊的意義は存続する（ロマ2 25-29、フィリッピ3 3、コロサイ2 11、ペトロ一書3 21）。聖パウロはロマ4 11で、アブラハムの割礼を彼が割礼以前に帰せられた信仰の義（15 6）のしるしと見なしている。

(6) 「サライ」と「サラ」は、「女王」という意であるが、16節の神のことばにしたがって限定されない「女王」は「わたしの女王」の義であるが、「サラ」という義をもつ別々の方言であろう。標準ヘブライ語としての「サライ」とは明らかである。

(7) ラテン語訳、ギリシャ語訳、シリヤ語訳では、サラではなくイサクに関する予言としている。

(8) 「笑う」という義の「イサク」は、アブラハムとサラが高齢で子を生むのはおかしいと笑ったこと（17 17 18 12-15 21 6）に関連する（21 9も参照）。最初の名は、「神はほほえまれた」または「神がほほえまれるように」という義の「イサク・エル」だったのであろう。

(9) もう一度ここで「イスマエル」の義に結びつけている。16 11参照。

(10) 「族長」は6節と16節の「王」とは異なる。その名は25 13-16にあげられている。

を生む。わたしはかれを大きな民族にする。」しかしわたしの契約は、イサクに立てる。
来年の今ごろサラがそのイサクをおまえに産むであろう」。」アブラハムとの話を終られて、神はアブラハムから離れてのぼられた。

割礼の実施

アブラハムは、その子イスマエルと、自分の家で生れたすべての者と、自分の金で買ったすべての者とを、すなわちかれの家のすべての男を集め、神がかれに命じたとおり、その同じ日に、かれらの包皮の肉に割礼を施した。」アブラハムは、包皮の肉に割礼をうけた時、九十九歳であった。[26]その同じ日に、アブラハムとかれの子イスマエルとは割礼をうけたのである。」かれの家の男は、その家で生れた者も異邦人から金で買われた者もみな、アブラハムとともに割礼をうけた。

マムレにおける出現[1]

ヤーウェはマムレの大木のかたわらでアブラハムに現われた。アブラハムは日盛りに天幕の入口にすわっていたが、」目を上げて見ると、三人の人がかれに向かって立っていた。アブラハムはこれを見ると、天幕の入口から走り出てかれらを迎え、地に身をかがめて、」言った、」あるじよ、もしあなたの心にかなうならば、どうかしもべの所を素通りしないでください。」水を少し持ってこさせますから、どうぞあなたがたの足を洗って、この木

の下でお休みください。」パンを少し持ってきましょう。元気をつけてから旅を続けてください。せっかくあなたがたがしもべの所においでくださったのですから[2]」。かれらは、「どうぞそのようにしてください」と答えた。

アブラハムは急いで天幕にはいり、サラの所に行って、「すぐ、麦粉を——よい麦粉を三セア[3]こねてパン菓子を造りなさい」と言った。」そして牛の群れの所に走り、良い柔らかな子牛一頭を選んで召使に渡し、急いでそれを料理させた。」アブラハムは酸乳[4]と牛乳と調理した子牛とを取り、かれらの前に置いた。アブラハムはかれらが木の下で食べている間、そのそばに立って控えていた。

かれらはアブラハムに、「あなたの妻サラはどこにいますか」と言った。アブラハム

【注】(1) 本章と次章(29節を除く)はヤーウェ伝承(あるいは二つのヤーウェ伝承)による。3[8]以下と同様、ヤーウェは本章で人間の形に描かれている。旧約聖書中ヤーウェが食を取る例は[8]節だけ。筋の中で興味を引くところは、客の超自然的性格が徐々にアブラハム、サラと同じく読者に示されていることである。18[13]22-19[1]-5[8]15から、[2]節の「三人の人」はヤーウェと二位の天使であることがわかる。三人現われているが、アブラハムはひとりだけに敬意を表している[3]節)。ある教父たちはこれを三位一体の玄義の暗示と解している。

(2) 旅人がある人の天幕の前に来て立つことは、もてなしを求めていることを意味する([2]節参照)。もてなすことは神聖な義務と見なされていた。

(3) およそ三十七リットル。気高くは見えるが、まだだれかもわからない客に対して、アブラハムは物惜しみせずに、もてなしたわけである。

(4) 酸敗して凝固した牛乳。アラビア人の好物で、渇をいやす時に飲む。士5[25]、イザヤ7[15]参照。

10 は、「サラは天幕の中にいます」と答えた。11 かれは(5)、「わたしは来年の春(6)、必ずおまえの
所にもどってくる。その時、おまえの妻サラには、男の子が生れているであろう」と言
11 った。かれのうしろに天幕の入口があったので、サラはそこで聞いていた。12 アブラハム
12 とサラは年を重ね、老人になっていた。サラにはもう女の月のものがなかった。13 それ
でサラは心の中で笑い、「わたしは老いこんでいるのに、楽しみがあるのでしょうか。わ
13 たしの主人も年寄なのに(7)」と言った。14 ヤーウェはアブラハムに言われた、「なぜサラは、
『わたしは年をとっているのに、ほんとうにまだ生むだろうか』と言って笑ったのか。
14 ヤーウェから見て不思議なことがあろうか。来年の春定めの時に、わたしはおまえの所
15 にもどって来る。その時、サラには男の子が生まれているであろう」。15 するとサラは恐
れて、「わたしは笑いませんでした」と言って打ち消した。ヤーウェは、「いや、おまえ
16 は確かに笑った」と言われた。

16 その人たちは立ち上がってそこを出発し、ソドムを見おろす所(8)に
17 **アブラハムのとりなし**　来た。17 アブラハムはかれらを見送るために、ともに行った。18 ヤーウ
ェは心の中で言われた、「わたしがしようとすることを、アブラハム
18 に隠しておいてよいであろうか。19 アブラハムは必ず大きな強い民
19 族となり、かれによって地のすべての民族は、かれら自身を祝福するであろうから。20 ア

20 ブラハムがかれの後の子らと家族に命じてヤーウェの道を守らせ、正と義を行わせるた
めに、わたしはかれを選んだのである。これは、ヤーウェがアブラハムに約束したこと
20 を果すためである」。21 そこでヤーウェは言われた、「ソドムとゴモラに対する叫びはまこ
21 とに大きい。まことにかれらの罪はきわめて重い。22 わたしは下って行って、わたしにと
どいた叫び(9)のとおり、実際にかれらがしているかどうかを見よう。わたしはそれを見さ
22 だめよう」。23 その人たちは、そこからソドムに向かって進んで行った。アブラハムは、
なお、ヤーウェのみまえに立っていた(10)。

---

(5) ヘブライ文には主語としての名詞も代名詞もなく、ただ前節の「言った」という複数形動詞を単数形に変えたものがあるだけである。ギリシャ語訳では前節にも5節の最後の所にも単数形を用いている（これに反しサマリア五書では3節の単数形を複数形にしている）。

(6) 直訳では「生き返るころ」。これに並行する17[21]の語句と同じ意味、すなわち「来年の今ごろ」と解する者が多い。

(7) 後に生れる「イサク」の名にまた結びつけている（17注[5]参照）。サラは主客が自分の夫を喜ばすために、無意味なことをていねいに言ったのだと思って笑った。しかし主客が彼女の心中の笑いを見抜いたので（9節では サラの名を承知）、彼女はその超自然的性格をうすうすと感じ、恐れをいだいた。

(8) アブラハムは翌日また同じ所に来て、そこからソドム滅亡の様子を見おろす(19[27,28])。二つとも同じ動詞。この所は今のベニ・ナイムに近い所だと伝えられている。山の端の小さな村でここからは死海が見える。

(9) 聖書には復しゅうを天に呼び求める罪(号天罪)が四つしるされている。ソドムの罪はその一つ。4[10]、出22[22]、申24[15]、ヤコボ5[4]参照。

(10) 去った「その人たち」は二位の天使(19[1])。もともと「ヤーウェは、なおアブラハムの前に立っておられ

23 アブラハムは近よって言った[11]、「ほんとうにあなたは義人を罪人（つみびと）といっしょに滅ぼされ
24 るのですか。」その町の中に五十人の義人がいるとしましょう。それでもあなたは、ほ
んとうにそこを滅ぼされるのですか。その中にいる五十人の義人のために、そこをおゆ
25 るしにならないのですか。」決してあなたがそういうことをなさいませんように。義人
を罪人といっしょに殺して、義人と罪人を同じようにするということを決してなさいま
26 せんように。全地をさばく御者（おんもの）は義を行うべきではありませんか」。」ヤーウェは、「もし
わたしがソドムの町の中に五十人の義人を見いだすならば、その人たちのためにそこを
全部ゆるそう」と言われた。
27 アブラハムは答えて言った、「わたしはちりと灰にすぎないものですが、あえて主に申
28 しあげます。」五十人の義人に五人欠けているとしましょう。五人のために、その町を
全部滅ぼされますか」。ヤーウェは答えられた、「もしそこに四十五人見いだすならば、
29 わたしは滅ぼさない」。」かれは重ねてヤーウェに言った、「そこに四十人見いだされると
しましょう」。ヤーウェは、「四十人のために、わたしはそんなことはしない」と言われた。
30 アブラハムは言った、「わたしの言うことに、主がお怒りにならないように。そこに三
十人見いだされるとしましょう」。ヤーウェは答えられた、「もしそこに三十人見いだす
31 ならば、わたしはしない」。」かれは言った、「わたしはあえて主に申しあげます。そこに二

十人見いだされるとしましょう」。ヤーウェは、「二十人のためにわたしは滅ぼさない」
と答えられた。
32 アブラハムは言った、「わたしがもう一度だけ言うことに、主がお怒りにならないよう
に。そこに十人見いだされるとしましょう」。ヤーウェは答えられた、「十人のためにわ
33 たしは滅ぼさない」。」ヤーウェはアブラハムとの話を終えて、立ち去られた。アブラハ
ムも自分の所に帰った。

19

1 そのふたりのみ使いは、夕方ソドムに着いた。その時ロトはソド
ムの門の所[1]にすわっていた。ロトはかれらを見ると、立って迎え、
2 顔が地につくほど身をかがめ、」「あるじらよ、どうか、しもべの家に

ソドムの罪

た」とあったものを、昔の筆写を担当した者が本訳のように書き変えたのだという説がある。

(11) 神とアブラハムとのこの感動的な会話は、アブラハムのように神と親しい者の仲介力がいかに大きいかを示す。また罪人に対する神の怒りは、わずかの義人さえいるならば避けられるということも示す。ここでアブラハムは最小限を十人としているが、後に神はたったひとりの義人を見いだすならばエルサレムをゆるすと言われている（エレミヤ5$_{1}$）。しかしソドムの人々はみな悪かった（19$_{4}$）。わずかな義人を罪人とともに滅ぼすことよりも、多くの罪人を義人のゆえにゆるすことが、神の正義にふさわしいとアブラハムは主張する。彼はロトがその町と運命をともにするとでも思ったのだろう。しかし神は連帯責任よりも個人の責任について正しくさばき、ロトとその家族を罪人からきり放して救う。預言者はこの個人的責任の原則を主張する（エゼキエル14$_{12-20}$18参照）。

【注】(1) 古代では町の門の所で売買や裁判が行われた。用のない者たちもここにたむろしておしゃべりをした。

寄って足を洗い、お泊まりください。そして朝早く起きて、旅を続けてください」と言った。かれらは、「いや、わたしたちは広場で夜を過ごそう」と答えた。しかしロトがしきりにすすめたので、かれらはロトの所に寄って、その家にはいった。ロトはごちそうを用意し、たねなしパン(2)を焼き、かれらにそれを食べさせた。

かれらが床につかないうちに、ソドムの町の人々が、若い者も老人も町中こぞって、その家を囲み、ロトに叫んで言った、「今晩おまえの家に来た人たちはどこにいるか。われわれに渡せ。かれらを知りたいから(3)」。ロトはかれらに会いに戸口の外に出て行き、出たあとでその戸をしめて、言った、「兄弟たちよ、どうかそんな悪いことをしないでください。お聞きください。わたしには、まだ男を知らない娘がふたりあります。娘をあなたたちに渡しますから、好きなようにしてください(4)。ただこの人たちには何もしないでください。この人たちは、わたしの屋根の下に身を寄せたのですから」。しかしかれらは言った、「そこをどけ」。また続けて言った、「この男はよそから来た者なのに、裁判官のふるまいをしようとする。それでは、おまえをあのやつらよりもひどい目にあわせてやる」。かれらはロトを強く押し、戸を破ろうとして近よってきた。その時そのふたりは手を伸ばして、ロトを家の中に引き入れ、戸をしめた。家の戸口にいた人々は、老いも若きもみな、目をくらまされたので(5)、戸口を捜したが、疲れるばかりであった。

ロトの脱出

そこでそのふたりはロトに言った、「ほかに身内の者——婿——がここにおりますか。あなたのむすこや娘たち、またこの町にいるすべてあなたにゆかりのある人を、ここから連れ出しなさい。われわれはここを滅ぼそうとしています。かれらに対する叫びがヤーウェのみまえに大きくなったので、ヤーウェがここを滅ぼすように、わたしたちをつかわされたのです」。そこでロトは出て行き、娘の未来の婿たち(6)に話して、「さあ、この町から出なさい。ヤーウェがここを滅ぼされます」と言った。しかしかれらには、ロトが冗談を言っているように思われた。

---

(2) 「たねなしパン」はすぐにでき上がるからである。

(3) 「知る」は4:1 19:8の場合と同じような意味。しかしここでは自然にもとる関係、すなわち男色の罪をさす(ロマ1:27参照)。

(4) アブラハムがエジプトで自分の命を救うためにサラの操を犠牲にしようとしたように(12:10-15および注6)、ロトも神聖なもてなしの義務を守るために娘たちの操を犠牲にしようとした。ロトは悪いとは知りながらも、客を渡すよりはましだと考えた。しかし神がサラを救ったように(12:17)、ここでは天使が助けている(10:11節)。

(5) この語は本節と列下6:18だけに出る。全然見えなくなるのではなく、視力の乱れを意味する。

(6) ギリシャ語訳では「娘をめとった婿たち」。これによれば、ロトにはふたりの娘のほかに嫁に行った娘がいて、彼女らは夫とともにその町に残って死んだことになる。ラテン語訳では未来形になっているので、彼女らはまだロトとともに暮していることになる。

15 空がしらみはじめた時、み使いたちはロトをせきたてて、「さあ、町にくだる罰にまき
こまれないように、あなたの妻とここにいるふたりの娘を連れ出しなさい」と言った。
16 しかしロトがためらったので、ふたりはかれとその妻とふたりの娘の手を取った。ヤー
ウェはロトにあわれみをたれたのである。かれらはロトを町の外に連れ出した。
17 ふたりがロトたちを連れ出した時、(7)かれは言った、「逃げよ。命にかかわることであ
る。うしろをふり返ってはいけない。盆地のどこにも止まってはいけない。滅ぼされな
18 いように、山に逃げよ」。ロトはかれらに言った、「主よ、どうかそうさせないでくだ
19 さい。しもべはあなたの心にかなないました。そしてあなたはわたしの命を救い、大き
なあわれみを示してくださいました。わたしは山に逃げることはできません。わざわい
20 が身に迫り、死ぬでしょうから。ごらんください。あの町は近いから、あそこへなら、
のがれることができます。あの町は小さなものです。あそこへ逃げさせてください。あ
21 の町は小さなものではありませんか。そうすれば、わたしの命は助かるでしょう」。かれはロトに言った、「わたしはおまえのこの願いも聞き入れよう。おまえの言うその町
22 は滅ぼさない。急いでそこへ逃げよ。おまえがそこに着くまで、わたしは何もできな
いから」。それでその町の名は(8)ゾアルと呼ばれた。

23 25
ソドムとゴモラの滅亡(9)

ロトがゾアルに着いた時、日はのぼったばかりであった。24ヤーウェは硫黄と火をヤーウェの所から——天から——ソドムとゴモラの上に降らせ、25これらの町、ならびに全盆地とその町々の全住民、お

---

(7) 18[9-19]の場合と同様、ヘブライ文には主語がない。前の動詞は複数形であるが、ここの動詞は単数形（ギリシャ語訳、ラテン語訳、シリヤ語訳では複数形のまま）。また18節でロトが話した相手は「彼ら」という複数形になっているが、すぐそのあとでまた単数形になり、会話の終りまでそのままである。18[1-22]節は天使を通じてのヤーウェとロトの会話のように見える（16[7]および注5参照）。ユダヤ伝説では天使は一度に一つの使命だけを帯びることになっている。これによって次のようにも考えられる。すなわち一番最初の言伝えの中では、18[2]の「三人」のうちのひとりはヤーウェとしてアブラハムに語り、もうひとりはロトを救うために19[17]で語り、あとのひとりはソドムとゴモラを滅ぼす使命を帯びて21-22節でヤーウェとしてロトに語ったようになっていたのかもしれない。しかし現存のヘブライ文に書き留められた形から見れば、「三人」は「ヤーウェと二位の天使」ということになる（18注1参照）。

(8) 「ゾアル」は「少量」すなわち「取るに足らないもの」という義の「ミゼアル」に由来する。この語は20節で二度くり返されている。前には「ベラー」と呼ばれていた（14[2]）。ローマ時代にこの町は地震によって滅亡し死海の水中に没したが、後に少し高い所に再建された。巻末第五図参照。

(9) 11[8-9]の場合と同様、神が第二原因を通じてなされたことが、直接神によってなされたように描かれている。25[29]節の「くつがえす」は地震を暗示している。この地震で硫黄ガスが吐き出され、燃えている町の火がこれに引火したのかもしれない。28節の「煙」はチャンの燃えている状態をほのめかしている。シッディムの谷には多くのチャンの穴があった（14[10]）。今でも死海南岸の浅い水面にチャンが時々浮かぶ。地震によってアドマとゼボイムの町々を含む谷全体に、死海の水が流れこんだのかもしれない（14[2-3]および注2参照）。谷の南端ゾアル（13[10]参照）は免れたが、後の地震で水中に没した（前注参照）。罪に対する神の恐るべき罰の戒めとして、ソドムとゴモラの滅亡のことが旧新両約聖書によくでてくる（アモス4[11]、ゼファニヤ2[9]、ルカ17[29]、ユダ[7]参照）。

よびその地にはえているものとを、くつがえした。
25 ロトの妻は夫のうしろの所でふり返ったので、塩の柱になった。(10)
27 アブラハムは朝早く、かれがさきにヤーウェの前に立った所に来て、28ソドムとゴモラ、
および全盆地のほうを見おろすと、その地の煙がかまどの煙のように立ちのぼってい
た。
29 神はその盆地の町々をくつがえされた時、すなわちロトの住んでいた町々をくつがえ
された時、アブラハムのことを思い出し、ロトを滅びの中から救い出された。
30 ロトはゾアルに住むことを恐れたので、ゾアルから登って、ふた
31 りの娘とともに山に住んだ。ロトと娘たちはほら穴に住んだ。
モアブ人とアンモン人の起り(11)
は妹に言った、「わたしたちの父は年とっています。また、世のなら
わしにしたがって、わたしたちの所に来る男はこの地にいません。
32 さあ、父に酒を飲ませ、ともに寝て、わたしたちの父によって子孫を残しましょう」。33ふ
たりはその晩、父に酒を飲ませ、姉は父の所にはいってともに寝た。しかしかれは娘が寝
34 たのも起きたのも知らなかった。(12)「翌日、姉は妹に言った、「昨晩わたしは父と寝ました。
今晩も父に酒を飲ませましょう。あなたははいって父と寝なさい。そしてわたしたちの
35 父によって子孫を残しましょう。」そこでふたりは父にその晩も酒を飲ませ、妹は行っ

36 て父とともに寝た。しかしかれは娘が寝たのも起きたのも知らなかった。「このように
37 して、ロトの娘はふたりとも父のたねをやどしたのである。「姉は男の子を産み、その
38 子をモアブ(13)と名づけた。かれは今のモアブ人の祖である。「妹も男の子を産み、その子

(10) ロトの妻は天使の命令(17節)にそむき、ためらってうしろをふり返ったので、死んでしまう。「塩の柱」は、人間のような形をした塩の柱をロトの妻の死に結びつけた伝説によるものであろう。この記事の最初の読者たちはこのように解している。知恵の書の著者は10[7]でこの「塩の柱」に言及している。このできごとに関係のある全地域には今日でも、ロトの物語にちなんだアラビア名がたくさんある。すなわち死海を「ロトの海」、死海南西岸に沿った塩の山を「ソドムの山」、そこにある塩の柱を「ロトの娘」、死海の東側にある柱を「ロトの妻」、その近くにあるものを「ロトの犬」とアラビア人は呼んでいる。ロトの妻はこの世のことにふり返る者の見本である。ルカ17[32]でキリストもこのことを述べている。

(11) 「モアブ」「アンモン」という名称に対する軽蔑的な説明が織りこまれている(注13[14]参照)。この二種族はシナイ山から約束の地にはいるイスラエル人を非常に苦しめるが、神はモイゼに、彼らはロトの子孫であるから争うなと命じる(申2[9,19]23[3-4])。ロトの娘たちの行為は当時の低い道徳、特に彼女らが住んでいたソドムの道徳、およびいかなる手段を講じても家系を存続させようという強い意欲(レビレート結婚のおきて、申25[5-10]参照)を考慮すれば理解はできるが、ゆるされるべきものではない。タマルと義父ユダの場合にも同じ目的で同じことが行われる(38、マテオ1[3])。ユダとタマルの子はキリストの先祖。またモアブ人の子孫ルトもキリストの先祖(ルト1[4]、マテオ1[5])。後のモイゼの律法は近親相姦をきびしく禁じる。このことからイスラエル人にはむかう親族、すなわちモアブ人とアンモン人とに対する侮りが本記事に含まれていることがわかる。

(12) ノエの酔態の場合(9[20-24])と同様、ロトも無罪(知10[6]、ペトロ二書2[7]参照)。

(13) 「モアブ」はここでは「メアブ」、すなわち「父によって」の義を帯びたものと解されている。この説明は姉がくり返して言った「わたしたちの父によって」(メアビヌ)という語句の中に用意されている。

をベン・アンミ(14)と名づけた。かれは今のアンモン人の祖である。

20
1　さてアブラハムはそこからネゲブの地に移り、カデシュとシュル
2　の間に住んだ。アブラハムはゲラル(2)に滞在中、「妻サラのことを、「こ
　ゲラル滞在(1)　れはわたしの妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、人
3　をつかわしてサラを召し入れた。「しかし神が、夜、夢の中でアビメ
　レクに臨み、「おまえは召し入れた女のゆえに死ぬであろう。あの女は夫ある身である」
4　と言われた。「アビメレクは彼女に近づいていなかったので(3)、「主よ、正しい民を殺され
5　るのですか。「かれはわたしに『これはわたしの妹です』と言ったではありませんか。ま
　た、あの女も自分で『あの人はわたしの兄です』と言ったではありませんか。わたしは
6　純な心と清い手でこの事をしたのです」と言った。「神は夢の中でかれに言われた、「わた
　しも、おまえがまじめな心でこの事をしたのを知っている。おまえを守って、わたしに
　そむいて罪を犯すことのないようにしたのは、このわたしである。それでわたしは、お
7　まえがあの女に触れることを許さなかったのである。「あの男の妻を返せ。かれは預言者
　であるから、おまえの命が助かるように、おまえのために祈るであろう。しかしおまえが
　あの女を返さなければ、おまえもおまえに属するすべてのものも必ず死ぬことを知れ」。
8　アビメレクは朝早く起きてしもべをみな呼び集め、この事をすべて語り聞かせた。し

9　もべたちは非常に恐れた。「アビメレクはアブラハムを呼びよせて言った、「あなたはわ
　たしたちになんという事をしたのですか。あなたに何をしたというのでしょうか。あなたは
10　を負わせますが、わたしがいったい、あなたはわたしとわたしの王国とに大きな罪
　わたしに、してはいけない事をしたのです」。「アビメレクはまたアブラハムに言った、
11　「どういうつもりで、この事をしたのですか」。「アブラハムは答えた、「この地方には神に
　対する恐れ(4)が全くないので、わたしの妻ゆえに人々がわたしを殺すだろうと思ったから

---

(14)　「わたしの親の子」の義。聖書の中で「アンモン人」のことを「ベネ・アンモン」と呼んでいるが、これは「ベン・アンミ」に由来するものと解されている。ギリシャ語訳、ラテン語訳では「ベン・アンミ」の説明として「わたしの家族または民の子」と書き入れているが、この説明は「わたしの親の子」に劣る。

【注】(1) 本章ではじめてエロヒム伝承がまとまった一つの記事となっている(15注1参照)。主題はヤーウェ伝承(おそらく二つ)による12^{10-20}　26^{6-11}の場合と同じ(12注6参照。26注4で三記事の関係をまとめて説明する)。12章と比べると次の点が異なる。(イ)神の役割はさらに大きく直接的になっている。(ロ)サラは償金を受ける。(ハ)アブラハムは予言者もしくは神の友で仲介力を持つ者と認められ(7^{7}節参照)、追放されずに滞在を勧められる。18^{12}でサラは自分のことを「老いこんでいる」と言っているので、この記事は年代順からいえば、18章に先んずるものである。

(2)　ゲラルは多分ベエル・シェバ(21^{22-34}参照)の西または北西の方向。アブラハムが最初行った地(カデシュとシュルの間)の北方。巻末第五図参照。

(3)　6^{17}節から、神がアビメレクの妻やはしためらをうまずめにされたように、アビメレクの身体上に欠陥を与えて、この事を防がれたことがわかる。

(4)　古代では外来者の権利を保護する律法は全然なかったので、その土地の宗教に基づいた道徳がこれに代る唯一の保証であった。

12 です。12「それにあの女はほんとうにわたしの妹なのです。わたしの父の娘ですが、母の娘
13 ではありません。そしてわたしの妻になったのです。(5) 13神がわたしを父の家から離して
さまよわせた時、わたしは彼女に『わたしたちがどこへ行っても、わたしを兄と言いな
さい。わたしのために、このように心を使いなさい』と言いました」。
14 14アビメレクは羊、牛、しもべ、はしためをアブラハムに与え、またかれにその妻サラ
15 を返した。15「そしてアビメレクは言った、「ごらんなさい。わたしの領土はあなたの前に
16 あります。好きな所で住みなさい」。16「またサラにも言った、「わたしはあなたの兄に銀千
枚を与えます。これは、あなたの身に起ったすべてのことを償うものです。あなたはす
17 べての人の前で、あかしが立っています(6)」。17「そこでアブラハムは神に祈った。神はアビ
メレクとその妻、およびつかえめをいやされたので、かれらは子を産むようになった。
18 18ヤーウェがアブラハムの妻サラのゆえに、アビメレクの家のすべての者をうまずめにさ
れたからである。(7)

イサクの誕生と割礼(1)

21 1 ヤーウェは、さきに言われたとおり、サラに恵みを与えられた。(2)
2 2サラはみごもり、神が告げられた時になって、年老いたアブラハムに男の子
3 を産んだ。3アブラハムは、サラが自分に産んだ子をイサクと名づ

4 けた。4「アブラハムは、神の命じたとおり、八日目にその子イサクに割礼を施した。5ア
6 ブラハムはその子イサクが生れた時、百歳であった。6サラは言った、「神はわたしを笑
わせてくださいました。この出来事を聞く人はだれでも、わたしのために笑(3)うでしょう」。

---

(5) 異父(異母)きょうだいとの結婚は後のレビ20[17]のおきてによってきびしく禁じられるが、古代では珍しいことではなかった。サムエル下13[13]参照。エジプトのファラオ王室でも慣例となっていた。

(6) [16]節後半をマソラ点にしたがって読めば、「これはあなたのために、あなたといっしょにいるすべての人の目をおおうものです。あなたはすべての人の前であかしが立っています」となる。「すべての点において」とも訳されるが、この箇所ははっきりしない。「目をおおうもの」は法律用語「償金」の義。他人からの軽蔑を忘れさせるほど人の目をくらませる贈り物のようなもの。サムエル上12[3]、ヨブ9[24]参照。「あなたといっしょにいる」という語の母音を変えて読めば、本訳のように「あなたの身に起った」となる。アビメレクは償金をサラの夫アブラハムに与えるが、アブラハムのことをサラの「兄」と呼んでやさしく皮肉っている。

(7) ヤーウェの名が用いられているので、本節はおそらく前節の説明としてあとで書き入れられたものであろう。アビメレクの病気については何も触れず、女たちが受けたわざわいだけを説明している。

【注】(1) 1-7節は、ヤーウェ伝承([1a 2a 6b-7])、司祭伝承([1b 2b-5])、エロヒム伝承([6a])から成るものと思われる(各伝承ともさきに約束された重要なイサク誕生に触れている、17[15-22] 18[9-15])。したがって[1a]節と[1b]節の用語はそれぞれ異なるが、同じことをくり返したものである。また「イサク」にかかる語句が[6a]節と[6b]節において重なっている。

(2) 直訳では「ヤーウェはサラをかえりみられた(または訪れた)」。本句は18[10b]のことば(おそらく同じヤーウェ伝承)にかかっているが、18[10a]の「もどってくる」という意味を含んでいるように見えない。この語は、神の場合には恵みを与えるため(例、50[24-25])、もしくは罰するため(例、出20[5]、サムエル上15[2])の神の訪れを意味する。

(3) この動詞は「イサク」という名と同音同形で、これに結びつけられたもの(17注[8]参照)。本節のサラの笑いは、18[12-15]の場合と異なり喜びである(詩126〔125〕[2]参照)。聞く人の笑いは、サラとともに祝い喜ぶこと、もし

また彼女は言った、「だれがアブラハムに『サラは子どもに乳を飲ませるでしょう』と言いえたでしょうか。なぜなら、わたしはアブラハムが年とってから、かれに男の子を産んだのです」。

その幼子は育ち、乳離れした。アブラハムは、イサクの乳離れの日に、大きな祝宴を催した(4)。

ハガルとイスマエルの追放(5)

サラは自分の子イサクと、エジプト人ハガルがアブラハムに産んだ子とが遊んでいる(6)のを見て、アブラハムに、「このはしためとその子を追い出してください。このはしための子は、イサクといっしょにあとつぎになるべきではありません」と言った。このことはアブラハムをひどく悩ました。かれのむすこのことだからである。そこで神はアブラハムに言われた、「その子とおまえのはしためのことで悩むな。サラがおまえに言うことをみな聞き入れよ(7)。イサクから生れるものが、おまえの子孫と呼ばれるからである。しかしわたしは、はしための子をも一つの民族とする。かれもおまえの子だからである」。

アブラハムは朝早く起き、水のはいった皮袋とパンを取ってハガルに与え、彼女の肩にその子を負わせて去らせた(8)。彼女は立ち去り、ベエル・シェバの荒野をさまよい歩いた。皮袋の水がなくなった時、彼女はその子を灌木(かんぼく)の下におろし、「子どもの死ぬのを

くは17のアブラハムの笑いのようにおかしくて笑うことのどちらかであろう。注1で述べたように、6a節と6b節以下は出所を異にしているらしい。もし6b節を7節のうしろに置けば、四句にまとまったヘブライの詩形になる。多分著者が「笑い」の二つの記事をいっしょにするためにその順序をを変えたのであろう。

(4) 乳離れと祝宴は、子が二、三歳の時に行なう(マカバイ下7[27]参照)。今日でもアラビアにはこの習慣がある。

(5) 本記事(9-21節)はエロヒム伝承による。おそらくヤーウェ伝承による16章のハガル逃亡の記事と同一の歴史的事実に基づいたものであろう。両記事の差異はちょうど両伝承によるサラの危険に関する二つの記事(12[10-20]と20)の場合と同じようなものである。ここでは16章よりも神の役割がさらに直接的になっている。またアブラハムの神に対する絶対服従が特に強調されている。両記事の要点はイサクを絶対的地位に置き、イスマエルを除いていることである。聖パウロはこのことを取り上げ、新約と旧約の関係にあてはめている(ガラテア4[21-31])。ロマ9[7-9]も参照。両記事ともイスマエルの義「神は聞かれた」(16[11] 21[17])について説明し、またイスマエルはアブラハムの子だから大きな民族になるという約束も含む。著者は一つの出来事から出た二つの言伝えをつなぎ合わすために、16章でハガル逃亡後、彼女をもどらせている(16[9]および注7参照)。(12[11-13]と20[13]を比べよ、20[13]の「どこへ行っても」も両記事をつなぐもの)。

(6) 直訳では「笑う」。またここで「イサク」に結びつけている(注3参照)。「自分の子イサク」という語句はヘブライ語原文にはない。ギリシャ語訳、ラテン語訳写本にはある。司祭伝承による16[16]と21[5](注4も参照)から判断すれば、イスマエルはここでは十七、八歳ぐらいであろう(この伝承はハガル追放については何も語らず、イスマエルはアブラハムの死の時もまだ家にいたと伝えている、25[9])。したがって「遊ぶ」はむしろ「なぶる」の意であろう。聖パウロはこの語を「迫害する」の意味にとっている(ガラテア4[29])。しかし14[16-18]節においてはイスマエルもまだイサク同様小さな子ということになっている。サラはふたりがともにたわむれているのを見て、イスマエルが養子(16[2]参照)としてイサクと同じように相続財産を受けるであろうと考え、これを極力防いだのであろう。

(7) サラの要求はアブラハムにとって快いものではなく、またイスマエルのような立場にある子の権利を保護する当時の慣習にも反するので、神はアブラハムに、サラの要求は自分の計画によるものだと告げられる。また神はアブラハムにイスマエルのことも配慮すると保証される。

(8) ヘブライ語原文では、ハガルが肩に負わされたのは「その子」ではなく、「パンと水」ということになって

見るに忍びない」と言って、矢のとどくほどのかなり離れた所にすわった。彼女が離れてすわった時、その子は声をあげて泣いた。
17 神は子の泣き声を聞かれた。神の使いは天からハガルに呼びかけて言った、「ハガルよ、どうしたのか。恐れるな。神は子のいる所に、子の泣き声を聞かれた(9)。
18 立って行き、その子を取り上げおまえの手でしっかりつかまえよ。わたしはかれを大きな民族にするからである」。
19 神はハガルの目を開かれたので、彼女は井戸を認め、そこに行って皮袋に水を満たし、子に飲ませた。
20 神は子とともにおられ、かれは成長した。そして荒野に住んで弓を射る者となった。
21 かれはパラン(10)の荒野に住んだ。母はエジプトの地からかれの妻を迎えた。

アブラハムとアビメレクの契約(11)

22 そのころのことである。アビメレクとかれの軍隊の長フィコルとはアブラハムに言った、「あなたが何をしても、神はあなたとともにおられます。
23 今ここで、あなたは、わたしとわたしの子と子孫とを欺かないということを、神かけてわたしに誓ってください。わたしがあなたにしたように、あなたもわたしと、あなたがとどまっているこの地とに好意をもつべきです」。
24 アブラハムは、「わたしは誓います」と言った。
25 アブラハムはアビメレクのしもべたちが井戸を奪い取ったことについて、アビメレクを責めた。
26 アビメレクは、「わたしは、だれがこのことをしたのか知りません。あなたもわたしもきょうまで聞いたことがありません」と答えた。
27 アブラハムは羊と牛を取ってアビメレクに与え、かれらふたりは契約を結んだ。
28 アブラハムは羊の中から七匹の雌の小羊を別にしておいた。
29 アブラハムに、「あなたが七匹の雌の小羊を別にしておいたのは、どういうわけですか」と聞い

いるが、普通はこのようなものを肩には負わない。16節でも同様に、泣いたのは「その子」ではなく「ハガル」になっている。これはイスマエルが十七、八歳であるという考え(注6参照)に合わせるために、あとで書き変えたものであろう。5章で説明したように、司祭伝承中の数字はむしろ象徴的なものである。

(9) 「イスマエル」は「神は聞かれた」の義(16[11]参照)。本節に二回出る。イスマエルの泣き声にこたえて、神が「子のいる所に」井戸が見いだされるようにした、という意味かもしれない。

(10) パランはシナイ半島にあって、ネゲブの南。聖パウロ時代にはアラビアに属していた(ガラテア4[24-25]、創14[6]および注4、民10[12]参照)。

(11) 著者はひとりの太祖とアビメレクの間に結ばれた契約について、少くとも三つの言伝えを知っていたようである。すなわちアラブハムに関するものが二つ、イサクに関するものが一つ(26[26-33])。これは太祖の妻の操が危険にさらされたという言伝えが三つあることに似ている(20注1参照)。しかし著者はここでアブラハムに関する二つの言伝えを織り合わせて一つの記事にしている。エロヒム伝承による[22-24 27 31]節では、「ベエル・シェバ」は「誓い(シャバ)の井戸」の義であると説明されている。ヤーウェ伝承の一つによる[25-26 28-30 32-33]節の中には、「ベエル・シェバ」は「七つ(シェバ)(七匹の小羊)の井戸」の義であるという説明が準備されているように見える。アラム語ではこの意味に言い伝えている。また第三の言伝えの中のヘブライ語(26[33])もこの意味をほのめかしている。[34]節はアラム語訳にはない。別の資料からとってあとでつけ加えたものであろう。三つの言伝えはみな同様に、神の太祖に対する特別な配慮と保護を物語り(異教徒でさえこの事を認めている)、また人間同志の契約の重大性をほのめかしている。このことから神と太祖の契約はさらに重大かつ神聖であることがわかる。

もわたしに告げたことはなく、わたしもきょうまで聞いたことがありません」と答えた。

30 た。「アブラハムは、「この七匹の雌の小羊は、わたしがこの井戸を掘ったことの証拠と
31 なるように、あなたがわたしの手から受け取るべきものです」と答えた。「したがって
その所はベエル・シェバと呼ばれるようになった。すなわち、ふたりがそこで誓いを立
32 てたからである。「かれらはベエル・シェバで契約を結び、アビメレクとかれの軍隊の
33 長フィコルとは立ち上がって、ペレシェト人(12)の地に帰った。「アブラハムはベエル・シ
34 ェバに一本のぎょりゅうを植え、そこで永遠(13)の神ヤーウェのみ名を呼んだ。「アブラハ
ムはペレシェト人の地に長い間とどまった。

22

1 これらの出来事のあとで、神はアブラハムを試みてかれに、「アブ
2 **いけにえに** ラハムよ」と言われた。アブラハムは、「はい」と答えた。「神は、
されるイサク(1) 「おまえのむすこ、おまえの愛するひとり子イサクを連れてモリヤ(2)
の地に行き、山々の中のわたしがおまえに示す山で、その子を燔祭(はんさい)
としてささげよ」と言われた。
3 アブラハムは朝早く起きてろばに馬具をつけ、燔祭に用いるまきを割り、ふたりの若
4 者と自分の子イサクを連れ、神がかれに示された所に向かって出かけた。「三日目にア
5 ブラハムが目を上げると、その所がはるかに見えた。「かれは若者たちに、「ろばといっ
しょにここにいなさい。わたしは子どもとあそこへ行き、礼拝してから、おまえたちの

(12) ペレシェト人はここではアブラハム、後にはイサク(26 1)と親しい間がらのように見える。彼らは、サウルおよびダビド時代のイスラエルにとっては、不倶戴天の敵となる好戦的な種族の初期の先祖のことかもしれない。「ペレシェト」から変化した「パレスチナ」という名称は、この民族消滅後久しい今日でも残っている。

(13) 原語では「エル・オラム」。イザヤ40 28、エレミヤ10 10参照。この地方で使用されていた神の名称かもしれない(アブラハムはこの名称を唯一の神ヤーウェに適用し、記念として聖樹を植える)。「エル・シャッダイ」(17 1および注2)と「エル・エリョン」(14 18および注9)参照。

【注】(1) この記事はアブラハムの信仰生活の頂点、彼の受けた最大の試練、およびその信仰と従順を物語る。大部分(1—14 19節)はあきらかにエロヒム伝承による。アブラハム時代およびその後でも、人身ごくう、特に自分の子をいけにえにすることは珍しいことではなかった(列下16 3 21 6、エレミヤ7 31参照)。したがってこのようないけにえが要求されたことよりも、最後の瞬間に止められたことのほうが、アブラハムにとっては意外だったと思われる。神の摂理によってイサクの代りになった雄羊は、ういごをあがなういけにえとしての最初の例である。後に出34 19—20で述べられるういごのあがないのおきては、幼子イエズス奉献の時にも守られている(ルカ2 22—24)。後の聖書は本記事からアブラハムの信仰と誠実を引き出している(知10 5、シラ44 20、ヘブライ11 17—19、ヤコボ2 21)。聖パウロおよび特に教父たちはイサクはキリストの前表であると説いている。イサクが燔祭のまきを運んだように、キリストは十字架をになう。またキリストは、羊がイサクの代りに犠牲となったように、われわれのために過越の小羊、すなわちいけにえとなる。

(2) 現存ヘブライ語原文におけるこの語の形も、14節でアブラハムがいけにえの場所につけた名を説明した句(次注参照)も、本来のエロヒム伝承においては、それぞれ別のものであったようである。各訳本で多様に訳されているのでその印象を受ける。「モリヤ」は本来の伝承中では、「アモル(人の地)」となっていたのだろうと推測されている。アモル人はカナアン人と同様、パレスチナの古代住民(10 16参照)。この語は本節と歴下3 1に出てくるが、後者では「地」ではなく、エルサレムにある「モリヤ」の「山」を意味している。この山にサロモンは神殿を建て、ここでういごのためのいけにえがささげられる。

6 所にもどってくる」と言った。
7 せ、自分の手には火と刃物を取った
ラハムに、「父よ」と言った。アブラハムは、「なにか、子よ」と答えた。イサクは、「火
8 とまきはありますが、燔祭の小羊はどこにいるのですか」と尋ねた。アブラハムは、
「子よ、神みずから燔祭の小羊をお計らいになるであろう」と答えた。ふたりはともに
進んで行った。

9 かれらは神の示された所に着いた。アブラハムはそこに祭壇を築き、その上にまきを
10 ととのえ、その子イサクを縛って、祭壇のまきの上に載せた。アブラハムは手を伸ば
11 して刃物を取り、自分の子をいけにえとして殺そうとした。その時ヤーウェの使いが
天から、「アブラハムよ、アブラハムよ」と呼びかけた。アブラハムは、「はい」と答えた。
12 み使いは、「その子に手を下すな。何もするな。今こそわたしは、おまえが神を恐れ、お
まえのむすこ、おまえのひとり子さえもわたしのために惜しまないということを認める」
13 と言った。アブラハムが目を上げて見ると、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊が
14 いた。アブラハムは行ってそれを捕え、むすこの代りに燔祭としてささげた。アブラ
ハムはその所を「ヤーウェ・イルエ」と名づけた。それで今日でもなお、「ヤーウェの山
で計らわれる」と言われている。(3)

15 ヤーウェの使いがふたたび天からアブラハムに呼びかけて、16言った、「ヤーウェはの
たもう『わたしはみずからにかけて誓う。(4) おまえはこのようにして、おまえのむすこ、
17 おまえのひとり子を惜しまなかったがゆえに、わたしはおまえを大いに祝し、おまえの
子孫を空の星、浜のまさごのようにおびただしく増そう。おまえの子孫は敵の門(5)を打ち

(3) 本訳は現存ヘブライ語原文の文脈から取られる一番いい意味と思われる。「ヤーウェ・イルエ」すなわち「ヤーウェはお計らいになる」は、8節の「神はお計らいになる」という考えをくり返したものである。続く語句(「それで…」)は、現存ヘブライ語原文では、「ヤーウェ・イルエ」と名づけたことの結果になっているが、本来のエロヒム伝承中では、その理由になっていて、「なぜなら、彼(アブラハム)が、『きょう、神は山でお計らいになる』と言ったからである」となっていたのかもしれない。本来のエロヒム伝承中の語句がヤーウェ伝承の編者によって、「ヤーウェの山で計らわれる」という通俗なことわざを説明した現在の形に変えられ、エルサレムの神殿に結びつけられたものであろう(メルキゼデクに関する記事、14[18-20]および注。はじめの部分参照)。このようなエルサレムとの関連は「モリヤ」(2節)という語にもうかがえる(前注参照)。「ヤーウェの山」はエルサレムの神殿のある所(詩24[23][3]、イザヤ2[3])。「お計らい」は神殿でささげられる祈りといけにえにこたえてヤーウェがなされる。「モリヤ」の「ヤ」は「ヤーウェ」をさしたものかもしれない。本来の語を「モリヤ」に変えたのも、[15-18]節をつけ加えたのも、また15節に合わせるため11節で「神(エロヒム)の使い」の代りに「ヤーウェの使い」を用いたのも(シリヤ語訳では両節とも「神の使い」)、このヤーウェ伝承の編者であろう。[14]節後半の引用語句は、ラテン語訳では、「山で主(ヤーウェ)は現われるであろう」。ギリシャ語訳では、「山で主(ヤーウェ)はご覧になる(またはお計らいになる)であろう」。後者は2節の「モリヤ」のラテン語訳「現われの地」に符合する。またこのギリシャ語訳は、エルサレムの南の山にあるアブラハムに関連した聖所のそもそもの名称であったかもしれない。

(4) 神の上に立つものはないので、神はご自身にかけて誓われる。エレミヤ44[26]、アモス4[2]6[8]の類句参照。

(5) 門は町の中で一番重要な所で防御の要点(19注1参照)。門を打ち取ることは町の占領を意味する。

18 取るであろう。」おまえの子孫によって、地のすべての民はかれら自身を祝福する。(6) お
19 まえがわたしに従ったからである』」。アブラハムは若者らの所にもどった。かれらは立
ち上がって、ともにベエル・シェバに住んだ。
20 これらの事のあとで、アブラハムに次のような知らせがあった、
21 **アブラハムの親族**(7) 「ミルカもまた、あなたの弟ナホルに男の子らを産んだ。」最初の子は
22 ウツ、その弟はブズである。次はカムエルで、かれはアラムの父であ
る」。次はケセド、ハゾ、ピルダシュ、イドラフ、ベトエルである」。
23 ベトエルはレベッカを生んだ。ミルカはこれら八人をアブラハムの弟ナホルに産んだの
24 である。」レウマというナホルのそばめ(8)もまた、テバー、ガハム、タハシュ、マアカを
産んだ。

23

1 サラの生涯は百二十七年であった。これがサラの生きながらえた
2 **太祖の墓**(1) 年である。」彼女はカナアンの地のキレヤト・アルバ(2)、すなわちヘ
ブロンで死んだ。アブラハムは中(3)にはいって泣き叫び、サラの死を
3 いたんだ。」アブラハムは死者のそばから立ち上がって、ヘト人たち(4)の所に行き、次の
4 ように言った、「わたしはよそから来て、あなたたちの所にとどまっている者です。わ

5 たしの死者を運び出して、葬ることができるように、あなたたちの所で埋葬地を譲って
くださ(5)い」。」ヘト人たちはアブラハムに答えて、6「あるじよ、それよりも、わたしたち

---

(6) 12注3参照。
(7) 一つのヤーウェ伝承によるナホルの系図。24章でイサクとレベッカの結婚を物語る用意として23節にレベッカの名をあげている。ナホルとミルカのことはすでに11[26-29]にしるされている。これらは個人名としてあげられているが、大部分は10章の場合と同様、むしろ種族名である。ヘブライ民族との関係を略述したものである。
(8) 第二の妻のことで、本妻の下、はしためのよう。アブラハムの本妻はサラ、そばめはケトラ(25[1])、はしためはハガル。

【注】(1) 本記事はあきらかに司祭伝承に基づくものだが、その司祭伝承の基礎となっているさらに古い伝承を反映している。内容は非常に法律調で、アブラハムがほら穴および畑地を買い取って、所有権を握ったということが、強調されている。ここにはサラだけでなく、後にアブラハム、イサク、レベッカ、ヤコブ、レアも葬られる(25[9-10] 49[29-33] 50[13])。本書中の他の箇所でもこの法律上の取得が主張されているので、この所有権についてあとで紛争がおこったのかもしれない。この土地は選民が約束の地で実際に取得した最初のものである。アブラハムの子孫が最後には全域を領有するという約束が果されはじめたわけである(13[15-17]および注6参照)。同様にヤコブもシェケムで畑地を取得し、後にヨゼフの骨が埋葬される(33[19]、ヨシュア24[32])。この二つの土地は使7[15-16]で混同されている。
(2) 「アルバ」はアナク人の祖先の名、およびアナク人中の巨人の名とされている(ヨシュア15[13-14])。「キレヤト」は「四」の義。この町は四氏族の中心地だったからであろう(民13[22]参照)。現代のヘブロン市には四つの区画がある。
(3) 死者の横たわっている所。ここでアブラハムは地に伏してわめき泣いた(サムエル下12[16-17] 20[13]、マルコ5[38-39]参照)。
(4) 直訳では「ヘトの子ら」。現代までの考古学的研究によれば、ヘト人はこれより後にパレスチナに来た民族であるが、司祭伝承中ではカナアンの初期住民の一般名称となっていたらしい(ヨシュア1[4]参照)。
(5) アブラハムはよその者で所有権がなかった。彼はヘト人の墓にサラを葬りたくなかったので、墓を買い取

の言うことを聞いてください。あなたはわたしたちの中では偉大な太公[6]です。わたしたちの墓のいちばんいい所に、あなたの死者を葬ってください。わたしたちの中には、あなたが死者を葬ることを断る者はひとりもいません」と言った。

7 アブラハムは立ち上がって、その地の民であるヘト人たちの前に身をかがめた。8 そしてかれらに言った、「わたしの死者を運び出して葬ることにご承知くださるのであれば、わたしの言うことを聞いてください。ゾハルの子エフロンに、9 かれが持っている畑地の端にあるマクペラ[7]のほら穴を、わたしに与えるように言ってください。あなたたちの前で、かれがじゅうぶんな値でわたしに埋葬地を譲るようにしていただきたいのです」。10 エフロンはヘト人たちの中にすわっていた。ヘト人エフロンは、ヘト人たち、すなわちかれの町の門に来るすべての者[8]の聞いている所で、アブラハムに言った、11「いや、あるじよ、わたしの言うことを聞いてください。わたしはあの畑地をあなたにさしあげます。またその中にあるほら穴もさしあげます。わたしの国の人々の面前で、わたしはこれをあなたにさしあげます。あなたの死者を葬ってください」。

12 アブラハムはその地の民の前に身をかがめた。13 そしてその地の民の聞いている所で、エフロンに、「もしあなたが……。それよりも、わたしの言うことを聞いてください。わたしは畑地の値を払います。これをわたしから受け取ってください。そしてわたしは死

14 者をそこに葬りましょう」と言った。15「あるじよ、それよりも、わたしの言うことを聞いてください。銀四百シェケル[9]の土地が、あなたとわたしとの間でどうしたというのでしょう。さあ、あなたの死者を葬ってください」と言った。16 アブラハムはエフロンのことばを入れ、エフロンがヘト人たちの聞いている所で

って自分のものにしようとした。ヘト人たちは彼に墓を売りたくなかったようである。そこで彼の要求を受け流し貸すことを申し出る（6節）。アブラハムは初志貫徹のため自分が選んだほら穴を要求し、これにじゅうぶんな額を支払うと申し出る（7-9節）。そのほら穴の所有者エフロンはアブラハムの要求に対し、ほら穴だけでなくそのまわりの畑地も「さしあげる」と言う（10-11節）。アブラハムはエフロンが抱合せで売りたがっていると解し、最初はためらうが、それを承知する（12-13節）。そこでエフロンはたいした価格ではないというような口ぶりで遠回しに言う。この価格は相当の高値であるが（14-15節）、アブラハムはすぐ承諾して支払う（16節）。

（6）直訳では「神の太公」。ヘブライ語で表現を最上級にするときには「神の」を加える。30[8]の「はげしい争い」参照。10[9]の「ヤーウェの前に強いかりうど」も参照。

（7）多分「二重」の義。ギリシャ語訳、ラテン語訳ではこのように訳されている。このほら穴は二重になっているとのことである。おそらくアブラハム自身もここに埋葬されるつもりでいたのだろう。

（8）本節と18節では「門の所で行われる公の集会に議席を有するすべての者」の義（19注1および34[24]の類句参照）。アブラハムとエフロンとの土地売買は門の所で公に行われた。

（9）「シェケル」は本来は重量の単位名（24[22]参照）。アブラハム時代に通用していたバビロニア式シェケルは軽衡で約八グラム、重衡で約十六グラム。この中にもそれぞれ常衡と王衡とがあった。王衡は軽衡でも重衡においても、わずかに常衡より多い。後のヘブライ式銀シェケルはこれらと異なる。これらの重さに基づいて後に貨幣が鋳造される。

言った値、すなわち銀四百シェケルを、商人の間で通用していた重さにしたがって量り、
エフロンに与えた。
17 このようにして、マムレに面しマクペラにあったエフロンの畑地、すなわち畑地、そ
18 の中のほら穴、畑地の中の木は境界線にある木までもすべて、2ヘト人たち、すなわちか
19 れの町の門に来るすべての者の面前で、アブラハムの所有となった。(10) 2この後、アブラ
ハムは、カナアンの地のマムレ（すなわちヘブロン）(11)に面しマクペラの畑地にあるほら
20 穴に、妻サラを葬った。2このようにして、畑地とその中にあるほら穴とは、埋葬地と
してヘト人からアブラハムに譲られた。

24

1 さてアブラハムは年を重ねた老人であった。ヤーウェはすべての
2 **イサクの嫁**(1) 事にアブラハムを祝福された。2アブラハムは財産を管理させていた
自分の家のいちばん年かさのしもべに言った、「おまえの手をわたし
3 のももの下に入れなさい。(2) 2わたしはおまえに、天の神、地の神であるヤーウェにかけ
4 て、誓わせます。それは、わたしが今いっしょに住んでいるカナアン人の娘たちから、
わたしの子の妻を選ばずに、2おまえはわたしの国に出かけ、わたしの子イサクの妻を選
5 ぶために、わたしの親族の所に行くことです」。2しもべは答えた、「もしその女がわたし
(3)
についてこの地に来るのを望まない時には、わたしはあなたの子をあなたの出身地に連

(10) 17 18節の文句は法律調を帯びたものらしい。
(11) 17 25 9 49 30 50 13参照。このほら穴はマムレよりもヘブロンの旧跡に面している。マムレはヘブロンの約二・五キロ北。現在ではこのほら穴の上に回教寺院が建っている。さきに三人のふしぎな訪問者がそのかたわらでアブラハムに現われたというマムレの大木(18 1―15)、いわゆる「聖樹」に、後になって人々が巡礼に来て迷信的儀式を行うようになり、著者の時代にもこのようなことがあって、これに反発する意味で、著者がマムレは「聖樹」のある所というよりは、「太祖の墓」に面した所である、と強調したのかもしれない。13 18および注8参照。巻末第六図参照。

【注】（1）摂理によってイサクの嫁をさがしあてるという牧歌的色彩に富んだこの記事は、ヤーウェ伝承による。しかし重複箇所があるので(例、ラバンは二度井戸に行く、29b 30b節。注7参照)、本伝承は少し異なった他の言伝え(エロヒム伝承?)と組み合わされたもののようである。レベッカの直系尊族についても二つの異なる伝承がある。一つはヤーウェ伝承で、ラバンとレベッカはアブラハムの弟ナホルの子となっている(29 5)(27 48節参照)。他は司祭伝承で、ふたりはアラム人ベトエルの子となっているように、ベトエルをナホルの子ということにして両者を調和させている(25 20 28 2 5)。著者は22にしるしているように、ベトエルをナがってアブラハムはしもべ(15 2のダマスコ出身のエリエゼルのことであろう)に、単に命令を与える代りに、誓約を要求している。ヤーウェ伝承による「アブラハムの死」は本来は61節のあとにあったのかもしれないが、おそらく著者が司祭伝承による「アブラハムの死」の記事を次章7―10節で述べるために、これを省いたのであろう。したがって年代順からいえば、25 1―6は24章に先立つものである。15 24 47節)。1―9節はアブラハム臨終の情景のようである。

（2）このようなしぐさは本節と47 29(ヤコブの臨終)だけ。46 26の「生れる」は直訳では「ももから出る」。本節でも同様に「もも」は生命を生み出す身体の一部分を象徴しているので、最も神聖視されている。このようなしぐさによる誓約は、神聖にして犯すべからざるものであるという意味であろう。

（3）アッシリア古代法典によれば、女は結婚後も自分の父の家にとどまることができた。58節のレベッカに対する質問も参照。

6 れ帰るのですか」。「アブラハムはかれに答えた、「わたしの子をあそこへ連れ帰らないよ
7 うにせよ。「わたしの父の家と親族の地からわたしを導き出し、『わたしはおまえの子孫
にこの地を与える』と語り、わたしに誓われた天の神、ヤーウェが、み使いをおまえの
先に立たせるでしょう。そしておまえは、あそこからわたしの子の妻を見つけるでしょ
8 う。「もしその女がおまえについてくるのを望まなければ、おまえはわたしに対する誓い
9 から解かれます。ただ、おまえはわたしの子をあそこへ連れ帰ってはならない」。「そこ
でしもべはその手を主人アブラハムのももの下に入れ、この事についてかれに誓った。
10 しもべは主人のらくだの中から十頭を取り、また主人の貴重な品々を携えて出発し、
11 アラム・ナハライム(4)のナホルの町に行った。「かれは夕方、水くみ女が出てくるころ、町
12 の外の井戸のほとりにらくだを伏させた。「かれは言った、「わたしのあるじアブラハム
の神、ヤーウェよ、きょう、わたしのためによく取り計らい、わたしのあるじアブラハ
13 ムにいつくしみを示してください。「わたしは泉のそばに立っています。町の娘たちは
14 水くみに出てきます。「わたしが若い娘に『水がめを傾けてわたしに飲ませてください』
と言った時に、その娘が『お飲みください。わたしはあなたのらくだにも水を飲ませま
しょう』と答えたならば、その者こそ、あなたがしもべイサクのために定めたものであ
りますように。これによって、わたしはあなたがわたしのあるじにいつくしみを示され

たのだと悟りましょう」。
15 かれがまだ言い終らないうちに、レベッカが水がめを肩に載せて出てきた。彼女はア
16 ブラハムの弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘である。「その若い娘は美しい処女で、
彼女を知った男はいなかった。彼女は泉に降りて行き、水がめを満たして上がってきた。
17 その時しもべは走って行き、レベッカに会って、「どうかあなたの水がめの水を一口飲ま
18 せてください」と言った。「彼女は、「あるじよ、お飲みください」と答え、手早く水が
19 めを自分の腕におろして、かれに飲ませた。「彼女はかれに飲ませてから、「わたしはあ
20 なたのらくだにも、飲みおわるまで、水をくんであげましょう」と言い、「手早く水がめ
の水を水ぶねにあけ、また水をくみに井戸に走って行き、すべてのらくだのために水を
21 くんだ。「その人は、ヤーウェが自分に旅の目的を果させてくださったかどうかを知ろ
うとして、黙って彼女を見つめていた。(5)
22 さて、らくだが水を飲みおわった時、その人は重さ半シェケルの金の輪一つをとってレ

(4) 「川のアラム」。上メソポタミアのことで、ここにナホルの町ハランがあった(10節)。11 31 29 4-5参照。ギリシャ語訳とラテン語訳では単に「メソポタミア」と訳している。25 20ではこの地域は「パッダン・アラム」となっており、ベトエルとラバンは「アラム人」と呼ばれている。

(5) しもべは自分の定めた条件どおり事が運んだので、今度は自分のあるじが定めた条件(4節)に合うかどうか、すなわち彼女がアブラハムの親族の娘かどうかを確かめようとする。

23 ベッカの鼻につけ、重さ十シェケルの金の腕輪二つをその手首にはめた。(6)「そして彼女
に、「あなたはどなたの娘ですか。どうかおっしゃってください。あなたの父の家に、わた
24 したちが泊まる所があるでしょうか」と尋ねた。「彼女は、「わたしはミルカがナホルに
25 産んだ子ベトエルの娘です」と答えた。「またかれに言った、「わたしたちの所には、わ
26 らもまぐさもたくさんあります。また、お泊めする所もあります(7)」。「その人はひざまず
27 きヤーウェに身をかがめて、「わたしのあるじアブラハムの神、ヤーウェは賛美されま
すように。ヤーウェはわたしのあるじに対するいつくしみと誠を忘れず、またわたしを
あるじの兄弟の家への道に導いてくださいました」と言った。
28 さてその娘は走って行き、母の家の者(8)に事の次第を告げた。29 レベッカにはラバンと
30 いう兄がいた。ラバンは泉の所にいるその人のもとに駆けて行った。「すなわちラバン
は妹の鼻と手首にある輪とを見て、また「あの人はわたしにこのように言いました」と
31 いう妹レベッカのことばを聞いて、その人の所に行ったのである。その人は泉の所でら
くだのそばに立っていた。「ラバンは言った、「ヤーウェ(9)に祝せられた方、おいでくださ
32 い。なぜ外に立っていらっしゃるのですか。わたしは家をかたづけて、らくだのために場
所を用意しました」。「そこでその人は家にはいった。ラバンはらくだのひもを解き、わ
33 らとまぐさをらくだに与え、その人々と供の人々の足を洗う水を運んだ。「そして食べ

ものがその人の前に出されたが、その人は、「わたしはわたしの用向きを述べるまでは、
いただきません」と言った。ラバンは、「ではお話しください」と言った。
34 **結婚の申込** そこでかれは言った、「わたしはアブラハムのしもべです。35 ヤー
ウェがわたしのあるじを大いに祝福されたので、かれは豊かになっ
ています。ヤーウェはかれに、羊、牛、銀、金、しもべ、はしため、
36 らくだ、ろばをくださったのです。37 あるじの妻サラは、年老いたあるじにひとりの子
を産みました。その子に、かれは全財産を譲りました。「あるじはわたしに誓わせて言
いました、『おまえはわたしが住んでいる地のカナアン人の娘の中から、わたしの子の妻
38 を選んではいけない。「おまえは必ずわたしの父の家、わたしの親族のところに行って、

---

(6) これらは親切なレベッカへの贈り物であるが、感謝のしるしとしてはあまりにも高価すぎるので、多分結婚申込の用意という意味を含んだものであろう。「シェケル」については23注9参照。金シェケルは銀シェケルより多少重い。

(7) 23—25節にそれぞれ関連のない二つの質問とそれに対する二つの返事がしるされている。ここにも二つの伝えが用いられたという形跡があらわれているようである（注1前部参照）。

(8) レベッカの父は死んでいたのであろう。レベッカの母の家の長は兄ラバンのようである（29節参照）。

(9) 異教徒ラバン（31[30]）が「ヤーウェ」の名を用いたのは、妹からあの人はヤーウェに祈っていた（27節）、と聞いたからであろう。ラバンは親切からではなく、強欲から、金持ちの他国人をとめたように見える。この性癖は後にヤコブを遇する時、はっきりあらわれる（29—31章）。

39 わたしの子の妻を選ばなければならない』。-わたしは、『その女はわたしについてこない
40 かもしれません』とあるじに言うと、かれは答えました、-『わたしはヤーウェのみまえ
に歩んできたので、ヤーウェはみ使いをおまえといっしょにつかわして、おまえに旅の
41 目的を果させてくださるでしょう。おまえはわたしの親族、わたしの父の家から、わた
しの子の妻を選ぶのです。-おまえがわたしの親族のところに行けば、おまえはわたし
のののろいから免かれます。もしかれらがおまえにその女を渡さなくても、おまえはわた
しののろいから免かれます』。

42 それでわたしはきょう泉のところに来て、言いました、『わたしのあるじアブラハムの
神、ヤーウェよ、もしあなたがわたしに旅の目的を果させてくださるのであれば、次の
43 とおりになりますように。-わたしは泉のそばに立っています。わたしが水くみに出て
44 きたおとめに、《水がめの水を少し飲ませてください》と言った時に、-そのおとめが
《お飲みください。あなたのらくだにも水をくんであげましょう》と答えたならば、そ
45 のおとめこそ、ヤーウェがわたしのあるじの子のために定めた妻でありますように』。

わたしがまだ心の中で言いおわらないうちに、レベッカが水がめを肩にして出てきて、
泉に降りて行き、水をくみました。そこでわたしが、『どうか水を飲ませてください』と
46 言いますと、-彼女は手早く水がめを降ろして、『お飲みください。わたしはあなたのら

くだにも水を飲ませてあげましょう』と
47 らくだにも飲ませました。-それでわたしは、『あなたはどなたの娘ですか』と尋ねます
と、彼女は、『わたしはミルカがナホルに産んだ子ベトエルの娘です』と言いました。わたしは飲みました。レベッカは
48 そこでわたしはレベッカの鼻に輪をつけ、手首に腕輪をはめました。-そしてわたしはひ
ざまずいてヤーウェに身をかがめ、わたしのあるじアブラハムの神、ヤーウェをたたえ
ました。あるじのきょうだいの娘をあるじのむすこに迎えるために、わたしを正しい道に
49 導いてくださったからです。-さあ、もしあなたがたがわたしのあるじに好意と誠を示す
おつもりならば、そうだとおっしゃってください。もしそうでなければ、わたしが右に
するか左にするかを決めることができるように、そうでないとおっしゃってください」。
50 ラバンとベトエル(10)は答えて言った、「これはヤーウェから出たことですから、わたしたちはあなたに、よしあしを言うことはできませ
51 ん。-ごらんください。レベッカはあなたの前にいます。連れて行っ

家族の承諾

---

(10) 「ベトエル」はレベッカの父として、またミルカの子として、15:24-47節に書き入れられたものであろう（注1参照。「レベッカ」は伝承中では「ミルカがナホルに産んだ娘」〔34-ディナの場合参照〕となっていたようである）。ここには「ベトエル」としるされているが、これはおそらく「ミルカ」または「彼女の母」に取って代ったものであろう。このあと「兄と母」（55節）は出てくるが、ベトエルのことは何も述べられていない。もし父がいたのであれば、本節で「ラバン」の前に置かれ、53節では妻子と同じように贈り物を受け、娘の出発の時に祝福を与

52 て、ヤーウェが言われたとおり、あなたのあるじの子の妻にしてください」。
53 ムのしもべはかれらのことばを聞き、地に身をかがめてヤーウェを拝した。
銀や金の飾りと衣服を取り出してレベッカに与え、その兄と母にも高価な品を贈った。
54 しもべとその供の者たちは飲み食いして、そこに泊まった。あくる朝、かれらが起きた
55 時、かれは、「わたしのあるじの所に帰らせてください」と言った。
兄と母は、「娘はしばらくの間、少くとも十日、わたしたちの所にいて、それから行かせ
56 ましょう」と答えた。しかし、しもべはかれらに、「ヤーウェはわたしに旅の目的を果
させてくださったのですから、わたしを引き留めないで、あるじの所に帰ることができ
57 るようにさせてください」と言った。
58 ょう」と言って、「レベッカを呼び、「おまえはこのかたといっしょに行きますか」と尋
ねた。するとレベッカは、「行きます」と答えた。
59 60 ばをアブラハムのしもべとその供の者たちといっしょに行かせた。
を祝福して言った、

61 レベッカとつかえめたちは、らくだに乗ってその人について行った。しもべはレベッカ

「われらの妹よ、おまえは千万の母となれ、
おまえの子孫は敵の門を打ち取るように」。

62 を引き取って出発した。
63 イサクはベエル・ラハイ・ロイの荒野に行っていた。かれはネゲブ地方に住んでいた
のである。暮れかかるころ、イサクは野でそぞろ歩きをしようとして出かけた。目を上

えたはずである。父がその場にいなかった事実、および「母の家」という文句（28節）から、父は死んでいるという結論になる。

(11) しもべは主人がまだ生きているだろうと期待して、急いでこの吉報を持ち帰ろうとする。注1参照。家族がレベッカの出発を延ばそうとしたのは、こまやかな愛情のあらわれである。

(12) 51節ですでに婚約はととのい、57節ではただ出発の時期が問題となっている。58節の質問はこの意味で本人に出発の時期を尋ねたものかもしれないが、むしろ、レベッカがとどまってイサクに来てもらうという意味の質問かもしれない。古代メソポタミアの婚約にこのような例が見られる。

(13) これは家長である兄ラバンとのつづきがらをさす（34:8でも同様に、ディナは「あなたたちの娘」と呼ばれている）。レベッカには数人の兄がいたと考える必要はない。ラテン語訳とあるギリシャ語訳写本では、53,55節の「兄」を複数にしているが、これはこの呼び名の由来を理解しなかったためであろう。

(14) 「デボラ」？ 35:8および注6参照。

(15) 直訳では「一万の数千倍となれ」（16参照）。「一万」の原語と「レベッカ」とは発音が似ている。おそらくしゃれを含めたものだろう。彼女の多産と子孫の繁栄を祈る別れのあいさつである。

(16) しもべがもどってきた時、イサクがベエル・ラハイ・ロイ（16:13-14参照）にいたということは、アブラハムはすでに死んでいるという印象を固めるものである（注1参照）。というのは、25:11にイサクはアブラハムの死後ベエル・ラハイ・ロイの近くに住んだとしるされているからである。

(17) ここにだけ出る語で意味不明。本訳とシリア語訳は似ている。ギリシャ語訳は「話し合う」。ラテン語訳では「もの思いにふける」。「（夕涼みに外で）寝そべる」という意味もほのめかされている。

64 げると、らくだが近づいてくるのが見えた。 65 「レベッカも目を上げて、イサクを見た。そしてらくだから降りて、 65 「しもべに尋ねた、「野原を歩いて、わたしたちのほうに来るあの人はだれですか」。しもべは、「あれはわたしのあるじです」と答えた。そこでレベッカはヴェールを取ってかぶった。(18) 66 しもべは自分のしてきたことをすべて、イサクに語った。 67 イサクはレベッカを天幕に連れてはいり、レベッカをめとって妻とした。イサクはレベッカを愛して、母の死後、慰めを得た。(19)

25

1 アブラハムはまた妻(2)をめとった。その名をケトラという。 2 彼女は、ジムラン、ヨクシャン、メダン、ミドヤン、イシュバク、シュアーを、アブラハムに産んだ。 3 ヨクシャンは、シェバとデダンを生んだ。デダンの子孫は、アッシュル人、レトシュ人、レウッム人であった。(3) 4 ミドヤンの子孫は、エファ、エフェル、ハノク、アビダー、エルダアであった。これらはみな、ケトラの子孫である。

5 アブラハムは、イサクに全財産を与えた。 6 アブラハムはそばめたちの子らには物を与え、かれの生存中、かれらを東のほう、東国に移らせて、その子イサクから遠ざけた。

ケトラによるアブラハムの子孫(1)

(18) 女が身分の高い男に会う場合、礼儀として下馬することになっていた（ヨシュア15 18、サムエル上25 23参照）。男が自分の未来の夫である場合には、結婚式後までその男の前ではヴェールで顔をおおうことになっていた（29 23-25参照）。しもべがイサクのことを「あるじの子」と言わずに「あるじ」と呼んでいることは、アブラハムの死を暗示している。

(19) ヘブライ文には「天幕」の次に「母サラ」が書きこまれているが、これは文法に合わない。本節後部に「母の死後」という語句が出てくるので、その必要な準備として本節前部にさしこんだのかもしれない。このことから、「母の死後」は伝承中では「父の死後」となっていたのかもしれない、という推測がある程度なりたつ。神に仕える者の生涯における摂理を物語るこの感動的な話はここで終る。トビト書はもっと詳細にわたって摂理のことを扱っている。

【注】(1) 1-18節でアブラハム物語は終る。ここには各種の伝承が用いられているが、今まで使用されてきた他の伝承と必ずしも完全に一致するものではない。著者はアブラハムについて知っていることはなんでも書き残そうとしたようである。シェバとデダンは10 7ではハム系のクシュの子孫であるが、ここではセム系アブラハムの子孫となっている。さらにシェバは10 28ではヨクタンの子、ここではヨクシャンの子。シェバはサロモンを訪れた「シェバの女王」の名のおこり（列上10 1-13、マテオ12 42、ルカ11 31参照）。概して2-4節と13-15節の名は、イスラエル人とその東と南に住むアラビア人との関係を示すものである（6節参照）。大体においてケトラの子孫はアラビアの南部と西部を、ハガルの子イスマエルの子孫は北部を占めている。ケトラの六人（ギリシャ語訳では七人）のむすこのうちミドヤンはよく知られている。この名は後のヨゼフの伝記（37 28 36）にも、またモイゼの義父の国の名としてもでてくる（出2 15以下）。36 35、士6-8章も参照。

(2) 本句は23章のサラの死を前提としたもののようであるが、6節の「そばめ」という語（歴上1 32ではっきりケトラをさす）はサラの存命を暗示している。

(3) デダンの三組の子孫は歴上1 32-33では省かれている。ギリシャ語訳では五組。アッシュル人はおそらくエジプトの近くに住むアラビア人の一種族であろう。

7 アブラハムの生涯は百七十五年であった。8アブラハムは老いて
アブラハムの死(4) 天寿を全うし、高齢になって息絶え、死んでかれの身内のなき数に
9 入れられた。(5)その子イサクとイスマエルとは、かれをヘト人ゾハ
ルの子エフロンの畑地にあるマクペラのほら穴に葬った。ここはマムレに面した所で、
10 さきにアブラハムがヘト人から手に入れた畑地である。そこにアブラハムと妻サラは葬
11 られた。神は、アブラハムの死後、その子イサクを祝福された。イサクはベエル・ラ
ハイ・ロイの近くに住んだ。

12 サラのはしためであったエジプト人ハガルが、アブラハムに産ん
13 **イスマエルの子孫** だ子イスマエルの系図は、次のとおりである。14イスマエルの子の名
は生れた順にしたがえば、ネバヨト(6)、すなわちイスマエルの長子、
次はケダル、アドベエル、ミベサム、15ミシュマー、ドマ、マッサ、
ハダド、テマ、エトル、ナフィシュ、ケドマである。16これはイスマエルの子で、村と
宿営地にしたがって分けられた名であり、種族にしたがって分けられた十二の族長(7)であ
る。

17 イスマエルの生涯は百三十七年であった。かれは息絶えて死に、かれの身内のなき数
18 に入れられた。イスマエルの子孫は、ハビラから、エジプトの東にあってアッシュル(8)へ

の道にあるシュルにかけて、住んだ。イスマエルはすべての兄弟と仲たがいして住ん
だ。(9)

---

(4) 7—10節は23章20でとだえた司祭伝承の続きであろう。アブラハムの死と前章の出来事との関係については24章注1後半、16、17後半、18参照。司祭伝承ではイスマエルはアブラハムの死の時、家にいたことになる（9節）。これは21章9—20および本章6節と少し矛盾しているように見える。

(5) 本来は家族の墓に埋葬されることをさすが、よみのくにいる先祖の所に行くことを意味するようになった。15章15節35章29節47章30節参照。

(6) 「ネバヨト」は28章9節36章3、イザヤ60章7にもでる。後のネバテア人はおそらく彼の子孫であろう。ネバテア人の首都は南トランス・ヨルダンのペトラ。その王アレタ四世はヘロデ・アンチパスの義父にあたり、聖パウロがダマスコから逃げた当時、そこを支配していた（コリント後11章32—33）。これより以前のアラビア王アレタのことは、マカバイ下5章8にしるされている。

(7) 17章20の予言の成就。

(8) 2注9後部参照。3節のアッシュル人の国と解する者もある。注3参照。シュルについては16注6参照。

(9) 直訳では「落ちた」。士7章12に「いなごの大群が降りてきたように」という意味の表現がある。ここではその意味に用いられている。16章12の予言の成就。アブラハム物語はイスマエルの系図で終る。次に神の選民イスラエル人の歴史がヤコブの誕生で始まる。

第三部　太祖イサクとヤコブ(10)

アブラハムの子イサクの系図は次のとおりである。アブラハムは
19 イサクを生んだ。
20 **エサウとヤコブの誕生**　イサクは、パッダン・アラム(11)のアラム人ベトエルの娘で、アラム人ラバンの妹レベッカをめとった時、四十歳であった。
21 イサクは妻がうまずめなので、妻のためにヤーウェに祈願
22 した。ヤーウェはその祈願を聞かれ、妻レベッカはみごもった。(12)その子らが胎内で押し合ったので、彼女は、「こんなことでは、わたしはどうなるでしょうか」と言って、ヤー
23 ウェに伺いを立てに行った。(13)ヤーウェは彼女に言われた、

「二つの民族がおまえの胎内にある。
二つの民はおまえの腹から分れて出る。
一つの民は他の民よりも強く、(14)
兄は弟に仕えるであろう」。

24 月満ちて子を産む時になって見ると、胎内の子はふたごであった。
25 はじめに出てきたのは、赤くて全身毛衣のようであったので、その名はエサウとつけられた。(15)
26 弟がエサウのかかとを手でつかんだまま出てきたので、その名はヤコブとつけられた。(16)

---

(10) 19―26b節は司祭伝承によるが、その他は大体において本章の終りまでヤーウェ伝承による。イサクの系図は、十に分けられた創世記の第八の部分であって（解説参照）、ここから35[29]にわたっている。しかし歴史の内容は、ちょうどテラー家の歴史（11[27]―25[11]）がアブラハムのことばかり物語っているのと同じように、ほとんどイサクの子ヤコブに関するものである。

(11) 24[10]のアラム・ナハライムのこと。24注[4]参照。レベッカの直系尊族に関する異なった言伝えについては24注[1]参照。

(12) レベッカは先代のサラやむすこのよめラケル（29[31]）と同様、最初はうまずめであった。このような試みのあとで生れる子は神の申し子とみなされる。サムソン、サムエル、洗者ヨハネの母たちの場合も参照（士13[2]、サムエル上1[2]、ルカ1[7]）。

(13) レベッカのことばはヘブライ文では全く不明。古代語訳本ではそれぞれわずかに異なった意味に訳されている。レベッカが胎内の騒ぎに不安を感じてヤーウェに伺いを立てたことははっきりしている。おそらく彼女はベエル・ラハイ・ロイの井戸（ここでヤーウェの使いがハガルに現われ、胎内のイスマエルのことについて予言した。16[7]―14）、あるいはベエル・シェバ（21[33]、26[23]―25参照）のような聖所に出かけたのであろう。

(14) 胎内のヤコブとエサウの争いは、後のイスラエル人とエドム人の争いの前兆。出産の時ヤコブがエサウのかかとをつかんでいたことは、彼がエサウをおしのけようという野心を持っていることをあらわし、このことにちなんで彼は名づけられる。[26]節および注[16]参照。ヤコブはエサウから長子の権利を買い取り（29―34節）、父の祝福を受けて（27章）この野心を果す。エドム人はダビド時代からヨラム時代までの長期間、イスラエル人に服従し、この二つの民族に関する予言は成就する（サムエル下8[13]―14、列下8[20]―22）。27[29][40]も参照。

(15) ここではおそらく「毛深い」という意味に用いられているようである。エサウの別名「エドム」（「赤い」の義）に関するしゃれのほうがわかりやすい（エサウがエドムと呼ばれる理由は別の物語ではっきり説明されている、30節。36[1]―参照）。「毛衣」の原語とエドムの住んだ山地「セイル」（36[8]―9参照）とは発音が似ている。

(16) 「ヤコブ」にも二重の説明がある。ここでは「かかと（をつかむ）」という意味の原語にちなんだもの。27

レベッカがふたりを産んだ時、イサクは六十歳であった。
27 少年たちは大きくなり、エサウは巧みなかりうど、野の人となったが、ヤコブは穏やかな人となって天幕に住んでいた。
28 イサクは猟の獲物を好んだので、エサウを愛した(17)が、レベッカはヤコブを愛した(17)。
29
ある日ヤコブが煮ものをつくっていた時、エサウが野から飢え疲れて帰ってきた。
30 **エサウ長子の権利を売る**(18)
エサウはヤコブに、「お願いだ。赤いものを、その赤いのを食わしてくれ。わたしは飢え疲れている」と言った。それゆえエサウはエドム(19)と名づけられた。
31
ヤコブは、「まず、わたしにあなたの長子の権利を売ってください」と答えた。
32
エサウは、「わたしは死にそうだ。長子の権利がわたしになんの役に立とうか」と言った。
33
ヤコブが、「まず、わたしに誓ってください」と言ったので、エサウは誓い、長子の権利をヤコブに売った。
34
そこでヤコブはエサウにパンとあじ豆の煮ものを与えた。エサウは飲み食いして、立ち去った。このようにエサウは長子の権利を無視したのである。

26

1
イサクのゲラル滞在(1)
さてアブラハムの時にあったききんとは別に、ききんがまたその地におこったので、イサクはゲラルにおもむき、ペレシェト人の王アビメレクの所に行った。
2
ヤーウェはイサクに現われて言われた、

3 「エジプトに下ってはならない。わたしがおまえに示す地に住め。(2)
わたしはこれらの地をことごとく、おまえとおまえの子孫とに与えるから、おまえはこの地にとどまれ。わ

36では「押しのける者」の義。多分「ヤコブ」は「神がまもる」または「神がまもりますように」という意味の「ヤコブ・エル」がなまったものである。「ヤコブ」という名は古代文献にはこの形であらわれている。

(17) 27:28節は27章の準備。また27節は29節以下の序文の働きもしている。

(18) イスラエルの敵エドム人は無作法、肉的、愚劣、衝動的であり、一時の物質的利益のために最も大事な権利を売る者であるということが、彼らの先祖エサウという一人物の中に皮肉に描かれている。またエサウは刀で世を渡り(27:40)、兇悪で執念深く(27:41-42)、カナアン人の女を妻にめとった(36:2)としるされている。ヤコブはこれと正反対。したがって彼が長子の権利をせしめたことは、もっともだとされる点もある。この権利を持っていれば、財産相続の場合、他の者の二倍を受け(申21:17)、またその他の特権も受ける。この権利がもっと資格のある別のむすこに移されるという他の例もある(歴上5:1-2参照)。聖パウロはロマ9:10-13でヤコブとエサウの関係および21-23節について説明している。エサウはヘブライ12:15-17で不敬な者だといわれている。

(19) 「赤い」の義。注15参照。

【注】 (1) 創世記の中で太祖イサクのことを独占的に物語るのは本章だけである。しかしイサクが農業をしたこと(12-14節)を除けば、本章の内容はすでにアブラハムの時の出来事とほとんど同じ(注4参照)。アブラハムについて物語られた出来事とほとんど同じ(注4参照)。アブラハムの時の出来事と筋がよく合っている箇所(例、1節の一部、2節の一部、15-18節)は、著者が編集するにあたって伝承につけ加えたものであろう、と一般にみなされている。ヤーウェ伝承(おそらく組み合わされたもの、解説25-26ページ参照)が本章の基本となっているようである。このうち少くとも7-11節(レベッカは美しく子がいないことになっている)は、論理上25:21に先立つ。最後の34-35節にエサウがカナアンの女をめとったことがしるされているが、これは司祭伝承による。もちろん後の出来事。

(2) 本節後半は次節のはじめの部分にも6節にもよく適合しない。おそらく著者が12:10のことを考えて伝承につけ加えたものであろう。

たしはおまえとともにいて、おまえを祝福し、おまえの父アブラハムにした誓いを果そ
4 う。 ―わたしはおまえの子孫を空の星のように多くし、これらの地をことごとくおまえ
の子孫に与えよう。地のすべての民は、おまえの子孫によってかれら自身を祝福するで
5 あろう。 ―アブラハムがわたしのことばに従い、わたしのさとし、命令、おきて、律法
を守ったからである」。
6 それでイサクはゲラルに住んだ。 7その所の人々がかれの妻のことを尋ねた時、かれ
は、「わたしの妻」と言うことを恐れて、「これはわたしの妹です」と答えた。そう言わ
なければ、レベッカは美しいので、この所の人々がレベッカのゆえにわたしを殺すだろ
う、と思ったからである。
8 イサクがそこに長い間とまどってからのことである。ペレシェト人の王アビメレクが
9 窓から外を見おろすと、イサクがその妻レベッカを愛撫(3)しているのが見えた。―アビメレ
クはイサクを呼びよせて言つた、「彼女はたしかに、あなたの妻です。どうしてあなたは
『これはわたしの妹です』と言ったのですか」。イサクは答えた、「わたしはあの女ゆえに
10 殺されるだろうと思ったからです」。―アビメレクは言った、「あなたはわれわれになんと
いうことをしたのですか。もうすこしで、民のひとりがあなたの妻といっしょに寝て、
11 あなたがわれわれにとがを負わせるところでした」。―そこでアビメレクはすべての人に

命じて、「この人とその妻に触れる者は死刑にする」と言った。(4)
12 さてイサクはその地に種をまき、その年に百倍の実を刈り入れた。(5)
13 **イサクの種ま** ヤーウェはかれを祝福された。―その人は豊かになり、ますます富み
14 **き、井戸騒動** 栄えた。―イサクは羊の群れと牛の群れ、また多くの召使を持ってい
15 たので、ペレシェト人はかれをねたんだ。―かれらは、かつてイサクの

(3) この語と「イサク」は語根が同じ。またしゃれを含めたもの。21注6 17注8 18注7参照。
(4) 12 10-20と20章と本章6-11節とを比べると、一つの物語の本質的部分がそれぞれ形を変えて三回に描かれたように見える。同じ出来事が時を異にして三回おこるということはありえないことではない。しかし太祖に関する伝承が語り伝えられて最後に創世記著者によってまとめられたことを考えると、三回も同じことがおこったということは信じがたいことである。三記事が同一の歴史的事実に基づいたものとして、このうちで実際の出来事に一番近いと思われるのは、本章のイサクに関するものであろう。本記事中には「イサク」に関するしゃれも含まれている(前注参照)。また話の切り出し、筋の運び、計略の察知され方、結びから見ても、三つのうちで一番自然的である。アブラハムに関する記事は二つとも本章より劇的に描かれ、話の切り出しにはアブラハムとサラが前もって打ち合わせしたことになっており、また神の特別の干渉によって事実が察知され、その結果がアブラハムにとって非常に大きな利益となっていて、不自然である。創世記著者は聖霊の神感によって三つの言伝えを全部しるしたほうがよいと思ったのであろう。というのは、それぞれの言伝えの中に、太祖の像がよく描き出されているばかりでなく、神はご自分の選んだ者を保護し、その約束に誠実であるということ、および婚姻の神聖なことが含まれているからである。
(5) 直訳では「見つけた」。創世記中で太祖が農業をしたという記事はわずかしかない。本節はその最初のもの(30 14 37 5-7参照)。次節が示すようにイサクは遊牧をやめたわけではない。初回からしかもききん(1節)にもかかわらず、百倍の収穫があったことは、神の特別の祝福を意味する。

16 父アブラハムの時に父のしもべたちが掘ったすべての井戸をふさぎ、土で埋めた。(6) 「ア
ビメレクはイサクに、「あなたはわれわれよりはるかに強いから、われわれの所から去っ
17 てください」と言った。「イサクはそこを去り、ゲラルの谷あいで天幕を張り、そこに
18 住んだ。「かつて父アブラハムのしもべたちが掘った井戸を、ペレシェト人がアブラハ
ムの死後ふさいだが、イサクはこれをまた掘り、父がつけた名と同じ名をこれらにつけ
19 た。「イサクのしもべたちはその谷あいに水のわき出る井戸を掘りあてた。20 するとゲラル
の牧者たちは、「この水はわれわれのものだ」と言って、イサクの牧者たちと争ったので、
21 イサクはその井戸をエセク(7)と名づけた。かれらがかれと言い争ったからである。「しも
べたちはまたもう一つの井戸を掘ったが、それについてもかれらは争った。そこでイサ
22 クはその井戸をシトナ(8)と名づけた。「かれはそこを移って、さらにもう一つの井戸を掘
ったが、それについてはかれらは争わなかった。イサクはその井戸をレホボト(9)と名づけ
て言った、「なぜなら、ヤーウェが今われわれのために広々とした所をつくってくださっ
たからである。われわれはこの地にふえるであろう」。

23 **ベエル・シェバにおける出現**

イサクはそこからベエル・シェバに上(のぼ)った。24 その夜ヤーウェが
かれに現われて言われた、
「わたしはおまえの父アブラハムの神である。

恐れることはない。わたしはおまえとともにいるから。
おまえを祝福し、おまえの子孫をふやそう。
わたしのしもべアブラハムのゆえに」。
25 イサクはそこに祭壇を築き、ヤーウェのみ名を呼び、そこに天幕を張った。イサクのし
もべたちは井戸を掘った。

26 アビメレクがその友アフッザトと軍隊の長フィコルとともに、ゲ
27 **イサクとアビメレクの契約**

ラルからイサクの所に来たので、「イサクはかれらに言った、「あな
たたちはわたしを憎んで、あなたたちの所からわたしを追い出した
28 のに、どうしてわたしの所に来たのですか」。「かれらは答えた、「ヤー
ウェがあなたとともにおられることが、われわれにははっきりわかりました。それでお

(6) 15節と18節はおそらく著者が編集にあたって、井戸問題についての二つの異なる言伝え(一つはアブラハム、他はイサクに関するもの)を適合させるために書き入れたものであろう(特に21 25-33と本章25-33を比べよ。注1も参照)。
(7) 「言争い」の義。
(8) 「言いがかり」または「敵対」の義。この語と「サタン」(悪魔)は語根が同じ(ヨブ1 6以下参照)。
(9) 「広々とした所」の義。同語は10 11ではメソポタミアの地名(10注5 6参照)。ベエル・シェバの南西三十キロの所にある地のアラビア名「エル・ルヘイベ」にこの名のおもかげが残っているが、ここが昔のレホボトであるとは断言できない。巻末第五図参照。

願いします。われわれの間に、すなわちわれわれもあなたとともに誓いを立てましょう。
29 あなたとともに契約を結びましょう。
いことだけをして、あなたを安らかに立ち去らせたように、あなたもわれわれに害を加
30 えてはいけない。ほんとうにあなたはヤーウェに祝福されています」。
31 のためにごちそうをつくり、かれらは飲み食いした。
いをし、イサクはかれらを去らせたので、かれらは安らかにイサクの所から去って行っ
32 た。
33 たしたちは水を見つけました」とイサクに告げた。
た。それでその町の名は、今日にいたるまでベエル・シェバといわれている。

34 さてエサウは四十歳の時、ヘト人ベエリの娘ユディトおよびヘト
35 **エサウの妻ら** 人エロンの娘バセマトを妻にめとった。(11)
カにとって心の痛みであった。

27
1 イサクは年老い、目がかすんで見えなくなった時、上のむすこエ
2 **ヤコブ、祝福を詐取する**(1) サウを呼びよせて、「子よ」と言った。かれは、「はい」と答えた。
イサクは言った、「わたしはこのとおり年老いて、いつ死ぬかわから
3 ない。おまえはおまえの武器、矢筒と弓をとって野に出て行き、

4 わたしのために獲物をとってこい。
持ってきて食べさせよ。わたしが死ぬ

---

(10) 直訳では「七つ」。アブラハムとアビメレクの契約の記事（ここでもアビメレクはフィコルを伴なう）の中に述べられている「七匹の小羊」(21:30)にかかる語が、あやまってここにしるされたのかもしれない。21注11参照。文脈から「七つ」より「誓い」の義のほうが適当と思われる。ギリシャ語訳ではこの義をとり、21:31の場合と同様ここでも「ベエル・シェバ」を「誓いの井戸」と訳している。ラテン語訳とシリア語訳では「七つ」のかわりに「あふれ」と訳している。

(11) 28:6-9ではエサウの妻たち、特にその父たちの名はここと多少異なる。36注3参照。

【注】(1) 本章は最後の節を除けばヤーウェ伝承だけだという説もある。本来の伝承中では、ヤコブのとった手段は道徳上悪いということはあまり問題とされず、単に彼のかしこさ(25:29-34では長子の権利をエサウから巧みに買い取り、30:25-43ではラバンに対してじょうずにかけひきする)がその主題となっていたのかもしれない。しかし創世記にしるされているように、レベッカとヤコブが「神の摂理を実現させるために」とった手段は是認されるべきものではない。ふたりとも策略が見破られた場合、祝福ではなくのろいを招くであろうことを認めている(12:12-13節)。またイサクもヤコブのしたことを欺瞞行為とみなしている(35節)。エサウがヤコブを悪く思っているということはいうまでもない(36:41-42節)。それにもかかわらず、彼らはみな、特にイサクはその結果が神のみ旨に一致していることを認めている。神はエサウよりもヤコブをその出生前に選ばれている(25:23、マラキ1:2-3、ロマ9:11-13)。神は絶対者であるから、もしこの事がおこらなかったとしても、他の事によって摂理が実現されたことであろう。この意味において物語全体は聖アウグスチヌスが言うように「神秘」である。これはダビド時代イスラエル人がエドムを支配したこと、およびキリスト教会において異邦人がユダヤ人に取って代ったことの前表。

(2) 死が迫って肉体を離れんとする父の魂による祝福(19:25節も同じ)は、特に有効で取消不能とされていた(48

5 レベッカは、イサクがその子エサウに話しているのを聞いていた。 エサウが獲物を
狩りに出かけた時、レベッカはその子ヤコブに言った、「わたしはおまえの父が兄エサウ
7 にこう言っているのを聞きました、『獲物をとってきなさい。 そしてわたしのために味
のよい料理をつくって、わたしに食べさせなさい。わたしは死ぬ前にヤーウェのみまえで
8 おまえを祝福しよう』。 さあ、わが子よ、おまえは言うことを聞いて、わたしの命じる
9 とおりしなさい。 群れの所へ行って、その中から二匹のよい子やぎをわたしの所に持
10 ってきなさい。わたしはそれでおまえの父の好む味のよい料理をつくりましょう。 そ
れを父の所に持って行って食べさせなさい。そうすれば父は死ぬ前におまえを祝福する
11 でしょう」。 ヤコブは母レベッカに言った、「しかし兄エサウは毛深い(3)人なのに、わたし
12 はなめらかです。 おそらく父はわたしにさわってみるでしょう。そうすればわたしは
13 父をばかにしていると思われて、祝福のかわりにのろいをまねくでしょう」。 母はかれ
に答えた、「子よ、そののろいはわたしが受けよう。ただ、わたしの言うことを聞き、行
14 ってわたしの所に持ってきなさい」。
かれは取りに行ってそれを母の所に持ってきた。母は父の好む味のよい料理をつくっ
15 た。 レベッカは家の中で手もとにあった上のむすこエサウの晴れ着を取って、これを
16 下のむすこヤコブに着せ、また子やぎの毛皮をその手と首のなめらかなところにかぶせ

17 た。 彼女は自分がつくった味のよい料理とパンをむすこヤコブの手に渡した。
18 かれは父のもとに行き、「父よ」と言った。イサクは、「おお、子よ、おまえはだれか」
19 と答えた。 ヤコブは父に言った、「わたしは長子エサウです。あなたが命じたとおりい
たしました。どうぞ起きてすわり、わたしの獲物を食べてください。そうすればあなた
20 の魂はわたしを祝福するでしょう」。 イサクはヤコブに言った、「子よ、そんなに早く見
つけるとはどうしたことか」。 ヤコブは答えた、「あなたの神ヤーウェがわたしのために
21 計らってくださったからです」。 イサクはヤコブに言った、「子よ、近く寄れ。おまえが
22 ほんとうにわが子エサウかどうかをさわってみよう」。 ヤコブは父イサクに近寄り、父は
23 かれにさわって言った、「声はヤコブの声だが、手はエサウの手だ」。 ヤコブの手は兄エ
サウの手のように毛深かったので、イサクはヤコブを見わけられず、かれを祝福しようと
24 した。(4) 「そしてイサクが、「おまえはほんとうにわが子エサウなのか」とただすと、ヤコブ

8–22、申33 1参照)。獲物の肉はイサクの好物で、そのために彼はエサウを愛した(25 28)。この料理はイサクのエサウへの愛情を高め、最も重要な最後の祝福にあたっては、なおさら父イサクの魂を強めるものである。イサクの死が近づいたころでも、エサウが未婚である(15節では、エサウの妻ではなく母が彼の着物をあずかっている)というこの記事は、司祭伝承による25 26 26 34 35 28–29と年代的には一致しない。

(3) 25 25および注15参照。

(4) この動詞は27節の「祝福した」と同形。この二重記載の理由で、一方本章が合併伝承によるものだという説があり(注1前部参照)、他方23節は後の書入れとみなされている。しかし現存原文の文脈から、著者が本訳のよ

25 は「そうです」と答えた。―イサクは言った、「では差し出せ。わたしは、わが子の獲物を食
べよう。わたしの魂はおまえを祝福するであろう」。ヤコブがかれの前に差し出すと、か
26 れはそれを食べた。またヤコブがぶどう酒を持ってきたので、かれはそれを飲んだ。―父イ
サクはヤコブに、「わが子よ、わたしに近寄って接ぷんしなさい」と言った。かれは近寄っ
27 て父に接ぷんした。―その時イサクはかれの衣のかおりをかぎ、かれを祝福して言った、

「ああ、わが子のかおりは、
　ヤーウェが祝福された野のかおりのようだ。
28 神がおまえに天の露、
　地の肥えた所、
　豊かな小麦とぶどう酒を与えるように。
29 もろもろの民はおまえに仕え、
　もろもろの国はおまえに身をかがめる。
　おまえは兄弟のあるじとなり、
　おまえの母の子らはおまえに身をかがめる。
　おまえをのろう者はのろわれ、
　おまえを祝福する者は祝福されよ」。(5)

30 イサクがヤコブを祝福し終り、ヤコブが父イサクの前から出て行くとすぐに、兄エサ
31 ウが猟から帰ってきた。―かれも味のよい料理をつくって父の所に持ってきて、父に言
った、「父よ、起きてあなたの子の獲物を食べてください。そうすればあなたの魂はわた
32 しを祝福するでしょう」。―父イサクはかれに、「おまえはだれか」とたずねた。かれは、
33 「わたしはあなたの子、長子エサウです」と答えた。―イサクはひどく身をふるわせて
言った、「それではいったいだれなのか。さきに獲物をとってわたしの所に持ってきたの
は。おまえが来る前に、わたしはじゅうぶんに食べてその者を祝福してしまった。その者
34 こそ祝福されるであろう」。―エサウは父のことばを聞くや、大声をあげてはげしく嘆き、
35 「父よ、わたしも、わたしも祝福してください」と父に言った。―かれは、「おまえの弟が偽
36 ってやってきて、おまえの祝福を奪ってしまったのだ」と答えた。―エサウは言った、
「かれがヤコブと名づけられたからであろうか、二度もわたしを押しのけるとは。(6) さき

うな意味としてこの動詞を使ったのだろうと考えられないことはない。

(5) イサクの与えた祝福は農業上の祝福（27―28節）と政治上の祝福（29節）から成る。したがってヤコブ個人の生涯よりも、むしろその子孫イスラエル人の将来の繁栄を意味する。「天の露」(28節)は雨のないパレスチナの夏の間、作物、特にぶどうにとっては絶対必要なもの（ダビドのギルボアの山に対するのろい、サムエル下1 21参照）。ヤコブの支配下に置かれる「兄弟」は広い意味ではエドム人だけでなく、イスマエル人、モアブ人、アンモン人を含んだものと解される。

(6) 25 26および注16参照。この動詞の形は「ヤーコブ」で、ヘブライ文では「ヤコブ」という名詞のすぐあと

には長子の権利を奪い、今またわたし
37 たしのための祝福を残して置かなかったのですか」と言った。「イサクはこたえてエサ
ウに言った、「わたしはかれをおまえのあるじとし、かれの兄弟をことごとくしもべとし
てかれに与えた。また小麦とぶどう酒をかれのために用意した。わが子よ、今となって
38 は、わたしはおまえに何ができようか」。エサウは父に、「父よ、祝福は一つしかないの
ですか。父よわたしも、わたしも祝福してください」(7)と言って、声をあげて泣いた。
39 父イサクはかれにこたえて言った、

「おまえは地の肥えた所を離れ、
天からおりる露を離れて住む。
40 おまえは刀で世を渡り、
おまえの弟に仕える。
しかしおまえがのがれる時には、
おまえは首からそのくびきを振りはなすであろう(8)」。

41 **エサウ、ヤコブを殺そうと企てる**

エサウは父がヤコブに与えた祝福のゆえに、ヤコブをうらんだ。
エサウは心の中で言った、「父の喪の日も近づいてくる。その時には
42 弟ヤコブを殺そう」。レベッカは上のむすこエサウのことばを

告げ知らされたので、人をやり、下のむすこヤコブを呼んで言った、「兄エサウは復しゅう
43 としておまえを殺そうとたくらんでいます。さあ、わが子よ、わたしの言うことを聞いて(9)
44 ハランに行き、わたしの兄ラバンのもとにのがれなさい。「兄の憤りが解けて、おまえの兄の怒りが解けるま
45 で、かれのもとにしばらくとどまりなさい。「おまえのしたことをかれが忘れるようになった時、わたしは人をやっておまえを呼びもどしましょう。どうしておまえたちふたりを同じ日に失ってよいでしょうか(10)」。

にきている。本節の「長子の権利」(ベコラ)と「祝福」(ベラカ)の間にも、しゃれが含まれている。

(7) ギリシャ語訳ではこのあとに「しかしイサクは黙ったままでいた」と書き入れ、場面をよりいっそう劇的にしている。本節の「(声を)あげた」(イッサー)と、ヘブライ文ではすぐそのあとにきている「エサウ」という名詞との間にもしゃれが含まれている。

(8) 二つの同じ表現が39節と28節に用いられているが、意味は正反対(ラテン語訳ではまちがって両節とも同じように解している)。40節の「刀で世を渡る」という表現は、エサウの子孫の盗賊生活をあらわしている。最後の二行は前の数行の詩形とは合わないので、ヨラム時代にエドム人がそむいたこと(列下8$^{20-22}$)を考慮して、あとで書き入れたものだろうと一般にみなされている。25注14後部参照。

(9) 本句はレベッカが祝福を詐取する計画を言い出す時に用いた句(8節)とまったく同じ。今度はその恐ろしい結果を避けるために用いている。ヤコブと彼女の悲運はこの時から始まる。しばしの別れと考えてレベッカは別離を軽く見ているが、ふたりは生き別れとなる。

(10) もしエサウがヤコブを殺せば、その次にエサウの血が流されることになる(96)。サムエル下14$^{6-7}$も参照。

レベッカはイサクに言った、「わたしはヘト人の娘たちのことで生きているのがいやになりました。もしヤコブが、この地の娘の中から、この女どものようなヘト人の娘を妻にめとるならば、わたしは生きていて何になりましょうか」。

ヤコブ、パッダン・アラムへ(1)

28

1 イサクはヤコブを呼びよせて祝福し、命じて言った、「おまえはカナアンの娘の中から妻をめとってはならない。2 パッダン・アラムにおもむき、おまえの母の父ベトエルの家に行き、そこでおまえの母の兄ラバンの娘の中から妻をめとりなさい。(2) 3 エル・シャッダイ(3)がおまえを祝福し、おまえに子を生ませ、おまえをふえさせて、多くの民とし、4 またアブラハムの祝福をおまえとおまえの子孫とに与えて、アブラハムに与えられたおまえたちの今とどまっているこの地を、おまえたちに継がせてくださるように」。5 イサクはヤコブを送り出した。かれはパッダン・アラムにおもむき、アラム人ベトエルの子ラバン、すなわちヤコブとエサウの母レベッカの兄のもとに行った。

エサウ、イスマエルの娘をめとる

6 さてエサウは、イサクがヤコブを祝福し、パッダン・アラムからその妻をめとるために、かれをそこにつかわし、その祝福の時に、「カナアンの娘の中から妻をめとってはならない」と命じているところと、7 またヤコブが父母のことばに従ってパッダン・アラムにおもむくところを見た。8 エサウはカナアンの女が父イサクの心にかなわないことを悟り、9 イスマエルの所に行き、すでにめとった妻のほかに、アブラハムの子イスマエルの娘でネバヨトの妹マハラトを妻にめとった。(4)

ベテルにおけるヤコブの夢(5)

10 さてヤコブはベエル・シェバを立ち、ハランに向かった。11 ある所に来た時、ちょうど日が沈んだのでそこで一夜を過ごした。かれはその場所の石を取ってまくらとし、そこに寝た。12 かれは夢を見た。

もむくところを見た。「エサウはカナアンの女が父イサクの心にかなわないことを悟り、イスマエルの所に行き、「すでにめとった妻のほかに、アブラハムの子イスマエルの娘でネバヨトの妹マハラトを妻にめとった。(4)

さてヤコブはベエル・シェバを立ち、ハランに向かった。11 ある所に来た時、ちょうど日が沈んだのでそこで一夜を過ごした。かれはその場所の石を取ってまくらとし、そこに寝た。12 かれは夢を見た。

【注】(1) 創世記中イサクに関する記事のうちで、司祭伝承によるものは27[46]—28[5]だけである。この伝承とこれに続く6—9節は、ヤコブがハランにおもむく別の理由、すなわち——アブラハムのしもべがイサクの嫁さがしにつかわされたように（24章）——ヤコブの嫁さがしを物語っている。この記事は筋としては26[35]に続く。その中間にある27[1—45]で述べられている祝福とヤコブがハランに逃げる理由については全然触れていない。本記事中の祝福（28[3—4]）はアブラハムに授けられた祝福（17[1—8]）を単に伝達更新したもので、将来のエサウとヤコブとの関係を予言する27[27—29]のような新たに霊感を受けた祝福ではない。

(2) レベッカの家族に関する言伝え、およびパッダン・アラムについては24注14参照。

(3) 17[1]および注2参照。

(4) 26[34]および注11 36[2—3]および注3参照。ネバヨトについては25[13]および注6参照。

(5) この記事の大部分はエロヒム伝承で、ヤーウェ伝承（13—16[19a]節）と若干のつけ加え（19b 21b節）とが織り込まれている。アブラハムがここに来て近くに祭壇を築いたという二重記事（12[8] 13[3—4]）には触れず、聖所の創立者はヤコブであるとしている。ベテルが後のイスラエル史で有名なのはこの聖所ゆえである（ベテルはエルサレムに次いで聖書にしばしば出てくる町の名）。「ベテル」は「神の家」の義。この義ゆえにまた特に17節の文句が適切なの

階段(6)が地に立てられていて、その頂は天にとどいていた。そして神の使いたちがこれを上
13 り下りしていた。「するとヤーウェがかれのそばに立って言われた、「わたしはおまえの
父アブラハムの神、イサクの神、ヤーウェである。わたしはおまえが横たわっているこ
14 の地をおまえとおまえの子孫とに与える。おまえの子孫は地のちりのように多くなり、
おまえは東西南北に広がり、おまえとおまえの子孫によって地のすべての民はかれら自
15 身を祝福するであろう。「わたしはおまえとともにいて、おまえがどこへ行ってもおまえ
を守り、この地におまえを連れもどす。わたしはおまえに言ったことを果すまでは、お
16 まえを見捨てるようなことはしない」。
ヤコブは眠りからさめて言った、「まことにヤーウェがこの所におられるのに、わたし
17 はそれを知らなかった」。「かれは恐れてまた言った、「ここはなんとおそるべき所だろ
18 う。ここはまさしく神の家である。ここは天の門だ」。「ヤコブはあくる朝早く、まくら
とした石をとり、これを立てて柱(7)とし、その頂に油をそそぎ、「その所をベテルと名づ
19 けた。しかしその町の名は最初はルズ(8)であった。
20 ヤコブは誓いを立てて言った、「神がもしわたしとともにおられ、旅の間わたしを守
21 り、食べるパンと身にまとう衣を与えて、「わたしが無事に父の家に帰ることができれ
22 ば、ヤーウェをわたしの神とし、「わたしが柱に立てたこの石を神の家としよう。わたし

は、あなたがわたしにくださったものはなんでも、必ずその十分の一をあなたにささげ
ます(9)」。

で、本記事の大部分は献堂式の典礼に用いられている（今日の聖堂はまさしく「神の家」である）。地の人は天使の奉仕を通じて天の神と交わることができるという真理、および神の直接の配慮（15節参照）のことが、本記事に述べられている。キリストは12節をご自身にあてはめている。すなわち「天は開かれ、神の使いが人の子の上に上り下りする……」（ヨハネ1 51）。これはことばでは表わせないほどの神聖な「天」と「人の子」との直接の交わりを意味する。またキリストはご自身を「門」（ヨハネ10 9）と言われているが、これに相当するのは17節の「天の門」。

（6）このヘブライ語はここだけに出る。普通「はしご」と訳されているが、むしろ「石の階段」の義であろう。メソポタミアのジグラトに結びつける聖書学者もある（ジグラトは聖所のことで塔のように高くその頂まで階段がついている。11注1中央部参照）。ベテルの真南の丘の斜面には階段状の石のうねがあって、これを下から見上げると斜面がふくらんでいるため頂が見えず、あたかも天に達しているように見える。これがヤコブの夢の材料もしくは心理的誘因になったのではないかとも考えられる。

（7）この原語「マッセバ」は「立てる」という動詞に由来する。この動詞は12節では「階段」の状態を描くときに用いられている。このような柱はいろいろな目的を持っていた。ヤーウェをまつるためのもの（本節、35 14、イザヤ19 19）、あるいは境界標、記念碑（31 45-51、35 20、出24 4、ヨシュア4 19-24、サムエル下18 18参照）などのように、よい目的あるいはよくも悪くもない目的もあれば、偶像崇拝の対象とされた柱の場合のように、悪い目的もあった。このようなものは禁じられ砕かれる（出34 13、申16 22、レビ26 1、列下3 2 10 27参照）。ヤコブが石に油をそそいだことになって、今日では祭壇を聖別するにあたりその上に油をそそぐ。

（8）ルズは実際にはベテルと区別されていたように思われる（ヨシュア16 2参照）。そして後にベテルの名声に押されて全く忘れ去られたようである。35 6 48 3、ヨシュア18 13、士1 23にもこの名は出る。

（9）14 20のアブラハムの十分の一献納参照。アモス4 4も参照。ヤコブは誓いを35 1-15で果す。特に35注9後半参照。

29

ヤコブは旅を続けて(2)東国の人々の地に行った。2見ると、野原に
ヤコブ、ラケルに会う(1)　一つの井戸があり、そのかたわらに、羊の三つの群れが伏していた。
人々はその井戸から群れに水を飲ませるのである。一しかし井戸の
口をふさいでいた石は大きかった。そこに群れがみな集まると、井
戸の口からこの石をころがして羊に水を飲ませ、またもとのとおりその石を井戸の口に
置くのである。(3)

ヤコブがかれらに、「兄弟たちよ、あなたたちはどこのかたですか」と言うと、かれら
は、「わたしたちはハランの者です」と答えた。一ヤコブが、「あなたたちはナホルの子
ラバンを知っていますか」とたずねると、かれらは、「知っています」と答えた。一ヤコ
ブがさらに、「かれは元気ですか」とたずねると、かれらは、「元気です。ごらんなさい。
かれの娘ラケルが羊といっしょにやってきます」と答えた。一ヤコブが、「日はまだ高い
し、家畜を集める時ではありません。羊に水を飲ませて、また行って飼いなさい(4)」と言
うと、一かれらは、「群れがみな集まるまでは、それはできません。集まると、井戸の口
の石をころがして羊に水を飲ませるのです」と答えた。

ヤコブがなおかれらと話しあっていると、ラケルは父の羊とともにやってきた。彼女
は羊飼いだったからである。一ヤコブは母の兄ラバンの娘ラケルと、母の兄ラバンの羊と

を見ると、進みよって井戸の口から石をころがし、母の兄ラバンの羊に水を飲ませた。(5)
そしてヤコブはラケルに接ぷんし、声をあげて泣いた。12ヤコブはラケルに自分が彼女の
父の親族で、レベッカの子であることを告げると、ラケルは走って行って父に話した。
ラバンは妹の子ヤコブのことを聞くと、かれを迎えに走って行き、かれを抱いて接ぷんを
浴びせた。そして自分の家にかれを連れて行った。ヤコブは事の次第をすべてラバンに

【注】(1)前章後半の続きである本章から33章までは前章後半同様、ヤーウェ伝承（おそらく29—33章においては組み合わされたもの）とエロヒム伝承から成る。そして若干司祭伝承が織り込まれているようである（24,29節）。本章と次章は、ヤコブとラケルのめぐりあい、ヤコブの二重結婚およびその子ら、最後に彼の富について物語り、どうしてヤコブがラバンのもとに数日（27,44）ではなく、二十年（31,38）も滞在するようになったかを説明している。

(2)直訳では「ヤコブは足を上げて…行った」。この聞きなれない語句はここに出るだけである。2節の「見ると」の前にあったように思われる「目を上げて」（13,10,14 18,2 22,4参照）がまちがって1節のはじめに筆写され、新しい文脈に合うように「足」が「目」に取って代ったのかもしれない。

(3)2節後部と3節は三つの群れが井戸のかたわらで待っている理由を説明したものである。石はかなり大きく、普通の男ひとりで動かせるものではない。特にラケルのような女牧者（9節、出2,16参照）にとっては無理である。この石は砂ぼこりがはいらないように、また家畜が落ちないようにするためのものであろう（ルカ14,5参照）。

(4)ヤコブは彼らの仕事の切り上げ方が早すぎると皮肉っている。そのほんとうの動機は、長い旅路のはてにいとこに会って手放しで喜び泣くところ(11節)を見られないように、彼らを追い払うためであったらしい。

(5)牧者間で不文律のようになっている習慣を無視し、ヤコブは人手を借りずすばらしい力で（32,25—31参照）石をころがしのけた。ラケルは父ラバンにヤコブの力強いことと親族に対する気前のよさを話す。ラバンがヤコブに働いてもらうにあたって丁重に遇したのは、ヤコブの力と大度のゆえであろう。

14 語った。ラバンはかれに、「あなたはほんとうにわたしの骨肉です」と言った。ヤコブ
はラバンの所で一か月を過ごした。
15 時にラバンはヤコブに言った、「あなたがわたしの親類だからといって、あなたはただでわたしに仕えることはない。どんな報酬がほしいかを言いなさい」。
16 **ヤコブ、レアと ラケルをめとる**(6) ラバンにはふたりの娘があり、姉はレア、妹はラケルといった。
17 レアは活気のない目をしていたが、ラケルはみめかたちが整って美しかった。(7)
18 ヤコブはラケルを愛したので、「わたしはあなたの末娘ラケルのために七年あなたに仕えましょう」と言った。
19 ラバンは、「娘を他人に与えるよりは、あなたに与えるほうがよい。ではわたしの所にいなさい」と答えた。(8)
20 そこでヤコブはラケルのために七年仕えたが、彼女を愛していたので、ヤコブにとってただ数日のように思われた。
21 ヤコブはラバンに言った、「時が満ちましたから、わたしに妻をください。彼女の所にはいりたいのです」。
22 ラバンはその所の人々をことごとく集めて祝宴を催した。(9)
23 その夜、娘レアをヤコブのもとに連れて行ったので、ヤコブは彼女の所にはいった。(ラバンは自分のつかえめジルパを娘レアにつかえめとして与えた。)
24 朝になってそれがレアであることがわかり、ヤコブはラバンに言った、「あなたはわたしになんということをしたのですか。わたしはラケルのためにあなたに仕えたのではありませんか。なぜわたしをだましたのですか」。
25 ラバンは答えた、「われわれの所では長女より先に下の娘をとつがせるようなことはしない。この娘のために(10)この週を過ごしなさい。そうすれば、あの

26 のですか。わたしはラケルのためにあなたに仕えたのではありませんか。なぜわたしを
27 だましたのですか」。ラバンは答えた、「われわれの所では長女より先に下の娘をとつがせるようなことはしない。この娘のためにこの週を過ごしなさい。そうすれば、あ

---

(6) ラケルはまた新たに16節で紹介されているように見える。これは本記事（15-30節 ただし24,29節を除く）が、その前後に用いられているヤーウェ伝承とは異なる別の出所（エロヒム伝承）から引かれたものと考えられる理由となっている。

(7) 「ラケル」は「雌の小羊」、「レア」はおそらく「雌のかもしか」の義。レアの目は、かもしかのように優しく寂しさを帯びていたのであろう。これに反して、ラケルはアラビア人が好む光った快活な目をしていたものと思われる。ラケルの容姿を描いているこの語句は、39:6でヨゼフを描くときにも用いられている。最後の語の一つの母音を少し変えて読めば、「顔が美しかった」という意味になる。教父たちはレアをユダヤ人会堂の前表、ラケルを教会の前表と解している。キリストはユダヤ人会堂よりもその後にくる教会を聖なる浄配として愛している。

(8) ヤコブは結納金または贈り物（24:53 34:12参照）に乏しかったので、七年の奉公を申し出る。ラバンはこの契約に非常に満足し、答えるときに年季のことには触れず、お互は親類だということを強調する。当時の習慣上、ヤコブはいとことしてラケルをめとる権利を持っていたのかもしれない。しかしラバンは特に計らって自分の娘を与えてやるのだという口振りである。

(9) 花嫁はヴェールでおおわれたままで（24:65参照）夜連れてこられたので、ヤコブはたやすく欺かれた。これはヤコブが自分はエサウだと言って父を欺いたむくいのようである。

(10) 直訳では「この者の週」。婚礼の祝宴は一週間続く（士14:10-17参照）。ヤコブがレアを拒めば、祝宴をだいなしにし出席者全員をおこらせることになる。ラバンは上の娘をこのようにして、しかもラケルと同じ値でとつがせた。ラバンのはかりごとがうまくいったわけであるが、彼の利己主義をきらってふたりの娘は父にそむきヤコブに従う（31:14-16）。後に姉妹をめとることは、モイゼのおきてによって禁じられる（レビ18:18）。

娘もあなたにあげよう。そのかわりさらにもう七年わたしに仕えてもらおう」。
28 ヤコブはそのとおりにして、レアのためにその週を過ごした。それでラバンは娘ラケ
29 ルをかれに妻として与えた。(ラバンは自分のつかえめビルハを娘ラケルにつかえめと
30 して与えた。)ヤコブはラケルの所にもはいった。かれはレアよりもラケルを愛した。
そしてさらにもう七年ラバンに仕えた。
31 ヤーウェはレアがうとんじられるのを見て、その胎を開かれたが、
32 **ヤコブの子ら**(11)　ラケルはうまずめのままであった。レアはみごもって子を産み、そ
の名をレウベン(13)とつけた。彼女が、「ヤーウェがわたしのうきめをご
33 らんになったから、今こそ夫はわたしを愛するでしょう」と言ったからである。彼女は
またみごもって子を産み、「ヤーウェはわたしがうとんじられるのをお聞きになって、(14)わ
34 たしにこの子をも授けてくださった」と言って、その名をシメオンとつけた。彼女はま
たみごもって子を産み、「今度こそ夫はわたしに結びつく(15)でしょう。わたしはかれに三人
35 の子を産んだのだから」と言った。それゆえその名はレビとつけられた。彼女はまた
みごもって子を産み、「今度はわたしはヤーウェをたたえましょう(16)」と言った。それゆえ
その名をユダとつけた。そして彼女は子を産まなくなった。
30 1 ラケルは自分がヤコブに子を産まないことを知って姉をねたみ、ヤコブに言った、「わ

2 たしに子をください。でなければ、わたしは死にます」。ヤコブはラケルにむかって怒
りを発し、「おまえの胎内に子をやどらせないのは神なのだ。わたしが神に代ることがで
3 きるか」と言った。ラケルは、「ここにわたしのはしためビルハがいます。彼女がわた
しのひざの上に子を産み、わたしも彼女によって子を与えられるように、彼女の所には
4 いってください(1)」と言った。ラケルは自分のつかえめビルハを妻としてかれに与えた

(11) イスラエル十二支族の祖となるヤコブの十二人のむすこのうち、十一人まではメソポタミアで生まれている。29[31]—30[24]にこの十一人の名の起源が通俗的に説明されている。名づけられた理由はそれぞれレアとラケルの張り合い物語の中にうかがわれる。ダンとナフタリ、およびガドとアシェルの各族は後に低い地位に落ちるが、これは彼らがヤコブのそばめから出たことに符合する(30[7—13])。ゼブルン(30[20])、ヨゼフ(30[23—24])の名のように二重の理由を持つものもある。これは二つの伝承が混用されていることを反映する(注1参照)。
(12) 26[27]の「憎む」と同語であるが、ここではラケルよりも愛され方が少いという意味。申21[15—17]参照。
(13) 「わたしのうきめをごらんになった」のヘブライ語「ラアベオニイ」が「レウベン」を説明したかどうかははっきりしない。「レウベン」はおそらく単に「ごらん、むすこだ」の義。
(14) このヘブライ語「シャマー」の子音は「シメオン」のはじめの三つの子音と同じ。
(15) このヘブライ語は「レビ」に符合する。三つよりの綱のように三人の子はかたくふたりを結ぶであろう(伝4[12]参照)。
(16) このヘブライ語は「ヤダ」。ユダ族は後に十二族を指導するようになる。ダビド、サロモン、そしてキリストもユダの子孫。

【注】(1) ラケルはサラの場合と同じ手段に訴える(16[2]および注2参照)。「ひざの上に子を産む」は、出産の時に生れる子を養子にする古代儀式。しかし本句は単に「養子にする」という意味でここに用いられたのであろう(50[23]参照)。

5 ので、ヤコブは彼女の所にはいった。「ビル
ハはみごもってヤコブに子を産んだ。6ラケ
ルは、「神はわたしのためにさばき(2)、わたし
の声をお聞きになって、わたしに子を授けて
7 くださった」と言って、その名をダンとつ
けた。「ラケルのつかえめビルハはまたみごも
8 って、ヤコブに第二の子を産んだ。「ラケルは、「わたしは姉とはげしい争いをして(3)勝っ
た」と言ってその名をナフタリとつけた。
9 レアは自分が子を産まなくなったのを知って、自分のつかえめジルパを妻としてヤコ
10 ブに与えた。「レアのつかえめジルパはヤコブに子を産んだ。11レアは、「幸運」と言っ
12 て、その名をガド(4)とつけた。「レアのつかえめジルパはヤコブに第二の子を産んだ。13レ
アは、「わたしはしあわせです。女たちはわたしをしあわせな者と呼ぶでしょう」と言っ
て、その名をアシェル(5)とつけた。
14 小麦を刈り入れるころ、レウベンは出て行って野で恋なす(6)を見つけ、それを母レアの
15 もとに持って行った。ラケルはレアに、「どうかあなたの子の恋なすをわたしにくださ
い」と言った。「レアは、「あなたがわたしの夫を取ったことは小さな事でしょうか。そ
の上、あなたはわたしの子の恋なすも取ろうというのですか」とラケルに言い返した。
16 ラケルは、「それでは、あなたの子の恋なすのかわりに、今夜、夫をあなたといっしょに寝
させましょう」と答えた。「夕方ヤコブが野から帰ってきた時、レアはかれを迎えに出て、

17 「あなたはわたしの所にはいることになっています。わたしの子の恋なすで、わたしはあ
なたを雇ったのですから」と言った。それでヤコブはその夜、彼女とともに寝た。「神が
13 レアの願いを聞かれたので、彼女はみごもってヤコブに第五の子を産んだ。「レアは、
「わたしは夫にわたしのつかえめを与えたので、神はわたしにその報酬を授けてくださ
19 った」と言って、その名をイッサカル(7)とつけた。「レアはまたみごもってヤコブに第六の子
20 を産み、「神はわたしによい持参金を贈ってくださった。今こそ夫はわたしを正当に扱

(2) ヘブライ語では「ダンナニ」。「ダン」は「さばき」の義。
(3) 直訳では「わたしは姉と神の組打ちを組打ちして……」。ヘブライ語では「ナフトゥレ・エロヒム・ニフタルティ」。「ナフタリ」という名を説明したものである。ここで「争いをする」と訳されている動詞を、他の箇所(例、詩18〔17〕27)と同じように「抜け目がない」の意味に解する者もある。直訳中の「神の」については23注6参照。ラケルの二番目の養子が生れた時、彼女が「わたしは勝った」と言っているので、ダンとナフタリはレアの第四子ユダのあとではなく、第一子レウベンのすぐあとに生れたと説く者もある。
(4) 「幸運」の義。
(5) この名は「わたしはしあわせだ」、「しあわせな者と呼ぶ」という語句の中に出る。
(6) 俗に催淫薬、妊娠を促すものとして知られている植物。雅7:13にもしるされている。「恋」というヘブライ語に関連がある。恋なす物語はヤーウェ伝承中に詳しく伝えられていたのだろうが、ここでは中途半端で終っている。次注参照。
(7) おそらく「イシュ・サカル」(雇い人)に由来する。「イッサカル」の由来に関する前口上が16節の「サカル」(雇う)というレアのことばの中にあらわれ、ヤーウェ伝承の恋なす物語に結びつけられているが、18節の「サカル」(報酬)という語を含むしめくくりとしての説明は9—13節に結びつくものでエロヒム伝承による。

うでしょう。わたしは六人の子をかれに産んだから」と言ってその名をゼブルン(8)とつけ
21 た。「その後レアは女の子を産み、その名をディナ(9)とつけた。
22 神はラケルをかえりみてその願いを聞き、彼女の胎を開かれた。
23 **ヨゼフの誕生** ラケルはみごもって子を産み、「神はわたしの恥を取り除いてくださ
24 った」と言って、「その名をヨゼフ(10)とつけ、「ヤーウェがわたしにも
うひとりの子を加えてくださるように」と言った。
25 さてラケルがヨゼフを産んだ時、ヤコブはラバンに言った、「わた
26 **ヤコブの機知**(11) しをわたしのふるさと、わたしの国に帰らせてください。
27 あなたに仕えて得た妻子をわたしに与えて、わたしを去らせてくだ
さい。あなたは、わたしがどういうふうにあなたに仕えてきたかを、知っているはずで
す」。ラバンはヤコブに、「もしあなたが気に入るなら…(12)。わたしは、ヤーウェがあなた
28 のゆえにわたしを祝福されたことを、占い(13)によって知りました」と言った。
29 らに、「あなたの望む報酬を言ってください。わたしはそれをあげましょう」と言った。
30 ヤコブはかれに言った、「あなたは、わたしがあなたにどのように仕えたか、またあなた
の家畜がわたしの世話でどうなっていったかを、知っているはずです。わたしが来るま
では、あなたのものはわずかでしたが、今はふえて多くなっています。わたしが来てから

31 (14)はヤーウェはあなたを祝福されましたから。とところで、わたしはいつになったら自分の家庭の
ために働けるようになるのでしょうか」。「そこでラバンは、「何をあなたにあげましょ

---

(8)「ゼブルン」にも二重の説明がある。その一つは「ザバド」(持参金を贈る)。もう一つは「ザバル」(正当に扱う)。レアの六人の子は彼女の持参金のようなもので、これから彼女が妻として正当に扱われるというしるしである。

(9)「ディナ」は34章の準備としてここにしるされている。

(10)「ヨゼフ」がエロヒム伝承では「アサフ」(取り除く)に由来し、ヤーウェ伝承では「ヨセフ」(加えてくださるように)に由来することはあきらかである。ラケルの願いは聞かれビンヤミンが生れる(35$^{16-20}$)。

(11) ラバンにあざむかれたヤコブは、厳格な契約に基づいてラバンをだしぬいた。彼の遊牧子孫も飼育が専門なので、特にこの話は楽しく詳しく語り伝えられたにちがいない。しかし創世記にしるされている話は非常に縮小されたもののようである。またこの記事は二つ(あるいは三つ)の伝承から成り(29注1参照)、非常に細かく組み合わされている。31$^{7-41}$でヤコブはラバンがしばしば報酬を変えたことについて不平を言い、まだら毛のものから足首の白いものに変えられたことを特にはっきり言っている。しかしここには一つの契約がしるされているだけである。これはおそらく第一回目の契約であろう。著者は二つの伝承を組み合わせ内容を縮小するにあたり、そのことから生ずる不調和をあまり問題とせず、また当時の読者である羊飼いには理解されると思って、現代の読者にとって必要と思われる詳細な点までも省いている。注15$^{17-19}$参照。

(12) 23^{13}と同様、文章が中途で切れている。続く語句は「ここにとどまってください」であろう(18^{3}参照)。

(13) 同語は44$^{5-15}$に出る。ラバンはヤーウェを自分の神として認めていないが(31$^{30-53}$参照)、自分を祝福してくれたのはヤコブの神ヤーウェであることを、占いによって知ったと言っている。この動詞を受動態の意味にとって「わたしは(あなたが来るまでは)縁起が悪かったが、ヤーウェはあなたのゆえにわたしを祝福された」と解する者もある。またこの語を単に「推測する」、「気づく」の義とする者もある。

(14)「来るまでは」と対比。直訳では「わたしの歩みごとに」または「わたしの歩みにしたがって」。

うか」とたずねた。ヤコブは答えた、「わたしに何もくださることはありませんが、あなたが次のことをわたしにしてくださるならば、またわたしはあなたの群れを飼って守りましょう。32 わたしはきょう(15)からあなたの群れをみな見回って、その中からぶちかまだらの子と黒の子、すなわち黒の羊とまだらかぶちのやぎをことごとく取り出しますから、それをわたしの報酬としてください。33 将来(16)あなたがわたしの報酬をしらべに来た時、わたしの正しいことが証明されるでしょう。もしぶちでもなくまだらでもないやぎと、黒でない羊がわたしの所にあれば、それは盗んだものとなるでしょう」。34 ラバンは、「よろしい。あなたの言うとおりにしよう」と言った。35 ところがラバンはその日に足首の白い雄やぎ(17)やまだらの雄やぎと、ぶちまたはまだらのすべての雌やぎ、すなわち白いところのあるもの、および黒の羊をことごとくより分け、自分のむすこたちの手に渡した。36 ラバンは自分とヤコブの間に三日路のへだたりをもうけた。ヤコブはラバンの残りの群れを飼った。

37 そこでヤコブは、はこやなぎ、あめんどう、すずかけの木のなまの枝をとり、皮をはいで白いすじをつくり、枝の白いところをあらわした。38(18) そして群れが水を飲みに来るみぞ、すなわち水ぶねの中に、この皮をはいだ枝を群れに面して立てた。群れが発情したのは、水を飲みに来た時であった。39 群れはその枝の前で発情してみごもったので、足首

の白いものとぶちのものとまだらのものとを産んだ。

---

(15) 直訳では「きょう」。本節と40節は非常に不明で多種多様に訳されている。しかし契約の概括的な意味ははっきりしている。一般に近東のやぎは黒く、羊は白いという事実に基づいたものである(雅4:1-2 6:5-6参照)。白いところのあるやぎ(ぶち、まだら、白の足首)と黒毛の羊はまれであった(35節参照)。ヤコブはこの並はずれた毛色のやぎと羊の中から報酬を要求する。本節のギリシャ語訳では、ヤコブが報酬をすぐもらおうとして、ラバンに並はずれた毛色のものをより分けるようになっている。この文章全体を正確に訳すことは次の三点から非常に困難である。(ハ)「羊」あるいは「やぎ」または両方を意味するあいまいな語が用いられている。(ニ)「羊の子」は「羊一般」、「やぎの子」は「やぎ一般」の意味にしばしば用いられている。(ホ)家畜の特徴を示す語が若干使われているが、他の箇所には見られないので参照できない。

(16) 直訳では「あした」。同語が同じ意味で出13:14に出る。

(17) ここにはじめて出てきたこの原語の意味についてはいろいろと議論されている。本訳は文脈から見て最適のものと思われる(本節中の一般呼称「白いところのあるもの」の中に含まれる)。また39-40節においてもよくあてはまる(注19参照)。この原語はあとは31:8,10,12に出るだけ。22:9にのみ用いられている「縛る」という動詞に由来する(いけにえとしてイサクを「縛る」)。動物をいけにえにする時に「縛る」ところは「足首」だから、この原語は動物の「足首」の義であるとするユダヤ伝説もある。またこの原語に似たアラビア語から判断して「尾のねじれたもの」と解する者もある。普通には「しまの」または「すじのある」と訳されている。ギリシャ語訳では、32節および本節中のすぐあとにくり返し用いられているように「ぶちの」となっている。

(18) ヤコブは正常の毛色のものから並はずれた毛色のものを産ませるために、三つの方法を用いる。(ハ) やぎのためには、(おそらくみぞを境として)枝のかわりに黒やぎに向かわせておき、黒の羊を産ませた(40節)。(ホ) 群れの中の強いものが交尾する場合にのみ枝を使用し、並はずれた毛色の強い子を産ませた(41-42節)。

40 ヤコブは羊を別にし、その群れを、足首の白いもの(19)とラバンの群れのすべての黒いものとに向かわせた。

41 ヤコブは自分の群れを別にしておいて、ラバンの群れといっしょにしなかった。強い群れが交わる時にはいつでも、ヤコブはその枝を小流れの中に群れの目の前に立て、群れが枝の前で発情するようにした。

42 しかし弱い群れの場合には枝を立てなかった。こうして、弱いものはラバンのものとなり、強いものはヤコブのものとなった(20)。

43 このようにして、この人は非常に富み、多くの群れ、はしため、しもべ、らくだ、ろばを持つようになった。

31

1 ヤコブはラバンの子らが、「ヤコブはわれわれの父の物をみな取ってしまった。かれはわれわれの父の物からこのすべての富を得たのだ」と言うのを聞いた。「またヤコブがラバンの顔を見ると、その表情(1)はヤコブに対して前(2)のようではなかった。

3 ヤーウェはヤコブに言われた、「おまえの先祖の地、おまえの親族のもとに帰れ。わたしはおまえとともにいる」。

4 ヤコブは人をつかわしてラケルとレアを野にいる自分の群れの所に呼び、5 彼女らに言った、「わたしがおまえたちの父の顔を見るのに、その表情はわたしに対して前のようではない。しかしわたしの父の神はわたしとともにおられるのだ。

6 おまえたちも承知のように、わたしは力のかぎりおまえたちの父に仕えてきたが(3)、

7 おまえたちの父はわたしを欺き、十回(4)もわたしの報酬を変えた。しかし神は、かれがわ

---

(19) 32—34節の契約に基づいて少くとも最初は、新たに生れるぶちとまだらのやぎだけが、ヤコブのものになることになっていた（後ヤコブの報酬はぶちのものから足首の白いものに変えられる、31 8参照）。しかしこの時にはすでにラバンが足首の白い雄やぎもより分けて連れ去っているからであろう）。新たに生れた足首の白いやぎは、第一回目の時にはヤコブのものにならなかった。これらはほとんどまっ黒だったから、ヤコブは自分が世話しているラバンの黒やぎとこれらをいっしょにして、発情中の白の羊に向かわせ、白く皮をはいだ枝を用いなかった。それで白の羊は生れず、黒の羊が生れ、ヤコブのものとなった(32—33節)。現存原文中の羊の飼育に関する記事は非常に縮小されたものである。注11後半参照。40a節はギリシャ語訳では「ヤコブは小羊を(自分のものとして)別にしておき、その群れの前に一頭のまだらの雄羊と雑色のすべての羊を置いた」。また「ラバンの」が省かれている。本節全体あるいはその大部分は後の書入れとみる者が多い。

(20) 強いものは夏に、弱いものは秋に交尾したので、このような区別はたやすくできた。

【注】（1）1—21節はベテルにおける神の約束どおり（28 15）、ヤコブが特別の保護を受けたことを示す（24 42節も参照）。

（2）直訳では「きのうとおととい」。5節も同じ。

（3）前章のヤコブの働きぶりから見ると、これは強い表現であるが、この記事全般からはヤコブの富は彼自身の勤勉の結果というよりも、むしろ神の直接の計らいのように見える（特に9節参照）。ここに用いられている伝承が前章に用いられている伝承とさらに異なる点、㈠ヤコブではなくラバンが報酬を決めていること（8節）。㈡30 35では並はずれた毛色の雄やぎは別にされているが、夢の中ではこの事が無視されているように見えること（10 12節）。㈢新語「斑点」が10 12節で「まだら」のかわりに用いられていること（両節を後の書き加えと解する者もある）。

（4）交尾期は一年に二回なので、六年に十回報酬を変えたことはありえないことではないが、おそらくここでは単に「何回も」の意（民14 22、ヨブ19 3参照）。

8 たしに害を加えることをお許しにならなかったのだ。―かれが『ぶちのものをあなたの報
酬にしよう』と言えば、すべての群れはぶちのものを産み、『足首の白いものをあなたの
9 報酬にしよう』と言えば、すべての群れは足首の白いものを産んだ。―このように神はお
10 まえたちの父の家畜を取り上げて、わたしに与えてくださったのだ。―群れの交尾期にわ
たしは夢の中で目を上げてみると、群れにかかっている雄やぎはみな、足首の白いもの、
11 ぶちのもの、斑点のあるものであった。―その時、神の使い(5)が夢の中でわたしに『ヤコ
12 ブよ』と呼んだので、わたしは『はい』と答えた。―すると神の使いは言われた、『目
を上げて見よ。群れにかかっている雄やぎはみな、足首の白いもの、ぶちのもの、斑点
13 のあるものである。わたしは、ラバンがおまえにしたことを、ことごとく見たからであ
る。―おまえはかつて、ベテルで柱に油をそそぎ、わたしに誓いを立てた。わたしはそ
14 のベテルの神である。今立って、この地を去り、おまえのふるさとへ帰れ』」。
15 ラケルとレアはかれに答えて言った、「わたしたちの父の家に、まだなにかわたしたち
に残された分と相続財産があるでしょうか。―わたしたちは父から他人のようにみなさ
16 れていないでしょうか。父はわたしたちを売って(6)、わたしたちのためのそのお金を使い
はたしてしまったのです。―神が父からお取り上げになったすべての富は、たしかにわ
したちとわたしたちの子どものものです。ですから、神があなたにおっしゃったことは

すべて、なさってください」。

17 ヤコブは立ち上がり、子らと妻たちをらくだに乗せ、18 カナアンの地にいる父イサク
19 のもとに行こうとして、すべての家畜、かれが得たすべてのもの、すなわちかれ自身の
財産としてパッダン・アラムで得た家畜をかり立てて去った。―ラバンが羊の毛を刈りに
20 出て行った時、ラケルは父のものであるテラフィム(7)を盗んだ。―ヤコブはアラム人ラバン
21 の目をかすめて(8)、自分が逃げ去ることを告げなかった。―かれは自分のものをすべて携え

(5) 16注5参照。13節では神として語る。

(6) ラバンは結納（ヤコブの十四年間の奉仕）を受取る時だけは習慣にしたがったが、あとは打算的で父親らしくふるまわず、娘に持参物（群れ）を与えるという習慣を守らなかった。「金を使いはたす」は直訳では「金を食べる」。本句は上メソポタミアのヌズに発掘されたくさび形文字の粘土版にも特殊用語としてあらわれている。

(7) 「家の守り神」のこと。本来は「腐敗物」というような意味をもつ軽蔑語で、ここでは偶像をさす。ラバンとヤコブは30-32節で偶像を「神々」と呼んでいる。小さなもの（34節）も人間大のもの（サムエル上19[13,16]）もあり、占いのためにも用いられた（エゼキエル21[26][21]、ゼカリヤ10[2]）。父所有の偶像は第一相続人がこれを受けつぐということが、ヌズの粘土版にしるされている。おそらくその偶像は、それを受けつぐ者が正統の相続人であることを証明するものであろう。ラケルは自分たちが持ち逃げした財産に対する権利を確保するために、父の偶像を盗んだのかもしれない。ヤコブが「よその国の神々」（35[4]）を埋めた時、この守り神も処分されたことであろう。

(8) 直訳では「心を盗んだ」。26節とサムエル下15[6]にも同句がある。ラケルはラバンの偶像を盗み、ヤコブはラバンの心を盗む。

て逃げた。ヤコブは立って川[9]を渡り、ギレアド[10]の山地に向かった。

22 三日目に、ヤコブの逃げたことがラバンに知らされた。23 かれは
ラバン、ヤコ 一族を率いて七日間[12]追いかけ、ギレアドの山地でヤコブに近づいた。
24 **ブを追う**[11] しかしその夜、神が夢の中にアラム人ラバンに現われて言われた、
「ヤコブにはよしあしを言わないように気をつけよ」。
25 ラバンがヤコブに追いついた時、ヤコブは山地[13]に天幕を張っていたので、ラバンも一
26 族とともにギレアドの山に天幕を張った。「ラバンはヤコブに言った、「あなたはわたし
の目をかすめ、わたしの娘たちをいくさのとりこのようにひいて行ったりして、なんと
27 いうことをするのですか。「なぜあなたはこっそり逃げてわたしをだまし、わたしに告げ
28 なかったのですか。わたしは鼓とたてごとで喜び歌い、あなたを見送ったでしょうに。「な
ぜわたしの孫や娘にわたしが接ぷんすることを許さなかったのですか。あなたは愚かな
29 ことをしたものです。「わたしはあなたたちに害を加える力を持っていますが、昨夜あな
たたちの父の神がわたしに、『ヤコブにはよしあしを言わないように気をつけよ』と言わ
30 れたのです。「今あなたはあなたの父の家をそんなに恋しがって去って行くのに、どうし
31 てわたしの神々を盗んだのですか」。「ヤコブは答えてラバンに言った、「わたしは恐れた
32 のです。あなたがあなたの娘たちをわたしから奪い取るだろうと思ったからです。「あな

たの神々がだれの所で見つかっても、その者を生かしてはおきません[14]。われわれ一族の
面前で、わたしの持っている物の中からあなたの物をしらべ出して取ってください」。ラ
ケルがそれを盗んだことを、ヤコブは知らなかったのである。
33 ラバンは、ヤコブの天幕、レアの天幕、ふたりのはしための天幕[15]にはいってみたが、

(9) ユーフラテス川。
(10) ギレアドははじめ小さな地域であったが、後にヨルダン川の東、アルノン川の北の全地域の名称となる(列下10[33]参照)。厳密にはヨルダン川の東方山地のこと。語根はアラビア語では「(きめの)荒い(ほほ)」の義。
(11) ヤコブはラバンの娘むこになっただけでなく、養子となったようである。最初は彼ひとりが相続人であったが、ラバンに実子が生れたので、第二相続人となったのであろう。このように考えれば、ヤコブが逃げたのに対してラバンがそのあとを追ったという事態がよくのみこめる。養子の全財産は義父が死ぬまでその管理下に置かれた([43]節のラバンのことば参照、ヤコブはこれに反対していない)。ラバンはすべてを取りもどそうとして出発したが、神から警告([24][29][42]節)を受けたので、家長の権利のしるしとしての偶像だけを捜し求め、他のものには手をつけない。
(12) ヤコブが群れをか(駆)って十日間に五百キロを進むとは考えられないので、ラバンが出発するときには、ヤコブとの間にすでに七日路([22]節の三日、30[36]の三日、出発準備のための一日)のへだたりがあったと解する者もある。
(13) [49]節の「ミツパ」から察して、ラバンが天幕を張った「ギレアドの山」に相対するように、この語を「ミツパの山」と読む者が多い。士10[17]も参照。
(14) ヤコブのことばはラバンの偶像に敬意を表したものではない。単に自己の無罪をはっきりと自信をもって述べたものである。
(15) はしための天幕はラケルの天幕の次にしらべられたものと思われるが、著者は興味の頂点としてラケルの天幕を最後にしたのであろう。

34 それを見つけださなかった。かれはレアの天幕を出て、ラケルの天幕にはいった。
ところがラケルはテラフィムを取ってらくだのくらの中に入れ、その上にすわっていた。ラ
35 バンは天幕をくまなく手で探ってみたが、それを見つけ出さなかった。ラケルは父に、
「あるじよ、お怒りにならないでください。わたしはあなたの前に立つことができません。
わたしには女の月のもの(16)があるからです」と言った。ラバンはなおも捜してみたが、テ
ラフィムを見つけ出さなかった。

36 そこでヤコブは怒り、ラバンを責めた。ヤコブは言い返してラバンに言った、「わたし
になんのとが、なんの罪があって、あなたはそんなにおこってわたしを追いかけたの
37 ですか。あなたは、わたしのものをことごとく手探ったのですが、何かあなたの家のも
のを見つけましたか。それをここに出してわたしの一族とあなたの一族の前に置き、わ
38 れわれふたりの間をかれらにさばいてもらいましょう。わたしはあなたの所に二十年い
ました。あなたの雌羊も雌やぎも流産したことはありません。またわたしはあなたの群
39 れの雄羊を食べたこともありません。「野獣に裂かれたものをあなたのもとに持って行
ったこともなく、自分でこれを償いました。昼盗まれたものでも、夜盗まれたものでも、
40 あなたはその償いをわたしにさせました。わたしについて言えば、昼は暑さのため、夜
41 は寒さのため疲れはて、目は眠ることができませんでした。(17)わたしはあなたの家に二十

年もとどまったのです。そのうち十四年はあなたのふたりの娘のため、六年はあなたの
42 群れのために、あなたに仕えましたが、あなたはわたしの報酬を十回も変えました。「わ
たしの父の神、アブラハムの神、イサクのおそれる御者(18)が、もしわたしとともにおられ
なかったならば、あなたはこの場合きっとわたしをから手で去らせたでしょう。神はわ
たしのうきめとわたしの手のほねおりを見て、昨夜さばきをなさいました(19)」。

ヤコブとラバンの契約(20)

43 ラバンは答えてヤコブに言った、「娘たちはわたしのもの、そのむすこたちもわたしのもの、群れもわたしのものです。あなたの見るものはすべてわたしのものです。ところで、娘たちと彼女らが産

(16) 「らくだのくら」は箱のような台。ラケルは他の者が彼女の不浄によって汚れることのないように、その上にすわっていたのであろう（レビ15$^{19-23}$参照）。著者は偶像に「テラフィム」（注7参照）という軽蔑語をあてているように、ここでも偶像を不浄とはしなかった。ラバンは偶像を捜すために、そのような不浄な所をしらべようとはしなかった。著者は偶像に「テラフィム」という軽蔑語をあてているように、ここでも偶像を不浄な所に結びつけてあざ笑っている。

(17) 38—40節は旧約聖書に描かれた「よき牧者」。流産がなかったということは、ヤコブが群れをよく見守り飼育がじょうずであったことを意味する。さらにヤコブは、後のモイゼの律法（39節と出22$^{12(13)}$を比べよ）、および当時のメソポタミアの慣習法（ハムラビ法典に反映している）に定められていないことまでもした。ハムラビ法典によれば、牧者にはある一定数の羊を食用にあてることが許されていた。また羊がライオンに殺された場合その牧者には責任がなかった。

(18) 本句は本節と53節だけ。イザヤ8^{13}の類句参照。

(19) このさばきは29節でラバンに示されたもの。

(20) 43—54節はラバンとヤコブの最後の契約を物語るもので、それぞれ内容を異にする少くとも二つの言伝えを

44 んだ子たちに、きょうわたしは何をしてあげましょうか。
しは契約を結びましょう。(21)…そしてそれをあなたとわたしとの間の証拠としましょう」。
45 そこでヤコブは石をとり、これを立てて柱とした。46ヤコブ(22)は自分の一族に、「石を拾
い集めよ」と言った。かれらは石を取ってきて、石づかをつくった。かれらは石づかの
47 かたわらで食事をした。「ラバンはそれをエガル・サハドタと名づけ、ヤコブはガレエド
48 と名づけた。(23)」ラバンは、「きょうこの石づかはあなたとわたしとの間の証拠です」と言
49 った。それでその名はガレエドと呼ばれた。「またミツパ(24)とも呼ばれた。かれがこう言
ったからである、「われわれが互に目の届かない所にいる時には、ヤーウェがわたしとあ
50 なたの間を見張りますように。「あなたはわたしの娘を苦しめたり、また娘のほかに女を
めとったりしてはいけません。われわれのもとにだれもいなくても、神がわたしとあな
51 たの間の証人であることをおぼえていなさい」。「ラバンはなおもヤコブに言った、「この
52 石づかを見なさい。わたしがわたしとあなたの間に立てたこの柱を見なさい。「この石
づかが証拠です。またこの柱も証拠です。害を加えようとして、わたしがこの石づかを
越えてあなたのほうに行くことも、またあなたがこの石づかと柱を越えてわたしのほう
53 に来ることも、決してできません。「アブラハムの神とナホルの神〔彼らの父の神(25)〕が、
われわれの間を治めますように」。ヤコブは父イサクがおそれる御者(おんもの)にかけて誓った。

組み合わせたものであろう。両伝承ともここで本来の形が少し変えられている（注21,22参照）。契約のしるしは柱と石づかの二つ（45—47節と51—52節）。また契約は二つの内容をもつ。一つはラバンが自分の娘のことについて心を用い、自分の孫だけがその財産を相続するように図った私的なもの（43,50節）。もう一つはラバンとヤコブの境界線を決定する公的なもの（52節）。

(21) 「柱をたてましょう」というような句が原本にはあったように思われる。語句が脱落したとは考えずに、続く語句を校訂して50節のように「ヤーウェをわたしとあなたの間の証人としましょう」と読む者もある。「それ(を)」はヘブライ文法上「契約」をささない。

(22) 名称の由来になることば（48—49節）を言ったのも、柱を自分で立てたと言ったのもラバンである（51節）。ゆえに45—46節の主語は出所の中ではヤコブではなくラバンであったかもしれない。また45節の主語はそのままにして、46節の主語だけをラバンに変える者もある。これによると、柱を立てたのはヤコブで、石づかをつくったのはラバンになる。したがって51節のラバンのことば「この柱を見なさい」を後の書入れと解し、「わたしがわたしとあなたの間に立てた」という形容詞節を「この石づか」に結びつけている。古いラテン語訳の46節の主語は「ラバン」。

(23) 「ガレエド」は単に「証拠の石づか」の義であるが、俗にギレアドの語源とみなされている。ギレアドの正しい説明については注10参照。「エガル・サハドタ」はアラム語で、ヘブライ語「ガレエド」と同義。本節は後のつけ加えのようである。

(24) ギレアド地方の一地名、「見張所」の義。神が契約を「見張る」という語句はこの語を説明したものである。またこの語は「柱」（マッセバ）に発音がよく似ているので、同時にしゃれを含む。サマリア五書では「ミツパ」と読まずに「マッセバ」と読んでいる。

(25) 後の書入れ。アブラハムの神とナホルの神（結局は彼らの父テラーの神）を同一の神として、ラバンの多神教をおおい隠そうとしたのかもしれない。この語の欠けているヘブライ語写本は二つある。またギリシャ語訳にも欠けている。ラバンの祈願は多神教的であるが、本節後半のヤコブの誓いは一神教的であることをはっきり表わしている。

54 ヤコブは山で会食祭のためにいけにえをほふり、一族を食事に招いた。かれらは食事
32 1 をして山で夜を過ごした。「ラバンは朝早く起き、孫と娘に接ぷんしてかれらを祝福し、
そこを去って自分の所に帰った。

2 **天軍の出現**(1)　ヤコブは旅を続けた。すると神の使いたちがかれに会った。3 ヤ
コブはかれらを見て、「これは神の陣営だ」と言って、その所をマハ
ナイム(2)と名づけた。

4 **エサウに会う**　ヤコブはセイルの地、エドムの野にいる兄エサウのもとに使いを
先立たせ、「かれらに命じて言った、「おまえたちはわたしのあるじ
5 **ヤコブの準備**(3)　エサウに言いなさい、『あなたのしもべヤコブはこう申しておりま
す。わたしはラバンの所にとどまり、今までいました。6 わたしは
牛、ろば、羊、しもべ、はしためを持っています。わたしはあなたの気に入るように、
御(おん)もとに人をつかわしたのです』」。

7 使いはヤコブのもとに帰ってきて、「わたしたちはあなたの兄エサウの所に行きまし
た。かれは四百人を率いてあなたに会いにやってきます」と言った。8 ヤコブは大いに恐
れ、気をもみ、かれの率いる人々、羊、牛、らくだを二つの組に分けた。9 「かれは、「もし
エサウが一つの組にやってきてこれを撃っても、残りの組は難を免れるであろう」と言

10 った。「そこでヤコブは祈った、「父アブラハムの神、父イサクの神よ、わたしに、『おま
えのふるさと、おまえの親族のもとに帰れ。わたしはおまえに恵みを与えよう』と言わ
11 れたヤーウェよ、「わたしはあなたがしもべにくださったすべてのいつくしみ、すべての
まことを受けるに足りない者です。わたしはつえだけを持ってこのヨルダン川を渡りま
12 したが、今は二つの組を持つようになりました。「どうぞわたしの兄の手から、エサウの

【注】(1) ヨシュア5[13-16]にもこれに似た天軍の出現がある。ここに簡単にしるされている出来事は、ヤコブのメソポタミア滞在中の出来事の結びかもしれない。ベテルにおける天使たちの出現によってヤコブが慰めを得たということ(28[12])に符合する。あるいは「神秘な夜中の組み討ち」(23-32節)に並行する記事の断片かもしれない。「会った」と訳されている動詞は多くの場合「対陣した」という意味を含む。次注も参照。

(2) ヨルダン川の東にあって、後に重要な町となる(サムエル下2[8]17[24]-19[24]、列上4[14]参照)。正確な位置は不明。この語は「陣営」の両数形なので、[8]節と11節に述べられている「二つの組」のことかもしれない。注7も参照。

(3) ヤコブがエサウに会う準備としてとった策略についてはいろいろの解釈がある。[14a]節と[22b]節に同句があるので、並行する二つの言伝えから成っていると解する者が多い。すなわち、(イ)ヤコブはエサウの敵意ある接近を聞いて組を二つに分け、少くとも一つは助かるように図り、神の助けを祈る(4-[14a]節、ヤーウェ伝承)、(ロ)ヤコブはすばらしい贈り物を五組に分け、毎回「ヤコブはうしろにいる」としもべに言わせてエサウをそのたびごとに驚かす(14b-22節、エロヒム伝承)。それはとにかく著者がまとまった物語としてここにしるしているとおり、二つの記事はよく調和しており、ヤコブが最初は守勢、翌日は攻勢の策略をとったように描かれている。ヤコブは家族や財産をヤッボク川の向こうに渡すことで忙殺されている時にエサウの奇襲を受けることのないように、夜のうちに彼らを渡らせている(23-24節)。

手から、わたしを救ってください。わたしはかれを恐れているのです。かれはやってきて、
13 わたしを妻子もろとも撃つでしょう。」あなたは、『ほんとうにわたしはおまえに恵みを
与えよう。わたしはおまえの子孫を浜のまさごのように、数えることができないほど多
くしよう』と言われました。」
14 その夜をそこで過ごしてから、かれは持ち物の中から兄エサウに贈り物として、15 雌や
ぎ二百頭、雄やぎ二十頭、雌羊二百頭、雄羊二十頭、16 乳らくだ三十頭とその子ら、雌牛
四十頭、雄牛十頭、雌ろば二十頭、雄ろば十頭を取り出した。17 かれは一群れずつしもべ
の手に渡し、「わたしの前を進み、群れと群れとの間にへだたりを置きなさい」としもべ
に言った。18 かれは先頭の者に命じて言った、「兄エサウがおまえに出合って、『おま
えはだれに属するものか。そしてどこへ行くのか。またおまえの前のこれらのものはだ
れのものか』と尋ねた時には、19 『あなたのしもべヤコブのものです。これはあるじエサ
ウにおくる贈り物です。その上、かれ自身もわたしたちのうしろから来ます』と答えな
さい」。20 かれは第二の者にも、第三の者にも、群れについて行くすべての者にも、命じ
て言った、「おまえたちはエサウを見つけたとき、21 このことを話し、『その上あなたのし
もべヤコブもわたしたちのうしろから来ます』と言いなさい」。ヤコブは、「わたしはわ
たしの前に行く贈り物でかれをなだめ、そのあとでかれの顔を見よう。おそらくかれは

22 わたしを受け入れるであろう」と思ったからである。23 贈り物はかれに先立って進んだ
が、かれ自身はその夜、宿営で過ごした。

神秘な夜中の組み討ち

24 その夜かれは起きて、ふたりの妻、ふたりのつかえめ、十一人の
子を連れて、ヤッボクの浅瀬を渡った。25 ヤコブはかれらおよびかれ
に属するものをさしずして、川を渡らせ、26 自分はひとりあとに残っ

---

(4) 直訳では「子の上の母」おそらく「子をかばう母」。ホセア10:14参照。
(5) 10-13節のヤコブの祈りの中に「このヨルダン川」という語があるので、この祈りの記事は少し場所はずれのように見える。祈りのすぐあと14節の「そこで」は、ヤコブが率いるものを「二つの組」(祈りの前の8-9節)に分けた所をさしているようである。この「二つの組」は地名「マハナイム」についてのもう一つの説明であろう(注2参照)。しかし祈りの中に全然別の意味ではあるが、これと同じ原語「二つの組」(11節)という語があるので、祈りの記事がここにしるされたのかもしれない。この祈りはエサウに会う直前、すなわち本章の最後にあるほうが、筋がはっきりしてくるように思われる。ヤコブが実際にエサウに会ったのはヨルダン川の近くであったかもしれないからである(注7後部参照)。
(6) ヤコブの相手の名と性格が不明であるように、記事全体も著者によって故意に神秘の幕に包まれたままにされているようである。あとでヤコブに与えられた名(29節)からわかるように、この神秘な相手は「エロヒム」である。この語は神の一般呼称であるが、時には「天使」をも意味する。ホセア12:4-5[3-4]のヤコブの相手「神の使い」は「エロヒム」を説明したものである。「その人」が明け方には去らなければならないようになっていることは、この話がかなり古いということを意味する。またこれに似たもっと原始的な話があったことを反映しているようである。この話はヤコブの名がイスラエルに変えられたこと(35:9-10参照)、およびその所がペニエルと名づけられたことを説明するのに役立っている。ヤコブが神またはその代理と戦って死ぬことなく(31節および注10後

26 た。(7) ある者が明け方までかれと組み討ちした。(8)「その人はヤコブに勝てないと見て、かれ
のももの つがいを打った。すると組み討ちをしている間に、ヤコブのももの つがいがは
27 ずれた。「その人は、「夜が明けるから、わたしを去らせよ」と言ったが、ヤコブは、「あ
28 なたがわたしを祝福するのでなければ、去らせません」と答えた。「そこでその人が、「お
29 まえの名はなんというか」と尋ねると、かれは、「ヤコブです」と答えた。「その人は、
「もうおまえの名はヤコブではなく、イスラエル(9)である。なぜならおまえは神と争った。
30 また人と争って勝つからである」と言った。「ヤコブが、「どうかあなたの名を教えてく
31 ださい」と尋ねると、その人は、「なぜおまえはわたしの名を尋ねるか」と言った。そし
てその所でかれを祝福した。「ヤコブは、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たが、わ
32 たしの命は助かっている」と言って、その所をペニエル(10)と名づけた。「かれがペヌエルを通
り過ぎた時、日がもうかれを照らしていたが、かれはもものゆえにびっこをひいていた。
33 そのためにイスラエル人は今日まで、もものつがいの上を通っている腰の筋(11)を食べな
い。その人がヤコブのもものつがいにある腰の筋を打ったからである。

部参照)、かえって天与の力を得たということは、夜ひとり残ってエサウとのさし迫った遭遇を恐れているヤコブ(8 25a節)に自信を与えその勝利を保証するものである。日が上ってからも彼がびっこをひいていたことは(32節)、夜中の組み討ちが単なる夢あるいは象徴的な幻ではなかったという証拠である。しかし教父たちは、この神秘な組み

討ちは明らかに心戦を象徴し、また神を打ち負かす熱心な祈りの力をも象徴するものであると、一貫して解している。

(7) 本章の地理的説明はいろいろある。ヤコブは南西方向へ下り、エサウは南から上っている。マハナイムはヤッボク川の北、キルベト・マネにあったか、あるいは北岸、すなわち南岸のペヌエルに面した所にあったようである。ヤッボク川の両岸にトルル・エド・ダハブと呼ばれる二つの丘がある。このうちの一つがペヌエルであろう。ヤコブがひとりあとに残った所は、多分彼が落ご者はいないかを見るためにとどまった(あるいは南岸からもどってきた)北岸とも解されるし、また川を渡ってしまってから他の者たちは前進するのに彼だけがとどまった南岸とも解される。これと異なる見解もある。すなわち、まずガレエドとミツパ(31 47-49参照)が、ヤッボク川の北ではなく南であり、ヤコブがすでにその上流を渡っていることにし、そしてマハナイムがヤッボク川の南方にあってペヌエルが北岸ということにしている。後者のほうが適当と思われる。この見解によれば、ヤコブがふたたび川を渡って北岸にもどり、次に西に進んでスッコト(ヤッボク川の北方でヨルダン川に近い)、シェケムに向かったことになる(33 17-19)。ヤコブとエサウの実際の会合はヤッボク川の北方、ヨルダン川の近くで行われたのかもしれない(11節および注5参照)。巻末第五図参照。

(8) このヘブライ語「アバク」はまれな語で本節と次節だけに出る。「ヤッボク川」の名と発音が似ているので、おそらく故意に選んだものであろう。出4 24-26の擬人法的記事参照(ヤーウェはモイゼを殺そうとするが、あとで彼をゆるされる)。

(9) ここでは「神と争う」の義。真の意味はむしろ「神は争う」。「神は聞く」のイスマエルの場合と同じ(16 11および注8参照)。本訳における続く語句はギリシャ語訳とラテン語訳の解し方と同じ。また「神および人と争って勝つ」という解し方もある(ホセア12 4-5参照)。

(10) 「神の顔」の義。次節の地名「ペヌエル」の異体。士8 8-17にはペヌエルとその塔のことがしるされている。列上12 25も参照。神を見た者は死ぬという古代の考えがここにあらわれている。16 13および注11参照。

(11) 「腱」「血管」という訳もあるが、厳密には「坐骨神経」のことであろう。モイゼの律法にはこのようなおきてがないので、この部分はかなり古いつけ加えと思われる。

33

1 ヤコブが目を上げて見ると、エサウが四百人を率いてやってくる
のが見えた。そこでかれは子らをレアとラケルとふたりのつかえめ
2 **ヤコブとエサウの会見**(1) とにそれぞれ託し、2つかえめとその子らをいちばん先に、レアとその
3 子らをそのあとに、ラケルとヨゼフをそのあとに置いた。3かれ自
4 身はかれらの前に出て進み、兄に近づくまでに七たび(2)身を地にかがめた。4エサウは走り
寄ってかれを迎え、かれを抱いて接ぷんし、その首に寄りかかり、ふたりはともに泣いた。
5 エサウは目を上げ、女たちと子らを見て、「かれらはあなたの何に当るのですか」と尋
6 ねた。ヤコブは、「神があなたのしもべに恵んでくださった子どもです」と答えた。7つ
7 かえめたちとその子らは近寄って身をかがめた。8エサウは、「わたしが出会っ
8 め、そのあとにヨゼフとラケルが近寄って身をかがめた。9エサウは、「あるじのご好意にあずかる
9 たこの組全体(3)はどういう意味ですか」と尋ねた。ヤコブは、「あるじのご好意にあずかる
ためです」と答えた。10エサウは、「弟よ、わたしはたくさん持っています。あなたのも
10 のはあなたのものとしておきなさい」と言った。11ヤコブは答えた、「いいえ、もしわた
しがあなたのご好意にあずかることができるのであれば、どうぞわたしの手から贈り物
を受けてください。あなたの顔を見るのは、ほんとうに神の御顔(4)を見るようです。また
11 あなたはわたしを心よく受け入れてくださいました。12どうぞあなたの所に持ってきた

贈り物を受けてください。神はわたしを恵み、これらはすべてわたしのものですから」。
ヤコブがしきりに願ったので、エサウは受け取った。
12 エサウは言った、「旅を続けて行きましょう。わたしはあなたの先に行きます」。13ヤ
コブはかれに言った、「あるじもごぞんじのように、子どもはかよわく、羊や牛が子に乳
を飲ませるので困ります。もし一日でもあまり早く追うと、羊はすべて死ぬでしょう。
14 あるじはしもべより先に行ってください。わたしはわたしの前に行く家畜の歩みと子ど

【注】(1) 本章には、29—32章に用いられた伝承と同じものが全部（29注1参照）見られるが、記事全体はよく調和している（32注3参照）。

(2) 身をかがめるのは一回が普通（18^{2}19^{1}）。ダビデはヨナタンに三回身をかがめる（サムエル上20^{41}）。カナアンの小王らはエジプトのファラオに送る手紙の中に臣下の礼をしめす意味で「七たび身をかがめる」という文句をしたためている。ヤコブの七回の敬礼はこれに似たものであるが、実際に彼がエサウを自分の王と認めたわけではない。この礼儀は策略の一つである。

(3) この組を32$^{15-16}$の贈り物全体（五百八十頭の動物）と考え、エサウの質問はそれにはおよばないという意味であると解する者もあるが、これを32^{8}の第一組と見るほうが適当のようである。ヤコブの家族は2$^{1-3}$節の順序で、ヤコブとともに第二組中にいる。計画的にあるいはエサウに対する不信ゆえにとったこの策略を包み隠すために、ヤコブは第一組全体を贈り物として提供する。これはヤーウェ伝承中では最初の贈り物、記事全体からでは追加の贈り物。とにかくヤコブはエサウに贈り物を受け取らせて、当座のためだけでなく、将来のための友好関係も結んだので、この贈り物はじゅうぶんに役立っている。

(4) 本句は「ペニエル」にかかるものかもしれない（32注10参照）。「神の御顔を見る」は「神のみまえに出ることを許され、恵みを受ける」を意味する。

もの歩みとにしたがって、ゆっくり進み、セイルであるじといっしょになりましょう」。
15 エサウは、「では、わたしが率いる者の中から幾人かをあなたのもとに残させてくださ
い」と言ったが、ヤコブは、「どうしてそのようなことを。ただあるじのご好意にあずか
16 りたいのです」と答えた。「その日にエサウはセイルへの帰途についた。
17 ヤコブは旅を続けてスッコトに行き、自分のために家を建て、
スッコト(5)　家畜のためには小屋を造った。このゆえにその所の名はスッコトと
いう。
18 パッダン・アラムからもどる途中、ヤコブはカナアンの地にある
ヤコブ、シェケムに着く(6)　シェケムの町に無事(7)に着き、町の前に宿営した。19 かれは天幕を張っ
た野の一部を、シェケムの父ハモルの子らの手から、百ケシタ(8)で買
20 った。かれはその所に祭壇を築き、それを「エル・エロヘ・イスラエル(10)」と名づけた。

34
2 1 ディナおかされる(1)　レアがヤコブに産んだ娘ディナは、その地の娘たちに会おうとし
て外に出た。(2)「その地の族長ヒッビ人ハモルの子シェケムは、ディナ

(5)「小屋（複数）」(17節)の義。ヤコブが家を建てたことから、彼はかなりしばらくの間、おそらく数年間そこに滞在したものと解される。ヤコブはエサウのあとを追ってセイルでいっしょになる(14節)と言ってエサウの護衛を断る(15節)。これは体裁のいい断り方で、自分の好きな所に行きたいことを意味するものであろう。
(6) ヤコブがシェケムの近くの野を買ったことは、アブラハムがマムレに面する畑地を買ったことを思い出さ

せる（23章）。シェケムの近くの野にヨゼフの骨が埋められる（ヨシュア24:32、23注1参照）。アブラハムもシェケムで祭壇を築いている（20節と12:6-7を比べよ）。
(7) ギリシャ語訳、ラテン語訳、シリア語訳では固有名詞となっている。この名詞を地名と見てシェケムから数マイル東のシャレム（サリム）と解する者もある。
(8) 34注1参照。
(9) 古代の貨幣単位。おおよそ小羊一匹の価値をもつものか、あるいは小羊の型に鋳造されたもの。大部分の訳本は「小羊百頭」と読んでいる。この語はヨブ42:11、および本節に並行するヨシュア24:32に出る。
(10) イスラエルはここでは個人名ではなく、むしろ民族名で、全体の意味は「イスラエルの神エル」あるいは「力ある（者）はイスラエルの神」。出17:15でもここと同じように祭壇に名づけている。「築く」と訳されている動詞は、普通は祭壇ではなく柱を建てる場合に用いられる語なので、本文を改め「祭壇」のかわりに「柱」と読む者もある。

【注】(1) 本章はシェケムでおこった出来事についての二つの言伝えが組み合わされたものとみなされている。すなわち一つはヤコブ家とハモル家間の問題で、ディナとシェケムに関するもの。もう一つはイスラエルの子らとハモルの子らとの両族相互結婚の契約に関するもの。最初の言伝えの中では、「その地の族長」と「その子」には名がつけられていなかったようである。そして話が伝えられていくうちに、彼らの属する氏族の名と出来事のおこった町の名にちなんで「ハモル」および「シェケム」と名づけられたものと思われる。「ハモル」は「ろば」の義。ここでは契約を結ぶときにろばを殺すフリ人の習慣にかんがみて「契約」の義かもしれない（エレミヤ34:18-19では契約の時に子牛がさかれる。本書15:9-10,17-18も参照）。ヒッビ人はおそらくフリ人のことであろう（次注参照）。したがって「ハモルの子ら」と呼ばれるシェケムの人々の名は、彼らの神の名「バアル・ベリト」、すなわち「契約の主」（士9:4）に符合する。「シェケム」はゲリジム山とエバル山の二つの肩にはさまれていることから「肩」の義をもつものと思われる（48:22参照）。パレスチナの十字路の交差点にあたり、戦略要点なので、古代カナアンの「中心部」（この語は士9:37ではゲリジム山をさしているようである）とみなされた。本書中に語られているように、ハモルが両族相互結婚の申込みをしたことは、彼がディナをむすこの嫁にと申し込んだあとの当然のなりゆきであって、ディナをもらう最善の策である。
(2) ヒッビ人は10:17では地理学上カナアンの住民となっているが、人種学上はおそらく北および北東からやっ

を見て彼女をとらえ、ともに寝てはずかしめた。[3]かれはヤコブの娘ディナに心を引かれ、
この若い娘を愛しやさしく彼女に語った。[4](3)[5]「シェケムは父ハモルに、「この娘をわたしの
妻にめとってください」と言った。
たが、むすこたちが家畜とともに野にいたので、かれらが帰ってくるまで黙っていた。
[6]シェケムの父ハモルはヤコブと話し合おうと、かれの所に出かけた。[7]ヤコブの子らは
このことを聞くと、野から帰ってきて、くやしがり、非常におこった。シェケムがヤコ
ブの娘とともに寝て、イスラエルにおいて愚かなことをしたからである。このようなこ
とはしてはいけないことである。[8]ハモルはかれらと語って言った、「わたしの子シェケ
ムの心はあなたがた[5]の娘を慕っています。どうか彼女をむすこの嫁にください。[9]われ
われは互に縁を結びましょう。あなたがたの娘をわれわれのところにとつがせ、われわ
れの娘をあなたがたがもらってください。[10]「われわれといっしょに住みなさい。この地は
あなたがたに開放されています。ここに住み、この地をめぐり歩いて、住みついてくだ
さい」。[11]シェケムもディナの父と兄弟たちに言った、「わたしはあなたがたのご好意にあ
ずかりたいのです。あなたがたがわたしにおっしゃるものはなんでもさしあげます。
[12]結納金と贈り物をどれほど多く求められても、あなたがたのおっしゃるとおりにさしあ
げます。ただあの娘をわたしの妻にください」。

[13]ヤコブの子らは、シェケムがかれらの妹ディナをおかしたので、
[14]**ヤコブの子らの復しゅう**[6]　シェケムとその父ハモルに答える時いつわって話し、[15]かれらに言っ
た、「割礼をうけていない者に妹を与えることはできません。それは
われわれの恥とするところです。[16]しかしあなたたちの男がみな割礼をうけて、われわれのようになりさえすれば、あなたたちに同意します。[17]そし
てわれわれの娘をあなたたちのところにとつがせ、あなたたちの娘をわれわれがもらっ
てきたフリ人(聖書中ではホル人)を祖とするものであろう。ギリシャ語訳写本の多くは、ここを「ヒッビ人」のかわりに「ホル人」と読んでいる。
(3) アムノンがタマルをはずかしめたあとの態度と著しく異なる(サムエル下13[14-15])。
(4) 著者がこのような罪をしるす場合に用いる語句。当時はまだイスラエル国は存在しない。このような罪がしるされる場合、本句がよく用いられている(例、士20[6,10]、サムエル下13[12]参照)。
(5) 24注13参照。17節でも複数「われわれの」となっている。
(6) 「ヤコブの子ら」は、25[30]節(49[5-7]も参照)に特記されているシメオンとレビをさすものか、あるいは27節にほのめかされている兄弟全員をさすものか不明。二つの言伝えが組み合わされたものとすれば(注1冒頭参照)、その一つはシメオンとレビだけをさし、割礼をうけたのはシェケムだけで、彼と彼の父だけが殺されたことを言い伝えたもので、もう一つは兄弟全員をさし、割礼をうけたのはヒッビ人の若者全員で、すべての男子が殺されたことを言い伝えたものかもしれない。それはとにかく、組み合わされている聖書本文中では、シメオンとレビが首謀者で、ハモルとシェケムが復しゅうされる主要人物となっている。シメオンとレビはディナとは同じ腹の兄妹なので、他の兄弟よりもこの事件に深く結びつけられている。彼らの兄、レアの長男レウベンがあまり関係していないことは、37[21-22]にあらわれている殺伐なことをきらう彼の性格に符合する。

17 て、あなたたちといっしょに住み、一つの民となりましょう。」しかしわれわれに聞か
ず、割礼を拒むのであれば、われわれの娘を連れてここを去ります」。
18 ハモルとハモルの子シェケムとは、かれらのことばを受けいれた。19若者はためらわ
ずにそのことを行なった。かれはヤコブの娘が気に入っていたからである。かれは父の
20 家の中でいちばん重んじられていた。21「ハモルとその子シェケムとは町の門に行き、町の
人々に言った、「あの人たちはわれわれに害を及ぼさないから、この地に住まわせ、め
ぐり歩かせてあげよう。この地は広く、かれらを入れるにじゅうぶんである。われわれ
22 はかれらの娘を妻にめとり、われわれの娘をかれらにとつがせよう。23あの人たちは、か
れらが割礼をうけているように、われわれのうちの男がみな割礼をうけさえすれば、わ
れわれといっしょに住んで一つの民となることに応じるのだ。24「そうすれば、かれらの群
れ、財産、すべての家畜はわれわれのものとなるではないか。かれらがわれわれといっ
しょに住むように、ただかれらに同意しよう」。
25 かれの町の門から出るすべての者(7)は、ハモルとその子シェケムの言うことに従った。
かれの町の門から出るすべての男はみな、割礼をうけた。26三日目のことである。かれら
がきずの痛みで苦しんでいるので、ヤコブのふたりの子、ディナの兄シメオンとレビは、
それぞれ刀をとってゆうゆうと町を襲い、すべての男を殺した。27かれらはハモルとその

27 子シェケムを刀にかけて殺し、シェケムの家からディナを連れ出して去った。28ヤコブの
子らは死者(8)を襲いその町を略奪した。かれらの羊、牛、ろば、町にあるもの、野にあるもの、29
その人たちの羊、牛、ろば、町にあるもの、野にあるもの、すべての財産を取った。30ま
たそのすべての子どもや女たちをとりこにし、家の中のものもすべて略奪した。
30 ヤコブはシメオンとレビに言った、「おまえたちはこの地の住民であるカナアン人とペ
リッジ人にわたしを忌みきらわせ、わたしに累を及ぼした。わたしにはわずかの人数し
かない。かれらが組んでわたしにはむかい、わたしを撃つならば、わたしも家族も滅ぼ
31 されるであろう」。31かれらは答えた、「わたしたちの妹があそびめのように扱われてよか
ったのですか(9)」。

(7) この特殊慣用語句について新たに提唱された意味は「出陣できるすべての若者」、すなわち結婚適齢期のすべての男子。しかしこれは23:10-18の類句と同じく「すべての男の市民」の義だと一般にみなされている。23注8参照。

(8) この語を少し変えて読み「傷ついた者」または「病者」(割礼ゆえの)とする者が多い。第二の言伝えの中ではこのように伝えられていたのかもしれない(注6参照)。そして著者が記事をまとめるにあたって本文のような読み方にしたものと思われる。27-29節と民31:9-11は言いまわしがよく似ている。

(9) ヤコブは30節で軽はずみな虐殺を戒め、49:5-7でその乱行をとがめ、シメオンとレビの二種族が後に行われる約束の地の分配の際に他の種族の中に散らされるのはこのためであるとしている。31節のシメオンとレビの答は当時の正義観に照らせば、正当な自己弁明のようである。ユディト9:2-4ではシメオンの行為は神がイスラエルの娘の貞操を重んじたしるしとして賞賛されている。

35

1 神はヤコブに、「立て。ベテルに上ってそこに住み、かつておまえ
2 **びベテルへ**(1)と言われた。ヤコブが兄エサウからのがれていた時、おまえに現われた神に祭壇を築け」
3 者に言った、「おまえたちのところにあるよその国の神々を取り除
4 き、身を清め、着物を替えよ。(2)ヤコブは自分の家族および自分とともにいるすべての
神は苦難の日にわたしを助け、わたしの歩んだ道でわたしとともにおられたから」。ヤ
れらは持っていたよその国の神々と耳につけていた輪(3)とをヤコブに渡した。ヤコブはこ
5 れらをシェケムの近くにあったテレビン樹(4)の下にかくした。ヤコブは立ち去ったが、ま
わりの町々は神の恐れにおおわれたので、ヤコブの子らのあとを追う者はなかった。
6 ヤコブおよびかれとともにいたすべての人々は、カナアンの地のルズ、すなわちベテ
7 ル(5)に来た。ヤコブはそこに祭壇を築き、その所をエル・ベテルと名づけた。かれが兄から
8 のがれていた時、神がそこでかれにご自身を示されたからである。レベッカ(6)のうばデボ
ラは死に、ベテルの下のほう、かしの木の下に葬られた。それでその木はアッロン・バ
9 クート(7)と名づけられた。
10 **御約束のくり返し**(8)　ヤコブがパッダン・アラムから帰ってくる時、神はふたたびかれ
に現われ、かれを祝福された。神はかれに言われた、

【注】(1)本章はエロヒム伝承(1—4 7—8 14 16—20節)、司祭伝承(6 9—13 15 22b—27節)、一つのヤーウェ伝承(5 21—22a節)をつづり合わせたものらしく、ヤコブ中心の物語はここで終る(ヤコブの最後の祝福と死は48—50章にしるされる)。1-7節は明らかに28 10—22の「ベテルにおけるヤコブの夢」に関連し、5節のシェケム出発は前章の出来事に結びつく。2—4節は話の筋とよく調和しているが、その昔、大がかりに行われた偶像放棄の民族的行事を反映したものかもしれない。ヨシュア24 14—15 23—26にもそのような事がやはりシェケムで行われたとしるされている。この意味においてギリシャ語訳では、4節の終りに「そして彼は偶像を滅ぼし、今日に及んでいる」とつけ足している。

(2)唯一の神をまつっているベテルの聖所に参るにあたり、前もって行われた祭式上の準備。出19 10 14参照。

(3)当時の耳飾りはお守りとしてもよく用いられた。ウルとハランの有名な月の神シンにちなんだ三日月型のものもある。

(4)12 6の「大木」のことであろう。ヨシュア24 26も参照。

(5)28 19および注8参照。ベテルの命名は司祭伝承ではヤコブの帰路の出来事(6 15節)、ヤーウェ伝承では往路の出来事(28 19)となっている。そしてエロヒム伝承では「エル・ベテル」(ベテルの神)と名づけられている(7節)。「ベテルに現われた神」または「ベテルに住まわれる神」の意味。7節の「神」のヘブライ語は「エロヒム」で複数形。この語につづく動詞「ご自身を示された」も複数形。「エロヒム」は広い意味では「天使」の義もあるので(1注8(ロ)参照)、28 12の天使たちをさしているのかもしれない。

(6)24 59に名はしるされていないが、レベッカのうばのことが述べられているので、ラケルとはせずにレベッカとしるしたのかもしれない。前後関係から「ラケル」のほうが、よく適合する。

(7)「嘆きのかし」の義。注9参照。

(8)最初の言伝えの時には別々になっていたと思われる二回の出現の物語を、著者はここに簡潔にしるしている。両記事とも司祭伝承によるものであることは、それぞれその用語「パッダン・アラム」(例、25 20)、「エル・シャッダイ」(17注2参照)からわかる。著者はこれらを前述の出現、28 10—22、おそらく32 25—31も)に結びつけて「ふたたび」という語をここに用いている。ヤコブの名は10節でまたイスラエルに改められている。これは32章中の改名に関する告知を決定的にしたものか(ヨハネ1 42、マテオ16 17—18参照)、あるいは簡単に第一回目のものを固めたものかのどちらかであろう。11—13節には28 13—15のヤコブに対する約束のことばがくり返されている。これはイサクが

「おまえの名はヤコブであるが、
もうおまえの名をヤコブと呼んではならない。
おまえの名はイスラエルである」。
そこでその名はイスラエルと呼ばれた。
11 神はかれに言われた、
「わたしはエル・シャッダイである。
生めよ、ふえよ。
一つの民、多くの民がおまえから出て、
王たちもおまえから生れ出るであろう。
12 わたしはアブラハムとイサクに与えた地をおまえに与える。
おまえの子孫にもこの地を与える」。
13 神はかれと語られた所でかれを離れ、上られた。14 ヤコブは神が自分と語られた所に
15 一つの石の柱を立て、その上に飲みものを注ぎ、また油を注いだ。(9) ヤコブは神が自分と
語られた所をベテルと名づけた。

16 17 **ビンヤミンの誕生とラケルの死**

かれらはベ
道のりの所で、ラケルは産気づき、ひどい陣痛で苦しんでいる時、産婆は彼女に、「心配してはいけま
がひどい陣痛
18 せん。今度も男の子です」と言った。(10) 彼女の魂が離れようとした時（「死んだのである」）、
彼女はその子の名をベン・オニと
つけた。しかしかれの父はかれをビンヤミン(11)と名づけ

---

28 3-4でヤコブのために祈願したものである（17 6-8も参照）。
(9) 前節のくり返しである「神が自分と語られた所に」という語句を除けば、14節は8節のすぐあとに続くものであるとする聖書学者が多い。そうだとすれば、この柱はデボラの墓柱で、飲みものを注いだことも葬儀的なものとなる。葬式の時に死者に物を与えることは後に禁じられているので（申26 14参照）、著者が本句をここにはめたのであろうと彼らは解している。しかしエロヒム伝承による本節は「アッロン・バクート」ではなく、「神が彼と語られた所」を強調したものとして、これをそのままの意味にとったほうがはるかによいと思われる。すなわち本節はヤコブの誓い（28 22）の成就を物語っているので（31 13 35 1-4参照、いずれもエロヒム伝承）、ヤコブの生涯の頂点を形成している「ベテルにおける」（注5参照）出現の記事（司祭伝承）に適合させられたものと考えられる。この意味で注がれた飲みもの（おそらく酒）は、28 22でヤコブが誓った「十分の一」の一部、すなわち（文字どおりの十分の一ではなく）申12 17 14 23の特殊な「十分の一」にもよくあてはまる）。「十分の一」の一部かもしれない（この解釈はアモス4 4のベテルで三日ごとに携える「十分の一」にもよくあてはまる）。「十分の一」というヘブライ語に相当する同時代のウガリト語は「飲みもの」を意味したようである。
(10) 産婆は子がもうひとりほしいという（24参照）。
(11) 「ベン・オニ」は「わたしの悲しみの子」の義。「ビンヤミン」は「右手の子」の義、すなわち「幸運の子」。ヤコブがこの場でラケルの死を悲しんだということは48 7に述べられている。別の言伝えはヨゼフの伝記中で、ラケルがビンヤミン誕生後も生きていたようにしている（37 9-10）。

19 た。[ラケルは死に、エフラト(12)〔すなわちベトレヘム〕への道のかたわらに葬られた。
20 ヤコブはラケルの墓の上に柱を立てた。これはラケルの墓柱で今日にいたっている。
21 **レウベンの醜行**　イスラエルは旅を続け、ミグダル・エデル(13)のかなたに天幕を張っ
22 た。[イスラエルがその地に住んでいた時のことである。レウベンは
父のそばめビルハの所に行ってともに寝た。イスラエルはこのことを聞いて……(14)。
23 **ヤコブの子ら**　ヤコブの子は十二人である。[すなわちレアの子はヤコブの長子
レウベン、次にシメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンであ
24 る。[ラケルの子はヨゼフとビンヤミンである。25ラケルのつかえめビルハの子はダンと
26 ナフタリである。[レアのつかえめジルパの子はガドとアシェルである。これらはヤコ
ブの子で、パッダン・アラムで生れたものである(15)。
27 **イサクの死**(16)　ヤコブはマムレというキレヤト・アルバ（すなわちヘブロン(17)）の
父イサクのもとへ行った。そこはアブラハムとイサクがとどまった
29 所である。[イサクの生涯は百八十年であった。29イサクは老いて天寿を全うし、息絶え
て死に、かれの身内のなき数に入れられた。その子エサウとヤコブはかれを葬った。

36

2 1 **エサウの系図**(1)　**(一) カナアンにおけるエサウの妻子**　エサウ、すなわちエドム(2)の系図
は次のとおりである。[エサウはカナアンの娘の中から妻として、へ

(12) サムエル上10^{2}、エレミヤ31^{15}（マテオ2^{18}に引用）では、ラケルの墓はエルサレムの北方、ビンヤミン族の領地ラマの近くとなっている。エフラトはベトレヘムのことであると48^{7}にもしるされているが、ベトレヘムはエルサレムの南にある。これはベトレヘムまたはその近くに住んだユダ族のエフラトあるいはエフラタという氏族（歴上2$^{19\,50-51}$、ルト1^{2}4^{11}、ミカ5^{2}）の名と混同したためであろう。巻末第五図参照。

(13) おそらくベテルとヘブロンの間。位置不明。「群れの塔」の義。

(14) この短かい記事は中途で切れている。その罪に対する罰は49^{4}にしるされる。ギリシャ語訳ではこのあとに「それは彼にいとわしく見えた」(34^{30}参照)とつけ加えている。嫡子レウベンの動機はサムエル下16$^{20-22}$におけるアブサロムの場合と同じと見る者もある。レビ18^{8}の禁令参照。

(15) エロヒム伝承による16—20節と異なり、司祭伝承はビンヤミンもパッダン・アラムで生れたことにしている。

(16) 司祭伝承は話を非常に順序よく図式的に物語っている。イサクの死の記述はほとんどアブラハムの死（25$^{7-10}$）の記事をそのまま写したようなものである。イサクとイスマエルがアブラハムを葬ったように、エサウとヤコブはイサクを葬っている。また他の伝承とくいちがっている点までも両記事はよく似ている（25注4 27注2 36注4参照）。

(17) マムレとキレヤト・アルバの関係については13注8 23注2 11参照。

【注】(1) 著者は25章でイサクの子らの物語を始める前にイスマエルの系図をしるしてイスマエルの物語のしめくくりをつけているように、ここでもヤコブの子らの物語を始める前にエサウの系図をしるしてそのしめくくりをつけている。本章は七部から成り、その大部分はエドムの各種族間の関係をしめす系図である。きまり文句の19節、およびエサウの移住を物語る6—8節が司祭伝承によるものだということは明らかである。その他の部分の由来について言えることは、(一)(三)(四)がイスラエル系、あとの三つはエドム系の言伝えのように見えるということだけである。著者は見たまま、あるいは聞いたままの系図をしるし、くいちがいを調整することには気を使っていない。各訳本だけでなくヘブライ語写本にすら、多くの異なった箇所がある。本系図は歴上1$^{35-54}$にくり返されているが、さらに異なった箇所が見られる。重要な相違点については後述する。

(2) 25^{30}および注15参照。エサウとエドムは同一人物であることが、本節と9^{19}節に主張されている。9^{43}節ではエサウは「エドムの父」すなわち「エドム人の先祖」と呼ばれている。

3 ト人エロンの娘アダ、ならびにヒッビ人ジベオンの子アナの娘オホリバマ、
4 マエルの娘でネバヨトの妹であるバセマトをめとった。(3) アダはエサウにエリファズを
5 産み、バセマトはレウエルを産み、
6 だ。これらはエサウの子で、カナアンの地で生れたものである。
(二) エサウの移住(4) エサウは妻、むすこ、娘、家のすべての人々、群れとすべての家畜、
7 およびカナアンの地で得たすべての財産を携え、弟ヤコブを離れてほかの地へ行った。
8 その群れのゆえに、かれらを住まわせるにはじゅうぶんではなかったからである。エサ
9 ウはセイルの山に住みついた。エサウとはエドムのことである。

(三) セイルにおけるエサウの子ら

10 セイルの山にいるエドム人の先祖エサウの系図は次
11 のとおりである。エサウの妻アダの子
12 で、レウエルはエサウの妻バセマトの子である。エリファズの子らはテマン、オマル、
ゼフォ、ガータム、およびケナズである。(5) (チムナーはエサウの子エリファズのそばめ
で、エリファズにアマレクを産んだ。) これらはエサウの妻アダ系の子らである。
15 レウエルの子らは次のとおりである。すなわちナハト、ゼラー、シャムマ、およびミ
ッザで、これらはエサウの妻バセマト系の子らである。

14 ジベオンの子アナの娘でエサウの妻オホリバマの子らは次のとおりである。彼女はエ
サウにエウシュ、ヤーラム、コラーを産んだ。

(四) エドムの酋長(しゅう)

15 エサウの子らの中の酋長は次のとおりである。エサウの長子エリ

---

(3) 2-18節のエサウの三人の妻についての記事は、26[34] 28[9]と一致しているところもあるが、大部分は異なっている。すなわち三人の妻のうちでその名が合っているのはバセマトだけである。また三人の父のうちふたりの名は合っているが、彼らの娘の名は異なったりくいちがったりしている。ここではオホリバマは第二の妻の名であるが、41節ではホル人の酋長としてしるされている。25節の「オホリバマ」はもともと男性であったが、2節の女性「オホリバマ」に一致させるために、そのあとに「アナの娘」をつけ加えたのであろう。シリア語訳にはない。歴上1[41]には「オホリバマ」もしるされていない。ヘブライ語原文のここ14節では、アナはジベオンのむすこでなく「娘」となっている(性の相違については注5参照)。ジベオンは2節ではヒッビ人と呼ばれ、[20 24 29]節ではホル人となっているが、同一人物であろう。34注2参照。

(4) 32[4 33 14]によれば、エサウはヤコブがハランからもどってくる前にすでにセイルに住みついていたことになる。しかしエサウとヤコブの仲たがいについては全然触れていない司祭伝承は(28注1参照)、父イサクの死の時にもエサウとヤコブをいっしょにいたことにして、ここで彼らふたりのおだやかな別れを物語っている。アブラハムの死の時のイスマエルとイサクの場合と同じ(13[5-6])。

(5) チムナーは歴上1[36]ではアマレクと並んで単にエリファズの子。この名は22節ではホル人の酋長ロタンの妹(歴上1[39])、40節では後のホル人の酋長(歴上1[51])として出る。これらが人名としてよりもむしろ氏族の名として出ているかぎり、男性であろうと女性であろうと根本的意味には影響を与えない(アナの場合にもあてはまる。注3後半参照)。チムナーは古代アマレク人(14[7]、民24[20]参照)といくらか関係のあるホル人の氏族の名で、後にエドム人に併合されたものかもしれない。本妻によらない子アマレクを除けば、エサウ家の酋長は十二人。イスマエル家(17[20] 25[12-16])とヤコブ家(35[22b-26])の場合も十二人。

16 ファズの子ら、すなわち酋長テマン、酋長オマル、酋長ゼフォ、酋長ケナズ、
17 酋長コラー[6]、酋長ガイタム、および酋長アマレク。これらはエドムの地にいるエリファズから出た酋長で、アダ系の子らである。
エサウの子レウエルの子は次のとおりである。酋長ナハト、酋長ゼラー、酋長シャムマ、および酋長ミッザ。これらはエドムの地にいるレウエルから出た酋長で、エサウの妻バセマト系の子らである。
18 エサウの妻オホリバマの子らは次のとおりである。すなわち酋長エウシュ、酋長ヤーラム、酋長コラーで、これらはアナの娘でエサウの妻であるオホリバマから出た酋長である。
19 以上はエサウ、すなわちエドムの子らで、かれらの酋長である。
20 **(五) ホル人セイルの子ら[7]と酋長**　この地の住民ホル人セイルの子らは次のとおりである。すなわちロタン、ショバル、ジベオン、アナ、
21 ディション、エゼル、ディシャンである。これらはエドムの地にいるセイルの子ホル人の酋長である。
22 ロタンの子らはホリで、ロタンの妹はチムナーである。
23 ショバルの子らは次のとおりである。すなわちアルワン、マナハト、エバル、シェフォ、オナムである。

24 ジベオンの子らは次のとおりである。アイヤとアナで、このアナはかつてその父ジベオンのろばを牧していた時、荒野で温泉を発見したアナのことである[8]。
25 アナの子らは次のとおりである。ディションの娘はヘムダンである。
26 ディションの子らは次のとおりである。すなわちヘムダン、エシュバン、イトラン、ケランである。
27 エゼルの子らは次のとおりである。すなわちビルハン、ザアワン、アカンである。
28 ディシャンの子らは次のとおりである。ウツとアランである。
29 ホル人の酋長は次のとおりである。すなわち酋長ロタン、酋長ショバル、酋長ジベオン、酋長アナ、
30 酋長ディション、酋長エゼル、酋長ディシャンである。これらはセイル

---

(6) サマリア五書にはない。18節の「酋長コラー」を何気なくここに書きこんだのであろう。
(7) エサウの子孫エドム人はカナアンからエドムに移住した（**申2**12 22参照）。セイルの原住民ホル人（おそらくフリ人）の先祖の名は、その地の名からとられたものである。
(8) この歴史的説明は、アナを彼のおじかもしれない同名のアナ（20 25 30節）と区別するために、つけ加えられたものと考える者もある。しかし**本章**を通じてアナを同一人物、すなわち「ジベオンの子」「ディションの父」として格付けは同じ。20—21 29—30節）。アナはエサウの義父（24 25節）なので、特に興味をもたれて**本節**にしるされたのかもしれない。アナが**荒野**で何を発見したのかは不明。「温泉」という訳語はラテン語訳による。この語はここに一回出るだけで、これに相当するアラビア語は「まむし」を意味する。

の地にいる分族ごとのホル人の酋長である。

31 **(六) エドムの王**[9] イスラエルの子らの王が治める前に、エドムの地を治めていた王は次
32 のとおりである。 ベオルの子ベラーはエドムを治めた。その町の名はディンハバとい
33 う。 ベラーが死んで、ボツラ出身のゼラーの子ヨバブがこれに代って治めた。[34] ヨバブ
35 が死んで、テマン人の地から出たフシャムがこれに代って治めた。 フシャムが死んで、
ベダトの子ハダドがこれに代って治めた。ベダトはモアブの野でミドヤン人を撃った。
36 その町の名はアビトという。 ハダドが死んで、マスレカ出身のサムラがこれに代って治
37 めた。 サムラが死んで、レホボト・ハナハル出身のシャウルがこれに代って治めた。
38 シャウルが死んで、アクボルの子バアル・ハナンがこれに代って治めた。[39] アクボルの子
バアル・ハナンが死んで、ハダル[10]がこれに代って治めた。その町の名はパウという。妻
の名はメヘタベルといい、マトレドの娘である。マトレドはメ・ザハブの娘[11]である。

40 **(七) エドムの酋長の別表**[12] 氏族と所にしたがって分けたエサウ系の酋長の名は次のとお
41 りである。すなわち酋長チムナー、酋長アルワ、酋長エテト、 酋長オホリバマ、酋長エ
42 ラ、酋長ピノン、 酋長ケナズ、酋長テマン、酋長ミブザル、[43] 酋長マグディエル、およ
び酋長イラム。以上はエドムの酋長で、その所有地における住所にしたがったものであ
る。エサウはエドム人の先祖である。

(9) 31節前半はギリシャ語訳のように「ひとりの王がイスラエルの子らを治めるまで」すなわち「サウルが立つまで」とも解されるが、本訳のように「ダビドが立つまで」とも解される（サムエル下8[13-14]参照）。したがってこの記事はエドムの最後の王までの表である。モイゼが民20[14]で交渉する王は初期の王のうちのひとりであろう。どの王も先王の子ではないので、王位は世襲ではなく、王の町も定まっていなかった。これらの名の多くは本章中の他の名と同じく、人名でもあり地名でもあり、歴史書とヨブ記にも出る。

(10) 多くのヘブライ語写本とシリア語訳は歴上1[50-51]と同じように「ハダド」と読んでいる。そうだとすればダド二世で、その時王子でエジプトにのがれ、後もどってきてサロモンを悩ました王はハダド三世ということになる（列上11[14-20]）。

(11) ギリシャ語訳とシリア語訳は「メ・ザハブの[35-36]節のハダド（歴上1[46-47]）はハダド一世で、本節のはダビドのイスラエル征服当時（サムエル下8[13-14]）のハのように聞えるので、「メ・ザハブ出身の」と読む者もある。

(12) 「ハダドは死んだ」ではじまる歴上1[51]（この別表に符合する）がほのめかしているように、これらの酋長はダビドの守備隊（サムエル下8[14]）の援助をうけてダビドの代理としてエドムを治めた酋長のことかもしれない。また「所にしたがって」、「住所にしたがって」(40 43節) という文句が暗示しているように、これらの名は本来は人名よりもむしろ地名であったかもしれない。歴上1章中のエドム人の系図はこの別表以外のエドム人酋長のことについては何も述べていない。

第四部　ヨゼフの伝記(1)

37

1 ヤコブは父がとどまっていたカナアンの地に住んだ。2ヤコブの
家の歴史は次のとおりである。ヨゼフは十七歳の時、兄たちとと
に羊を牧していた。かれはまだ少年で、父の妻ビルハとジルパの子
らとともにいた。ヨゼフはかれらの悪いうわさを父に告げた。(3)

3 ヨゼフは年寄り子なので、イスラエルはすべての子のうちでかれをもっとも愛した。
4 そこでそでつきの長い服(4)をヨゼフにつくってやっていた。「兄たちは父がすべての兄弟
のうちでヨゼフをもっとも愛するのを見て、かれを憎み、かれについて穏やかに語るこ
とはできなかった。

5 ある時、ヨゼフは夢を見て、これを兄たちに告げた。するとかれ
6 らはますますヨゼフを憎んだ。「ヨゼフはかれらに言った、「どうか
わたくしが見た夢を聞いてください。「わたしたちは畑の中で束を
7 つかねていました。その時、わたしの束が起きて立つと、あなたたちの束がわたしの束
8 のまわりにきて、身をかがめたのです」。「兄たちはかれに、「おまえは王となってわれわ

れに君臨しようというのか。ほんとうに支配者となってわれわれを治めようというのか」
と言った。かれらはヨゼフの夢とそのことばのゆえに、ますますかれを憎んだ。
9 ヨゼフはまた夢を見て、それも兄たちに語った。かれは、「わたしはまた夢を見まし
10 た。太陽と月と十一の星がわたしに身をかがめたのです」と言った。「ヨゼフが父と兄
たちにこれを語った時、父はかれをしかって、「おまえはなんという夢を見たのだ。わた

【注】(1) ユダとタマルのことを物語る38章とヤコブの死を物語る49章を除けば、第四部はヨゼフに関するもので、劇的に描かれている。その主旨は50 20にあらわれている。すなわちヨゼフの兄たちの悪だくみから始まって、悪から善を引き出される神の摂理を物語っている(50 20a)。歴史的に見れば、この物語はイスラエル人がどうしてエジプトに来たかを説明したもので、民族としてのイスラエルの誕生（出エジプト記）の序となっている。裏切られて売られ、「多くの民の命」(50 20b)の救い主となるヨゼフは、人類の救世主キリストの前表。またエジプトの副王となって民の世話をするヨゼフは、全教会の守護者である聖ヨゼフの前表で、その名まで同じ（41 55b「ヨゼフのもとに行け」参照）。

(2) 本章はおもな二つの伝承からとってこれをたくみに織り合わせたヨゼフの伝記の第一幕で、1 2節は司祭伝承の断片からとった前置きである。1節は36 6—8の続き。2a節は創世記の十の「トレドス」の最後のもの（2注4参照）で、本来はこのあとにヤコブの子らの系図（35 22b—26）が続いていたものと思われる。

(3) 一般に認められている資料区分法による各記事の中に、ヨゼフが兄たちからきらわれた理由がそれぞれ一つずつある。すなわち、(一)ビルハとジルパの四人の子の不評判を父に告げたこと（2節、司祭伝承）、(二)父からつくってもらったそでつきの長い服（3—4節、ヤーウェ伝承）、(三)ヨゼフの夢（5—11節、エロヒム伝承）。著者はこの三つを実にたくみにつないでいる。

(4) ラテン語訳では「多彩の服」。族長とか高貴の者が着るような特殊な服で、優位を示すものであったらしい（サムエル下13 18—19参照）。ヨゼフは時々新しい服をつくってもらっていたのであろう（サムエル上2 19参照）。

しもおまえの母[5]も兄たちもおまえの所にやってきて、地に身をかがめるというのか」と
11 言った。[1]兄たちはかれをねたんだが、父はそのことを心におさめた[6]。
12 兄たちはシェケムで父の羊を牧するために出かけた。[13]イスラエ
ルはヨゼフに、「兄たちはシェケムで羊を牧している。さあ、わたし
兄たちの　悪だくみ　はおまえを兄たちの所へつかわそう」と言った。ヨゼフは、「はい」
14 と答えた。[1]イスラエルは、「さあ行きなさい。兄たちは無事か、羊
も無事かを見てきて、わたしに知らせなさい」と言って、ヨゼフをヘブロンの谷からつ
かわした。ヨゼフはシェケムに来た。
15 ひとりの男が野をさまよい歩いているヨゼフに出会い、かれに、「なにを捜しているの
16 ですか」とたずねた。[1]ヨゼフは、「兄たちを捜しているのです。兄たちがどこで羊を飼っ
17 ているか、どうぞ教えてください」と答えた。「その男は、「かれらはもうここを去りま
した。かれらが『ドタン[7]に行こう』と言っているのをわたしは聞きました」と言った。
18 そこでヨゼフは兄たちのあとを追い、ドタンでかれらを見つけた。[1]かれらはヨゼフをは
19 るかに見て、ヨゼフがかれらに近づかないうちに、かれを殺そうとたくらんだ。[1]かれら
20 は互に言った、「夢見る男がやってくる。さあ今こそかれをうちころし、これらの水だ
めの一つに投げいれて、悪い獣がかれを食い殺したのだと言おう。そしてかれの夢がど

うなるかを見よう[8]」。
21 レウベン[9]はこれを聞くと、「かれの命をとるのはやめよう」と言って、ヨゼフをかれら
22 の手から救った。[1]レウベンはかれらに、「血を流してはいけない。かれを荒野にある水
だめに投げ入れよ。しかしかれに手を下してはいけない」と言った。これは、ヨゼフを
23 かれらの手から救って、父のもとに返すためであった。
24 さてヨゼフが兄たちの所に来た時、かれらはヨゼフの長い服、かれが着ていたそでつ
きの長い服をはぎとった。[1]かれらはヨゼフを捕えて水だめの中に投げ入れた。その水
25 だめはからで、中には水がなかった[10]。[1]そしてかれらは食事をしようとしてすわった。

---

(5) 35注11後部参照。43[29]および注7も参照。
(6) ヤコブはヨゼフが無邪気に語る夢を、自分にとっては芳しくないが神からのものと悟る。ヨゼフが後に解く他の夢は彼の生涯の後半で重要な役割を演ずる（40—41章参照）。
(7) ドタンはシェケムから北に歩いて約四時間（二十二キロ）の所にあり、牧草に富む。東国からエジプトにいたる通商路にある。ここにある小山のようなつかは今日でも「テル・ドタン」と呼ばれ、その名をとどめている。巻末第五図参照。
(8) ユダヤ伝説では最初に言いだしたのはシメオンになっている。42[24]から判断したものであろう。シメオンはヨゼフを救おうとしたレウベンの次の兄。血を流すことを好むシメオンの性癖は34章に見られる。
(9) 多くの理由から本節はすぐあとの22節[22]よりも26節[26]によく結びつく。組み合わされる前の本来の言伝えの中ではレウベンではなくユダが提案したように語られたものと思われる。それはとにかく伝承を組み合わした本文中ではレウベンの提案になっている。
(10) パレスチナの水だめは通常下部は広く、上部は狭い。ヨゼフの訴えと苦しみは42[21]に述べられる。

時に目を上げて見ると、ギレアドからやってくるイスマエル人の
ヨゼフ、エジプトに売られる
隊商が見えた。らくだに樹脂、香脂、もつ薬[11]を背負わせて、エジプトに下るところであった。[26]ユダは兄弟たちに言った、「われわれが弟をうちころし、その血を隠して[12]なんの益があろう。[27]さあヨゼフをイスマエル人に売って、かれに手を触れないようにしよう。かれはわれわれの弟、われわれの肉身だから」。兄弟たちはこれを聞き入れた。
[28]ミドヤン人の商人が通りかかった時、かれはヨゼフを水だめから引き上げた。かれらはヨゼフを銀二十枚[13]でイスマエル人に売った。その人々はヨゼフをエジプトへ連れて行った。
[29]レウベンが水だめのところにもどってきて見ると、水だめの中にはヨゼフはいなかった。
[30]レウベンは自分の着物を引きさき、[31]かれらはヨゼフの長い服をとり、雄やぎをほふって、その血に長い服を浸した。[32]かれらはそのそでつきの長い服を父に送り届けて、「わたしたちはこれを見つけました。あなたの子の長い服かどうか、見さだめてください」と言った。[33]父はそれを見さだめて、「わたしの子の長い服だ。悪い獣が食い殺したのだ。ヨゼフはかみさかれてしまったのだ」と言った。[34]ヤコブは自分の着物を引きさき、荒布を腰にまとい、その子のために幾日も嘆いた。[35]むすこ娘はみな、かれを慰めようとして立ちあがったが、かれは慰められることを拒み、「いやわたしはよみのくにのむすこの所に嘆きながら下る」と言った。その父はヨゼフのために泣いた。
[36]かのミドヤン人はエジプトでファラオの宮人[15]である護衛隊長ポチファル[15]にヨゼフを売った。

---

(11) この三つの香料はエジプトで非常に重んじられた。死体をミイラにする時に用いられ、また薬にも使われた（43[11]、エレミヤ8[22] 46[11] 51[8]参照）。
(12) 復しゅうを天に呼び求めないように、血を隠すこと（4[10]および注6参照）。
(13) 五歳から二十歳までの男子の代価は二十枚（レビ27[5]参照）。おとなの奴隷の代価は三十枚（出21[32]参照）。ユダはこの値で主イエズスを売る（マテオ26[15] 27[3]）。
(14) ここに組み合わされているように見える二つの伝承を次のように分けることができる。(ｲ)エロヒム伝承――レウベンは弟たちを説き伏せてヨゼフを殺すかわりにからの水だめに入れさせる。あとでヨゼフを救いにもどってみると彼はいない。通りがかりのミドヤン人がヨゼフを見つけてエジプトに連れて行き、彼を売る。(18a 19―20 22 24 28a 28c 30……36。40[15]も参照)。(ﾛ)ヤーウェ伝承――兄たちはヨゼフの服をはいだあと、彼を殺す前に食事をしようとしてすわる。しかしエジプトに下るイスマエル人が近づいてきた時、ユダの提案に基づき、彼らはヨゼフを殺すかわりにイスマエル人に売る（18b 21〔注9参照〕 25―27 28b 31―33a……。45[4]参照）。イスマエル人がエジプトでヨゼフを売ることは39[1]に述べられる。著者はイスマエル人とミドヤン人を同一人物のようにし（両者ともアブラハムの子孫、異母兄弟）、またヨゼフが売られる時にはレウベンがいなかったことにして、この二つの伝承を組み合わしている。
(15) 39[1]および注2参照。

38

1 そのころの事であった。ユダは兄弟から離れて下って行き、ヒラ
2 **ユダの子ら**(1) というアドッラム人の近くに天幕を張った。(2) ユダはそこでシュア
というカナアン人の娘を見て、これをめとり、彼女の所にはいった。
3 彼女はみごもって男の子を産んだ。そしてその名はエルとつけられた。(3)
5 ごもって男の子を産み、その名をオナンとつけた。4 また彼女はみ
6 の名をシェラとつけた。シェラを産んだ時、彼女はケジブにいた。
7 タマルという嫁を迎えた。ユダの長子エルはヤーウェから悪者(わるもの)と見られた。ヤーウェ
はかれを殺された。
8 ユダはオナンに、「おまえの兄嫁の所にはいり、彼女に義弟として
9 **オナンの罪、** の務(4)を果し、兄のために子孫をおこせ」と言った。7 オナンはその子
ユダの恐れ が自分のものとならないことを知っていたので、兄嫁の所にはいっ
10 た時には、兄のために子孫を与えないように、地にながした。8 かれ
のしたことは、ヤーウェの目に悪い事であったので、ヤーウェはかれをも殺された。
11 そこでユダは嫁タマルに、「わたしの子シェラがおとなになるまで、おまえの父の家で
やもめのままでいなさい」と言った。ユダは、シェラもその兄たちのように死ぬといけ
ないと思ったからである。タマルは父の家に行って住んだ。(5)

【注】(1) 本章はヤコブの子らの系図を受け継ぎユダのことをしるしている。しかもこの系図はダビドを経て最後にキリストに至る(マテオ1 3—5 16)ので、本章はユダヤ人の歴史に欠くことのできないものである。表現法からヤーウェ伝承に属するものと思われるが、ヨゼフの伝記中のヤーウェ伝承とは全然無関係。ユダは37章までは兄弟たちとともにいて(37 26参照)、後に彼らがエジプトに下る時にまた兄弟たちといっしょになっているので(44 14 46 28参照)、この話は38章としてここに入れられている。しかし本章と前後にある章の年代は一致しない。これは各種伝承を比較する場合よくあることである。ここに述べられるオナンとユダの罪は、道徳上の見地から次章のヨゼフの貞潔の徳をきわ立たせるために役立っている。

(2) アドッラム、ケジブ(5節。ヨシュア33 44のアケジブと同じ)、チムナ、エナイム(12 14 21節)は、ユダ高地とペレシェト平野の間にある低い山地シェフェラ地方(マカバイ上12 38「低地」)の地名である(ヨシュア15 33 35 44 57、34)。ユダが兄弟から離れたことは歴史上はおそらくユダ族が仲間の種族から離れたことであって、このことは申33 7のユダ復帰の祈りの中に反映しているようである。シェラ、ペレツ、ゼラーはユダ族の祖として後に出る(民26 20)。

(3) ヘブライ文には主語がない。動詞は三人称単数男性能動形。「彼(ユダ)はその名をエルとつけた」と訳すこともできる。しかし25 26 29 34、士1 17と同じく非人称動詞であろう。4 5節の場合と同じく女性形になっている写本もある。子の名をつけるのは父よりもむしろ母であるとするのはヤーウェ伝承の特徴である。

(4) 子なくして死んだ者の兄弟は、その死者の妻をめとり、彼女に子を産ませ、その者の家系の断絶を防ぐべきことが、古代イスラエル人、アッシリア人、ヘト人などの間で律法として規定されていた(申25 5—10、ルト4 5—12、マテオ22 23—28参照)。聖書にはこの義務のあるのは弟だけとなっているが、ヘト人の律法ではまず弟、次に父となっている。タマルはヘト人であったかもしれない(エゼキエル16 3 45参照。ダビドの町エルサレムはヘト人の子孫として描かれている。タマルはダビドの先祖)。そうだとすれば、彼女がオナンの死後、義父のたねを宿そうとしたことは、ヘト人のおきてに基づいたもので、彼女は自分としては正当なことをしたのだと思っていたのかもしれない。26節のユダのことば「彼女はわたしよりも正しい」参照。

(5) レビ22 13、ルト1 8参照。イスラエルでは、未亡人は実父の家に帰って住んでも義父の支配をうけ、義父は彼女に新らしい夫を世話する義務があった。しかしユダは自分の最初の子がふたりとも死んだのはタマルのせいだと思って(トビト7 11参照)、シェラが成人した後でも彼をタマルに与えていない(14節)。

かなり日がたって、シュアの娘、ユダの妻は死んだ。(6) 喪が明けて
12 ユダ、タマルの
13 わなにかかる
から、ユダはその友アドッラム人ヒラとともに、自分の羊の毛を刈る者たちがいるチムナへと上って行った。「ある人がタマルに、「あなたのしゅうとは羊の毛を刈りにチムナに向かっています」と告げたので、14 タマルはやもめの服をぬいでヴェールをかぶり、身に布をまとってチムナへの道にあるエナイムの入口にすわった。彼女は、シェラが成人したのに、自分がまだその妻にされないのを知ったからである。

15 ユダが彼女を見た時、彼女は顔をおおっていたので、かれはあそびめと思った。16 かれは道ばたの彼女のかたわらに行き、子の妻であることを知らずに、「さあ、あなたの所にはいらせなさい」と言った。彼女が、「わたしの所にはいるために、何をくださいますか」とたずねると、17 「かれは、「わたしは群れの中からやぎの子を一匹送りましょう」と答えた。彼女は、「それを送ってくださるまで形(かた)をくださるのであれば」と言った。「ユダが、「形として何をあげようか」とたずねると、彼女は、「あなたの印形(いんぎょう)とひもとあなたが持っているつえを」(7)と答えた。かれはそれを与えて、彼女の所にはいった。彼女はかれによってみごもった。19 彼女は立ちあがって去り、ヴェールをぬいでやもめの服を着た。

20 ユダはその女から形(かた)を受けもどそうとして、自分の友アドッラム人に託してやぎの子

を送ったが、その女は見いだせなかった。21 「そこでその友は、「エナイムの道ばたにいたみこあそびめ(8)はどこにいますか」とその所の人々にたずねた。「はここにいたことがありません」と答えた。

22 かれはユダの所にもどってきて、「わたしはあの女を見いだせませんでした。その上、あの所の人々は、『みこあそびめはここにいたことがありません』と言いました」と言った。

---

(6) 著者は、ユダがやがてタマルにかかわって犯す罪を見のがしてはいない。しかしユダがもはや妻帯者ではないこと、彼はその女がむすこの妻タマルであることに気がつかなかったこと(15節)、および気がついてからは彼女と関係していないこと(26節)を、著者はことさらにしるしている。

(7) タマルが亡夫と血のつながりのある者のたねを宿そうとした如才なさが、この要求の中にあらわれている。彼女が求めた形はその持ち主がだれであるかをはっきり示すものである。これらの物は彼女が宿そうとした子の父はだれかを証明するばかりでなく、彼女を死の刑罰から救うものである(26節)。「印形」は指輪として指にはめられたり、特殊なひもを通して首にぶらさげられたりした。25節の「ひも」は復数形なので、胸にぶらさげる装身具を兼ねたものと考える者もある。「つえ」は歩行用ではなく権力の象徴として用いられ、通常その頭に特殊な装飾が施されていた。情欲のとりこになったユダはあとですぐ取りもどすからかまわないと考え、彼にとって貴重なこれらのものを手離す。しかし後に彼はその品を自分の評判を悪くしてまで取りもどす価値のあるものとは考えない(23節)。

(8) 直訳では「身をささげた者」。ここでは女神アスタルテに仕える女。古代異教徒の祭儀にはこのような「みこあそびめ」との結合が行われ、この行為によって女神と一致できると考えられていた。15:24節に「あそびめ」という普通のことばが用いられているので、ユダとタマルの行為は宗教を悪用したものではないということは明らかである。おそらくカナアン人ヒラが彼女を捜すにあたって、ユダの行為は情欲的なものではなく宗教的動機によるものであるとして、ていさいのいい尋ね方をし、「みこあそびめ」という語を用いたのであろう。申23:18にこのような祭儀的淫行はきびしく禁じられている。

23 た。ユダは、「われわれが恥をかかないように、そのまま彼女に取らせておこう。わたしは子やぎを送ったのだが、あなたはあの女を見いだせなかったのだ」と言った。

24 約三か月後のことである。ある人がユダに、「あなたの嫁タマルは**ユダ、タマルをさばく**　あそびめのふるまいをし、その上、そのあそびめのふるまいによってみごもっています」と告げた。ユダは、「彼女を引き出して焼き殺せ」と言った。「引き出される時、彼女はしゅうとのもとに人をつかわして、「これらの物の持ち主によってわたしはみごもったのです」と言わせた。また言った、「この印形とひもとつえはだれのものか、どうか見さだめてください」。ユダはこれらを見定めて、「彼女はわたしよりも正しい。わたしが彼女をわたしの子シェラに与えなかったためである」と言った。かれはこの時から彼女を知らなかった。

27 彼女の出産の時になって見ると、胎内の子はふたごであった。出産の時、ひとりの子が手を出したので、産婆は、「これが先に出てきたのだ」と言って、まっかな糸を取ってその手に結びつけた。しかしその子が手を引っこめると、兄が出てきた。産婆は、「あなたはなんという破れ目をつくったのか！」と言った。そこでかれの名はペレツとつけられた。あとで手にまっかな糸をつけた弟が出てきた。かれの名はゼラーとつけられた。

39

1 **ポチファル家におけるヨゼフ**(1)

2 さてヨゼフはエジプトに連れて行かれた。ファラオの宮人で護衛隊長であるエジプト人ポチファル(2)は、イスマエル人の手からかれを買い取った。「ヤーウェがヨゼフとともにおられたので、彼は栄える人となり、その主人エジプト人の家にいた。その主人は彼が主ヤーウェの彼に手がけることをすべて栄えさせられるのを見た。ヨゼフは主人の前に恵みを得て、その前に仕えた。主人は彼を家の監督とし、その全財産を彼の手にゆだねた。彼が家の監督とし、その全財産を彼に任せてから、ヤーウェはエジプト人の家をヨゼフのために祝福された。ヤーウェの祝福は家の内にも野にあるすべてのものにも及んだ。主人は自分のパンのほかは何も顧みなかった。ヨゼフは姿も美しく、顔だちも美しかった。

7 これらの事の後、主人の妻はヨゼフに目をつけて言った、「わたしと寝てください」。しかし彼は拒んで主人の妻に言った、「ごらんください、家のうちのことは何もわたしに任せず、自分のものはすべてわたしの手にゆだねられました。この家でわたしより大いなる者はなく、あなたを除いては何ひとつ彼はわたしに差しとめません。あなたは彼の妻ですから、どうしてこのような大悪を行なって神に罪を犯すことができましょうか」。彼女は日ごとにヨゼフに言いよったが、ヨゼフは聞き入れず、彼女のそばに寝ることも、ともにいることもしなかった。

11 ある日のこと、ヨゼフが仕事をするために家に入ったが、家の人はだれも内にいなかった。彼女はヨゼフの着物をつかまえて、「わたしと寝てください」と言った。しかしヨゼフは着物を彼女の手に残して外に出た。彼女は彼が着物を残して外に出たのを見て、家の人を呼んで言った、「ごらんなさい、主人はヘブル人をわたしどもに連れてきて、わたしどもをからかわせました。彼はわたしと寝ようとしてわたしのところに来ましたが、わたしは大声をあげました。彼はわたしが大声をあげたのを聞いて、着物をわたしのそばに残して外に出ました」。彼女はヨゼフの着物を自分のそばに置いて、主人が帰ってくるまで、この言葉をもって彼に告げた、「あなたがわたしどもに連れてきたヘブル人の奴隷があなたのところに来ましたが、彼はわたしをからかおうとしました。わたしが大声をあげたのを聞いて、着物をわたしのそばに残して外に出ました」。

19 主人は妻が「あなたの奴隷はこのようにわたしに仕えました」と言って告げたことばを聞いて、怒りを発した。ヨゼフの主人は彼を捕えて、王の囚人を入れる獄舎に入れた。

20 **獄舎におけるヨゼフ**(3)

獄舎にもヤーウェがヨゼフとともにおられ、彼に恵みを与えて、獄舎の長の前に恵みを得させられた。獄舎の長はヨゼフの手にすべての囚人を預けたので、彼らのなすすべてのことは彼がこれを行なった。獄舎の長は彼の手にゆだねたすべてのことを顧みなかった。ヤーウェが彼とともにおられ、ヤーウェが彼のなすことを栄えさせられたからである。

40

1 **献酌官長と調理官長**

これらの事の後、エジプト王の献酌官長と調理官長とが、その主人エジプト王に罪を犯した。パロはこのふたりの役人、すなわち献酌官長と調理官長とに対して怒ったので、彼らを護衛隊長の家の獄舎に入れた。ヨゼフが入れられた獄舎である。護衛隊長はヨゼフを彼らのもとにつかわして、彼らに仕えさせた。彼らは幾日か獄舎にいた。

5 ふたりは同じ夜に、エジプト王の献酌官長と調理官長とが獄舎に入れられた者であるが、おのおの夢を見た。おのおの夢の意味が異なっていた。朝になってヨゼフが彼らのところに来て見ると、彼らは憂えていた。彼はパロの役人で彼とともに主人の家の獄舎にいる者に尋ねて言った、「なぜ今日あなたがたの顔色はすぐれないのですか」。彼らは彼に言った、「われわれは夢を見たが、それを解く者がない」。ヨゼフは彼らに言った、「解くことは神のなさることではありませんか。どうぞそれをわたしに話してください」。

9 献酌官長はその夢をヨゼフに話して言った、「わたしの夢に、わたしの前にぶどうの木があった。

(9) ユダは、タマルがシェラと結ばれることになっているにもかかわず姦淫の罪を犯したので、家長として罰を言い渡す。後のイスラエルでは、火刑は司祭の娘が私通をした場合だけに限られ(レビ21⁹)、普通の者に対する刑罰としては石殺しが規定される(申22²³⁻²⁴、ヨハネ8⁵)。また父と嫁との近親相姦の場合、両者とも死の刑罰を受けることが規定される(レビ20¹²)。後に定められたこの禁令の線に沿って、著者は26節後部の文句をつけ加えたのであろう。

(10) 「破れ目」の義。門がとざされている時、急いで外に出るために壁を破る。そういう場合の「破れ目」。

(11) 語根の基本的意義は「輝く」。したがって「赤」とか「まっか」の義を帯びている。同名は36¹³ ¹⁷ ³³にエサウの孫およびエドム人として出る。ペレツとゼラーの誕生は25²⁴⁻²⁶のヤコブとエサウ(別名エドム「赤」)の誕生に並行する。

【注】(1) 38章によって切断されたヨゼフの伝記は本章に続く。明らかに、ほとんどが37章に用いられたヤーウェ伝承で、エロヒム伝承が少しつけ加えられている(例、1節のポチファルの身分、次注参照)。ヤーウェ伝承では「宮人ポチファル」ではなく、ただの「エジプト人」。この「エジプト人」は金持の地主のようで、その妻がヨゼフに拒まれた彼を獄舎に入れる。獄舎がしらは、地主がヨゼフにその家をつかさどらせたように、囚人をことごとくヨゼフの手にゆだねる。エロヒム伝承(40章)はヨゼフが誘惑され投獄されたことについては、全然伝えていないようである。ヨゼフの主人ポチファルは妻を持たないほんとうの宦官(かんがん)であったかもしれない(次注参照)。ポチファルは護衛隊長としてファラオの囚人を監督し、そのしもべヨゼフはファラオの怒りを招いた酒人がしらとパン焼き人がしらを託される。そしてこのところで二つの伝承がふたたび組み合わされる。伝記の主題、すなわちヨゼフに対する神の摂理と配慮は特に3—5節と21—23節にはっきりあらわれている。

(2) 著者はエロヒム伝承による37³⁶の「ファラオの宮人である護衛隊長ポチファル」をここでくり返し、二つ

におられたので、かれのすることはすべてうまくいった。かれはエジプト人である主人
3 の家にいた。「その主人は、ヤーウェがヨゼフとともにおられ、ヨゼフが手をつけること
4 はすべてヤーウェが成功させられるのを見た。「ヨゼフは主人に気に入られ、その身近に
仕えた。主人はヨゼフにかれの家をつかさどらせ、その持ち物をすべてヨゼフの手にゆ
5 だねた。「かれがヨゼフに自分の家とすべての持ち物をつかさどらせた時から、ヤーウェ
はヨゼフのゆえに、そのエジプト人の家を祝福された。ヤーウェの祝福は、かれの家と
6 畑にあるすべてのものの上に及んだ。「かれは自分のものをすべてヨゼフの手にまか
せ、自分が食べる物のほか[3]は、ヨゼフがいるので、何事にも気をつかわなかった。ヨゼ
7 フは姿がよく、顔だちもよかった。

8 **主人の妻の誘惑**[4]　このようなことの後、主人の妻がヨゼフに目をつけて、「わたしと
いっしょに寝なさい」と言った。「かれは拒んで主人の妻に言った、「ごらんください。わたしの主人はわたしがいるので、家のことに
9 ついては、何も気をつかわず、その持ち物をすべてわたしの手にゆだねています。「この
家の中でわたしの力が及ばないものはありません。また、主人はあなたのほかはどんな
10 ものでも惜しみません。あなたは主人の妻ですから。それなのに、どうしてわたしがそ
んな大[だい]それた事をして、神に罪を犯すことができましょう[5]」。「彼女は日ごとにヨゼフに

言い寄ったが、かれは彼女のそばに寝ることも、ともにいることも聞き入れなかった。
11 ある日いつものように、かれが仕事をしようとして家の中にはいった時、そこには家の
12 者がだれもいなかった。「そこで彼女はヨゼフの服をつかんで、「わたしといっしょに寝
なさい」と言った。しかしヨゼフは服を彼女の手にのこして、外に逃げて行った。

の伝承を組み合わしている。「ポチファル」は41[45]のオンの司祭でヨゼフの義父にあたる「ポチフェラー」（おそらくヤーウェ伝承）と形が少し異なるだけで同名。「ポチフェラー」は「ラ（太陽神）からのおくりもの」の義で、聖書以外の古代文献にもあらわれるエジプト名。ここで「宮人」と訳されている語の本来の意味は「宦官」。古代では宮人はほとんど宦官であった。宦官が妻をもったという例がなかったわけではない。著者が両伝承を組み合わしたところから見ると、この語の意味を拡張して「宮人」と解したほうがよさそうである。「護衛隊」と訳されている語の本来の意味は「畜殺人」または「料理人」（サムエル上9[23]-[24]参照）。ギリシャ語訳ではポチファルは「料理人がしら」、「……または畜殺人がしら」となっている。

（3）民族的偏見ゆえの制限と解する者もあるが（43[32]参照）、本句は「彼が食べること以外は」を意味する慣用句と解したほうがよかろう。

（4）古代エジプトの道徳は高くなかった。姦婦の甘いことばに気をつけるようにと若者を戒めている格2[16]5[3]6[24]7[5-21]参照。

（5）主人に感謝していること、および彼女が主人の妻であることは、ヨゼフが彼女の要求を拒んだ最初の二つの理由である。このようなことは当時のエジプト文学の中にもあるいは見られたかもしれない。第三の、神に罪を犯さないためという理由は、聖書にふさわしいものである。現存原文の9a節は「この家の中では主人はわたしより強い力をもっていません」。本訳はギリシャ語訳に基づいて現存原文中の形を少し改めたもので、文脈から見てこのほうが適当と思われる。

彼女はかれが服を自分の手にのこして外に逃げたのを見て、14家
不当なヨゼフの投獄
の者どもを呼び、かれらに言った、「ごらんなさい、ヘブライ人を連れてきたものだから、わたしたちに戯れて困ります。かれがわたしといっしょに寝ようとしてはいってきたので、わたしは大声で叫びました。15かれはわたしが声を上げて叫ぶのを聞いて、服をわたしのそばにのこしたまま、外へ逃げて行きました」。16彼女はかれの服を手もとに置いて、かれの主人が家に帰るのを待った。17彼女は夫にこれらのことを語った、「あなたがわたしたちの所に連れてきたヘブライ人のしもべは、わたしに戯れようとして、わたしの所にはいってきました。18わたしが声を上げて叫んだので、かれはわたしのそばに服をのこしたまま、外へ逃げました」。19主人は妻が、「あなたのしもべはわたしにこのようなことをしたのです」と語ることばを聞いて、怒りに燃えた。20ヨゼフの主人はかれを捕え、王の囚人がつながれている獄舎にかれを入れた。

ヨゼフ、獄舎を任される

21ヨゼフは獄舎の中にいたが、ヤーウェはヨゼフとともにおられ、かれにいつくしみを施し、獄舎がしらの心にかなうようにされた。22獄舎がしらは獄舎にいる囚人をすべてヨゼフの手にゆだねたので、かれらはそこですべてのことを、ヨゼフのさしずどおりに行

なった。23獄舎がしらはヨゼフの手にゆだねたことは何事にも干渉しなかった。ヤーウェがかれとともにおられ、かれが何をしても、ヤーウェが成功させられたからである。

ヨゼフ、二つの夢を解く

40 このようなことの後、エジプト王に対して罪を犯した。2ファラオは酒人がしらとパン焼きがしらのふたりの宮人(1)にむかって怒り、3護衛隊長の家にかれらを監禁した。すなわちヨゼフがつながれている獄舎に入れたのである。4護衛隊長はかれらの世話をするようにヨゼフに命じたので、ヨゼフはかれらに仕えた。かれらはしばらくの間、監禁されていた。

5さて獄舎につながれていたエジプト王の酒人とパン焼き人とは、ふたりとも同じ夜に

【注】(1) 酒人がしらとパン焼きがしらにはポチファルと同じ称号「宮人」が与えられている。この称号は直訳では「宦官」の義（39注2参照）。彼らは実際に宦官であったかもしれない。彼らの職名についている「かしら」という語も、獄舎がしらの「かしら」（39[21-23]）も、ポチファル護衛隊長の「長」（37[31]39-40[3-4]）もみなヘブライ語では同じ。ファラオの酒食の毒味は彼らの主要任務の一つであった。当時のエジプト文献は、[20]節にしるされているような公のさばきがあったこと、およびファラオをたおそうという政治的陰謀が宮廷内で行われ、それが成功したということを物語っている。本章と次章はほとんどエロヒム伝承とみなされている。宮人はさばきをうけるまでポチファルの家に監禁され、ポチファルはヨゼフに彼らの世話を命じる。ヨゼフを囚人とし、ふたりの宮人は獄舎につながれていたとするのはおそらくヤーウェ伝承。ふたりはヤーウェ伝承中では「かしら」ではなく、王に仕えるただの酒人とパン焼き人となっていたようである。

それぞれ意味ありげな夢を見た。一朝、ヨゼフがかれらの所に来て見ると、かれらはしょげていた。[2]そこでヨゼフは主人の家に自分とともに監禁させているファラオの宮人に、「どうしてきょうはあなたがたは顔色が悪いのですか」とたずねて言った。一かれらはヨゼフに、「わたしたちは夢を見ましたが、これを解く者がいないのです」と答えた。ヨゼフはかれらに、「解くことは神のなさることではありませんか。どうぞわたしにそれを話してください」と言った。

そこで酒人がしらは夢をヨゼフに語って言った、「夢の中で一本のぶどうの木がわたしの前にありました。一そのぶどうの木には三つのつるがあって、芽を出し、花が開き、ぶどうのふさが熟してきました。一わたしの手にファラオの杯があったので、わたしはそのぶどうをつんで、それを杯にしぼり、その杯をファラオの手にささげました」。一ヨゼフはかれに言った、「その解きあかしはこうです。三つのつるは三日のことです。一三日以内にファラオはあなたの頭を上げて、あなたをもとの位にもどすでしょう。あなたは前にファラオの酒人であった時のように、ファラオの手にその杯をささげるでしょう。一しかしあなたに運が開けた時には、わたしのことを覚えていて、わたしに好意を示し、この家からわたしを出すように、ファラオにわたしのことを話してください。一わたしはヘブライ人の地からさらわれてきた[3]者です。ここでも、わたしはろうやに入れられるようなことは、何もしたことがありません」。

パン焼きがしらはヨゼフが都合よく解きあかしたのを見て、ヨゼフに言った、「わたしの夢の中でも、わたしの頭の上に菓子[4]のかごが三つありました。一いちばん上のかごには、ファラオの食べ物としてパン焼き人がつくったあらゆるものがはいっていましたが、鳥が頭の上のかごからそれを食べていました」。一ヨゼフは答えて言った、「その解きあかしはこうです。三つのかごは三日のことです。一三日以内にファラオはあなたの頭を[5]上げ、あなたを木につるすでしょう。そして鳥はあなたの肉をあなたから取って食べるでしょう」。

---

(2) ふたりがしょげているのは、監禁ゆえに夢を解く人の所に行けないからである。エジプト文献の一つに、夢の中の当人の行為を解く夢判断の基準をくわしくしるしたものがある。ヨゼフは「解くことは神のなさることではありませんか」(8節)と彼らに言って、夢を正しく解くのは神の力によるもので、人間がつくった解きあかしによるものではないと教えている。

(3) 直訳では「盗まれて」。これはエロヒム伝承によるヨゼフのエジプト下りに一致する(37注14(1)参照)。しかしヨゼフは自分が奴隷の生れでもなければ、とりこでもなく、自由人であること、そして不正にも奴隷にされてエジプトに連れられてきたのだということを述べ、兄たちのしうちについては語っていない。

(4) この語はここに一回出るだけ。「白い」という義の語根からきたものであろう。「白い」は高級な粉を意味し、ここでは「菓子」をさす。この語を「穴」という義の語根からきたものとして「枝編みの(かご)」と解する者もある。

(5) 二つのヘブライ語写本とラテン語訳には本句が欠けている。本節後部に適切に用いられている語句を、こ

さて三日目はファラオの誕生日であった。その時、ファラオはすべての家来のために祝宴を張り、家来の前で酒人がしらの頭とパンの職にもどし、酒人がしらはファラオの手にその杯をささげた。しかしファラオは、ヨゼフがかれらに解いたとおり、パン焼きがしらをつるした。酒人がしらはヨゼフのことを思い出さず、忘れてしまった。

夢判断の実現

41

ファラオの夢(1)

二年の後、ファラオは夢を見た。かれがナイル川(2)のほとりに立って、見ていると、りっぱな肥えた七頭の雌牛が川から上がってきて、葦の中で草をはんでいた。するとそのあとから、醜いやせ細った他の七頭の雌牛が川から上がってきて、岸にいるさきの雌牛のかたわらに立った。そして醜いやせ細った雌牛はりっぱな肥えた七頭の雌牛を食いつくした。そこでファラオは目がさめた。

ファラオはまた眠ってふたたび夢を見た。一本の茎に太ったよい七つの穂が出てきた。するとそのあとから、東風に焼けた細い七つの穂がはえてきた。そして細い穂は太って実った七つの穂をのみこんだ。そこでファラオは目がさめたが、それは夢であった。

あくる朝、ファラオは気をもみ、人をつかわしてエジプトのすべての賢人を呼んだ。ファラオはかれらに自分の夢を語ったが、それを解く者はひとりもいなかった。(3)「その時、酒人がしらがファラオに言った、「わたしはきょうこそ、わたしのあやまちを申しあげましょう。「かつてファラオはそのしもべらにむかって怒り、わたしとパン焼きがしらを護衛隊長の家に監禁したことがあります。「わたしとかれは同じ夜、夢を見ました。それぞれ意味ありげな夢を見たのです。「そこにはわたしたちといっしょに、護衛隊長のしもべ、ヘブライ人の若者がいました。わたしたちがかれに話し

ここに重複して書き入れたもの。この書入れは反対の意味をはっきりさせている。「頭を上げる」の普通の意味は、酒人の場合のように(13節)、獄舎から出して(列下25[27]、エレミヤ52[31]参照)、喜ばせること(4[7]参照)。著者は20節で本句を用い、同様に二重の意味を持たせている。罪ありげなパン焼き人は、自分の夢も酒人の夢と同じように「三」で始まっているので、自分につごうのいい解きあかしを期待する。ヨゼフは最後のところまでまったく同じ解きあかしをして、パン焼き人の不当な望みをささえている。凶兆としての鳥については[15]11および注7参照。

【注】(1) 本章中に描かれている多くの事がらは、当時のエジプト文献にしるされている一般生活と宮廷生活の模様に符合する。

(2) 直訳では「川」。この語は多分エジプトからの外来語で常に冠詞がついている(次節以下の「川」の場合も同じ)。したがって「ナイル川」をさす。エジプトの全生命は毎年土地に生命を与えるナイル川の出水にかかっている。水かさが高くて広範囲にわたれば、収穫が多く、低ければ収穫は少なかった。

(3) うらないをするエジプトの司祭は、同時に魔術師でもあったということが、出[7]11,22[8]3から明らかである。神から与えられたヨゼフの知恵は、後のヤーウェの代理者としてのモイゼとアーロンの場合と同じく(出[7]12[8]14—15[9]11)、彼らの知恵にまさる。ダニエル[1]20—[2]23も参照。

ますと、かれはわたしたちの夢を解きあかしました。かれはそれぞれの夢にふさわしく
13 解きあかしたのです。「そしてかれがわたしたちに解きあかかあかしたとおりになって、わ
たしはもとの位にもどされ、パン焼き人はつるされました」。

14 ファラオはヨゼフを呼びに人をつかわしたので、かれは急いでろ
ヨゼフ、ファラオの夢を解く
15 うやから連れ出された。ヨゼフはひげをそり、服を着替えてから、
ファラオの前に出た。「ファラオはヨゼフに、「わたしは夢を見たが、
それを解く者がいない。聞くところによると、おまえは夢を聞いて
16 それを解くそうだが」と言った。「ヨゼフはファラオに答えて、「わたしではありません。
17 ファラオにさいさきのよい答を与えるのは神です」と言った。「ファラオはヨゼフに語
18 った、「夢の中でわたしが川の岸に立って見ていると、「肥えたりっぱな七頭の雌牛が川
19 から上がってきて、葦の中で草をはんでいた。「するとそのあとから、活気のない非常に醜
いやせた他の七頭の雌牛が上がってきた。わたしはこのような醜いものをエジプト全国
20 で見たことがない。「このやせた醜い雌牛は、さきの肥えた七頭の雌牛を食いつくした。
21 腹に入れても腹に入れたことがわからないほど、はじめと同じく醜かった。そこでわた
22 しは目がさめた。「また夢の中でわたしが見ていると、一本の茎に実ったよい七つの穂が
23 出てきた。「するとそのあとから、東風に焼け、枯れた細い七つの穂が出てきた。24 そし

て細い穂は、七つのよい穂をのみこんだ。わたしはうらない師に話したが、わたしにそ
のわけを説明してくれる者はいなかった」。

25 ヨゼフはファラオに言った、「ファラオの夢は一つであります。神がなさろうとするこ
26 とをファラオに示されたのです。
27 か年のことであります。夢は一つなのです。「七頭のよい雌牛は七か年のことで、七つのよい穂も七
の雌牛も七か年のことです。実のはいっていない東風に焼けた七つの穂もそうです。こ
28 れらは七か年のききんのことです。(4)「こういう事は、わたしがファラオに申しあげたとお
29 り、神がなさろうとすることをファラオに啓示されたものです。「エジプト全国には七
30 か年の大豊作がおとずれます。「しかしそのあとに七か年のききんがおこって、すべての
31 豊作のことはエジプトの地で忘れられてしまい、ききんは地を荒らしつくします。「その
32 豊作は、あとに続くききんがあまりひどいので、この地では忘れられてしまいます。(5)「夢
が二度もファラオにくり返されたのは、このことが神によって定められ、神がそれをする

(4) はじめのところがまったく同じように「三日」のことであると解かれた酒人の夢とパン焼き人の夢の場合のように、ファラオの夢もそれぞれ二つの部分のはじめのところがまったく同じく七年と解かれている。またパン焼き人の夢の解きあかしが最後のところで急に恐ろしく変っているように、ここでもそうなっている。夢全体の詳しい説明は次節以下。40注5参照。

(5) この表現は21節のファラオのことばに符合する。両節ともヘブライ文では同じ。

ために急いでおられるからです。

33 今ファラオは思慮深い賢い人を見つけて、エジプトの地を治めさせたほうがよいでし
34 ょう。ファラオはさっそく国中に監督官を置き、七か年の豊作のうちに、エジプトの地
35 から五分の一を取り立てるほうがよいでしょう。これからの豊年の食糧をかれらにす
べて集めさせ、麦を食糧としてファラオの管理のもとに、町々に積み上げさせ、保管さ
36 せたほうがよいでしょう。(6)その食糧は、エジプトの地におこる七か年のききんに対する
国のたくわえとなり、この地はききんで滅びることはないでしょう」。

37 ファラオとすべての家来はこれを名案だと思った。38 そこでファ
ヨゼフの立身と結婚
ラオは家来たちに、「神の霊のやどっているこのような人を見いだせ
るだろうか」と言った。39 ファラオはヨゼフに言った、「神はこのこ
とをことごとくおまえに示されたからには、おまえのように思慮深
40 く賢い人はいない。おまえにわたしの家をつかさどらせよう。そしてわたしのすべて
の民をおまえのことばに従わせよう。わたしはただ王位の点でおまえにまさっているだ
41 けである(7)」。41 ファラオはヨゼフに言った、「見よ、わたしはおまえをエジプト全国のつか
42 さにする」。42 ファラオは印形(いんぎょう)の指輪を手からはずしてこれをヨゼフの手にはめ、かれに
43 亜麻織の服を着せ、その首に金の首飾りをかけた(8)。43 そして自分の持っている第二の車に

44 かれを乗せた。かれの前では「アブレク(9)」ということばが叫ばれた。このようにしてか
れをエジプト全国のつかさにしたのである。44 ファラオはヨゼフに言った、「わたしはフ
ァラオである。おまえの許しがなければ、エジプト全国において何人も手足を動かすこ
とはできない」。

45 ファラオはヨゼフの名をザフェナト・パネアーとつけ、オンの司祭ポチフェラーの娘
アセナトを妻として与えた(10)。

---

(6) 33—35節のファラオに対するヨゼフの忠告は多様にわたっている。これらは、単に一大計画をいろいろな角度から見たものであると説明することもできるが、二つの伝承によるそれぞれ並行した二つの計画が組み合わされたものであると見るほうが順当である。すなわち、㈠ひとりの監督官が任命され、その者が収穫の五分の一を徴収してそれを直接ファラオの管下に置く。㈡多くの地方監督官が任命され、その者らが(余剰)食糧をことごとく徴収してそれを各町に保管する。

(7) ヨゼフの地位は「宰相」に相当する。この文字はエジプトの各宰相の墓碑銘にあらわれている。「おまえのことばに従わせよう」を現存原文にしたがって直訳すれば、「おまえの口に接ぷんする」、すなわち「おまえが言う時には(土に)接ぷんする(土下座のように)」の意であろう。

(8) 多分特殊な首飾り。おそらくファラオ自身が首にかけていた物と同じようなもの。「亜麻織」と訳されている語はエジプトからの外来語で、このような服は高位の者だけが着た。

(9) これもエジプトからの外来語で、その正確な意味についてはいろいろの説がある。これと類似音のヘブライ語「ベレク」は「ひざまずけ」すなわち「下にいよ」の意であろう。エジプト語にその由来を求めれば、単に「気をつけ」の意。これに似たような事がペルシャでも行われたようにしるされている(エステル6:6—11参照)。次節の「わたしはファラオである」という文句は宣誓の礼式。

(10) 「ザフェナト・パネアー」はおそらく「神が語られたので(名を受ける)その者は生きている」の義。ラ

46 ヨゼフはエジプトの地をまわった。ヨゼフがエジプトの王ファラオの前に立った時は
三十歳であった。かれはファラオの前を去ってエジプトの国をあまねくめぐった。(11)

47 さて七か年の豊作の間、地は豊かに物を産した。(12) 48 ヨゼフはエジプ
豊年と凶年、 トの地に豊作があった時の七か年の食糧をことごとく集め、それを
ヨゼフの子ら 町々にたくわえさせた。すなわち各町のまわりにある田畑からとれ
た食糧を、それぞれその町の中にたくわえさせた。ヨゼフは麦を海
49 の砂のように非常に多く積みあげ、ついに量りきれなくなったので、量ることをやめた。
50 ききんの年がおとずれる前に、ヨゼフにふたりのむすこが生れた。これはオンの司祭
51 ポチフェラーの娘アセナトが産んだのである。ヨゼフは、「神はわたしのすべての苦労
とわたしの父の家のすべてのことを、わたしに忘れさせました」と言って、長子の名を
52 メナッシェとつけた。(13) 「またかれは、「神はわたしの苦しみの地で、わたしに子を生ませ
てくださいました」と言って、二番目の子の名をエフライムとつけた。(13)

53 さてエジプトの地の七か年の豊作は終った。54 そしてヨゼフが言ったように、七か年の
ききんがおとずれはじめた。すべての国々はききんであったが、エジプト全国には食物
55 があった。「そしてエジプト全国がききんに悩んだ時、人々はファラオに叫んで食物を求
めた。ファラオはすべてのエジプト人に、「ヨゼフのもとに行き、かれがおまえたちに言

56 うことをせよ」と言った。「ききんは地の全面に広がったので、ヨゼフはすべての麦の倉
57 を開いてエジプト人に売った。ききんはエジプトの地においてはげしかった。「全地の
人々が買い付けのために、エジプトのヨゼフのもとに来た。ききんが全地においてはげ
しかったからである。

42

ヨゼフの兄たち エジプトへ(1)

2 ヤコブはエジプトに穀物があると知って、その子らに、「おまえた
1 ちはなぜ顔を見合わせているのか」と言った。「かれはまた、「エジ
プトには穀物があるということを、わたしは聞いた。おまえたちはあ

テン語訳では「世の救い主」。その他多様に解されている。「アセナト」は「(女神) ネイトに属するもの」の義。「ポチフェラー」については39注2参照。「オン」のギリシャ名は「ヘリオポリス」(太陽の町)。カイロの北東十二キロの所にあり、太陽神「ラ」をまつった有名な神殿があった。ここの大司祭はエジプト政界で相当の力を持っていた。したがってファラオ自身がとりきめたヨゼフの結婚は、最高階級の一家族にヨゼフを結びつけたものである。

(11) 45節後部と46節後部は重複記事 (注6参照)。

(12) 直訳では「手いっぱいに」。

(13) ヨゼフの子の名がヤコブの子の場合のように(29[31]–30[24])、俗間語原説によって説明されている。すなわち「ナッシャニ (彼はわたしに忘れさせた)」は「メナッシェ」を、「ヒフラニ (彼はわたしに子を生ませた)」は「エフライム」を説明したものである。

【注】(1) 本章は前の二章と同じく主としてエロヒム伝承による。これに反して続く二つの章 (43 44) はほとんど大部分がヤーウェ伝承とみなされている。本章中にヤーウェ伝承の形跡をはっきりのこしている箇所は27–28[38]節 (注6参照)。

そこへ下って、あそこでわたしたちのために買ってきなさい。そうすれば、わたしたちは
3 生きながらえて、死を免れるであろう」と言った。ヨセフの兄十人は麦を買うた
4 めエジプトに下った。しかしヤコブはヨセフの弟ビンヤミンを兄たちとともにつかわさ
5 なかった。災がビンヤミンにふりかかるといけないと思ったからである。(2)イスラエルの
子らは人々にまじって買いにやってきた。ききんがカナアンの地にあったからである。
6 ヨゼフはエジプトの国の支配者であり、この地のすべての民に穀物を売るのはかれで
7 あった。ヨゼフの兄たちは来て、かれの前で顔が地につくほど身をかがめた。ヨゼフは
兄たちを見て、それとわかったが、かれらに対して見知らぬ者のようにふるまい、荒々
しく語ってかれらに、「おまえたちはどこから来たのか」と言った。かれらは、「カナア
8 ンの地から食糧を買いにまいりました」と答えた。
ヨゼフは兄たちだとわかったが、かれらはヨゼフだとわからなかった。ヨゼフはかつ
てかれらについて見た夢のことを思い出した。そしてかれらに、「おまえたちは回し者
10 で、この国のすきをうかがいに来たのだ」と言った(3)。かれらは言った、「いいえ、ある
11 じよ、しもべらは食糧を買いに来たのです。わたしたちはみな、ひとりの人の子で、正
12 直者です。しもべらは回し者ではありません」。ヨゼフはかれらに、「そうではなくて、
13 おまえたちはこの国のすきをうかがいに来たのだ」と言った。かれらは言った、「わた

したちしもべは十二人兄弟で、カナアンの地にいるひとりの人の子です。末の弟は今わ
14 たしたちの父といっしょにおります。一そしてもうひとりはいなくなりました」。ヨゼフ
はかれらに言った、「わたしがおまえたちに言ったとおりだ。おまえたちは回し者だ。
15 おまえたちは次のことによってためされるのだ。ファラオの命(いのち)にかけて言う(4)。おまえ
16 たちの末の弟がここに来ないかぎり、おまえたちはここから出ることはならない。一おまえ
たちのうちのひとりをつかわして、弟を連れてこさせよ。その間おまえたちはつないで

---

(2) エジプトにおけるヨゼフと兄たちの間におこった劇的事件のかなめとなっているのは、ビンヤミンに対する愛である。第一回のエジプト行きの時、ビンヤミンを行かせなかったのは父ヤコブの愛である。そして彼は第二回のエジプト行きにビンヤミンが加えられることを悲しむ(38節)。ヨゼフのビンヤミンに対する特別の愛と彼に会いたがっている気持は、特に43[30]45[12][14]にあらわれている。最後に兄たちも父を愛するがゆえに弟ビンヤミンを愛したということ、特にかつてはヨゼフを売ろうと提案したユダのビンヤミンに対する愛が44[16-34]にしるされている。このことは、彼らがヨゼフに罪を犯してから後、ほんとうに改心したことを示すものである。

(3) ヨゼフに夢を思い出させたのは、兄たちが彼に身をかがめたからである(37[7-10]参照)。彼らが回し者と見られてとがめられたのは当然のことである。大ぜいでやってきたので、エジプト東部国境の監視隊に怪しまれ(アジアからの敵は常にこの攻めやすい地点を突いた)、直接にヨゼフの取調べをうけることになったのであろう。あるいは、ヨゼフがききんのために兄たちがエジプトに来るだろうと予想して、監視隊に彼らがあらわれた時には連れてくるようにと命令していたのかもしれない。ヨゼフのとがめに対する兄たちの答もきわめて当然なものである。スパイを派遣するにあたって兄弟十人が選ばれることはありえないし、またその父がそれに同意するということもありえない。

(4) 直訳では「ファラオのいのち」。エジプト人が宣誓する時の礼式。41[44]のファラオのことば参照。

おかれる。おまえたちにまことがあるかどうか、おまえたちのことばがためされるわけだ。もしまことでなければ、ファラオの命にかけて言うが、おまえたちは回し者だ」。

17 ヨゼフはかれらをみないっしょに、三日の間、監禁所に入れた。

18 三日目にヨゼフはかれらに言った、「こうすれば、おまえたちの命

19 **シメオン、人質として残される**

は助かるであろう。わたしは神をおそれる者だ。もしおまえたちが正直者ならば、兄弟のうちひとりをおまえたちのいる監禁所につないで、おまえたちは家族の飢えを救うために、穀物を携えて行け。

20 そして末の弟をわたしのところに連れてこい。そうすれば、おまえたちのことばがほんとうだということになり、おまえたちは死を免れるであろう」。かれらはそのようにした。

21 「かれらは互に言い合った、「まことに弟のことについては、われわれにとががある。かれがわれわれにあわれみを求めた時、われわれはかれの心の苦しみを見ながら、これを聞き入れなかったのだから。それでこの苦しみがわれわれにかかってきたのだ」。

22 ルベンはかれらにこたえて言った、「わたしは『あの子に罪を犯すな』と言ったではないか。しかしおまえたちは聞き入れなかった。その上、見なさい。かれの血が求められているのだ」。

23 かれらはヨゼフが聞きわけているのを知らなかった。相互の間に通訳者

24 がいたからである。ヨゼフはかれらから離れた所に行って泣いた。やがてもどってき

て、かれらに語った。そしてかれらの中からシメオンを捕え、かれらの目の前で縛った。(5)

27 ヨゼフは、かれらの入れ物に麦を満たし、各人の銀をそれぞれの袋の中に返すように、また道中の食料をもかれらに与えるように命じた。そのとおりかれらになされた。

26 れらはその穀物をろばに背負わせて、そこを去った。

27 が、自分のろばにまぐさを与えようとして袋を開いたところ、自分の銀を見た。しかも、

28 それが麦袋の口にあった。「そしてごらんなさい。わたしの麦袋の中に」と言った。かれらは肝をつぶし、身をふるわせて、それぞれ互に見合い、「神がわれわれになさったこのことは、いったいなんだろう」と言った。(6)

---

(5) ヨゼフはレウベンがあの時自分を救おうとしたことを聞き、次の兄シメオンを縛る。37注8も参照。ヨゼフが三日目に最初の条件を急にゆるめたのは(16節と19節を比べよ)、彼が神をおそれる者であり、また彼らの家族の飢えをあわれんだからである(18-19節)。最初のきびしい条件と三日間いっしょに監禁したことは、兄たちに過去の罪を反省する機会を与えた。

(6) 27-28節はヤーウェ伝承からひかれたものと一般にみなされている(注1参照)。この伝承は、お金の発見を帰路の出来事とし(27節)、ひとりが発見したのではなく、兄弟全員がそれぞれ発見したように伝えたものであろう。同伝承に基づく43[21]にこのことがはっきりしるされている。しかしながら、ここではお金を最初に発見した者のことを述べただけで、すぐに断ち切られている。そして、あとの九人のことについては帰ってからお金が発見されたとするエロヒム伝承(35節)にゆずっている。

29 かれらはカナアンの地にいる父ヤコブのもとに帰り、その身にお
30 **兄らの帰国とヤコブのうれい** こったことをすべて、告げて言った、「かの国のあるじである人が、
31 わたしたちに荒々しくものを言い、わたしたちをかの国を探る回し
者とみなしました。「そこでわたしたちはその人に『われわれは正
32 直者で回し者ではありません。われわれは十二人兄弟で、同じ父の子です。ひとりはい
なくなりましたが、末の弟は今カナアンの地で父といっしょにいます』と言いました。
33 かの国のあるじであるその人はわたしたちに言いました、『次のことによって、おまえた
ちが正直者かどうかがわかる。おまえたち兄弟のうち、ひとりをわたしのとこ
34 ろに残し、おまえたちは家族の飢えを救うために、穀物を持って行け。「そして末の弟
をわたしのところに連れてこい。そうすれば、おまえたちが回し者でなく正直者であ
ということを、わたしは知るであろう。その上で、おまえたちのきょうだいを返してや
る。そしておまえたちは、この地をめぐり歩いてよい』」。
35 かれらが袋をあけてみたところ、おのおのの袋の中には、各人の金づつみがあった。
36 かれらも父も金づつみを見て、恐れた。「父ヤコブはかれらに、「おまえたちはわたしに
子を失わせようとしている。ヨゼフはいなくなり、シメオンもいなくなった。そしてビ
ンヤミンをも取ろうとしている。わたしの上に、これらすべての事がのしかかっている

37 のだ」と言った。「レウベンは父にこたえて、「もしわたしがあなたのもとにビンヤミン
を連れて帰らなければ、わたしのふたりのむすこを殺してください。かれをわたしの手
にまかせてください。わたしはきっとあなたのもとにかれを連れ帰ります」と言った。
38 ヤコブは、「わたしの子をおまえたちといっしょに行かせない。かれの兄は死に、ただひ
とりあの子が残っている。おまえたちの行く道すがら、あの子に災がおこれば、おまえた
ちはこのしらがのわたしを、悲しみのうちによみのくにに下らせることになるのだ」と
言った。(7)

43

1 その地のききんはひどかった。2 かれらがエジプトから持ってき
兄ら、ビンヤミンを伴う(1) た穀物を食べつくした時、父はかれらに、「またわれわれのために行
3 って、少し食糧を買ってきなさい」と言つた。「ユダは父にこたえ
て言った、「あの人はわたしたちに、『おまえたちの弟がいっしょで

(7) 36節後部でヤコブは子をひとりずつなくし、その損失をうけるのは、父としての自分であると言って嘆く。そこでレウベンが37節でこれにこたえて、もし自分がビンヤミンを連れて帰らなければ、人質として自分のふたりの子（後の46:9では子は四人）のいのちをさしあげると言う。これに続く38節はヤーウェ伝承でこれによれば、ヤコブがひたすら愛したふたりの子というのは、愛妻ラケルの産んだヨゼフとビンヤミンをさす。「よみのくにに下る」という表現はヤーウェ伝承の特徴（37:35 44:29参照）。死後も死の時の「悲しみ」（あるいは喜び）の状態が続くものだと信じられていた。49:28–33のヤコブの実際の死と対照せよ。

【注】(1) 著者はここでエロヒム伝承からヤーウェ伝承に切り替えているようである（42注1参照）。ヤーウェ伝承中

4 なければ、おまえたちはわたしの顔を見ることはならない』(2)ときびしく言いました。」も
しわたしたちといっしょに弟をつかわすならば、わたしたちはあなたのために下って行
5 って食糧を買ってきます。」もし弟をつかわさないならば、わたしたちは下って行きま
せん。あの人がわたしたちに『おまえたちの弟がいっしょでなければ、おまえたちはわた
6 しの顔を見ることはならない』と言ったからです」。そこでイスラエルは、「なぜおまえ
たちは、もうひとりの弟がいるとあの人にしゃべって、わたしを苦しめるのか」と言っ
7 た。」かれらは、「あの人がわたしたちと身内のことを詳しくたずね、『おまえたちの父
はまだ生きているか。おまえたちに弟がいるのか』と言ったので、問われるままにわた
したちはかれに告げたのです。かれが『弟を連れて下ってこい』と言いだすとは、思い
8 もよりませんでした」と言った。
ユダは父イスラエルに言った、「あの子をわたしといっしょにつかわしてください。わ
9 たしたちは立って行きます。そうすれば、あなたもわたしたちもわたしたちの家族も、
生きながらえて、死を免れるでしょう。わたしはかれの身代り(3)になります。わたしの手
からあの子を求めてください。もしわたしがかれをあなたのところに連れて帰らず、あ
10 なたの前にあの子を立たすことができなければ、わたしはあなたに対して永久に罪を負
います。」もしわたしたちがためらわなかったならば、今までにもう一度行って帰ってこ

られたでしょうに」。
11 父イスラエルはかれらに言った、「それならこのようにしなさい。この地の名産であ
る、香脂を少しと、みつを少し、樹脂ともつ薬、ふすだしうの実とへんとう(4)を入れ物に
12 入れて、あの人に贈り物として持って行きなさい。おまえたちの麦袋の口に返されてい
い。おまえたちの銀をまた持って行って返すのです。これ
13 はまちがいかもしれない。」さあ、弟を連れてあの人のもとに行きなさい。14エル・シャ
ッダイ(5)がおまえたちにその人のあわれみを得させてくださるように。そうすれば、その

の主役は、レウベンではなくユダである。これと同じような相違点は37章に用いられている両伝承間にも見られる(37注14参照)。また44[25-29]にあらわれているように、ヤーウェ伝承中ではビンヤミンのエジプト行きの問題は、イスラエル(ヤコブは本伝承中ではこう呼ばれる)が、子らにふたたびエジプト行きを命ずるまではおこらなかったようである。本伝承に属する42[38]の語句はおそらく本章のはじめのほうにあったもので、ここから抜き取られて前章最後部に移され、レウベンの提案に対する最後的拒否として用いられたのであろう。本章における本来の箇所では、おそらくユダに対する一応の拒否となっていたのであろう。両伝承間の他の相違点については、7節と42[12-13]を比べよ(42注6も参照)。シメオンが人質にされていることは、14[23]節を除く箇所では述べられていないので、両節中のシメオンに関する句は、著者がエロヒム伝承に基づいて織りこんだものとみなされている。

(2) 33[10]の類句およびその注4参照。
(3) ユダは自分が言いだした保証について、心を変えていない(44[32-34]参照)。
(4) 六つの品目のうち三つは37[25]のものと同じ(37注11参照)。
(5) 17注[2]参照。神の名称として用いられているこの語は、エロヒム伝承とヤーウェ伝承中では、ここ以外ど

人はもうひとりのきょうだいとビンヤミンをおまえたちに返すでしょう。もしわたしが
子を失わなければならないのなら、失ってもしかたがない」。

15 そこでその人たちは贈り物をととのえ、倍額の銀を持って立ち、
ヨゼフ、兄弟ビンヤミンを伴ってエジプトへ下って行った。そしてヨゼフの前に
16 **らをもてなす** 立った。ヨゼフはビンヤミンがかれらとともにいるのを見て、自分
の家をつかさどる者に、「この人たちをわたしの家に連れて行きなさ
17 い。この人たちは、昼にわたしといっしょに食事をするから、家畜をほふってしたくしな
さい」と言った。18 その者はヨゼフの言ったとおりにして、その人たちをヨゼフの家に連
れて行った。19 その人たちはヨゼフの家に連れて行かれたので、「はじめの時にわれわれ
の麦袋の中に返してあったあの銀のことで、われわれは連れてこられたのだ。われわれ
をおとしいれて襲い、捕えて奴隷にし、ろばをも取ろうとするのだ」と恐れて言った。
20 そこでかれらはヨゼフの家をつかさどる者に近づき、家の入口で話しかけて、言った、
21 「失礼ですが、あるじよ、わたしたちは最初、食糧を買いに下ってきたのです。22 ところが
とまり場所に着いて麦袋を開いてみると、各人の銀がそれぞれの麦袋の口にあって、銀
の重さはもとのままでした。そこでわたしたちはそれをまた持ってきました。23 そして食
糧を買うために、ほかの銀も持ってきました。わたしたちの麦袋の中にだれが銀を入れ

23 たのか、わたしたちは知りません」。24 その人は、「安心しなさい。恐れてはいけません。
あなたたちの神、あなたたちの父の神が麦袋の中に宝を入れて、あなたたちに賜わった
のです。あなたたちの銀は、わたしが受けとりました」と言った。そしてかれはシメオ
ンをかれらのところに連れてきた。25 その人はヨゼフの家にかれらを連れてはいり、水を与えて足を洗わせ、またろばにも
まぐさを与えた。26 かれらはそこで食事をするのだと聞いたので、昼に来るヨゼフのため
に、贈り物をととのえた。

27 さてヨゼフが家に帰ってきた時、かれらはその家に携えてきた贈り物をヨゼフにささ
げ、かれの前で地に身をかがめた。28 ヨゼフはかれらの安否を問い、そして、「おまえた
ちの父、おまえたちがさきに話したあの老人は元気か。まだ生きておられるか」とたず
ねた。29 かれらは、「あなたのしもべであるわたしたちの父は元気で、まだ生きておりま
す」と答え、ひざまずいて身をかがめた。(6) 30 ヨゼフは目を上げ、同じ母の子である弟ビン

こにも出ないので、創世記の著者もしくは編者が司祭伝承にならってここに書き入れたものか、あるいはすでにあった語と取り替えたものとみなされている。

(6) 宰相から父の安否をたずねられたことは、兄弟たちにとって大きな光栄なので、彼らはヨゼフの前にふたたび身をかがめる。ここにおいてヨゼフの夢は三度果されたわけである（26節42$_6$37$_{7-10}$参照）。

ヤミンを見て「これはおまえたちがわたしに話した末の弟か」と言い、また、「わたしの子よ、神がおまえを恵まれるように」と言った。ヨゼフは急いでその場を去った。弟なつかしさに胸がせまり、涙が出かかったからである。かれは奥のへやに退いて、そこで泣いた。

やがてヨゼフは顔を洗って出てきた。そして自分をおさえて、「食事を運べ」と言った。食事は、ヨゼフとかれらとヨゼフの相伴をするエジプト人とに、それぞれ食卓を異にして運ばれた。エジプト人はヘブライ人とともに食事をすることはできなかった。それはエジプト人の忌みきらうところであったからである。かれらはヨゼフの前にすわらされたが、長幼の序にしたがっているので、互に驚き合った。ヨゼフのもとから別の分がかれらに運ばれたが、ビンヤミンの分は他のだれのものよりも五倍も多かった。かれらはヨゼフとともに飲み、酔いごこちになった。

44

ヨゼフは自分の家のつかさに命じて言った、「あの人々の麦袋に運べるだけの食糧を満たし、各人の銀をそれぞれの麦袋の口に入れなさい。そしてわたしの杯、あの銀の杯を、いちばん年下の者の麦袋の口に、穀物の代金といっしょに入れておきなさい」。かれはヨゼフが言いつけたことばのとおりにした。「夜が明けると、その人々はろばとともに送り出された。

た。「かれらが町を出てまだそう遠く行かないうちに、ヨゼフは自分の家をつかさどる者に言った、「さあ、あの人々のあとを追いなさい。そして追いついた時、かれらに、『なぜあなたたちは悪をもって善に報いるのですか。これはわたしのあるじが飲み、また占

---

(7) ヨゼフとビンヤミンはその年齢にかなりのひらきがあった。37[3]ではヨゼフはまだ一番末の子のようであるが、第二の夢を見たころ、すなわち彼が売られる少し前と思われるころには、37[9]の「十一」という数から、当然ビンヤミンも生れていたと解される。したがってヨゼフはせいぜい乳幼児のころのビンヤミンしか知らなかったのであろう。

(8) 「忌みきらう」という語は宗教上の意味を含んだものである。不浄なものとして避けなければならない行為、物、人に適用される。同語は46[34]にも出る。かかる食事の差別は古代ヘブライ人にとって非常にふしぎに思われたにちがいない。

(9) ヨゼフの食卓から運ばれた別の分は礼遇のしるし。ビンヤミンに特別な分が与えられているが、これに似たもう一つの例はサムエル上9[23-24]に見られる。

【注】(1) 二度目の時に袋に返された穀物の代金は、物語の中でそれ以上の役割を演じていないので、この記述は一度目の出来事が、ここに重複してしるされたものと考える者が多い。この見解の根拠となる理由もあるが、これに反する理由もかなりある。またギリシャ語訳では、杯は「袋の口」ではなく、ただ「袋」の中に入れられたことになっている。これは12節に符合する。しかし以上二つはたいした問題ではない。

(2) ギリシャ語訳ではこのあとに「なぜあなたたちはわたしから銀の杯を盗んだのか」をつけ加えている。ラテン語訳、シリア語訳もこれに似た語句をつけ加えて意味をはっきりさせている。しかしヘブライ語原文にしるされているそのままでも、意味はじゅうぶん成立する。この場合は家令は前の晩にいいつけられたことから(2節)、ヨゼフが何を意味しているかをよく知っている。そして兄弟らに問いただす時には神秘さを高めるために、家令は盗まれた貴重な器の名を言わなかったのかもしれない。これは8節で兄弟らが「銀か金」というあいまいな言い方をしたことに符合する。

いをする物(3)ではありませんか。あなたたちのしたことは悪いことです』と言いなさい」。
6 かれはその人々に追いついて、このことばを語った。7かれらは答えて言った、「なぜ
あるじはこのようなことをおっしゃるのですか。しもべらは決してそのようなことはい
8 たしません。¬わたしたちは麦袋の口に見つけた銀をカナアンの地からあなたのもとに
返しに来たほどです。どうしてわたしたちがあなたのあるじの家から銀か金を盗みまし
9 ょう。¬しもべらのうちだれのところで、それが見つかっても、その者は死に、その上わ
10 たしたちはあるじの奴隷となりましょう」。¬かれは、「それではあなたたちのことばを聞
き入れてこのようにしよう。それを持っているのを見つかった者は、わたしの奴隷とな
11 らなければならない。ほかの者は無罪です」と言った。¬かれらは急いでそれぞれの麦
12 袋を地におろし、おのおのその麦袋を開いた。¬年上の者からしらべ始め、いちばん年下
13 の者におよんだところ、杯はビンヤミンの麦袋の中に見つかった。¬その時、かれらは着
物を引きさき、おのおのそのろばに荷を負わせて町に引き返した。
14 ユダと兄弟たちがヨゼフの家に来た時、かれがまだそこにいたので、かれらはヨゼフ
15 の前で地にひれ伏した。¬ヨゼフはかれらに、「おまえたちはなんということをしたのだ。
わたしのような者は占い当てるということを、おまえたちは知らないのか」と言った。
16 ユダは、「わたしたちはあるじに何を言い、何を話しえましょう。また、どうして身のあ

かしを立てえましょう。神はしもべらのあやまちをあばかれました。さあ、わたしたち
17 も、杯を持っているのを見つかった者も、あるじの奴隷となりましょう」と答えた。¬し
かしヨゼフは、「わたしは決してそのようなことはしない。ただ杯を持っているのを見つ
けられた者だけが、わたしの奴隷となれ。ほかの者どもは安心して父のもとに帰るがよ
い」と言った。

18 **ユダの嘆願**　この時ユダはヨゼフに近づいて言った、「あるじよ、お願いです。
しもべにひと言あるじの耳に入れさせていただきたいのです。しも
べをおこらないでください。あなたはファラオのようなかたですから。
19 ら。¬さきにあるじは『おまえたちに父や弟があるか』と言って、しもべらにたずねまし
20 た。¬そこでわたしたちは『年とった父と小さな年寄り子があります。その兄は死にま

---

(3) 後に占いはイスラエルにおいて厳禁される（レビ19[26]、申18[10]参照）。しかし古代の司祭とか高貴の人たちは常習的にこれを行った。占いの方法にはいろいろあった。杯を用いる次の一例はバビロンから伝わったものである――水のはいった器に油を落し、その油の動き方を見て、規定にしたがって吉凶を読む。ヨゼフ自身は夢判断の力を神のたまものと考え（40[8]および注2 41[16]参照）、また同様に占う力も人間にはないとみなしているが、ここではエジプトの賢人のようにふるまい、兄弟たちもそう思いこんでいる。15節でヨゼフが兄弟たちに言った質問は、はっきりこの意味を含んでいる。「占う」というこの動詞が出る創世記中の他の箇所はただ一つだけで、異教徒ラバンによって話されている（30[27]および注13参照）。

したので、同じ母から生れて残ったのはかれだけです。父はかれをかわいがっています』
21 とあるじに答えました。「するとあなたはしもべらに『その者をわたしのところに連れ
22 てこい。わたしはかれに目をかけたい』と言われました。「わたしたちはあるじに『あの
若者は父を離れることはできません。もしかれが父を離れるならば、父は死ぬでしょう』』
23 と言いました。「しかしあなたはしもべらに『おまえたちの末の弟がいっしょに下って
24 くるのでなければ、おまえたちはふたたびわたしの顔を見ることはならない』と言われ
ました。「わたしたちはあなたのしもべである わたしの父のもとに帰った時、父にあるじ
25 のことばを告げました。「そして父が『われわれのためにまた行って、少し食糧を買って
26 きなさい』と言った時、「わたしたちは『下って行くことはできません。もし末の弟も
いっしょならば、わたしたちは下って行きます。末の弟がわたしたちといっしょでなけ
27 れば、あの人の顔を見ることができないからです』と答えました。「するとあなたのしも
べであるわたしの父は『おまえたちも知っているように、わたしの妻はふたりの子をわ
28 たしに産んだのだが、「ひとりはわたしから離れて出て行ってしまった。あの子はかみさ
かれてしまったのだ、とわたしはその時言った。そして今になってもわたしはあの子を
29 見ない。「おまえたちがまたこの子をわたしから取り去って、災がかれの身におこったな
らば、おまえたちはこのしらがのわたしを、苦しみのうちによみのくにに下らせること

30 になるのだ』とわたしたちに言いました。「ですから、わたしがあなたのしもべである
31 たしの父のもとに帰った時に、この若者がわたしたちといっしょでなければ、父の魂は
かれの魂に固く結びついていますので、「若者がいないことを見たら、父は死んでしまう
32 でしょう。しもべらはあなたのしもべである しらがの父を、悲しみのうちによみのくにに
下らせることになります。「しもべは父に対して若者の身代りになり、『もしわたしがかれ
33 をあなたのところに連れて帰らなければ、わたしはあなたに対して永久に罪を負います』
と言ったのです。「ですから、お願いします。しもべを若者の代りにあるじの奴隷として
34 とどまらせ、若者を兄たちといっしょに帰らせてください。「この若者を伴わずに、どうし
てわたしは父のもとに帰ることができましょう。父におこる不幸を見るに忍びません(4)」。

---

(4) 本章後半のすべてを占めるユダの話はヨゼフの伝記の頂点である。ヨゼフは兄弟らを試み、彼らが過去の罪を後悔しているだけでなく、完全に改心して善徳のほうに進んでいるというじゅうぶんな証拠を得た。以前は父にかわいがられている年寄り子ヨゼフをねたむ心から、兄弟らはヨゼフを奴隷としてエジプトに売り、無情にも父を欺いて野獣に殺されたように思わせた。しかしこのたびは父に今かわいがられている年寄り子ビンヤミンを愛する心から、また父を悲しませたくない気持から、兄弟らはエジプトに奴隷としてとどまる覚悟をする(16節)。かつてヨゼフを売る提案をしたユダは、特に自分が父に言いだした保証(43:9)について心を変えず、ビンヤミンに代って奴隷として残ると申し出る。ヨゼフは彼らが改心しているこれ以上の証拠を見つけることはできなかった。ユダが最後に年老いた父のことに触れた時の話し方は、ヨゼフを強く感動させ、これ以上、身の上を隠しておくことができないほどにした。彼が身をあかしたことは、次章冒頭に劇的にしるされる。

45

1 **ヨゼフ、自分のことを打ち明ける**(1)

ヨゼフはかたわらに立っているすべての人々の前で、自分をおさえきれなくなったので、「みんな、わたしのところから出てくれ」と叫んだ。そして兄弟たちに自分のことを打ち明けた時には、だれもかれのところに残っていなかった。

2 ジプト人はこれを聞き、ファラオの家の者もこれを聞いた。

3 ヨゼフは兄弟たちに、「わたしはヨゼフです。わたしの父はまだ生きていますか」と言ったが、兄弟らはこれに答えることができなかった。

4 かれらはヨゼフを前にして驚き恐れたからである。(2)

5 ヨゼフは兄弟たちに、わたしに近寄ってください」と言い、かれらが近寄ると続けて言った、「わたしはあなたたちがエジプトに売った弟ヨゼフです。

6 わたしをここに売ったからといって、あなたたちは気を落したり、残念がってはいけません。というのは、神が命を救うために、わたしをあなたたちより先につかわされたからです。(3)

7 この二年の間、国中にききんがあり、あとの五年の間は耕すことも刈入れることもないでしょう。

8 神はあなたたちの子孫をこの地におこし、またあなたたち多くの者の命を救うために、わたしをあなたたちより先につかわされたのです。

9 ですからわたしをここにつかわしたのはあなたたちではなく、神です。神はわたしをファラオの父、(4) ファラオの全家のあるじ、エジプト全国の統治者とされました。

10 あなたたちは急いでわたしの父のところに帰り、むすこのヨゼフが次のように申していると伝えなさい、『神はわたしを全エジプトのあるじにされました。ためらわずにわたしのところに下ってきてください。

11 あなたはゴシェン(5)の地に住み、子と孫と、羊と牛と、あなたのすべての持ち物といっしょに、わたしの近くにいることになります。

【注】(1) 本章では著者が両伝承による大団円を組み合わせているので、同じことがらが相つぐ節にあるいは同一の節の中に、ちょっと異なった形でくり返されている。しかし巧みに組み合わされているので、場面の劇的雰囲気が高められている。

(2) 兄弟らは50_{15}以下で言っているように、ヨゼフの復しゅうを恐れたのである。これはエロヒム伝承によるものとみなされている。本節中のヨゼフの質問はユダが父について語ったあととしては適当とは思われない。これもおそらくエロヒム伝承によるものであろう。本伝承によるヤコブに関する事がらは、42_{13}から本節までには何も述べられていない。年齢からみてヤコブがいつ死ぬかわからないので、ヨゼフは兄弟らをせきたてている(9_{13}節)。ヤーウェ伝承中では4節はおそらく1節に直結していたのであろう。

(3) ヨゼフは兄弟らを心からゆるし、自分が復しゅうしないということを彼らに得心させるために、本節と8節と50_{20}に次の真理を訴えている——神の摂理はすべてに及び、善をもたらすためには神は人間の悪でさえ利用される。この深遠な真理はヨゼフの伝記を特色づけるものである(37注1参照)。

(4) 「親友、相談役」の義。エステル3_{13f} 8_{12l}〔13_{6} 16_{11}〕、イザヤ22_{21}、マカバイ上11_{32}参照。

(5) エジプトの北東部国境に近い地方。ここでイスラエル人は牧者としての今までの生活を続けることができた。この地方は牧畜のためには「一番よい所」であり、ここでファラオの群れも飼うことになる(47_{6})。47_{11}では「ラーメセス地方」と呼ばれる(47注5参照)。ギリシャ語訳には「アラビアの」という語がつけ加えられているが、おそらくこれはヨシュア10_{41} 11_{16} 15_{51}にしるされている他の「ゴシェン」と区別するためのものであろう。

五年もありますから、あなたも家族もあなたのすべての持ちものも困らないように、わ
12 たしはそこであなたを養いましょう』。」あなたたちも弟ビンヤミンもその目で見るとお
13 り、あなたたちに口ずから話しているのは、このわたしです(6)。」エジプトにおけるわたし
のすべての栄えと、あなたたちが見たいっさいの事を、わたしの父に話して、急いで父
14 をここに連れてきなさい」。ヨゼフは弟ビンヤミンの首をだいて泣き、ビンヤミンもヨ
15 ゼフの首にすがって泣いた。ヨゼフはすべての兄弟に接ぷんし、かれらをだいて泣いた。
16 そのあとで、兄弟たちはかれと語った。

17 **ファラオ、ヤコブを招く**

ヨゼフの兄弟がきたという知らせがファラオの家に伝わった。そ
のことはファラオとその家来にとってよいことであった(7)。ファラ
18 オはヨゼフに言った、「兄弟たちにこう言いなさい、『あなたたちは
このようにしなさい。獣に荷を積んでカナアンの地にもどり、父と
あなたたちの家族を連れてわたしのところに来なさい。わたしはエジプトの国にできる
最上のものをあなたたちに与え、あなたたちはこの地のすぐれたもの(8)を食べさせます』。
19 またおまえはかれらにこう命じなさい、『あなたたちはこのようにしなさい(9)。あなたたち
の子どもと妻たちのために、エジプトの国から車を持って行き、父を乗せてきなさい。
20 あなたたちの物に未練を残してはいけません。エジプト全国にできる最上のものは、あ

なたたちのものとなるからです』」。

21 イスラエルの子らはそのとおりにした。ヨゼフはファラオの命に
22 **兄弟らまたカナアンへもどる** したがってかれらに車を与え、道中の食料も与えた。またかれらす
べてにそれぞれ晴れ着を与えたが、ビンヤミンには銀三百枚と晴れ
23 着五かさねとを与えた。父にはエジプトの最上のものをのせた十
24 頭のろばと、父のための麦とパンと道中の食べ物をのせた十頭の雌ろばとを贈った。ヨ

---

(6) ヨゼフはもう通訳なしに直接兄弟らに話す(42[23]参照)。兄弟らが目で見た事実および次節に述べられることは、エジプトのふしぎな宰相はまさしくヨゼフであるということを、兄弟らが父に納得させる材料となっている。

(7) ファラオと家来が喜びの色をあらわしたことは、当時のファラオはエジプト人ではなく、ヨゼフと兄弟らと同じ東国出身のヒクソスである、という説によく適合する。「ヨゼフのことは何も知らず」、イスラエル人を苦しめた出1[8]の「新しい王」は、最後のヒクソスがエジプトを追われたあとに立ったエジプト出身のファラオのひとりである。

(8) 直訳では「地の脂肪」。近東では動物の脂肪は特別なごちそうとみなされた。

(9) 現存ヘブライ語原文を直訳すれば、「おまえ(単数名詞、ヨゼフのこと)は命じられる。これをせよ(複数動詞、兄弟らに対する命令)」。本訳はギリシャ語訳、ラテン語訳にならった。車についてのさしずはヨゼフ自身の命令(27節に暗示)ではなく、ファラオがヨゼフを通じて命じたものだという記述は(本節と21節)、創世記の著者もしくは編者が本来の伝承につけ加えたものであろうと思われるふしがある。この差異は46[5]にも反映している。すなわちギリシャ語訳の46[5]はヘブライ語原文のように「ファラオ」ではなく、45[27]にならって「ヨゼフ」となっている。

ゼフは兄弟たちを送り出した。かれらが出発するにあたって、ヨゼフは、「あなたたちは途中心配(10)してはいけません」と言った。

25 かれらはエジプトを出て上って行き、カナアンの地にいる父ヤコブのもとにもどった。
26 かれらは父に告げて、「ヨゼフはまだ生きていて、エジプト全国の統治者です」と言った
27 が、父は感動しなかった。かれらを信じなかったからである。そこでかれらは、ヨゼフが自分たちに語ったことばをことごとく父に話した。かれは自分を乗せるためにヨゼフ
28 がつかわした車を見た。その時、かれらの父ヤコブは元気づいた。「イスラエルは、「満足だ。わたしの子ヨゼフはまだ生きている。わたしは死ぬ前に、ヨゼフに会いに行こう」と言った。

46

1 イスラエルは自分の持ちものをことごとく携えて出発し、ベエル
2 **ヤコブ、エジプトへ**(1) ・シェバに来た時、父イサクの神に会食祭のいけにえをささげた。
3 神が夜の幻のうちにイスラエルに語り、「ヤコブよ、ヤコブよ」と言われたので、かれは、「はい」と答えた。
4 「わたしは神である。おまえの父の神である。エジプトに下ることをおそれるな。わたしはあそこでおまえを大きな民にするからである。
5 下り、また必ずおまえを導き上る。ヨゼフはその手でおまえの目を閉じるであろう(2)」。

5 ヤコブはベエル・シェバを立った。イスラエルの子らはヤコブを乗せるために、ファ
6 ラオがつかわした車に、父ヤコブと子どもらと妻たちとを乗せた。
7 は、家畜とカナアンの地で得た家財を携えて、ことごとくエジプトに来た。
8 こ、孫、娘、孫娘、すなわち子孫をことごとく連れてエジプトに来たのである。

エジプトに来たイスラエルの子らの名は次のとおりである。

9 **ヤコブの子らの系図**(3)
10 ブとその子ら、すなわちヤコブの長子レウベン。
ハノク、パッル、ヘツロン、カルミ。
ヤミン、オハド、ヤキン、ゾハル、およびカナアンの女が産んだ子

---

(10) このヘブライ語は他の箇所で「なじり合う」を意味する場合もある。ギリシャ語訳、ラテン語訳はこの意味に解している（42$^{22-23}$参照）。

【注】（1）本章のはじめの数節は前章における混合記事の続きである。このあとには司祭伝承によるまとまった部分（6$^{1-27}$節）が続く。残りの部分と次章の数節を除く大部分（47注3参照）はヤーウェ伝承による。

（2）ベエル・シェバにおけるこの出現を伝える伝承と、45^{28}の伝承とは異なる。45^{28}ではイスラエルはヨゼフのもとに行くことをためらっていないが、ここではヤコブがこの地を離れることを恐れたことになっている（この地ではヤコブに出現の時約束されたもの、例、17^{8} 26$^{3-4}$ 35^{12}）。かつての出現の時、しかも同じようなきびん状態の時、ヤコブの父イサクはエジプト行きを禁じられている（26^{2}）。神はヤコブのメソポタミア行きの時ベテルで言われたように（28$^{13-15}$）、ここでも彼を守りまた連れ帰ると保証される。しかしこの場合はヤコブを後世、大きな民として導き上るという意味。

（3）本系図の出所は民26$^{5-50}$の出所に非常に近い。出1^{5}にヤコブの直系子孫は七十人（申10^{22}参照）としるさ

11 シャウル。-レビの子らはゲルション、ケハト、メラリ。12 ユダの子らはエル、オナン、
シェラ、ペレツ、ゼラー。しかしエルとオナンはカナアンの地で死んだ。ペレツの子ら
13 はヘツロンとハムルである。-イッサカルの子らはトラー、プワ、ヨブ、シムロン。14 ゼ
15 ブルンの子らはセレド、エロン、ヤーレエル。-これらはパッダン・アラムでレアがヤコブ
に産んだ子らである。彼女は娘ディナも産んだ。その子女は合わせて三十三人である。(4)
16 ガドの子らはジフヨン、ハッギー、シュニ、エツボン、エリ、アロディ、アルエリ。
17 アシェルの子らはイムナ、イシュワ、イシュビ、ベリア、およびこれらの妹セラー。ベ
18 リアの子らはヘベルとマルキエル。-これらはラバンがその娘レアに与えたジルパの子
らで、彼女がヤコブに産んだのは十六人である。
19 ヤコブの妻ラケルの子らは、ヨゼフとビンヤミン。20 エジプトの地でヨゼフに生れた子
らはメナッシェとエフライム。これらはオンの司祭ポチフェラーの娘アセナトが産んだ
21 ものである。-ビンヤミンの子らはベラー、ベケル、アシュベル、ゲラ、ナアマン、エ
22 ヒ、ロシュ、ムッピム、フッピム、アルド。-これらはラケルがヤコブに産んだ子らで、
合わせて十四人である。
23 ダンの子はフシム。24 ナフタリの子らはヤーゼエル、グニ、エゼル、シッレム。25 これ
らはラバンがその娘ラケルに与えたビルハの子らで、彼女がヤコブに産んだのは合わせ

て七人である。
26 ヤコブに属しかれから生れてエジプトに来たすべての者は、かれの子らの妻を除けば、
27 合わせて六十六人である。-エジプトでヨゼフに生れた子はふたりである。それでエジ
プトに来たヤコブ家の者は合わせて七十人である。(5)

れているが、この「七十」は象徴的意義をもつ数字である。エジプト移住者（出1-1と本章8節とを比べよ）としてのこれら七十人の名をあげるために本系図がここにはめられたのであろう。しかしカナアンで死んだエルとオナンの名も含まれているので（12節）、本系図の最初のものはヨゼフの伝記に適合したものではないということがわかる。またユダの嫁の系統である彼の孫（12節）、ビンヤミンの十人の子（21節、ギリシャ語訳ではこのうち六人が孫、ひとりがひまご）も含まれているので、年代上、前章の記事にあまり調和しない。これは七十人が移住したことに合わせるために、本来の系図を多少変えたものである。注4 5参照。他の系図との相違点については10節と民26 12および歴上4 24、13節と民26 24歴上7 1、16節と民26 15-16、21節と民26 38-40とを比べよ。

（4） エルとオナンは本来の系図中でレアの三十三人の「むすこ」の中に数えられていたものと思われる（12節）。しかし彼らはエジプトに移住していないので、彼らに取って代ってヤコブが8節に、「娘」ディナが15節に書きこまれている。ところがヤコブはレアの子孫とはいえないので、ラビたちは系図をさらに正確なものにしようとして、ヨケベド（出2-6 20参照）をレビの娘としてつけ加えている。ヨケベドはちょうどエジプト入国の時に生れたとラビたちは言っている。

（5） 26節の「六十六」はヤコブ、ヨゼフおよびそのふたりの子を減じた数。したがって本節の「七十」はヤコブを含む（申10 22も同じ）。出1 5はそうではない。ギリシャ語訳は20節でヨゼフのふたりのむすこが生んだ三人のむすことふたりの孫の名をつけ加え、27節前半でうかつにヤコブとヨゼフをその子孫といっしょに数え、合わせて九人が「エジプトでヨゼフに生れた」ことにしている。そしてこの「九」を26節の「六十六」に加えて「七十五」としている。聖ステファノは使7 14でこの「七十五」を用いている。

28 さてイスラエルはユダをヨゼフのもとにつかわして、ヨゼフがゴ
29 **ヨゼフ、ヤコブをゴシェンに迎える** シェンで自分の前にあらわれるようにさせた。(6) そしてかれらはゴシ
ェンの地に来た。29 ヨゼフは車のしたくをさせ、父イスラエルを迎え
るために、ゴシェンへ乗って行った。父の前にあらわれた時、かれ
30 は父の首をだき、しばらくその首にすがって泣いた。30 イスラエルはヨゼフに、「わたしは
おまえの顔も、おまえがまだ生きていることも見たから、もう死んでもよい」と言った。
31 ヨゼフは兄弟たちと父の家の者らに言った、「わたしはファラオのところに行って告
32 げ、かれに『カナアンの地にいた兄弟と父の家の者たちがわたしのところに来ました。
この人たちは羊飼いです。かれらは家畜の牧者だったのです。そして羊、牛、持ちもの
33 すべてを携えてきました』と言いましょう。33 ファラオがあなたたちを呼んで、『おまえ
34 たちの職業はなにか』と聞いたら、34 あなたたちはゴシェンの地に住むことができるよ
うに、『しもべらは若いころから今まで家畜の牧者でした。わたしたちも先祖もそうで
した』と答えなさい」。羊飼いはすべて、エジプト人の忌みきらうものだからである。(7)

47
1 ヨゼフはファラオのもとに行って告げ、「わたしの父と兄弟たち
兄弟五人の拝謁 2 が、カナアンの地から羊、牛、すべてのものを携えてきて、今ゴシ
ェンの地におります」と言った。1 かれは兄弟の中から五人(1)を選び、

3 ファラオに拝謁させた。2 ファラオがヨゼフの兄弟たちに、「おまえたちの職業はなにか」
と聞いた時、かれらはファラオに、「しもべらは、わたしたちも先祖も、羊飼いであり
4 す」と答えた。3 かれらは、「わたしたちはこの地にとどまるために来ました。カナアン
の地にはききんがひどく、しもべらの羊のための牧草がないからです。それでお願いし
6-5 ます。しもべらをゴシェンの地に住まわせてください」(2)とファラオに言った。5a ファラオ
はヨゼフに、6b「かれらはゴシェンの地に住んでもよい。もしかれらのうちに有能な者がい
るのを知っているならば、その者らをわたしの家畜を飼う者のかしらにせよ」と言った。

---

(6) 古代語訳および文脈からこのように訳した。ヘブライ文そのものは不完全で、ただ「示すように」となっているだけ。「道を(ゴシェンへの)」あるいは「住む場所を(ゴシェンにおける)」(45^{10}参照)のような目的語が必要である。

(7) しばしばこの最後の文句はヨゼフが兄弟にさしずしたことがらの中にはいるものと解されている。しかし著者がヨゼフの知恵を説明したものと見るほうがよさそうである。すなわちヨゼフは彼らを国境の内側、当時の宮廷に近いところ(47注5参照)、しかもナイル川沿岸の貴族階級の地主たちから離れた所に住まわせている。あるいは本句は外国から来た粗野な牧者を一般にけいべつしたというヒクソス以後の世情を反映したものかもしれない。おそらく牧者と群れが増加したため、彼らは後に圧迫を受け、ついにはエジプト脱出をしなければならないようになったのであろう。

【注】(1) 五という数(および五を分母とする分数)がよく出る(41^{34} 43^{34} 45^{22} 47^{24,26}参照)。エジプト人は特に「五」に縁起をかついだのであろう。イスラエル人は「七」「十二」などを好んだ。

(2) エジプト文献には、東国遊牧民の窮乏の時に彼らのエジプト滞在を許したという二つの類似例がある。ヤーウェ伝承による本記事中では「牧草」だけが問題となっている。司祭伝承による11節の「所有地」と比べよ。

ヤコブとその子らはエジプトのヨゼフのもとに来た。エジプト

父ヤコブの謁見(3)　の王ファラオはそのことを聞いた。ファラオはヨゼフに 5c語り、「お

まえの父と兄弟がおまえのところに来た。 6a エジプトの地はおまえ

の自由になるのだから、国の中でいちばんよい所におまえの父と兄弟を住まわせよ」と言

った。ヨゼフは父ヤコブを導き入れて、ファラオに謁見させた。ヤコブはファラオにあ

いさつした。ファラオはヤコブに、「あなたの年はいくつか」とたずねた。 9 ヤコブはフ

ァラオに、「わたしの旅路の年月は百三十年です。わたしのよわいの日は短くあわれであ

り、わたしの先祖が送った生涯の旅路の年月には及びません」と答えた(4)。ヤコブはフ

ァラオにあいさつしてファラオの前からさがった。ヨゼフはファラオの命じたとおり、

父と兄弟たちをエジプトの地に住まわせ、国のいちばんよい所、すなわちラーメセス地

方(5)に所有地を与えた。またヨゼフは父と兄弟および父の家の者すべてに、その家族の数

に応じて食べ物を与えて養った。

さてききんはきわめてひどかったので、全地には食べ物がなく、エジプトの地もカナ

アンの地も、ききんのために衰えていった。ヨゼフは人々が買った穀物と引替えに、エ

ジプトの地とカナアンの地にあった銀をことごとく集めた。そしてヨゼフはその銀をフ

ァラオの家に納めた。

15 エジプトの地にもカナアンの地にも銀がことごとく尽きた時、すべてのエジプト人が

ヨゼフのもとに来て、「食べ物をください。銀が尽きはてたからといって、われわれが

16 あなたの前で死んでよいでしょうか」と言った。ヨゼフは、「おまえたちの家畜をひい

17 てこい。銀が尽きはてたのであれば、家畜と引替えに与えよう」と言った。そこでかれ

らはヨゼフのもとに家畜をひいてきた。ヨゼフはかれらに、馬、羊の群れ、牛の群れ、

---

(3) 5–6節はギリシャ語訳の順序にしたがった。現存ヘブライ語原文の順序は 5a 5c 6a 6b で、5b は欠けている。ギリシャ語訳のほうが古い形を保持しており、このほうがヤーウェ伝承らしいここまでの部分と、司祭伝承らしいここからの部分(——11 27b 28節)との区別がはっきりする。現存原文には、調和した記事にするために各種伝承を少しずつ組み合わせたところがある。本記事の二つの形を比較することは、このことを知るのに役立つ。特にここの場合はギリシャ語に訳されてから後に改訂されているので、そのことがはっきりわかる。ここに使用されている司祭伝承によれば、ファラオは自発的であり、気前のよさを示している。12節は多分エロヒム伝承を反映したものである。

(4) アブラハムは百七十五年(25 7参照)、イサクは百八十年(35 28参照)。ヤコブは本節では百三十年、エジプトで十七年生きて百四十七歳で死ぬ(28節)。年数をしるすこのような記事は司祭伝承の特徴。

(5) イスラエル人が労働を課せられて建設した二つの貯蔵の町の一つ(出1 11)で、ラーメセス二世の時に完成され、彼が自分の名にちなんでつけたもの(正式名称は「勝利の大王ラーメセスの家」)。その所在がアバリス(後のタニスまたはゾアン、詩78〔77〕12 43、民13 22参照)と同一でないとすれば、少くともその近くである。このアバリスはラーメセス二世時代の王ヒクソスの首都であった。ヨゼフ時代以前とラーメセス二世時代以後、およびその間の期間のエジプトの首都はほかの所。ラーメセスはゴシェンのすぐ北、東部デルタ地帯にあった。ギリシャ語訳の46 28–29は、出1 11のもう一つの貯蔵の町ピトム(ラーメセスのすぐ南、ギリシャ語でヘロオンポリス)をゴシェンにおけるヤコブとヨゼフの再会の地としている。ラーメセスはエジプト脱出の出発点(出12 37参照)。巻末第四図参照。

ろばと引替えに、食べ物を与えた。かれはすべての家畜と引き替えた食べ物で、かれらにその年を切り抜けさせた。

18 その年も終り、次の年になった時、かれらはヨゼフのもとに来て、「われわれはあるじにかくさずに申しあげます。われわれの銀はことごとく尽き、家畜の群れもあるじのものとなりましたので、われわれのからだと土地のほかには、もう何もあるじの前にはありません。19 われわれと土地が、あなたの目の前で滅んでよいでしょうか。ですから、食べ物と引替えに、われわれと土地を買い取ってください。われわれは土地もろともファラオの奴隷となりましょう。われわれが生きながらえて死を免れるように、また土地も荒れることのないように、種を与えてください」とかれに言った。

20 そこでヨゼフはエジプトの地をことごとくファラオのために買い取った。ききんがエジプト人にきびしかったために、かれらがおのおのその畑地を売ったからである。このようにして地はファラオのものとなった。21 エジプトの国境のはしからはしにいたるまで、ヨゼフは民をすべて奴隷とした。22 ただ司祭らの土地は、買い取らなかった。司祭らはファラオから食祿を受けており、ファラオの与えるその食祿で暮していた。それゆえかれらは土地を売らなかったのである。

23 ヨゼフは民に言った、「見よ、わたしはきょうファラオのために、おまえたちとおまえ

たちの土地とを買い取った。ここにおまえたちのための種がある。これを土地にまくがよい。24 そして収穫の時、その五分の一をファラオに納め、五分の四をおまえたちのものとし、畑地の種のため、またおまえたちと家族の食糧、また子どもの食糧のためとせよ」。25 するとかれらは、「あなたはわれわれの命を救ってくださった。あなたの心にかなえば、われわれはファラオの奴隷となりましょう」と言った。26 ヨゼフは、ファラオに五分の一を納めることをエジプトの土地についてのおきてとした。これは今日に及んでいる。ただし司祭の土地だけは、ファラオのものとならなかった。(6)

27 さてイスラエルはエジプトの国のゴシェンの地に住んだ。かれらはそこに定住し、子を生み、非常にふえた。28 ヤコブはエジプトの国で十七年生きながらえた。ヤコブの生涯の年月は百四十七年であった。

ヤコブの死近づく

29 イスラエルは死ぬ時が近づいたので、その子ヨゼフを呼んで言った、

---

(6) ヒクソスが君臨しはじめた時代とモイゼ時代との間のある時期に、エジプトの社会的経済的機構の改革が行われたということは、エジプト史からはっきりうかがえる。ヒクソスが君臨する以前には土地はまだ個人によって私有されていたが、モイゼ時代には司祭の土地を除くすべての土地がファラオの絶対管理のもとに置かれていた。歴史と符合するもう一つの点は、17節にはじめてしるされた馬のことである。馬はヒクソスがもたらしたもの(12[16]には馬のことはしるされていない)。他の近東諸国の徴税に照らしてみれば、収穫豊かなエジプトにおける五分の一(24[26]節)という率は法外ではなかった(マカバイ上10[30]の三分の一参照)。

「もしおまえの心にかなうならば、お願いする。どうかおまえの手をわたしのももの下
30 に入れてくれ(7)。わたしに親切とまことを尽してもらいたい。―どうかわたしをエジプト
に葬らないでくれ。わたしが先祖といっしょに眠る時には、わたしをエジプトから運び
出して、かれらの墓に葬ってくれ」。ヨゼフは、「わたしはあなたのことばどおりにいた
31 します」と答えた。「するとイスラエルが、「わたしに誓え」と言ったので、ヨゼフはかれ
に誓った。イスラエルは床(とこ)の上(かみ)のほうに向かって身をかがめた(8)。

48

1 これらの事のあとで、ヨゼフに、「あなたの父は病気です」という
知らせがあったので、かれはふたりの子、メナッシェとエフライム
2 **ヤコブ、ヨゼフの子を自分の子とする(1)**
を連れて行った。―ある人がヤコブに告げて、「あなたの子ヨゼフが
あなたのもとに来ました」と言うと、イスラエルは力をふるいおこ
3 して床(とこ)に腰をかけた。―ヤコブはヨゼフに言った、「エル・シャッダ
イはかつてカナアンの地のルズ(2)でわたしに現われ、わたしを祝福して、『わたしはおま
4 えに子を生ませ、おまえをふやし、おまえを多くの民とする。またこの地をおまえのあ
とに続く子孫に永久の所有として与えよう』とわたしに言われた。―わたしがエジプトの
5 おまえのところに来る前に、エジプトでおまえに生れたふたりの子はわたしのものだ。
エフライムとメナッシェはレウベンとシメオンと同じようにわたしのものとなるのだ。

6 しかしかれらの後におまえが生む子はおまえのものとなる。その者らは財産相続のため
には、その兄たちの名を名のることだ。
7 パッダンから帰る途中、わたしはカナアンの地でラケルに死なれた。そこからエフラ
トに行き着くにはかなりの道のりがあった。わたしは彼女をエフラト〔すなわちベトレ
ヘム(3)〕への道のかたわらに葬った。

（7） 24注2参照。
（8） 老衰したヤコブはおそらく寝台に腰をかけたまま(48^{2} 49^{33}参照)、神に感謝するために(24^{26} 48参照)、通例の地の上(48^{12}参照)ではなく、寝台の上で身をかがめたのであろう。列上1^{47}では年老いたダビドが同じようなことをする。ギリシャ語訳は「床」というヘブライ語を誤読し「彼のつえ」と訳している。ヘブライ11^{21}はギリシャ語訳から引用したもので、ヨゼフのつえを意味する。この場面に並行する記事は49^{29}―^{32}に見られる。前者はヤーウェ伝承、後者は司祭伝承によるものとされている。

【注】（1）本章はエロヒム伝承とヤーウェ伝承とがだいたい二三節ずつ交互に連なったもののようである。しかし3―6節は文体、用語から司祭伝承に属するものとみなされている。三伝承とも後のエフライム族とメナッシェ族の優勢をヤコブの最後の処置に起因するものとしている。ヤコブがエフライムとメナッシェを自分の子としたので(司祭伝承による5節、エロヒム伝承による12a節)、彼らから出る種族は、そのおじたちから出る種族と同列となる。これはヨゼフに敬意を表してなされたもので、長子として二つの分(領地)を受ける権利(申21^{17})は、レウベンからヨゼフに移された(歴上5^{1}参照)。ヤコブがメナッシェとエフライムを祝福する時の手の置き方(ヤーウェ伝承による13―14 17―19節)、および祝福の文句の中で唱えられる名の順序(エロヒム伝承による20節)は、弟エフライムがメナッシェに優先していることを説明するものである。ヤーウェ伝承ではヤコブの目はもう見えなくなっている(10節)。8節と対比。ヤコブが祝福を受ける時のイサクの場合と同じ。

（2） 「ベテル」のこと。28^{19}および注8、35^{6}参照。ヤコブはここで35^{9}―^{12}の出現に触れている(35注8参照)。

（3） 35注12参照。ヤコブが愛妻ラケル（ギリシャ語訳では「おまえの母ラケル」）の第一子ヨゼフを前にしてベ

8 イスラエルはヨゼフの子らを見て、「これらはだれか」とたずね
9 た。ヨゼフは父に、「神がここでわたしに授けてくださったわたし
の子です」と答えた。するとかれは、「どうかかれらをわたしのとこ
10 ろに連れてきなさい。わたしはかれらを祝福しよう」と言った。
ヤコブ、エフライムとメナッシェを祝福する
スラエルの目は老齢のためにかすんで見えなかった。ヨゼフはかれ
11 らをそのもとに近寄らせたので、イスラエルはかれらに接ぷんし、かれらを抱いた。
12 スラエルはヨゼフに、「わたしはおまえの顔が見られようとは思わなかったのに、神はお
まえの子らもわたしに見せてくださった」と言った。
13 ひざの間から引き出し(4)、かれの前で顔が地につくほど身をかがめた。
ヨゼフはふたりの子のうち、エフライムを自分の右にしてイスラエルの左に向かわせ、
14 メナッシェを自分の左にしてイスラエルの右に向かわせ、かれに近寄らせた。しかしイ
スラエルは右手をのばして若いほうのエフライムの頭の上に置き、左手をメナッシェの
15 頭の上に置いた。メナッシェが長子であるのに(5)、このように手を交差したのである。かれはヨゼフ(6)を祝福して言った、

「わが先祖アブラハムとイサクが仕えた神よ、
きょうまでわが生涯の牧者であった神よ、

16 わたしをすべての悪からあがなわれたみ使いよ、
若者らを祝福してくださるように。
わが名と先祖アブラハムとイサクの名が、
かれらの中に続きますように。
またかれらが地の上に数多くふえますように。」
17 ヨゼフは父が右手をエフライムの頭に置いているのを見てこれを喜ばず、エフライム

テルの出現のことを思い出していると、そのあとに続いておこったビンヤミン出産時の彼女の死のことが目の前に浮かんだのである(35[16-20])。ヤコブはかつてラケルをめとるために喜んで七年働いた(29[20])。ここでは彼女の子孫二種族を三種族にして愛妻への愛情を新たにしている。ヤコブはラケルのかたわらに葬ってもらおうと考えているのだと想像する者もある。

(4) 本句から養子縁組の古代儀式がここで行われたことがわかる。30[3]および注1参照。ヨゼフも自分のひまごをこのようにして養子にしたのかもしれない(50[23])。このあとの子(6a節)の名は出ない。

(5) 本句はギリシャ語訳にはない。おそらく「手を交差する」というわかりにくい語句の説明として書きこんだものであろう。右手のほうが大きな祝福を与える。

(6) 15-16節はエロヒム伝承中ではヨゼフのことを物語る12節に直結していたのであろう。ギリシャ語訳では、ヤーウェ伝承による13-14節にならって文脈に合わせ、「ヨゼフ」の代りに「彼ら」(エフライムとメナッシェ)としるしている。このあとに続く神を呼び求める三つの句は、それぞれ、(ロ) 17[1]-24[40]の「(神の)みまえに歩む」(ここでは「仕えた」と訳した)、(ハ) 牧者としてのヤコブの生涯(49[24]、詩23〔22〕80〔79〕[2]も参照)、(ニ) 32[25-31]の神の使い(16注5参照)を思い出させる。ヤコブはペヌエルで「神の使い」に祝福を願ったように(32[27])、ここでヨゼフの子らのために神の祝福を願う(16節)。13-14節は17-20a節(ヤーウェ伝承)につながり、15-16節のヤコブのヨゼフへのことばは20b-22節につながる。

18 の頭からメナッシェの頭に移そうとして父の手を握った。「そしてヨゼフは父に、「父よ、
そうではありません。こちらが長子ですから、右手をかれの頭の上に置いてください」
19 と言ったが、「父は拒んで、「子よ、わかっている。わたしはわかっているのだ。かれも
また一つの民族となる。かれもまた大きくなるのだ。しかし弟はかれよりも大きくなっ
20 て、その子孫は多くの民族となるであろう(7)」と言った。「そしてかれはその日にかれら
を祝福して言った、

「イスラエルはおまえのことを取り上げ、
次のように祝福を述べるであろう、
『神があなたをエフライムやメナッシェのようにせられるように』」。

このようにして、かれはエフライムをメナッシェより先に立てた。
21 イスラエルはヨゼフに言った、「見よ、わたしは死のうとしている。しかし神はおまえ
22 たちとともにおられ、おまえたちを先祖の地に導き返されるであろう。「わたしはおま
えの兄弟よりもむしろおまえに、一つの「肩(8)」を与える。これはわたしが刀と弓でアモ
ル人の手から取ったものである」。

49

1 **ヤコブの祝福(1)**

ヤコブは子らを呼び寄せて言った、「集まりなさい。わたしはおま
えたちに将来起こることを語ろう(2)。

(7) 申33^{17}でメナッシェの数千に対してエフライムは数万となっている。ここに用いられている伝承はこの場面に関するかぎり、次節のはじめの句「かれはかれらを祝福した」のところで終っている。続くヤコブのことばはこれと異なる伝承からのものである。「おまえ」(ヨゼフをさす)という単数形からそのことがわかる。ギリシャ語訳では15節の場合と同じように、現在の文脈に合わせるために「おまえ」を複数形(すなわちエフライムとメナッシェ)にしている。祝福の時に子孫の名が唱えられるであろうという類似例については22^{18}26^{4}28^{14}参照。ユダヤ人は今なおこの祝福の文句を用いている。

(8) 「肩」という語は三重の意義を含む。すなわち、㈠特別な「分」(ラテン語訳ではこうなっている)を暗示したもの(民6^{19}、申18^{3}参照)。㈡ヘブライ語では「シェケム」。地名と同じ(ギリシャ語訳ではこの意味にとって単に「シキマ」としるしている)。㈢シェケムは「肩」のような形をした二つの山(メナッシェとエフライムの境界に近い)の間にある谷の入口にある(34注1後半参照)。ヤコブはここに百ケシタで埋葬地を買い(33$^{18-19}$)、後にヨゼフがここに葬られる(ヨシュア24^{32})。ヤコブが刀と弓でシェケムを取ったことは、聖書中ここ以外には出ない(外典中にはあるいはそうかもしれないような伝説が一つある)。またヨシュア24^{12}およびシメオンとレビの虐殺行為をとがめるヤコブのことば(49$^{5-7}$)といちじるしく異なるので、「刀と弓で」の代りに「百ケシタ」でと変えて読む者もある。本節のアモル人は15^{16}の場合と同じく、単にカナアン人をさす。

【注】(1) 祝福されるのはヨゼフだけで、ユダはたたえられ、レウベン、シメオン、レビはとがめられる。ヤコブから出た十二支族がカナアンに定住してから後の状態を描いたもので、臨終のヤコブが語った予言のようにしるされている。しかし10節には未来のことを述べた真の予言が含まれている。ユダから出るメシアに関するものである(注6参照)。この詩は本来は今まで創世記に用いられてきたどの基本伝承とも無関係であったらしい(次注参照)。ゼブルン、イッサカル、ナフタリの場合を除き、ヤコブの子らの誕生の順にしるされている(29^{31}—30^{24}35$^{16-18}$参照)。前章(および民12章)中の伝承と異なり、エフライムとメナッシェのことを述べていない。しかしヨゼフに関する詩はエフライムについて語ったものである。ユダ、ダン、ガドなどの名にはしゃれが含まれている。ユダ、イッサカル、ダン、ナフタリ、ヨゼフ、ビンヤミンは、それぞれ動物にたとえられ、その特徴が描かれている。

(2) 1節は二句から成り前置きの役目をしているが、詩の本来の前置きは2節である。1b節の前置きとこれに符合する28a節の結びは、おそらくこの古代詩を創世記の基本伝承(ヤーウェ伝承?)に取り入れる時につけ加えた

2 ヤコブの子らよ、集まって聞け、
　父イスラエルのことばを聞け。
3 レウベン(3)よ、おまえはわが長子、
　わが勢い、わが力の初穂、
　自負心の強い者、腕力の強い者。
4 水のようにむやみにほとばしるので、
　おまえはすぐれることがない。
　おまえは父の床に上がり、
　わが寝床に上ってけがしたから。
5 シメオンとレビ(4)はまさに兄弟、
　かれらのつるぎは暴虐の武器。
6 わが魂よ、かれらの仲間にはいるな。
　わが心よ、かれらのつどいに加わるな。
　かれらは怒りにまかせて人を殺し、

7 むやみに雄牛の足の筋を切ったから。(5)
　のろわれよ、かれらの怒りは激しく、
　その憤りはむごいゆえに。
　わたしはかれらをヤコブの中に分け、
　イスラエルの中に散らそう。

ものであろう。1a節の前置きとこれに符合する28b節の結びは司祭伝承によるもので、祝福の記事を囲む額ぶちの役目をしている。この司祭伝承は引続き29—32節に用いられている。この詩は伝統的に「ヤコブの祝福」と題されているが、司祭伝承による28b節に「祝福」という語が用いられているので、そう呼ばれるようになったのである。

(3) 3節でレウベンの過剰の力と活気がたたえられるが、それらは抑制されず破滅の原因となる（4節）。すなわちビルハとの近親相姦のゆえに（35[22]）、レウベンは長子の権を失う。優柔不断なその一族（士5[15b—16]）は、支族としてはほとんど姿を消す（申33[6]）。

(4) 順位からいえば、シメオン、次はレビが相続するわけであるが、彼らは乱暴のゆえに支配権を与えられない（シェケム人虐殺34[25—29]参照）。6節には彼らの好戦的精神をきらうヤコブの気持（34[30]参照）と民族感情があらわれている。彼らは罰として土地の分配にあずからず、各族の中に分散させられる。シメオン族はユダ族に吸収され、モイゼの祝福にあずからない（申33）。レビ族は司祭職によっておのれを償い、モイゼは彼らの司祭職をたたえる（申33[8—11]）。

(5) ウガリト文学では「男」の意味として「雄牛」という語がよく用いられている。これによれば、「むやみに雄牛の足の筋を切った」は34[25]の「すべての男を殺した」の詩的表現かもしれない。そうだとすれば、本句は前句の「人を殺した」と並行し、「牛」を傷つけずに「取った」とする34[28]と矛盾しない。

ユダ(6)よ、おまえこそ兄弟がたたえる(7)。
　おまえの手は敵の首の上にあり、
　父の子らはおまえの前に身をかがめる。
ユダこそ若いしし、
　わが子よ、おまえは獲物を奪って上って行く。
かれは雄じしのようにうずくまり、
　雌じしのように身を伏せる。
だれがかれを起こすだろうか。
王笏(しゃく)はユダを離れず、
　統治者のつえもかれの足の間(8)から離れない、
持ち主の来るまでは(9)。
　もろもろの民はその者に服従する。
かれはろばをぶどうの木につなぎ、
　めろばの子をよいぶどうの木につなぐ。
かれは着物をぶどう酒の中で洗い、
　衣をぶどうのしるの中で洗う。

かれの目はぶどう酒によってうるみ、
　歯は乳によって白い。

ゼブルン(10)は海べに住み、
　舟のつく浜べとなり、
そのわき腹はシドンに向く。

---

(6) 支配権はついに第四子ユダに授けられる。彼は百獣の王「しし」として描かれている。この優越権はユダ族の中に伝わり、キリストにいたるまで続く。キリストは「すべての被造物の長子」(コロサイ1[15])であり、永遠からその権利を持ち、「もろもろの民の王」であり、卓絶した「ユダ族のしし」(黙5[5])である。メシアに関するこの予言は、3[15]の予言よりもかなりはっきりしたもので、メシアがユダ族から出ることを述べている。[11-12]節はユダ族の豊かな土地を描いたもの——ぶどうの木はろばのつなぎ場にされるほど繁茂する。これはメシア時代の霊的恵みの豊かさに適用される。ゼカリヤ9[9]の句はこの[11]節が映じたものであろう。その句はマテオ21[5]、ヨハネ12[15]では枝の主日のキリスト(ユダ族から出たダビドの子)をさす。

(7) ユダが名づけられた時のしゃれと同じ(29注16参照)。

(8) 古代の王たちは王座にすわっている時つえをひざの間に立てて持った。

(9) 現存ヘブライ語原文を直訳すれば、「彼がシロに来るまでは」または「シロが来るまでは」。「シロ」はきたるべきメシアの名であると、ラビたちの間では伝えられている。本訳は古代語訳にならった。並行句はエゼキエル21[32(27)]に出る。

(10) 本節の二行目は不明であるが、ゼブルンに関するこの描写から彼の一族の領地はかつて海に境していたものと思われる(申33[19]も参照、ヨシュア19[10-16]と対比)。シドンはパレスチナのすぐ北のフェニキアにある有名な港であるが、ここでは国をさしているようである。

14 イッサカル(11)はたくましいろばで、
　羊の囲いの間に伏す。
15 かれは定住の暮しをよいとし、
　その地を楽しいと見た。
その肩をかがめて荷をにない、
　苦役(12)をしいられる奴隷となった。
16 ダン(13)は自分の民をさばくであろう、
　イスラエルの他の支族のように。
17 ダンは道ばたのへび、
　小道のほとりのまむし、
馬のひずめにかみつき、
　乗る者はうしろに落ちる。
18 ヤーウェよ、わたしはあなたの救いを待ちのぞむ。

19 ガド(14)には襲撃隊が襲うであろう。
　しかしかれはかれらの背後を襲う。
20 アシェルの食べ物は豊か(15)となり、
　王たちの珍味をつくり出す。

(11) イッサカルが遊牧生活よりも豊沃なエスドレロン平野における安易な生活を好んだということが描かれている。14b節の「羊の囲い」と訳されているヘブライ語は、くわしくは羊を囲いに導き入れるじょうご型の通路の両側にある二つのさくのことであろう。あるいは「二つのくら袋」のことかもしれない。ろばはくら袋をつけたままその間に伏して休むのを好む。

(12) これより少し以前にエスドレロン平野の町々でファラオのためにこのような労働が行われた。そのことをしるした手紙がエジプトに送られているが、その手紙の中にこれと同じ語が見られる。

(13) 「さばき」の義、30[6]および注[2]参照。ダン族から士師サムソン（士13—16章）が出て有名になるというのではなく、むしろ隣国のペレシェト人から攻撃を受けても、わずかな人数でへびのように機敏に戦い、戦車上の敵をうしろにおとして完全な独立を築き上げるので有名になるという意味である。ダン族から六百人がイスラエルの最北端に移住し、そこでダンという町を建てる（士18章）。

(14) 本節に三回用いられている語根「グド」（襲う）に関連する。30[11]の場合とは異なる。勇敢なガド族（歴上12[8-15]参照）は、トランス・ヨルダン地方のおのれの領地を東から侵された場合、ただ守るだけにとどまらず、攻め返した。

(15) 直訳では「あぶら」。おそらくアシェルの名産オリーブ油に結びつけたもの（申33[24]参照）。

21 ナフタリ(16)は放たれた雌じかで、
　枝の形の角をかざす。
22 ヨゼフ(17)は牛の子、泉のほとりの子牛、
　わたしの若者の子らは若い牛、
23 弓射る者はかれを悩まし、
　射かけてかれをうらんだ。
24 しかしかれらの弓は力ある御者(おんもの)によって折られ、
　その腕の力はくじかれる、
　ヤコブの大能者の手によって、
　イスラエルの石〔牧者〕の名によって、(18)
25 父の神によって――その神がおまえを助けるように、
　シャッダイご自身によって――その御者がおまえを祝福するように、
　上からの天の祝福、
　下に伏している深淵(しんえん)の祝福、
　乳ぶさと胎の祝福をもって。(19)

26 おまえの父の祝福はまさる、
　永遠の山の祝福よりも、(20)

(16) ナフタリ族は冒険好きで活気に満ちていたので(士5^{18b}参照)、「放たれた雌じか」と呼ばれたのであろう。続く句はナフタリ族の紋章を描いたものかもしれない。本節は古代語訳にも近代語訳にも多様に訳されている。

(17) 現存原文中の22–26節は詩の中で最も不明。本訳の22節は、(イ)ヨゼフを雄牛と呼んでいる申33^{17}に並行する(また動物にたとえられている詩中の他の例にもつり合う)。(ロ)現存原文と部分的に異なるサマリア五書とギリシャ語訳による。(ハ)次節の「弓射る者(ヨシュア17$^{14-18}$の戦車に乗ったカナアン人のことかもしれない)が彼を射かける」という考えに一致する。また本訳の「若者の子ら」は「ヨゼフの子エフライムとメナッシェ」をさし、申33^{17}の場合と同じになる。現存原文に対する伝来の訳は、「ヨゼフは実を結ぶ若木、泉のほとりの実を結ぶ若木、その枝はへいを越える」。詩全体の背景はカナアン的色彩が強い。古代カナアンにおいて牛が崇拝されたということを連想させないように、特に本節が取り替えられたのかもしれない。このカナアン人の牛崇拝は後のイスラエル人にうつった(列上12$^{25-33}$参照)。本節全体は、現存原文においても本訳においても、申33^{17}の場合と同様、ヨゼフの子メナッシェ、特にエフライムの力と数が強大であることを意味している。

(18) 本節はじめの二行は22節以下の文脈に合わせて、ギリシャ語訳ならびにシリア語訳とアラム語訳の一部にならった。現存原文では「しかし彼の弓(もつ手)はゆるがずもちこたえ、その手と腕はすばやい」となっていて、ヨゼフが自分を守っているように描かれている。「牧者」はヤーウェの比喩として無遠慮に用いられている「石」という語の説明として書き入れられたものであろう。「石」は後に「岩」という語で表わされ、普通の表現となるもの(例、申32$^{4\ 15\ 30-31}$)。「名によって」(シリア語訳)はヘブライ語原文では「そこから」とも読まれる。ラテン語訳は神によってイスラエルを慰める牧者として(エジプトへ?)派遣されたヨゼフのことだと解しているようである。

(19) 「天の祝福」は雨露。「深淵の祝福」は大地を豊沃にする泉と地下水(申8^{7}、本書7^{11}参照)。深淵は伏している怪物と想像されていた。「乳ぶさと胎の祝福」は子宝。ホセア9^{14}と対比。

(20) この行のヘブライ語は不明で、ラテン語訳は「わたしの先祖の祝福よりも」と解している。本訳はギリシ

永久の丘にある好ましいものよりも。
それらはヨゼフの頭の上、
兄弟のうちですぐれた者の頂にあれ。

27 ビンヤミン(21)はかみさくおおかみ、
朝にはえじきをくらい、
夕には獲物を分ける」。

28 これらすべてのイスラエルの支族は十二で、これはその父がかれらに語ったことである。ヤコブはかれらを祝福し、それぞれにふさわしい祝福でかれらを祝福した。

29 ヤコブはかれらに命じて言った、「わたしは身内のなき数に入れられようとしている。わたしをヘト人エフロンの畑地にあるほら穴に、

30 **遺言と死**(22) 先祖といっしょに葬ってくれ。 31 そのほら穴はカナアンの地のマムレに面し、マクペラの畑地にある。これはアブラハムがヘト人エフロンから埋葬地として畑地とともに買ったものである。 32 そこにはアブラハムとその妻サラが葬られ、イサクとその妻レベッカも葬られている。そしてそこにわたしはレアを葬った。畑地とその中にあるほら穴はヘト人から買い取ったものである」。

50 1 33 ヤコブは子らに命じ終って、床の中に足を入れ、息絶えて身内のなき数に入れられた。

エジプトにおけるヤコブの弔い(1)

3 ヨゼフは父の顔に取りすがって泣き、接ぷんした。 2 ヨゼフはしもべである医者たちに、父をミイラにするように命じたので、医者たちはイスラエルをミイラにした。 3 ミイラにするには、これだけの日数を要するのである。エジプト人はかれのために七十日の間、喪に服した。

ヤ語訳と申33[15]にならった。申33[14]の思想にならって前の行のヘブライ語をわずかに変えて読めば、本節のはじめの三行は文脈にふさわしい句となる。すなわち「穂（レビ2[14]参照）と花（亜麻の花、出9[31]参照）の祝福、永遠の山の祝福、永久の丘の好ましいものをもって」。

(21) ここに描かれているのは、「少年ビンヤミン」ではなく、「好戦的ビンヤミン族」である（士3[15]—30 19[16]参照）。

(22) アブラハム、イサクの死と同じく（25[7—11] 35[28—29]）、ヤコブの死も司祭伝承によって語られている。イスラエル人の落ち着くところはエジプトではなく、カナアンであるということが、本記事中に強く主張されている。この考えは先祖を葬ってあるマクペラの埋葬地は買い取ったものであるという文句（23章参照）に要約されている。32節（ラテン語訳にはない）はカナアンがイスラエル人の国となることを主張したものである。これはあとでつけ加えられたものか、あるいは本来30節に直結していたものかであろう。

【注】（1）本章の大部分もヤーウェ伝承とエロヒム伝承から成っているようである。ただ12—13節の埋葬の記事だけが司祭伝承によるものとされている。本章前半はヤコブの葬式を物語り、後半はヨゼフの伝記の結末で、伝記全体の基礎となっている主題、すなわち「神の摂理」（特に20節を見よ、37注1参照）が強調されている。

喪が明けた時、ヨゼフはファラオの家の者に語って言った、「あなたがたのご好意にあずかることができますならば、どうかファラオの耳に伝えて言ってください、[2]『父はわたしに誓わせて、《見よ、わたしは死のうとしている。わたしのためにカナアンの地に掘っておいた墓に、わたしを葬ってくれ》と言いました。わたしはまた帰ってきます』」。[3]ファラオは、「おまえの父がおまえに誓わせたように、上って行って、父を葬れ」と言った。

そこでヨゼフは父を葬るために上って行った。かれとともに上って行ったのは、ファラオのすべての家来、その家の長老、エジプトの国のすべての長老、[4]またヨゼフの家のすべての者、ならびに兄弟たちと父の家の者たちであった。ただ家族と羊と牛は、ゴシェンの地に残した。[5]「なおいくさ車も騎兵もかれとともに上って行ったので、非常に盛大な一行であった。

かれらはヨルダン川の向こうのゴレン・ハアタドに着いて、そこで大いに泣き叫び、非常に嘆き悲しんだ。ヨゼフは父のために七日の間、追悼の儀式をおこなった。[11]その地の住民カナアン人はゴレン・ハアタドにおける追悼の儀式を見て、「あれはエジプト人の盛大な追悼の儀式である」と言った。このゆえに、その所の名はアベル・ミツライム[5]と

呼ばれた。これはヨルダン川の向こうにある。

[12]ヤコブの子らは父の命じたとおりに、父におこなった。[13]すなわちヤコブの子らは父をカナアンの地に運び、マクペラの畑地にあるほら穴に葬った。これはアブラハムがヘ

---

(2) ヨゼフは死者に接していたので、ファラオに近づかなかったのであろう。後のイスラエルにおけるかかる場合のおきて(民19[14-16])参照。

(3) 古代エジプトの彫刻絵画などにいくさ車は見られるが、「騎兵」は見られないので、この語はここではいくさ車に乗った者をさすと解するほうがよかろう。

(4) 「アタドの打ち場」または「いばらのやぶの打ち場」の義。位置不明。本節と次節の「ヨルダン川の向こう」という句は不可解。[11]節の「アベル・ミツライム」はエジプトとカナアンとの境に近い所と思われる。この考えに基づいて「ヨルダン川」は最初ただ「川」(エジプトの川、民34[5]参照)としるされてあった語に取って代ったものであろうという説がある。しかしここではむしろ各種伝承の残った部分がつなぎ合わされているように見える。すなわち一つの伝承はヤコブがカナアンで自分のために掘った墓(5節参照、ラケルの墓のかたわら? 48[7]および注3後部参照)のことを物語り(エジプト人らはその墓までヨゼフに同行したことになっている)、もう一つの伝承はトランス・ヨルダン(パヌエルなど、ヤコブのことで有名な地がある)にある墓のことを物語っていたのかもしれない。ヤコブ埋葬に関する各種伝承のうちでいちばん有力なのは、マクペラのことを述べる司祭伝承である(49[29-32] 50[12-13])。各種伝承を組み合わせた現存ヘブライ語原文からは、彼らはモアブを通ってトランス・ヨルダンに至り、そこでエジプト人らはヤコブの子らがヘブロンに埋葬しに行ってもどってくるのを待っていたという感じを受ける。

(5) 「エジプト人の牧草地」の義。他の「アベル」(例、民33[49]、士11[33])と区別するためにこう呼ばれていたのであろう。「アベル」(ギリシャ語訳では「エベル」)はここではエジプト人の「追悼」(エベル)を意味しているが位置不明。

ト人エフロンから埋葬地として畑地とともに買ったもので、マムレに面している。

14 ヨゼフは父を葬ってから、兄弟と、父を葬るためにかれといっしょに上って行ったすべての人々とともにエジプトに帰った。

15 **ヨゼフの寛大**　ヨゼフの兄弟たちは父の死に会い[6]、恐れて、「ヨゼフはわれわれをうらみ、われわれがかれにしたすべての悪のしかえしをするかもしれない」と言い合った。16 「かれらはヨゼフにことづけを送った、「あなたの父は死ぬ前に命じてこう言いました、17 『ヨゼフに言いなさい、《お願いだ。おまえたちの兄弟たちはおまえに悪いことをしたが、どうかそのとがと罪をゆるしてやってくれ》』。今われわれもお願いします。あなたの父の神に仕えるしもべらのとがをゆるしてください」。ヨゼフはかれらのことばを聞いて泣いた。

18 兄弟らもまたかれのもとに来て、その前にひれ伏し[7]、「われわれがあなたのしもべであること、このとおりです」と言った。19 「ヨゼフはかれらに言った、「恐れることはありません。わたしが神に代ることができましょうか。20 あなたたちはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変えられました。これは今日なされたように、多くの民の命を救うためでした[8]。21 だから、恐れることはありません。わたしはあなたたちも家族も養いましょう」。このようにヨゼフはねんごろに語って、かれらを慰めた。

22 ヨゼフは父の家の者とともにエジプトに住んだ。ヨゼフは百十年

23 **ヨゼフの晩年と死**　生きながらえた[9]。「そしてエフライムの三代目の子孫も見た。メナッシェの子マキルの子らもヨゼフのひざの上で生れた[10]。

24 ヨゼフは兄弟らに、「わたしは死のうとしています。しかし神はきっとあなたたちを訪れ、この地から、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地に、あなたたちを導き上るでしょう」と言った。25 「またヨゼフは、「神があなたたちを訪れた時、あなたたちはわたしの骨をここから携え上るのです」と言って、イスラエルの子らに誓わせた[11]。

26 ヨゼフは百十歳で死に、ミイラにされ、エジプトでひつぎに収められた。

---

(6) 直訳では「父の死を見て」。次句「恐れて」はシリア語訳による(ラテン語訳も参照)。現存原文にはない。

(7) ヨゼフの夢の最後の成就(37[7-10] 42[6] 43[26,28]参照)。

(8) ここに用いられている伝承からは、ききんがまだ続いているように見える(次節も参照)。ヤコブがエジプトに来てから十七年後に死んだとしている伝承(47[28])とくいちがう。

(9) エジプト記録によれば、百十年生きれば天寿を全うしたことになるようである。22b節と26a節は、あきらかに重複したものである。

(10) 30注1 48[12]および注4参照。マキル族は後に有名になるので、特にここにしるされる。士5[14]ではメナッシェ族を代表している。

(11) そのとおりに果される。すなわちイスラエル人のエジプト脱出の時、ヨゼフの骨は携えられ(出13[19])、シェケムに葬られる(ヨシュア24[32])。次の最終節で太祖時代は静かに幕を閉じ、約束の地に携えられることを待つヨゼフのからだは、きたるべきエジプト脱出のしるしとなる。